宮竹野際遺跡6次

2012年3月

(財)浜松市文化振興財団

A区　古代面　全景（北東から）

巻頭図版２

Ｂ区　古代面　全景（北東から）

SD06主要出土遺物

1　SD06出土　文字関連遺物

2　SD06出土　製塩土器

例　言

1　本書は静岡県浜松市東区宮竹町他において実施した宮竹野際遺跡（6次調査）の発掘調査にかかわる報告である。

2　当発掘調査は（都）福塚線・高林芳川線整備事業に先立つ事前調査として実施した。調査は、浜松市（主管課：平成22年（2010）6月14日から平成23年（2011）6月30日は浜松市南土木整備事務所、平成23年（2011）7月1日から平成24年（2012）3月16日は浜松市東・浜北土木整備事務所）の委託により、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）の指導のもと、財団法人浜松市文化振興財団が行った。宮竹野際遺跡の発掘調査は、1986年から断続的に実施されており、今回報告分を6次調査とする。

3　平成22年度の契約期間は平成22年（2010）6月14日から平成23年（2011）3月10日であり、このうち現地発掘調査を平成22年7月28日から平成23年3月10日の間に実施した。平成23年度の契約期間は平成23年（2011）6月1日から平成24年（2012）3月16日であり、このうち現地発掘調査を平成23年7月4日から平成23年7月29日の間に実施した。調査面積はのべ1,650㎡である。

4　現地発掘調査は鈴木一有、影山重広、首藤久士（浜松市文化財課）が担当し、原田和子、関根章義（浜松市文化財課非常勤職員）、吉田悠歩（浜松市文化振興財団非常勤職員）が補助した。

5　整理作業は鈴木一有、首藤久士が担当し、吉田悠歩、原田和子、関根章義の補助を得た。

6　本書の執筆は第2章1及び2を鈴木一有、3を首藤久士、第3章を関根章義、第4章を㈱吉田生物研究所、第5章1を関根、2を鈴木、第6章を鈴木、その他の部分の執筆及び本書の編集は首藤が行なった。

7　墨書土器の判読は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、山本崇氏に依頼し、赤外線写真撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の中村一郎氏が行なった。

8　調査の記録、出土遺物は浜松市文化財課が保管している。

凡　例

1　本書で用いる座標値は、世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海抜高である。

2　遺構の略記号は以下の通りである。

SH：掘立柱建物　SR：自然流路　SD：溝　SK：土坑

SH：小穴　SE：井戸　SX：遺物集積、不明遺構

3　遺物番号は遺物の種別にかかわりなく、それぞれ連番を付した。

4　本書で報告する土器の断面と種別の関係は以下の通りとする。

□ 弥生土器・土師器　■ 須恵器

□ 灰釉陶器・山茶碗・貿易陶磁器・近世陶器

5　本文中の引用文献等の表記については、以下のように略す。

浜松市博物館→浜市博　教育委員会→教委

浜松市文化振興財団→浜文振　静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所→奈文研

6　本書の作成にあたり、荒木志伸、大谷宏治、梶原義実、丸杉俊一郎、向坂鋼二、森泰通、渡辺晃宏、山本崇各氏の協力を賜った。

宮竹野際遺跡6次

目　次

巻頭図版
例　　言
凡　　例

第1章　序　論……1

1　調査にいたる経緯……1
2　遺跡をめぐる環境……2
3　本発掘調査の方法と経過……8

第2章　検出遺構……14

1　A区の遺構……14
2　B区の遺構……36
3　C区～F区の遺構……46

第3章　出土遺物……55

1　A区の出土遺物……55
2　B区の出土遺物……76
3　C区～F区の出土遺物……77

第4章　分　析……80

第5章　後　論……84

1　西遠江における陶硯の様相と地方官衙……84
2　宮竹野際遺跡と長上郡家……96

第6章　総　括……114

図　　版

図 版 目 次

巻頭図版

1 A区 古代面 全景(北東から)
2 B区 古代面 全景(北東から)
3 SD06主要出土遺物
4 1 SD06出土 文字関連遺物
2 SD06出土 製塩土器

図 版

1 A区 古代面 全景(北西から)
2 1 A区 弥生時代 全景(北から)
2 A区 弥生時代 SE02遺物出土状況(南西から)
3 A区 弥生時代 SE02 (北西から)
3 A区 古代面 全景(南から)
4 1 A区 SD06下層SX08遺物出土状況(北西から)
2 A区 SD06下層SX08遺物出土状況(西から)
3 A区 SD06下層SX09遺物出土状況(北西から)
5 1 A区 SD06中層遺物出土状況(南から)
2 A区 SD06中層SX03遺物出土状況(北東から)
3 A区 SD06中層SX06遺物出土状況(北から)
6 1 A区 SD06中層SX05遺物出土状況(北から)
2 A区 SD06中層SX05遺物出土状況(北から)
3 A区 SD06上層SX02遺物出土状況(北から)
7 1 A区 鎌倉時代 SD01·02 (東から)
2 A区 鎌倉時代 SE01 (西から)
8 B区 古代面 全景(東から)
9 1 B区 古代面 全景(東から)
2 B区 古代面 全景(北から)
10 1 B区 古代 SH01 (北西から)
2 B区 古代 SH01-SP18 (北西から)
3 B区 古代 SH01-SP23 (南西から)
11 1 B区 鎌倉時代 SE03 (南東から)
2 B区 近現代 SX11 (南西から)
12 1 C-2区 全景(南東から)
2 D-1区 全景 (北西から)
3 E区 全景 (南西から
13 1 F-1区 全景 (北東から)
2 F-2区 古代 SK06 遺物出土状況 (西から)
3 F-3区 鎌倉時代 SE05 (南から)
14 1 F-2区 全景 (東から)
2 F-2区 全景 (西から)
3 F-2区 近世 SD26 遺物出土状況 (南西から)
15 古代 SD06 主要出土遺物
16 1 古代 SD06 出土 製塩土器
2 古代 SD06 下層 出土遺物
17 古代 SD06 中層 出土遺物
18 古代 SD06 中層 出土遺物
19 古代 SD06 上層 出土遺物
20 古代～鎌倉時代 SR01 出土遺物
21 1 SD06 出土 文字関連遺物 (1)
2 SD06 出土 文字関連遺物 (2)
22 SD06 出土 墨書土器 (1)
23 SD06 出土 墨書土器 (2)
24 SD06 出土 墨書土器 (3)
25 SR01 出土 墨書土器 (4)
26 SR01 出土 墨書土器 (5)
27 墨書土器拡大 (1)
28 墨書土器拡大 (2)
29 墨書土器拡大 (3)
30 A・B区 弥生時代～鎌倉時代 出土遺物

挿 図 目 次

Fig.1 宮竹野際遺跡の位置……1
Fig.2 宮竹野際遺跡周辺の遺跡分布……3
Fig.3 宮竹野際遺跡の調査状況……5
Fig.4 宮竹野際遺跡周辺の調査状況……6
Fig.5 宮竹野際遺跡周辺の地籍……7
Fig.6 宮竹野際遺跡試掘箇所……9
Fig.7 宮竹野際遺跡試掘調査土層柱状図……10
Fig.8 宮竹野際遺跡グリッド配置図……11
Fig.9 SD06 作業風景……12
Fig.10 現説風景……12
Fig.11 発掘体験……12
Fig.12 整理作業……12
Fig.13 A 区 全体図……15
Fig.14 A 区 弥生時代 全体図……16
Fig.15 SX01 詳細……17
Fig.16 SE02 詳細……17
Fig.17 A 区 トレンチ土層断面図……18
Fig.18 A 区 古代面下層 全体図……20
Fig.19 SX08 詳細……21
Fig.20 SX09 詳細……22
Fig.21 SD06 出土桃核……23
Fig.22 A 区 古代面中層 全体図……24
Fig.23 SX03 詳細……25
Fig.24 SX04 詳細……26
Fig.25 SX05 詳細……27
Fig.26 SX06 詳細……28
Fig.27 SX07 詳細……29
Fig.28 古代面上層 全体図……30
Fig.29 SX02 詳細……31
Fig.30 SR01 上位層遺物分布図……32
Fig.31 SR01 出土馬歯……32
Fig.32 A 区 鎌倉時代 全体図……34
Fig.33 SE01 詳細……35
Fig.34 B 区 全体図……37
Fig.35 B 区 弥生時代 全体図……38
Fig.36 B 区 古代面 全体図……39
Fig.37 SH01 詳細……40
Fig.38 SE04 詳細……41
Fig.39 B 区 鎌倉時代 全体図……42
Fig.40 SE03 詳細……43
Fig.41 SX11 詳細……45
Fig.42 C 区 全体図……47
Fig.43 D 区・E 区 全体図……48
Fig.44 F-1 区 全体図……50
Fig.45 F-2 区・F-3 区 全体図……51
Fig.46 F-2 区 遺構詳細図……52
Fig.47 F-3 区 SE05 詳細図……53
Fig.48 弥生時代 出土遺物……55
Fig.49 SD06 下層 SX08・09 出土遺物……57
Fig.50 SD06 中層 SX03・04・05・06・07 出土遺物……58
Fig.51 SD06 形成期遺物……59
Fig.52 SD06 中層出土遺物 (1)……60
Fig.53 SD06 中層出土遺物 (2)……61
Fig.54 SD06 上層 SX02 出土遺物……62
Fig.55 SD06 上層出土遺物……63
Fig.56 SD06 出土遺物……64
Fig.57 SR01 Ⅱ層出土遺物……65
Fig.58 SR01 Ⅰ層出土遺物 (1)……66
Fig.59 SR01 Ⅰ層出土遺物 (2)……67
Fig.60 SR01 Ⅰ層出土遺物 (3)……68
Fig.61 SR01 Ⅰ層出土遺物 (4)……69
Fig.62 SD06 下層・中層出土墨書土器……70
Fig.63 SD06 出土墨書土器……71
Fig.64 SR01 出土墨書土器……72
Fig.65 A 区 遺構出土遺物……73
Fig.66 A 区 包含層出土遺物……74

Fig.67　B 区 遺構出土遺物 ……75
Fig.68　B 区 包含層出土遺物 ……76
Fig.69　C 区～ F 区 出土遺物 ……78
Fig.70　B 区 SH01 ……81
Fig.71　顕微鏡写真（1）……82
Fig.72　顕微鏡写真（2）……83
Fig.73　西遠江出土陶硯（1）……86
Fig.74　西遠江出土陶硯（2）……87
Fig.75　西遠江出土陶硯（3）……88
Fig.76　西遠江陶硯出土遺跡分布図 ……89
Fig.77　西遠江陶硯変遷図 ……90
Fig.78　西遠江出土獣脚付壷 ……91
Fig.79　東国出土圏足硯 c の類例 ……93
Fig.80　各遺跡硯比較 ……97
Fig.81　「北家」墨書の詳細 ……98
Fig.82　西遠江における製塩土器の分布 ……99
Fig.83　宮竹野際遺跡と下滝遺跡における掘立柱建物 ……100
Fig.84　宮竹野際遺跡における古代の様相 ……101
Fig.85　木船廃寺出土瓦の時期と系譜 ……103
Fig.86　「長田」墨書山茶碗 ……104
Fig.87　永田遺跡群における地籍図 ……106
Fig.88　永田遺跡群の構造 ……107
Fig.89　天竜川平野西岸の表層条里分布図 ……108
Fig.90　長上郡家とその周辺の景観 ……109
Fig.91　長上郡家とその周辺の施設配置 ……110
Fig.92　宮竹野際遺跡 6 次調査区の変遷（1）……114
Fig.93　宮竹野際遺跡 6 次調査区の変遷（2）……115

表 目 次

Tab.1　宮竹野際遺跡における調査等一覧 ……8
Tab.2　宮竹野際遺跡墨書土器一覧 ……79
Tab.3　宮竹野際遺跡出土木製品同定表 ……82
Tab.4　西遠江出土陶硯出土遺跡一覧 ……91
Tab.5　西遠江出土獣足出土遺跡一覧 ……91
Tab.6　出土遺物観察表 ……116

第1章　序　論

1　調査にいたる経緯

宮竹野際遺跡の概要　宮竹野際遺跡は、静岡県浜松市東区宮竹町地内にある縄文時代から近世へと続く集落遺跡である。1986年のマンション建設に伴う調査で、遺跡の存在が明らかとなった。以後、5回にわたり、浜松市教育委員会、浜松市文化協会、静岡県埋蔵文化財調査研究所によって調査が継続されている。弥生時代では水田跡を検出し、奈良・平安時代については墨書土器や円面硯が出土したことから長上郡家関連遺跡と考えられている。中世では鎌倉時代の集落や水田跡が検出され、中世以降では島畑が営まれたと考えられる。

開発計画の浮上　2006年に、(都) 中郡・福塚線整備事業が浜松市南土木整備事務所（当時所管部署）によって具体化された。開発区域は周知の埋蔵文化財包蔵地であり、2004年の静岡県埋蔵文化財調査研究所による5次調査区の隣接地であることから遺跡の連続性が想定された。そこで、対象地において2006年及び2009年に計13箇所の試掘坑を設定し、遺跡の広がりを確認することとなった。調査の結果、2006年調査全域及び2009年調査試掘坑3より南側で、遺構や遺物を検出したことから、弥生時代及び奈良時代から鎌倉時代にかけての集落が連続している事が判明した。一方、試掘坑4以北では遺物包含層が見られなかった。

本発掘調査の実施　試掘調査の結果を受け、工事を主管する浜松市南土木整備事務所（2010年度）及び東・浜北土木整備事務所（2011年度）と浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）により協議がなされた。その結果、(都) 中郡・福塚線の拡張部分について本発掘調査を実施することとなった。発掘調査は浜松市文化振興財団が受託し、浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）が指導にあたった。現地調査は2010年7月28日から2011年3月10日及び2011年7月4日から7月29日にかけて実施した。調査面積は1,650㎡である。

Fig.1　宮竹野際遺跡の位置

2　遺跡をめぐる環境

（1）立地環境

宮竹野際遺跡は天竜川下流西岸の沖積平野に位置する。周辺は大天竜と呼ばれた天竜川本流と小天竜に相当する馬込川に挟まれた氾濫原であり、支流や旧河道が入り混じり合って複雑な地形が展開している。また、天竜川より運ばれた土砂が堆積し、島状に連なる多くの微高地を形成している。その微高地群の一つに立地しているのが宮竹野際遺跡である。

（2）歴史的環境

縄文時代　天竜川西岸域へ人びとが進出し始めるのは、宮竹野際遺跡4次調査で突帯文土器が出土していることから、縄文時代晩期頃と考えられる。しかし、縄文時代については確認されている同時代の遺跡が少なく様相は不明な点が多い。安定した集落を営むようになるのは、弥生時代に入ってからと考えられる。

弥生時代　農耕社会が進展する弥生時代では、安定的な集落が営まれるようになる。天竜川流域の沖積平野にも人々の進出が本格化する。集落の中には山の神遺跡、松東遺跡、将監名遺跡などの環濠を持つ拠点的集落が形成されていた。中期中葉からは将監名遺跡、大蒲町村東Ⅰ遺跡、中期後葉からは田見合遺跡、箕輪遺跡、海東遺跡で集落が営まれている。後期になると、三遠式銅鐸が木船遺跡とツツミドオリ銅鐸出土地でそれぞれ2口見つかっている他、松東遺跡では近畿式銅鐸飾耳片、森西遺跡からは銅鐸形土製品が出土している。また後期には、山の神遺跡、越前遺跡、森西遺跡、松東遺跡、大蒲町村東Ⅱ遺跡、寺西遺跡、山寺野遺跡、天王中野遺跡、中田北遺跡で集落や水田が確認できる。

古墳時代　古墳時代では、沖積地における集落は低調となる。宮竹野際遺跡における過去の調査では、遺物は散見されるものの安定した遺構は見られない。周辺では大蒲町村東Ⅱ遺跡や越前遺跡、山の神遺跡、上新屋遺跡、中田北遺跡、天王中野遺跡で集落、箕輪遺跡で水田が営まれている。また、西方に所在する三方原台地東端には稜線に沿う形で多くの古墳群が展開しており、当地域との有機的関係が想定される。

飛鳥・奈良・平安時代　飛鳥・奈良時代には国家が律令制へ移行し、地域支配においても斉一化が志向される。各地には国郡里制がしかれ、天竜川下流西岸域には敷智、長田、麁玉等の郡が設定された。永田遺跡群（宮竹野際遺跡、山の神遺跡、大蒲町村東遺跡、木船廃寺跡、越前遺跡、森西遺跡の総称）周辺は長上郡（長田郡がその広大さから和銅2年（709）に上下2郡へ分割、以下は長上郡と表記）に属している。近年調査が行なわれた木船廃寺からは多量の布目瓦が出土しており、白鳳期の寺院跡と推定されている。また、大蒲町村東Ⅰ遺跡では木簡が4点、森西遺跡では円面硯や布目瓦、越前遺跡では陶馬と布目瓦、宮竹野際遺跡の過去の調査では規則性のある掘立柱建物跡や硯、墨書土器、布目瓦が見つかっていることから、周辺に長上郡家の存在が考えられる。その他、

Fig.2 宮竹野際遺跡周辺の遺跡分布

上組遺跡からは陶馬、大蒲町村東Ⅱ遺跡や天王町村東遺跡では住居跡、箕輪遺跡では条里に沿う溝跡が検出されている。

平安時代には蒲御厨が成立する。天竜川流域の御厨と同様に蒲御厨も伊勢神宮領となっており、在地領主によって開発が進められたと考えられる。

鎌倉時代以降　鎌倉時代には山の神遺跡、山寺野遺跡、寺西遺跡、宮竹野際遺跡で掘立柱建物や井戸が検出されており、集落及び耕作が営まれたと考えられる。山寺野遺跡の調査からは、鎌倉時代の集落廃絶後に周囲の土地を掘り下げ、その土を掻き揚げた島畑が形成された事が判明した。そのほか鎌倉時代の蒲地域に関するものとして、源頼朝の異母兄弟である範頼が蒲周辺で生まれ育ったことから蒲冠者と呼称されたという伝説がある。

戦国時代には海東遺跡で方形区画溝が検出されている。また伝松下屋敷跡では園池遺構が出土したことから居館内と考えられている。伝松下屋敷跡の他、蒲屋敷など地籍図や伝承からも推定される中世の屋敷地が多く存在するなど、天竜川流域における地域拠点の一つであった。

（3）宮竹野際遺跡をめぐる調査履歴

発見の経緯　1986年にマンションの開発が計画された折、当該地域に遺物の散布が認められることから試掘調査を行い、遺跡の存在が明らかとなった。以後遺跡周辺では開発が著しく、住宅開発や道路拡幅工事などが相次ぎ、これまでに5度の本発掘調査が実施されている。

1次調査　1986年、1988年の両年にわたり浜松市教育委員会が調査を行なった（浜松市教委1988）。開発毎に調査区を2回に分け、合計約475㎡の調査を行なった。古代から中世の掘立柱建物や井戸等を検出した。建物には規則性が見られる。遺物は古代の土師器や須恵器、中世の山茶碗等が出土した。

2次調査　1993年から1994年にかけて浜松市文化協会が1次調査の北側隣接地の調査を行なった（浜文協1994）。調査面積は3,500㎡である。古代から中世の集落を検出し、多くの掘立柱建物や井戸、区画溝等を確認した。遺物は古代の土師器や須恵器のほか、陶馬、円面硯、布目瓦等が出土したことから官衙関連遺跡の可能性が想定された。また、下層より水田跡が検出されており、弥生時代前期の条痕文土器が伴っている。

3次調査　1995年に浜松市教育委員会が2次調査C区の東側隣接地の調査を行った（浜松市教委1995）。調査面積は150㎡と些少であったが、古代から中世の井戸を2基検出した。

4次調査　1995年から1996年にかけて、商業施設建設に伴い浜松市文化協会が調査を行なっている（浜文協1997）。確認調査でトレンチを設定した後、遺構や遺物が見られた地点を拡張する形で調査が行なわれた。弥生時代中期の土器を伴う水田が検出されたほか、中世の井戸が確認されている。

5次調査　道路拡幅工事に伴い、2004年から2005年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行なった（静文研2006）。調査面積は1,100㎡であり、古代と中世の2面を検出している。古代面では境界溝を検出した。近隣の箕輪遺跡で確認された条里制水田に伴う溝と軸方向が一致することから、古代条里制水田に伴うものであると考えられている。遺物は墨書土器のほか風字硯や円面硯、

Fig.3 宮竹野際遺跡の調査状況

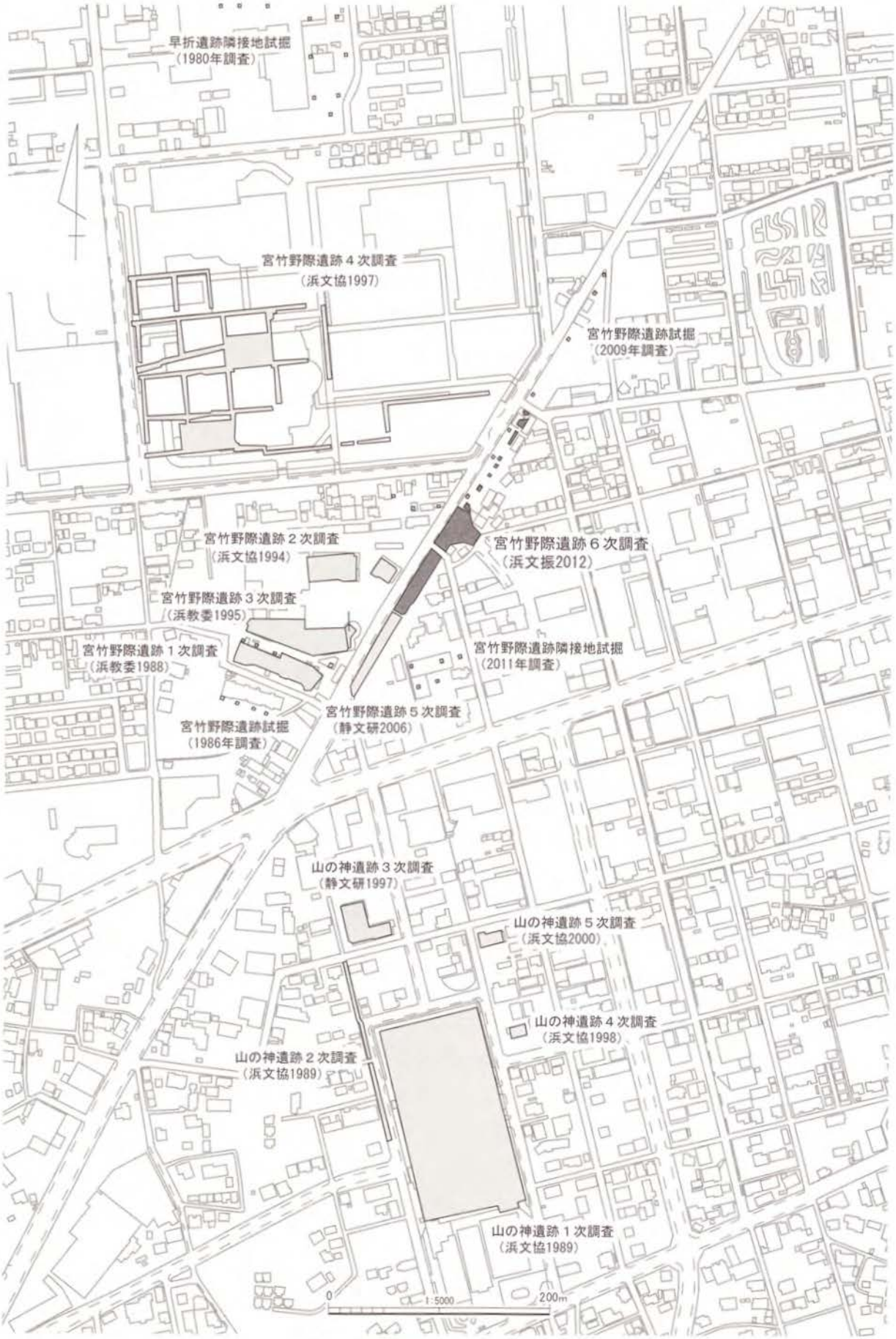


Fig.4　宮竹野際遺跡周辺の調査状況

Fig.5　宮竹野際遺跡周辺の地籍

Tab.1　宮竹野際遺跡における調査等一覧

遺跡調査	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	発行者	発行	報告書名
第1次調査	1986年10月～1988年4月	475.34㎡	浜松市教育委員会	弥生～中世	浜松市教育委員会	1988.6	宮竹野際遺跡
第2次調査	1993年12月～1994年3月	3,500㎡	㈶浜松市文化協会	弥生～近世	㈶浜松市文化協会	1994.8	宮竹野際遺跡2
第3次調査	1995年1月～1995年1月	150㎡	浜松市教育委員会	古代～中世	浜松市教育委員会	1995.3	宮竹野際遺跡3
第4次調査	1995年10月～1996年6月	6,500㎡	㈶浜松市文化協会	縄文～弥生	㈶浜松市文化協会	1997.1	宮竹野際遺跡4
第5次調査	2004年12月～2005年5月	1,100㎡	㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所	古墳～近世	㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所	2006.1	宮竹野際遺跡
第6次調査	2010年7月～2011年3月、2011年7月～2011年7月	1,650㎡	㈶浜松市文化振興財団	弥生～近世	㈶浜松市文化振興財団	2012.3	宮竹野際遺跡6次

獣足、布目瓦など特殊品が出土したことから、周辺に官衙の存在が推定された。中世面では溝等を確認し、水田域と考えられた。

試掘調査の実施　宮竹野際遺跡周辺における試掘調査及び工事立会いは、2006年以降5回行なわれている。そのうち6次調査地点及び西側の拡幅工事対象地における確認調査は2006年12月6日及び2009年2月26日の2回にわたり実施された。対象地内に2m×2mの試掘坑を合計13箇所設定し、2006年調査では南側より試掘坑1から3、2009年には南側より試掘坑1から7、西側地点では東方より試掘坑8から10と呼称した。確認調査の結果、2009年調査の試掘坑3以南では安定的な包含層が確認され、弥生時代と古代及び中世に相当する遺構面が2面捉えられるとともに弥生土器や須恵器、土師器、山茶碗等の遺物も出土したが、試掘坑4より北側では包含層が確認されなかった。この事実から遺跡の北限が確定することとなった。また、西側地点の3つの試掘坑からは包含層が検出され、遺跡の存在が確認された。

3　本発掘調査の方法と経過

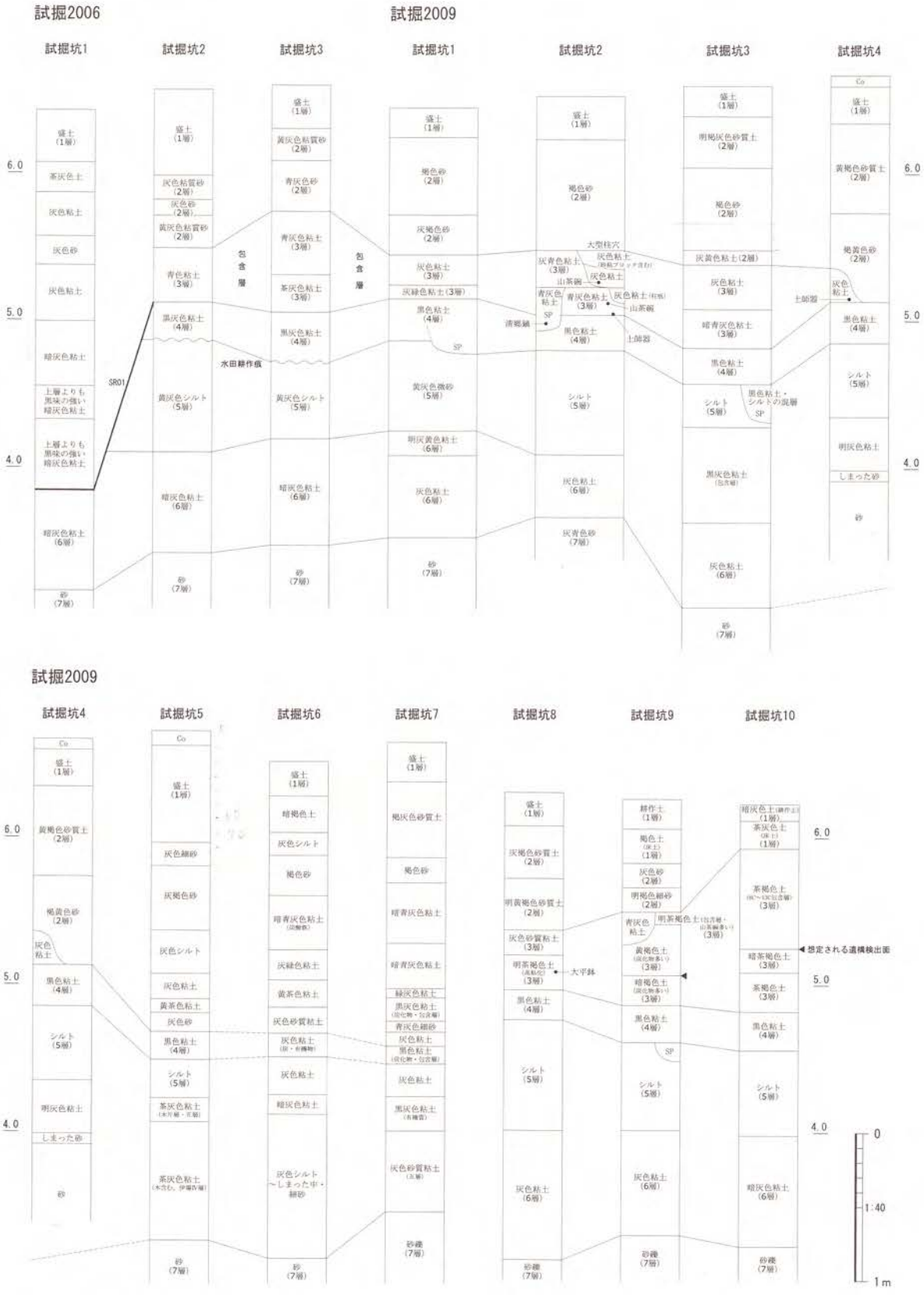
(1)調査方法

調査区の設定　本発掘調査にあたり、国家座標及び標高に関しては基準点及び10m間隔のグリッドを設定した。発掘調査区について、2010年度調査では南側よりA区、B区と呼称し、対象範囲の現道路部分を除くほぼ全面を調査した。2011年調査区では、南側から大きくC区～F区に4分割し調査区を割り振った。その上で、周辺住宅や店舗入口等を確保し地下埋設物を避ける形で、小規模なトレンチ状の調査区を設定するとともに、名称を細分し枝番を割り振った。

表土掘削　調査対象地の盛土及び表土は重機（バックホー）を用いて除去した。盛土の高さは、2010年調査において南側（A区）が最も深く、現地表面より約1.2m～1.5mであり、標高4.6m～5.5m付近までを掘削した。2011年度では、盛土について南側（C区）が最も深く、現地表面より0.6m～0.1mであり、標高5.7m～6.3m付近までを掘削した。

堆積層の掘削　盛土及び表土などを除去した後、人力で包含層を掘削し、遺構の検出を行った。また、発掘区の壁面を精査して土層堆積状況の把握に努めた。2010年度調査の基本層位は表土もしくは盛土（基本層位1層）、褐色砂（基本層位2層）、青灰色粘土（古代から中世の包含層、基本層

Fig.6 宮竹野際遺跡試掘箇所



基本層位

1　表土もしくは盛土
2　褐色砂層
3　青灰色粘土層（古代～中世の包含層）
4　黒色粘土層（弥生水田層）
5　黄灰色シルト層（弥生基盤層）
6　暗灰色粘土層
7　砂・砂礫層（基盤層）

Fig.7　宮竹野際遺跡試掘調査土層柱状図

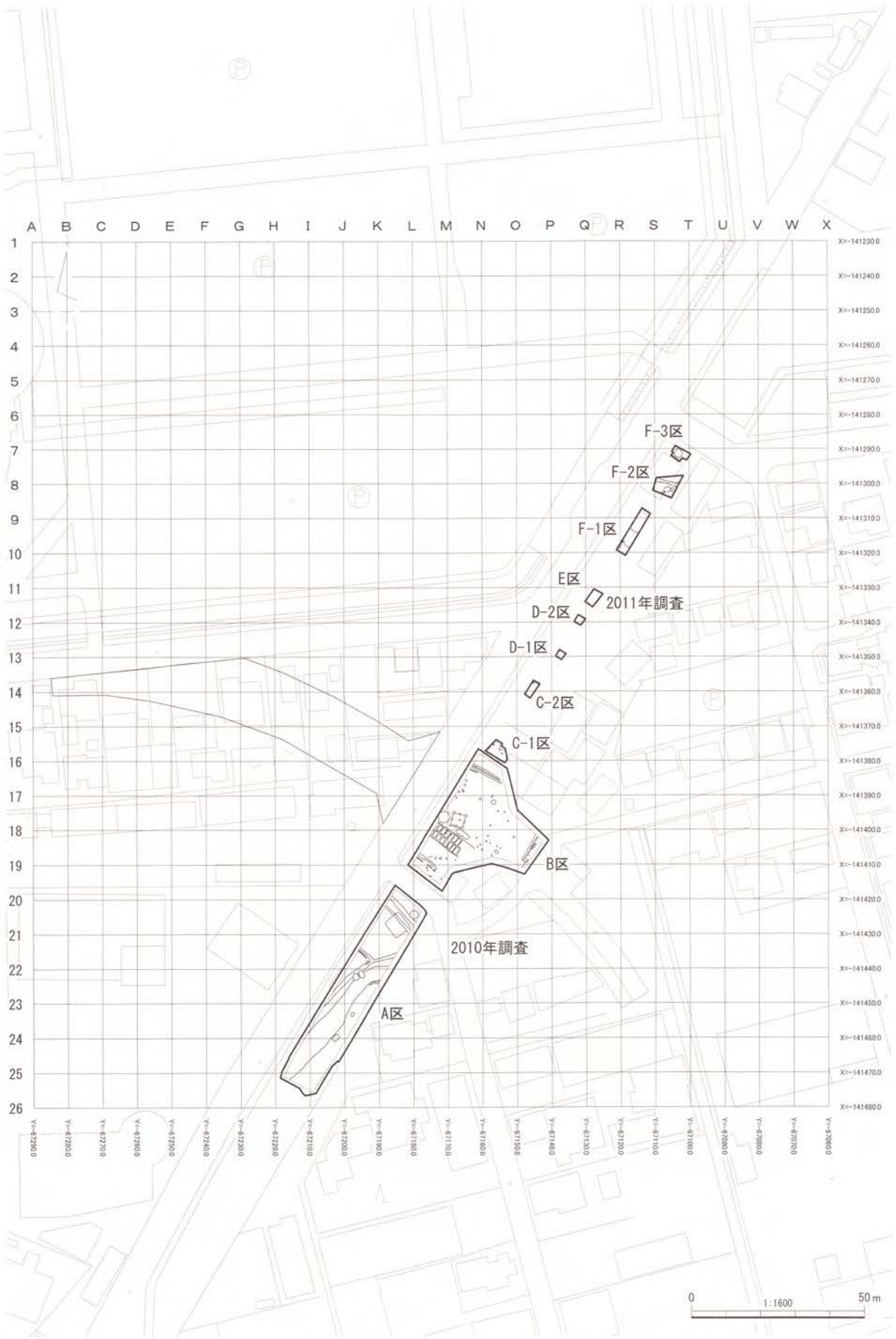


Fig.8 宮竹野際遺跡グリッド配置図

位3層）、黒色粘土（弥生水田層、基本層位4層）、黄灰色シルト（弥生基盤層、基本層位5層）、暗灰色粘土（基本層位6層）、砂・砂礫（基盤層、基本層7層）である。盛土が厚く、盛土下からは明灰色シルト～暗灰褐色砂（1層）、褐色砂（2層）、茶褐色粘土（3層）の薄い堆積が見られた。2011年度調査区では、それぞれの調査地点で層位が異なっていた。表土層下の茶褐色粘土（3層）はほぼ共通する。一方、下位層についてはC区、D区、E区、F-3区で暗灰色粘土（19層）もしくは灰褐色砂（20層）がみられるものの、F-1区では他調査区で見られない粘土層（36層～39層）及び砂層（23層・29層）が幾重にも堆積していた。また、各調査区とも湧水がひどく水中ポンプを使用したが、作業が出来ない場面が多々あった。

遺構精査・測量　遺構の測量は主にトータルステーションを用いた。基準点やグリッド杭をもとに測量を行なった。調査区の土層及び遺構の詳細図は縮尺1/20で作図した。全体図は1/100で作成した。

写真撮影　写真撮影には基本的に銀塩フィルムを用いた。銀塩フィルムによる写真撮影は、モノクロフィルムとカラーリバーサルフィルムの双方を用い、6×7判を主体に、部分的に4×5判を使用した。また35㎜判もカラーリバーサルフィルムに限り、補足的に用いた。

（2）調査経過

発掘調査　2010年度の現地調査は2010年7月28日から2011年3月10日にかけて実施した。また、2011年度の調査は2011年7月4日から7月29日にかけて実施した。各地点の調査期間は以下のとおりである。A区：2010年7月28日～11月10日、B区：2010年10月26日～2011年3月10日、C区：2011年7月4日～8日、D区：7月21日～22日、E区：7月13日～14日、F区：7月5日～28日である。

発掘調査区について、2010年度調査のA区、B区では道路拡張範囲のほぼ全面を調査した。A区では古代の流路であるSD06から墨書土器や円面硯を含む大量の遺物が出土した。B区では遺構密度がやや低くなるものの、古代の掘立柱建物や中世の井戸が検出された。2011年度調査のC区～F区は、事前の確認調査で遺構密度が低くなる事が判明していたため全面調査は行なわず、トレンチ

Fig.9　SD06作業風景

Fig.10　現説風景

状の調査区設定となった。そして、調査対象地を大きく4分割し、周辺住宅や店舗の出入口を確保するとともに地下埋設物を避けて小規模な調査区を設定し、名称も枝番を割り振った。調査では、包含層から遺物が出土するものの明確な遺構はほとんど見られなかった。F-1区では自然流路と考えられるSR02の落ち込みが見られるとともに、上位層には自然堆積である砂層が幾重にも堆積していた。F-2区及びF-3区では基盤層が比較的安定しており、古代の土坑や中世の土坑、井戸などの遺構が検出された。

現地公開　発掘調査中には、調査成果を市民に公開し、普及活動に努めた。2010年10月14日に蒲小学校74名、10月21、22日には曳馬中学校5名、11月2、4日には入野中学校5名、11月9から11日には気賀高等学校3名の生徒を受け入れ、発掘体験や調査の説明を行なった。また、毎月2回発掘通信を発行し、積極的に調査成果の普及を行った。

現地説明会　A区からは円面硯や陶馬、墨書土器など多量の遺物が出土し、B区からは掘立柱建物や井戸が検出されたことから現地説明会を2010年12月19日（日）に実施し、107名の市民の参加を得た。

整理作業　整理作業は、発掘調査と並行して2010年8月から2011年3月及び2011年7月から2012年3月にかけて現場事務所及び浜松市西区の浜松市埋蔵文化財調査事務所で実施した。SR01出土遺物をはじめ多くの出土品を扱ったが、従事者の効率よい作業により、契約期間内に整理作業を終了することができた。

調査参加者

現地調査

池谷志麻、池田典子、石岡　幸、岩田武道、大城光明、大城光義、鬼武朋子、小野志保、須部公夫、辻　健治、坪井里恵、外波山泉、中安洪弐、野本徹、藤原豊廣、水野すゞ代、湊　保代、村松はるみ、渡辺時次

整理作業

内山敦世、北野恵子、豊田七重、中村玲子、長谷川房枝、林　至美、峯野洋子

Fig.11　発掘体験

Fig.12　整理作業

第２章　検出遺構

１　Ａ区の遺構

（１）Ａ区における検出遺構の概要

Ａ区は、６次調査地の中でも最も南に位置し、南端を宮竹野際遺跡５次調査地に接する。古墳時代から鎌倉時代にかけては調査区の東北方向から南西方向に自然流路（SR01、SD06）が貫いており、その北側の微高地に遺構が展開している。弥生時代においては、水田として使われたとみられるが、造営期間は宮竹野際遺跡２次調査地（浜文協 1994）と比べると短いとみられ、水田に関連する遺物や遺構は僅かである。

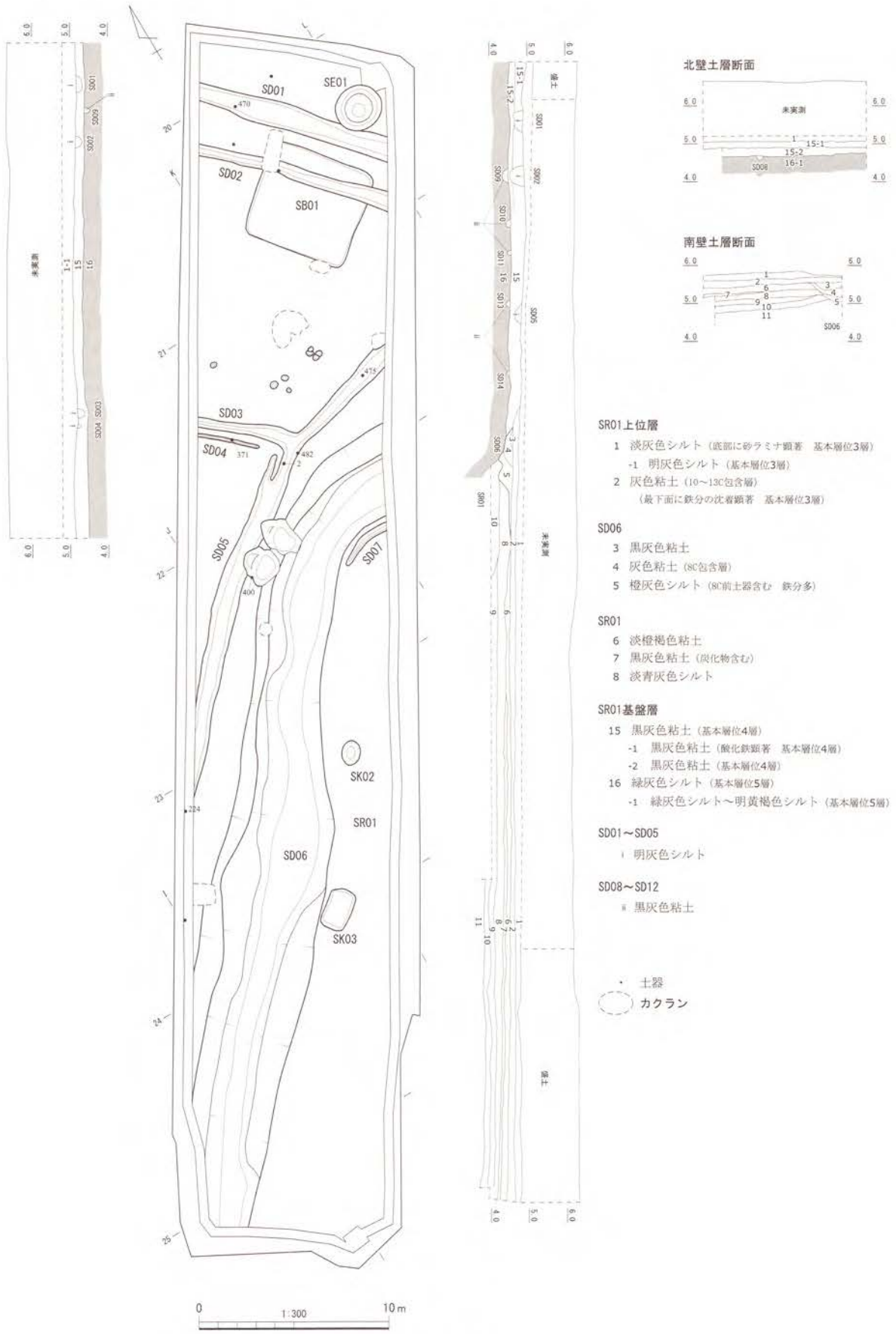
（２）弥生時代

概　要　弥生時代の遺構はＡ区の北側において集中的に検出できた。明確な遺構は水田の下部構造とみられる平行小溝群（SD08 ～ SD14）と畦畔上の祭祀遺構の可能性がある土器集積（SX01）である。また、微高地上には井戸 SE02 が一基確認できた。なお、自然流路（SR01）からは弥生時代終末期の遺物が出土しており、形成時期の一端をうかがうことができる。

平行小溝群　（SD08 ～ SD14、Fig.14）　調査区の北側において、平行する小溝群（SD08 ～ SD14）を検出した。遺構検出面は緑灰色シルト層（基本層位５層、Fig.14-16 層）であり、小溝群はその上位にある黒灰色粘土層を埋土にもつ。遺構の検出層位や状態は、宮竹野際遺跡２次調査で検出した水田下層遺構群（Ⅷ層溝状遺構）と同一である。小溝群の幅はいずれも 20cm以下で、検出面からの深さは最も深い部分においても 10 数センチ程度である。検出できた溝は、幅 1m ～ 3m ほど間隔をもちながらも、南北方向にほぼ方向を揃えている。宮竹野際遺跡２次調査の成果を参照すると、本例も同様に水田耕作に関連した遺構とみられる。畦畔の設定などに伴い基盤層まで掘削された痕跡と想定できるだろう。なお、水田耕作土とみられる黒灰色粘土層（基本層位４層、Fig.14-15 層）中の土壌の攪拌は顕著とは言えず、明確な耕作痕跡を見出すことが難しい。水田の造営期間は、２次調査地と比べると短かったものと想定できるだろう。小溝群に伴う遺物は皆無であり、遺構の形成時期を明確にすることは難しい。

河原石の埋没　（Fig.14）　平行小溝群が検出できた範囲の南西側において長径 20cm 程度の円礫（河原石）が埋没している状況を確認した。検出できた河原石は全部で３個であり、耕作土中に埋置されたような状況であった。これらの河原石の性格は不明確であるが、水田耕作に伴い畔の傍らに置かれた石の可能性が考えられる。

土器集積　（SX01、Fig.15）　河原石の埋没が確認できた南側において、弥生土器が集中的に出土する地点を確認した。出土した土器は、高杯（Fig.48-13）や甕（Fig.48-14）である。明確な掘り方をもたないことから、地面上に土器を集積したものと捉えられる。平行小溝群を水田関連の遺構と



SR01上位層
- 1 淡灰色シルト（底部に砂ラミナ顕著　基本層位3層）
- -1 明灰色シルト（基本層位3層）
- 2 灰色粘土（10～13C包含層）
（最下面に鉄分の沈着顕著　基本層位3層）

SD06
- 3 黒灰色粘土
- 4 灰色粘土（8C包含層）
- 5 橙灰色シルト（8C前土器含む　鉄分多）

SR01
- 6 淡橙褐色粘土
- 7 黒灰色粘土（炭化物含む）
- 8 淡青灰色シルト

SR01基盤層
- 15 黒灰色粘土（基本層位4層）
- -1 黒灰色粘土（酸化鉄顕著　基本層位4層）
- -2 黒灰色粘土（基本層位4層）
- 16 緑灰色シルト（基本層位5層）
- -1 緑灰色シルト～明黄褐色シルト（基本層位5層）

SD01～SD05
- Ⅰ 明灰色シルト

SD08～SD12
- Ⅱ 黒灰色粘土

・ 土器
カクラン

Fig.13　A区 全体図

捉えるなら、この土器集積も畦畔上の祭祀などに用いられたものである可能性が考えられる。いっぽう、この遺構を水田に伴わない遺構と捉えることも充分可能である。出土遺物が示す時期は、弥生時代後期後半（欠山様式期）である。

水田の造営時期　今回の調査で確認した水田に関連する可能性がある遺構はいずれも不明確なものばかりである。出土遺物も僅かであることから、その造営時期も明確になしえない。ただし、弥生時代前期に溯る条痕文土器の破片（Fig.48-1）や弥生時代中期に溯る可能性がある壷底部（Fig.48-2）が認められることは注目してよい。宮竹野際遺跡2次調査地と同様の時期の遺構が今回の調査地区にも展開していた可能性があるだろう。今回の調査で出土した弥生土器の中では、後期のもの（Fig.48-4 ～ 12）が目立つ。また、土器集積SX01の帰属時期は弥生時代後期後半である。これらのことから、水田の造営時期は、弥生時代後期まで降る可能性も考えてよい。

自然流路　（SR01、Fig.17）　SR01は、A区の中央部から南側の大部分を占める自然流路である。

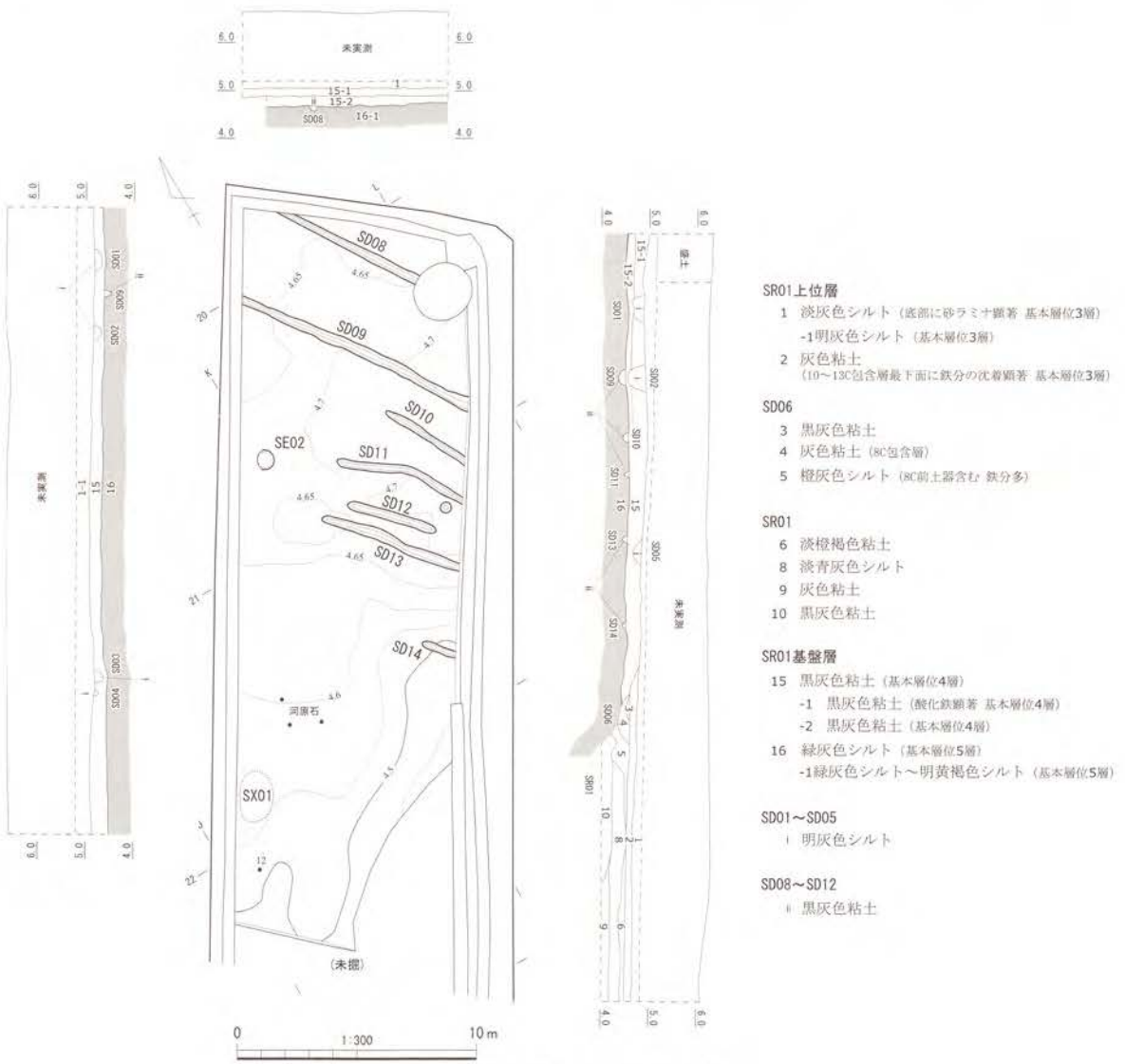


Fig.14　A区 弥生時代 全体図

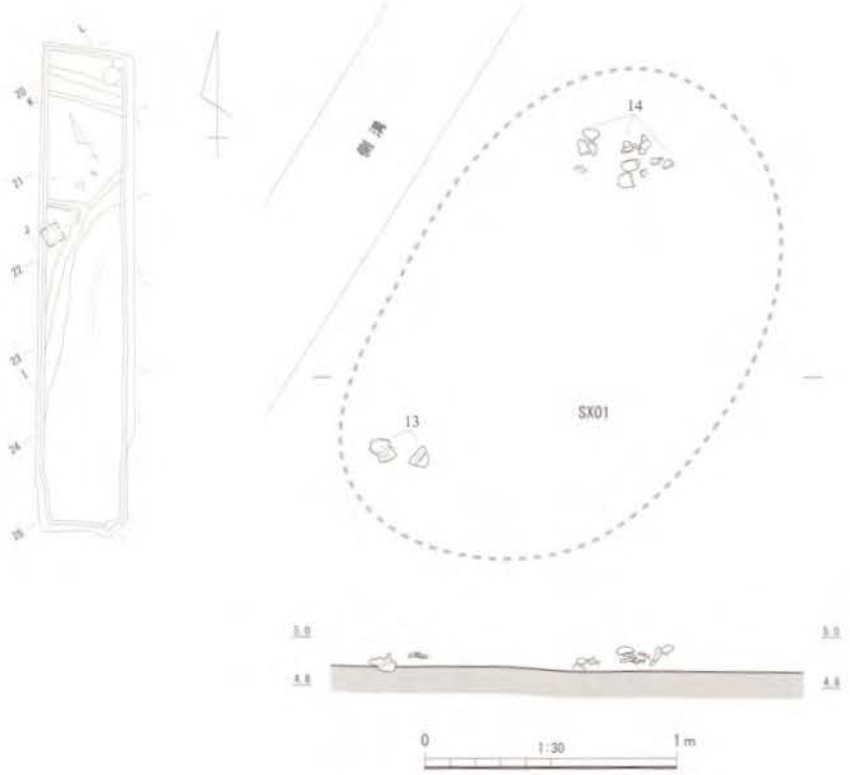


Fig.15　SX01 詳細

形成初期の幅は10 m以上、深さは1.2 mほどである（Fig.17）。SR01は基本層位6層を貫き、宮竹野際遺跡の東端を区画するような位置に流れていたとみられる。SR01の比較的下層からは、弥生時代終末期（元屋敷Ⅰ式期）に降る遺物（Fig.48-15･16）が出土している。自然流路の形成は弥生時代まで溯るとみられ、SR01は水田に水を供給する小河川であった可能性も考えられる。

井　戸（SE02、Fig.16）　SE02は平行小溝群が展開する区域の南西部において検出した素掘りの井戸である。直径80cm、深さ90cmほどであり、最下層からは直口小壺（Fig.48-3）が出土した。出土遺物の特徴から、SE02は弥生時代後期から古墳時代前半期の遺構と捉えられる。

小　結　A区における弥生時代の状況は、水田と小規模な河川が展開する景観であったとみられる。土器集積SX01や井戸SE02が水田とは関わらない遺構と捉えるなら、小規模な居住域も広がっていた可能性もある。水田の造営時期については出土遺物が僅かなことから細かな検討ができない。

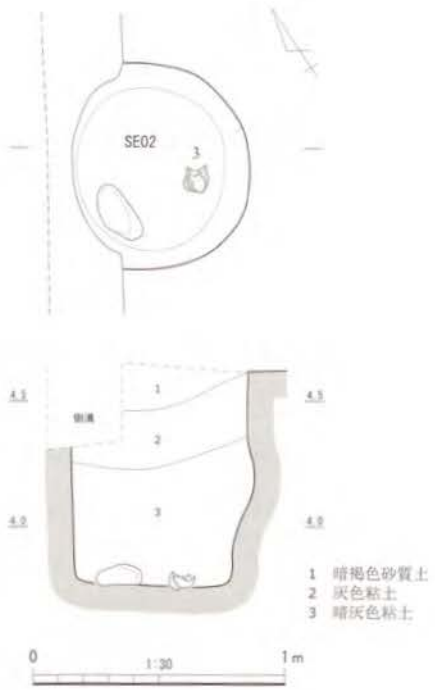
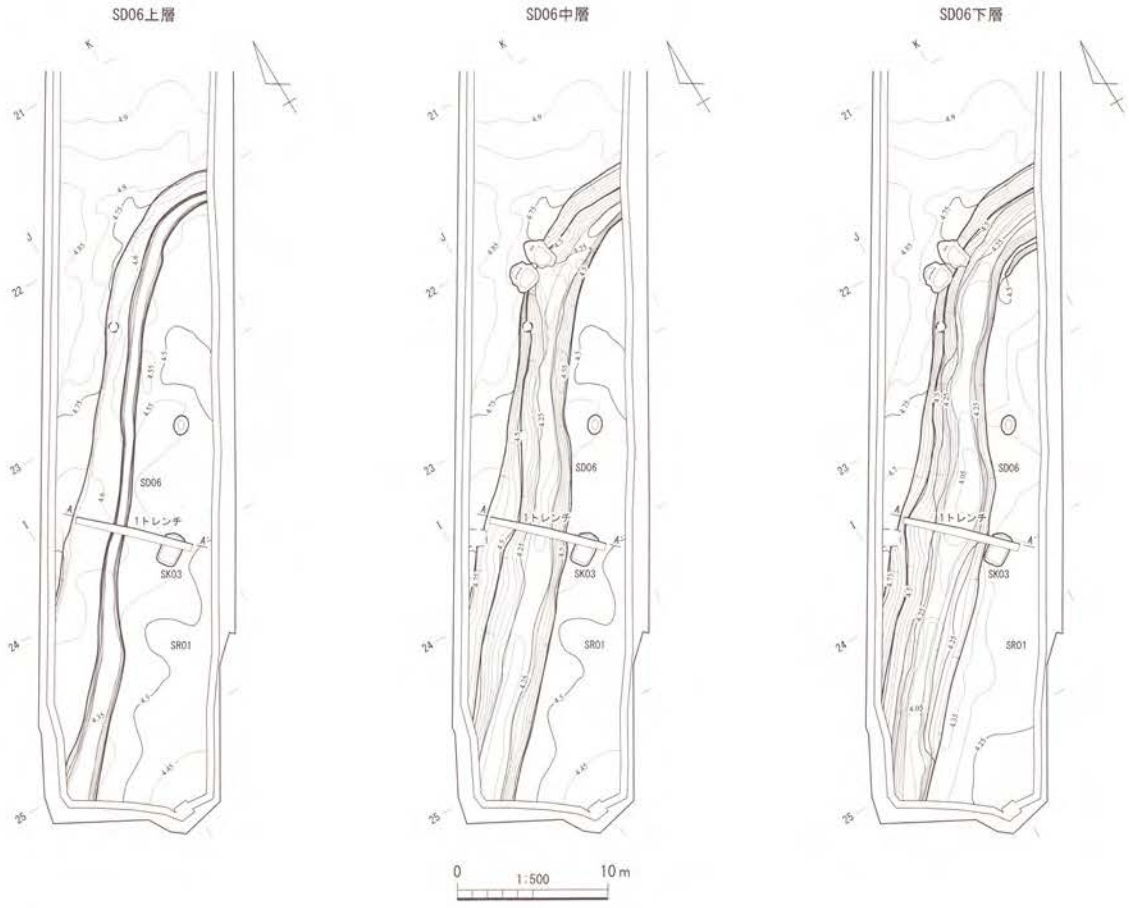
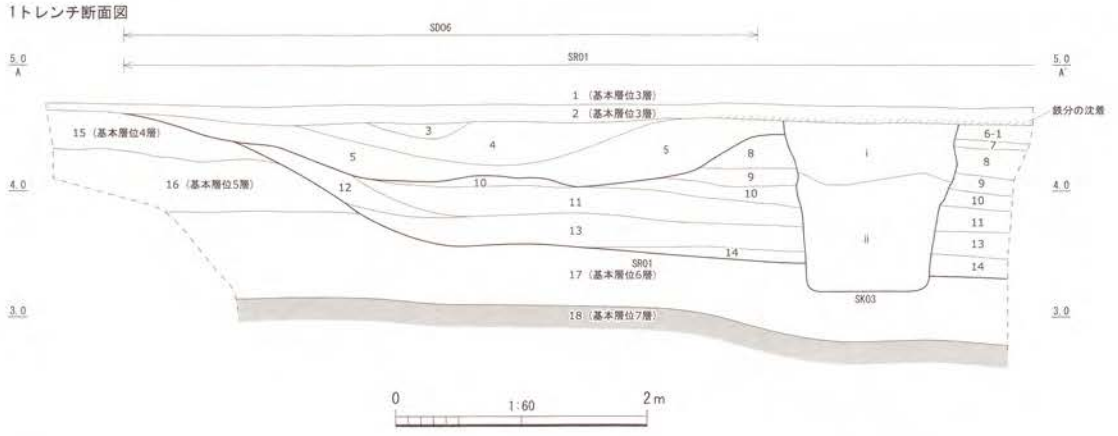


Fig.16　SE02 詳細





SR01上位層
- 1　淡灰色シルト（SR01　Ⅰ層）
  （底部に砂ラミナ顕著　基本層位3層）
- 2　灰色粘土（SR02　Ⅱ層）
  （10～13C包含層　最下面に鉄分の沈着顕著　基本層位3層）

SR01基盤層
- 15　黒灰色粘土（基本層位4層）
- 16　緑灰色シルト（基本層位5層）
- 17　灰色粘土（基本層位6層）
- 18　砂（基本層位7層）

SD06上層
- 3　黒灰色粘土

SD06中層
- 4　灰色粘土（8C包含層）

SD06下層
- 5　橙灰色シルト（8C前土器含む　鉄分多）

SR01
- 6-1　淡橙褐色粘土（8～9C包含層）
- 7　黒灰色粘土（炭化物含む）
- 8　淡青灰色シルト
- 9　灰色粘土
- 10　黒灰色粘土
- 11　灰色粘土
- 12　黒灰色粘土
- 13　暗灰色粘土
- 14　黒灰色粘土

SK03
- i　灰色粘土（黒色粘土の斑土を含む）
- ii　灰色粘土

Fig.17　A区トレンチ土層断面図

（３）奈良時代～平安時代

概　要　Ａ区における奈良時代～平安時代の遺構は、調査区の中央を貫く自然流路 SD06 を境界に大きく様相が異なる。SD06 は、弥生時代に形成された自然流路 SR01 の上層において再形成された小規模な河川跡である。SD06 の北側は、微高地性堆積層（基本層位４層）が確認でき、竪穴建物の可能性がある方形遺構 SB01 がみられる。いっぽう、SD06 の南側では湿地性堆積層（自然流路 SR01 埋土）が確認でき、小規模な土坑が数基、確認できた。SD06 の埋没後も自然流路 SR01 の範囲全体は湿地化した環境であったとみられる。

自然流路　（SD06、Fig.17）　SD06 はＡ区の中央を北東方向から南側に流れる自然流路である。水流は北側から南側に向っていたとみられるが、調査範囲においては溝の底面に明確な高低差を認めがたい。SD06 は、自然流路 SR01 の上層において形成されている。SR01 がある程度埋没した後に、流路の西岸を這うようにして形作られたとみられ、形成当初は幅 5m ～ 6m、深さ 80cmほどの規模であったとみられる。SD06 の形成時期は、溝中から７世紀中頃（古墳時代終末期）の須恵器（Fig.51-92 ～ 95）が出土していることから、この時期まで溯るとみてよいだろう。いっぽう、SD06 埋没時期は、上層遺物（Fig.54･55）から判断して、９世紀前半（平安時代前期）のことと考えられる。SD06 の埋没後は、SR01 の旧流路の範囲が湿地化した状態となり、13 世紀後半（鎌倉時代後期）頃まで堆積が進んだと捉えられる（SR01 上位層）。

SD06 は堆積層が明確に分離でき、下層、中層、上層の３層位にわたり、平面的に精査した。各層位には比較的まとまって遺物が出土する状況が確認できている。これらの遺物には、後述するように官衙的様相が看取できるものが含まれ、宮竹野際遺跡が長上郡家にかかわる遺跡であることが明確になった。SD06 は湿地性堆積がみられたが、比較的乾燥しており、木製品などの保存環境には適しない。SD06 中には、ある程度の木製品も投棄されていた可能性が考えられるが、明確な木製遺物は確認できていない。

SD06 下層　（Fig.18）　SD06 の下層は、幅５～６ｍ、深さ 80cmの規模である。SD06 内の堆積土が橙灰色シルトであることから判断すると、後述する中層以降に比べてある程度の水量があったとみられる。SD06 の下層には、土器が比較的集中する地点が２箇所ほどみられた。北側の土器集中区を SX08、南側の土器集中区を SX09 とする。この他、SD06 の下層からは Fig.49・62 に示す遺物群が出土した。土器集積出土品を含め、SD06 下層出土遺物には、墨書土器（Fig.62-403）、赤彩された土師器高盤（Fig.49-32）、製塩土器（Fig.49-42 ～ 53）、桃核（Fig.21）など、官衙的様相をもつ遺物が少なからず認められる。出土遺物が示す時期は７世紀末～８世紀前半頃である。後述するように、宮竹野際遺跡には遠江国長上郡家がかかわる施設の一部が及んでいたとみられるが、その形成は奈良時代の初頭頃まで溯るとみてよいだろう。

SX08　（Fig.19）　SX08 は南北 6m、東西２ｍにわたり遺物が集中する地区で、この部分だけ溝の底部が深い状況であった。浅い渕状の地形を呈し、その深みに遺物がまとまったものと捉えられる。SX08 からは Fig.49-17 ～ 30 に示す土器のほか、比較的大量に桃核が出土している。桃核を用いた祭

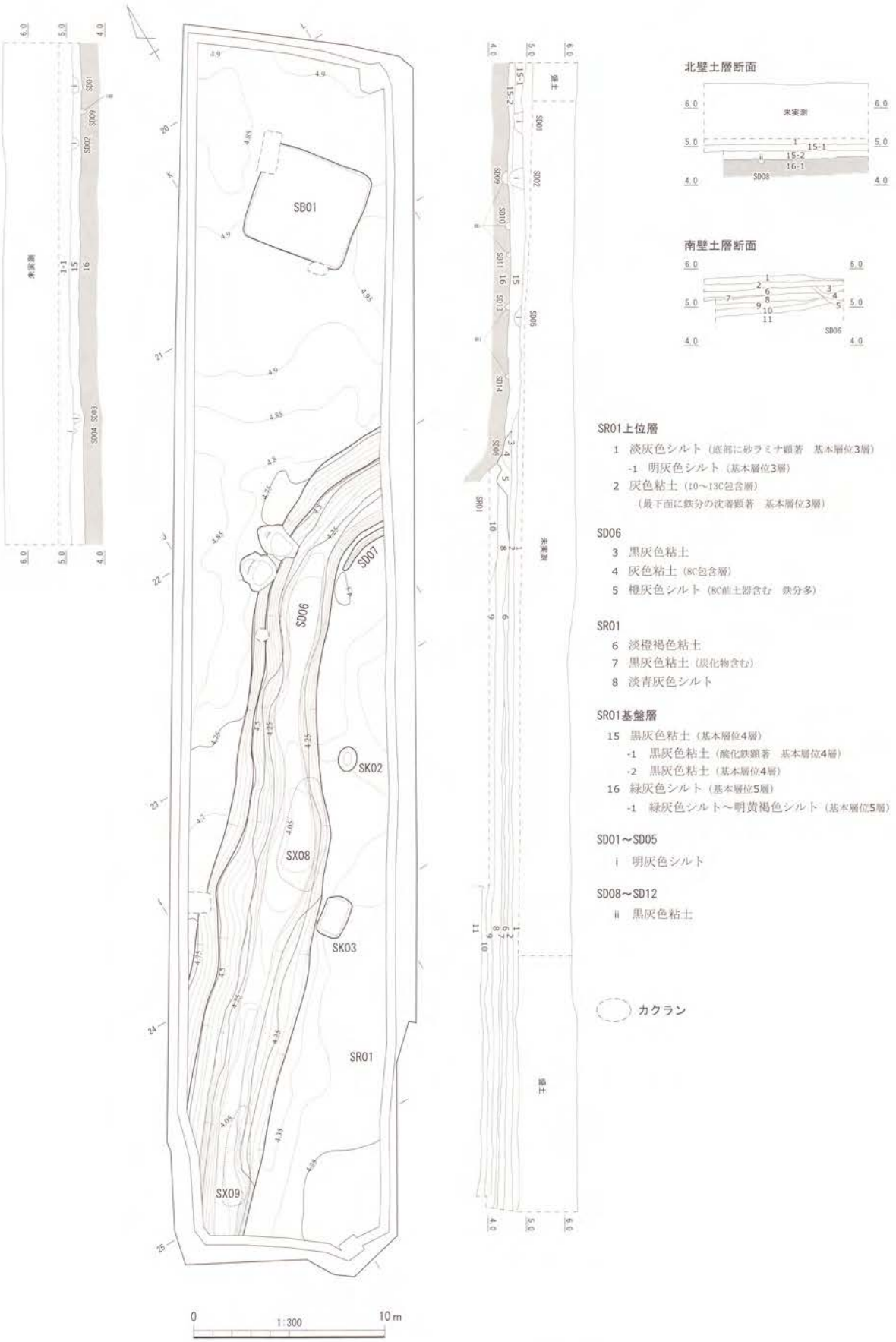


Fig.18　A区古代面下層 全体図

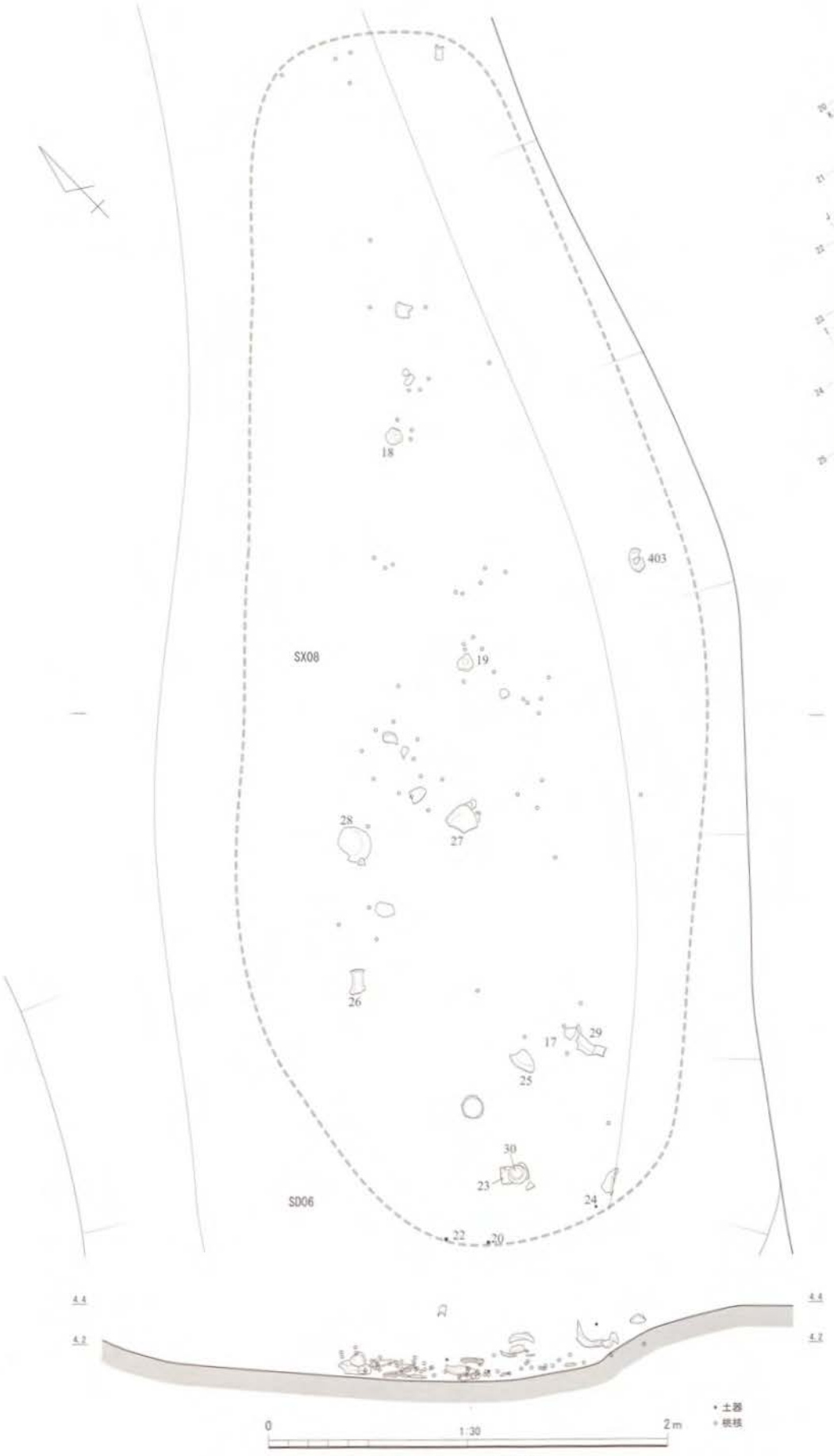


Fig.19　SX08 詳細

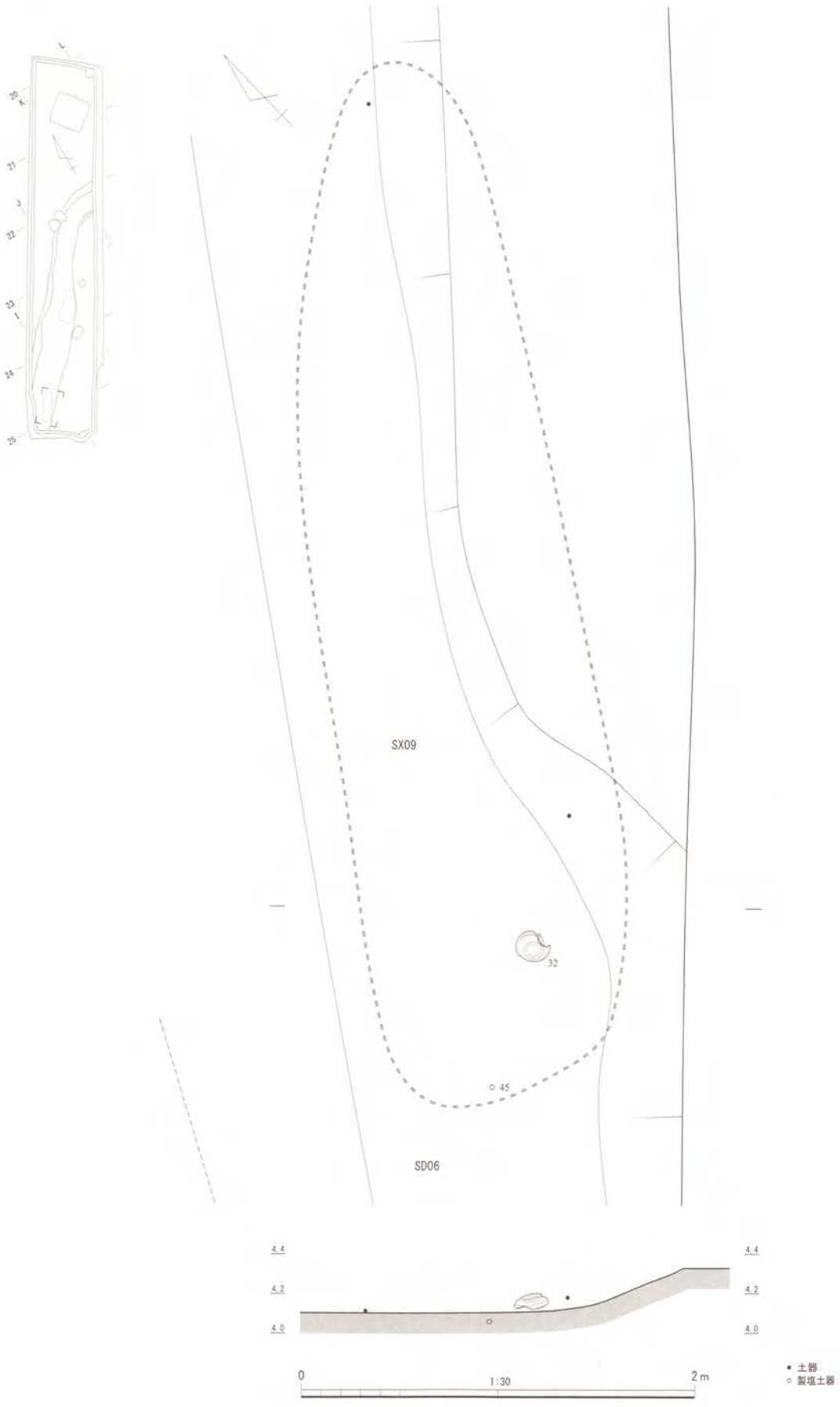


Fig.20　SX09 詳細

祀が執り行われた可能性もある。出土遺物の特徴から、SX08は7世紀末～8世紀前半頃の遺物集積と捉えられる。

SX09（Fig.20） SX09は調査区の南端で確認した遺物集積である。遺物の集積密度は高くないが、完形に近い土器が数点（Fig.49-32など）みられるほか、製塩土器（Fig.49-45取上番号256）などが認められる。

SD06中層（Fig.22） SD06下層の堆積が20cmほど進んだ後、上位層で遺物が集中する部分が認められた。この層位をSD06中層とする。SD06の中層は、幅5～6m、深さ60cmの規模である。SD06中層内の堆積土が灰色粘土であることから判断すると、常時はあまり水が流れず湿地のような環境であったとみられる。SD06の中層には土器が比較的集中する地点が5箇所ほどみられた。この土器集中箇所を北側からSX03～07とする。この他、SD06の中層からはFig.52･53に示す遺物が出土した。SD06中層出土遺物が示す時期は8世紀中葉～8世紀末頃である。出土遺物には、墨書土器（Fig.62-404～406､413）をはじめ、円面硯（Fig.52-111）、水滴（Fig.50-81）、製塩土器（Fig.53-142～161）といった官衙的様相をもつ遺物が含まれている。

SX03～07（Fig.23～27） SD06の中層には遺物が出土する地点が数箇所認められた。これらは便宜的にSX03～07と名づけたが、ほぼ一連の土器集積とみてよい。SX03～07からはFig.50に示す遺物が出土した。出土遺物が示す時期は8世紀中葉～8世紀末頃である。

SD06上層（Fig.28） SD06中層の堆積が20cmほど進み、SD06はその規模が急速に縮小する。SD06が埋没する直前の姿をSD06上層とする。SD06の上層は、幅1～2m、深さ30cmの規模である。SD06上層の埋土は黒灰色粘土であり、炭化物も比較的多く含まれている。

SD06の上層からは土器片が集中する地点が1箇所みられた。この土器集中箇所をSX02とする。SX02からはFig.54の遺物が出土した。この他、SD06の上層からはFig.55に示す遺物が出土している。SD06上層出土遺物が示す時期は8世紀末～9世紀前葉である。また、SD06最上層から出土した遺物をFig.55-187･188、Fig.63-429に示す。この遺物群は鎌倉時代の遺物を若干含むが、新しい時期の土器は混入品とみてよいだろう。これらの遺物を含め、SD06上層出土遺物には、墨書土器（Fig.63）、須恵器獣脚付壺の脚部（Fig.56-224）、製塩土器（Fig.56-229～233）をはじめとした官衙的様相をもつ遺物が含まれている。

SX02（Fig.29） SX02はSD06上層の南側において、確認できた遺物集中箇所である。遺物が分布する範囲は、南北5m、東西1.5mほどの範囲であり、Fig.54に示す遺物が出土した。出土遺物が示す時期は8世紀末～9世紀前葉頃である。

湿地帯（旧自然流路）（SR01上位層、Fig.30） SD06が埋没した後も旧流路SR01の上層部分が低位面として残存し、湿地帯が広がっていたとみられる。SD06の埋没後に残存した湿地帯の堆積土をSR01上位層として取り扱う。SR01上位層は、古い段階に堆積したⅠ層（Fig.17-2層：灰色粘土層）、新しい段階に堆積したⅡ層（Fig.17-1層：淡灰色シ

Fig.21　SD06出土桃核

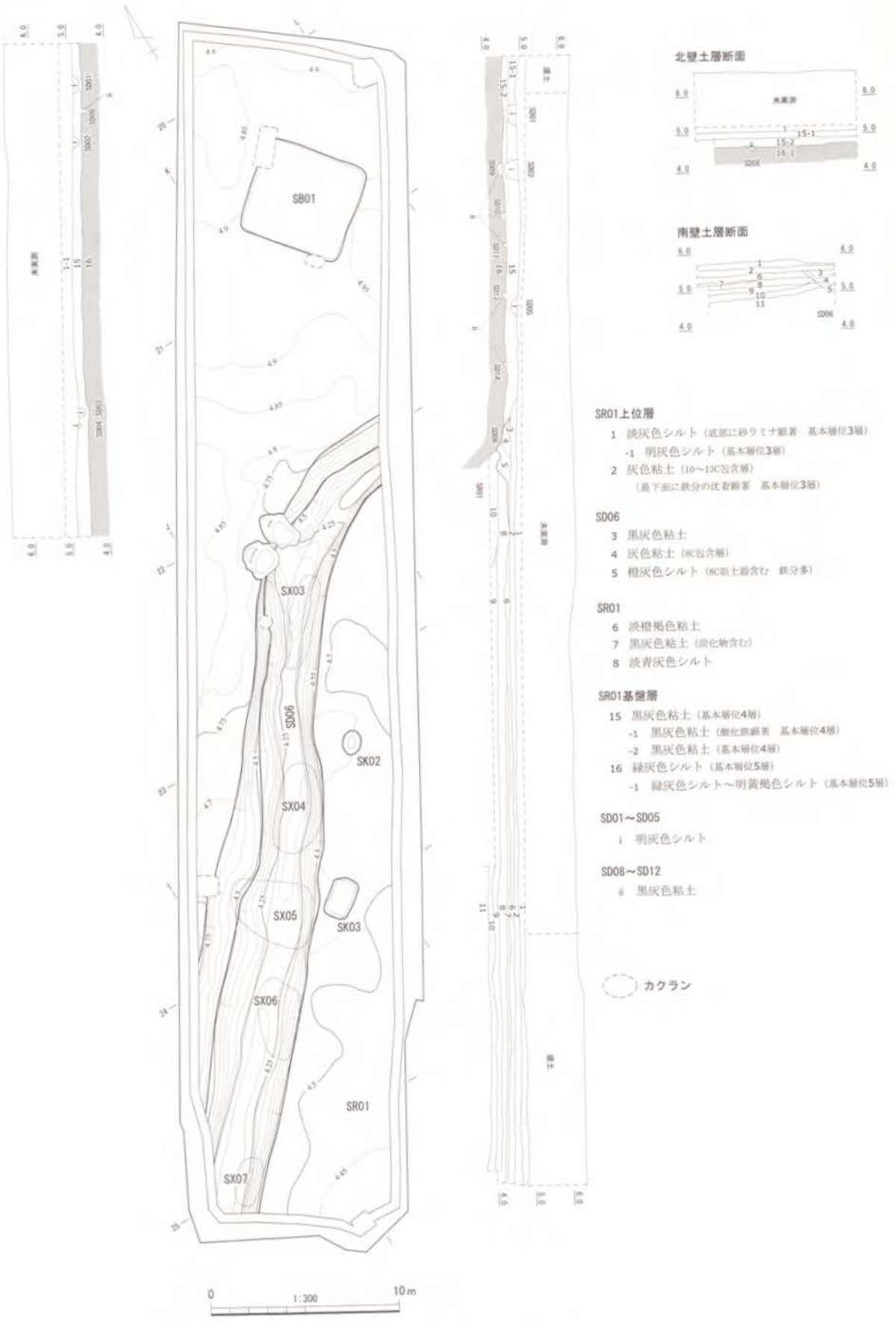


Fig.22　A区 古代面中層 全体図

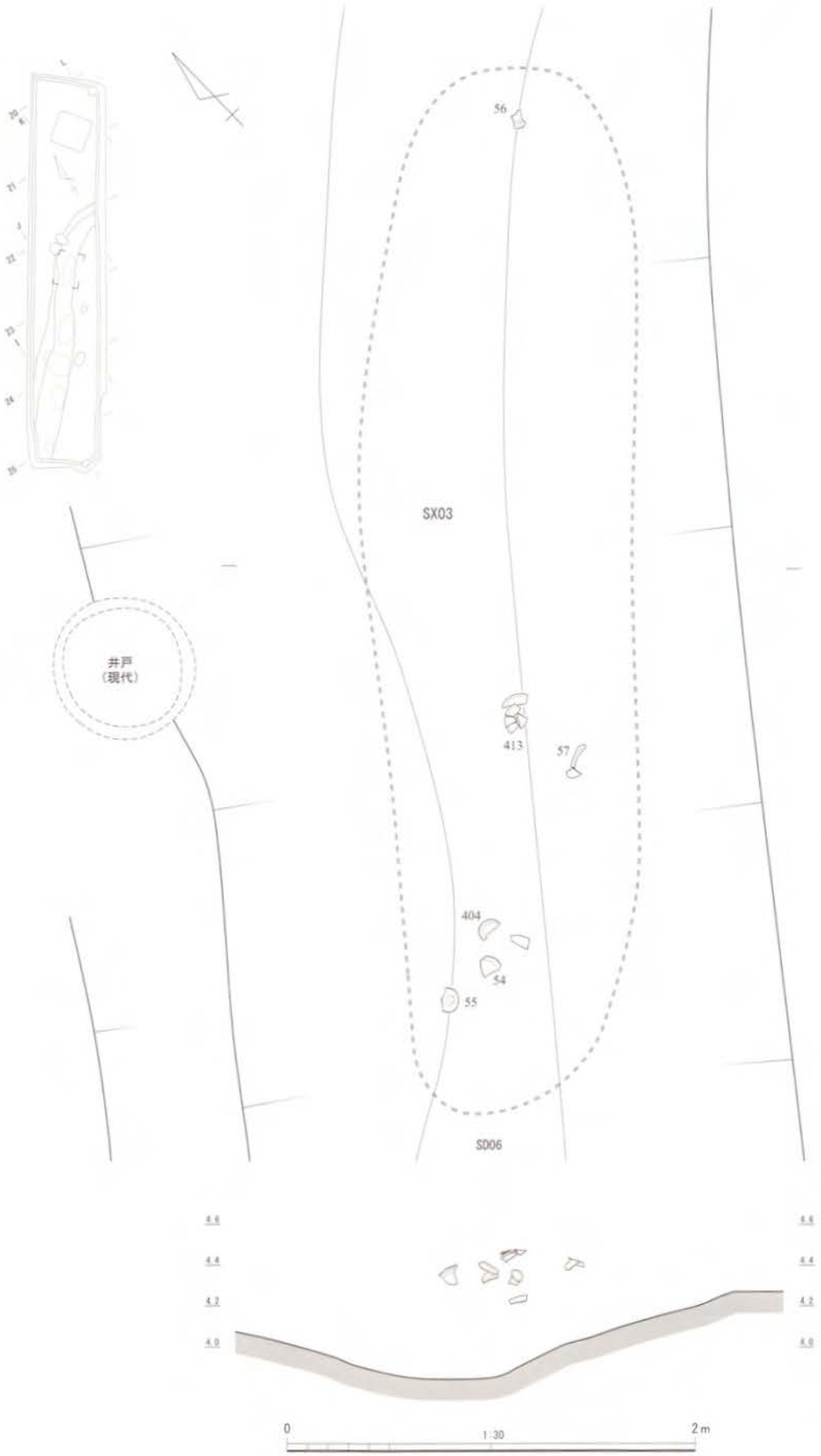


Fig.23　SX03 詳細

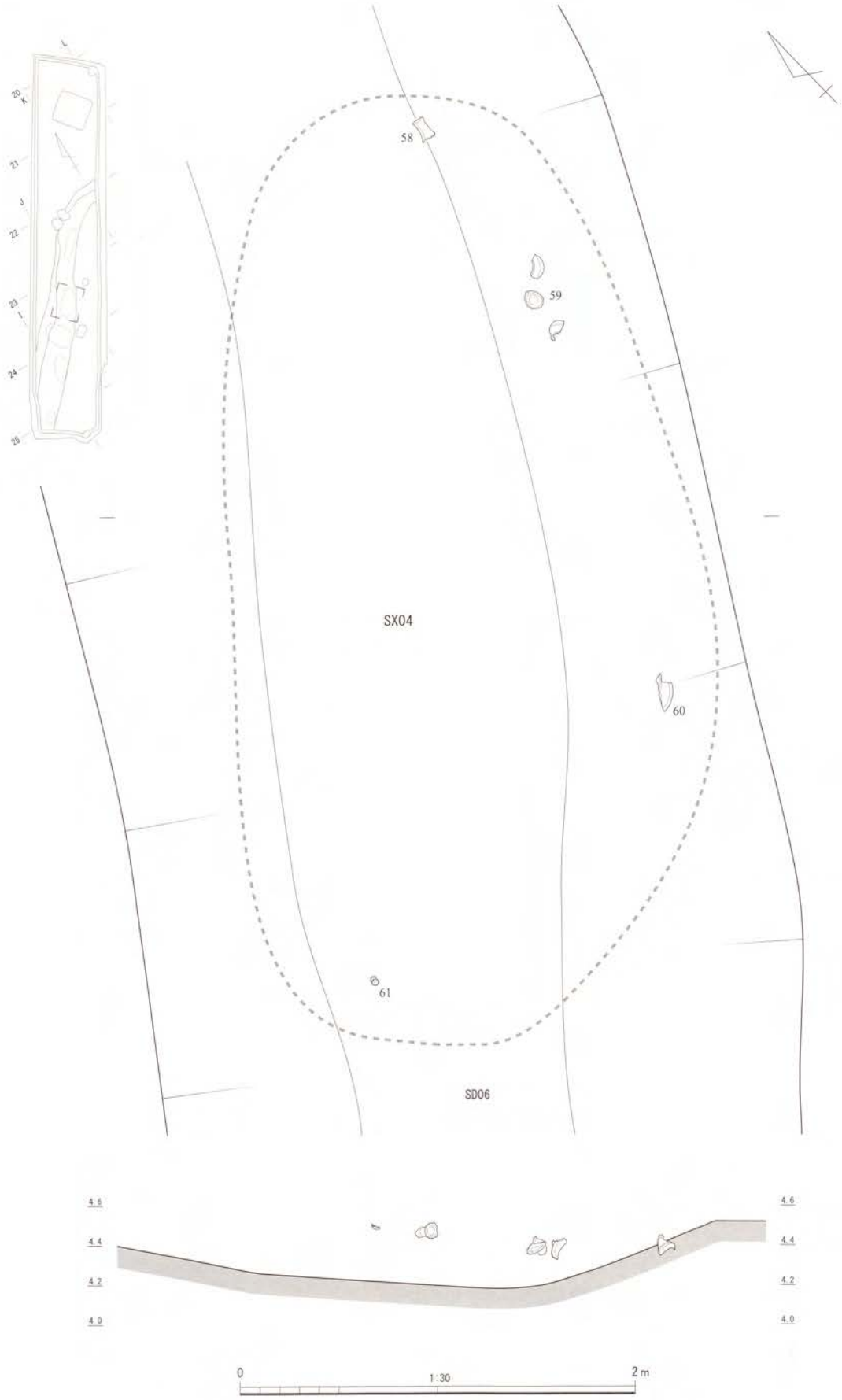


Fig.24　SX04 詳細

Fig.25　SX05 詳細

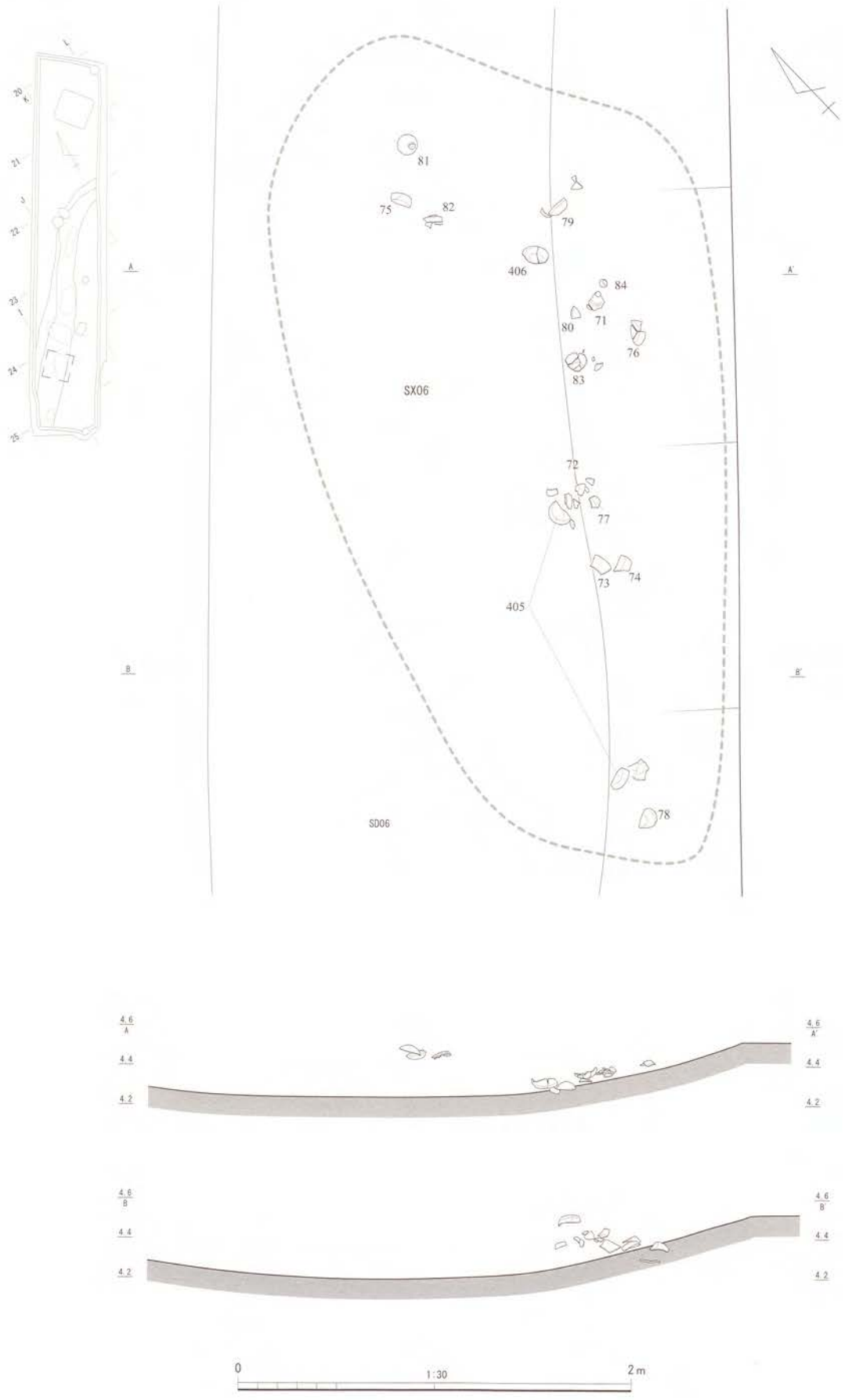


Fig.26　SX06 詳細

ルト層）に分離できる。これらの堆積層位は、基本層位３層に相当する。

SR01 上位層からは、土器のほか馬歯（Fig.31）や獣骨が出土している。後述するように、湿地帯内には小さな畦畔がみられるが、常時耕作土として用いたような攪拌の痕跡は認められなかった。SR01 上位層から出土した遺物量が比較的豊富なことも考慮すると、水田として活用していたとしてもその頻度は少なかったとみてよいだろう。宮竹野際遺跡５次調査の調査区北端で検出された遺物を多く含む地点（静文研 2006：p.29、土器集中地域）は、この湿地帯（SR01 上位層）に相当するとみられ、その下位に自然流路 SD06 が埋没していると捉えられる。

SR01 上位層からは、Fig.57 ～ 61 に示す遺物が出土した。出土遺物が示す時期は、下層のⅡ層が８世紀末～９世紀前葉頃、上層のⅠ層が９世紀末～ 13 世紀後半である。SR01 上位層からの出土遺物には、墨書土器（Fig.64）をはじめ、円面硯（Fig.59-297 ～ 299）、風字硯（Fig.59-300）、水瓶（Fig.60-345）といった官衙的様相をもつ遺物が含まれている。Fig.64-456･457 といった 10 世紀（平

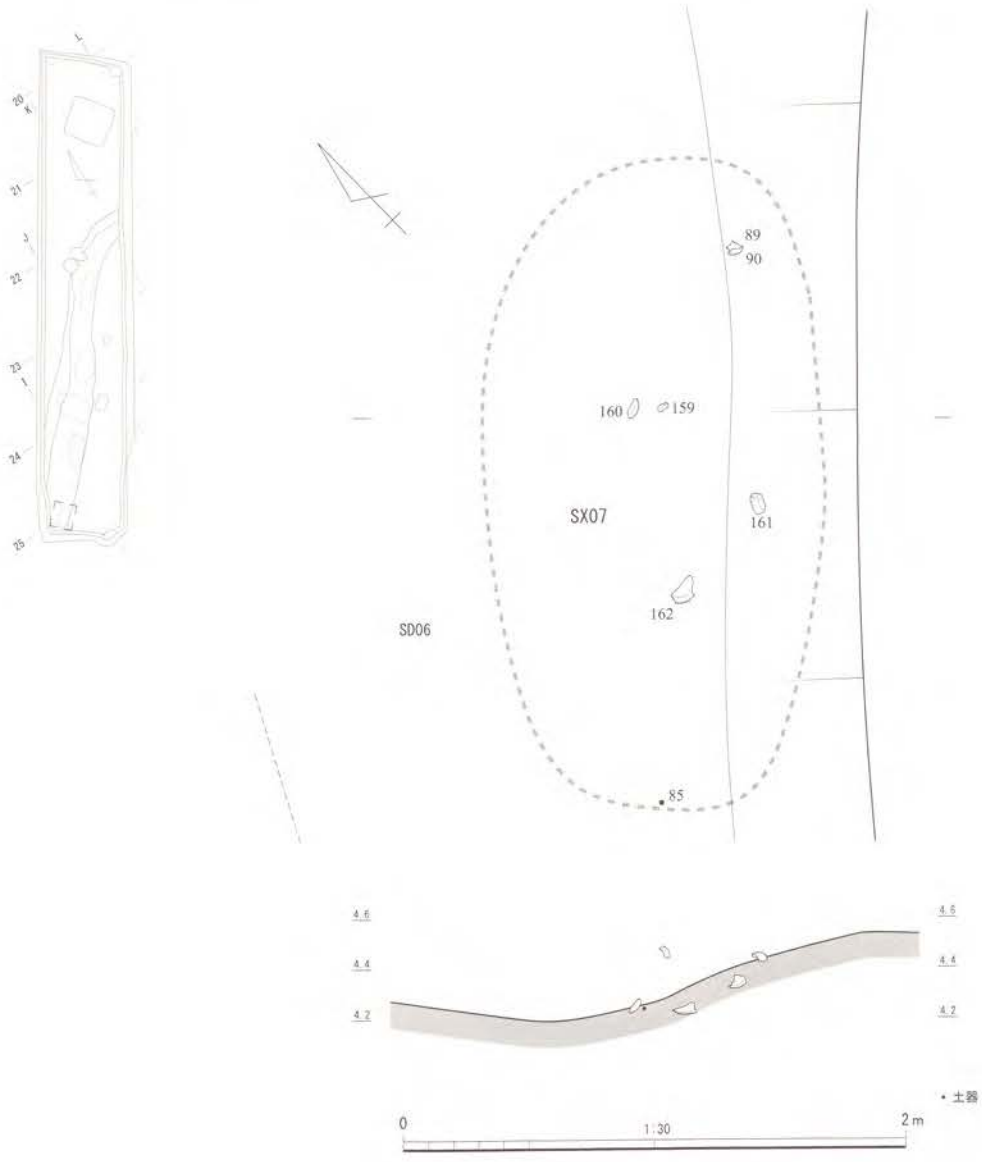
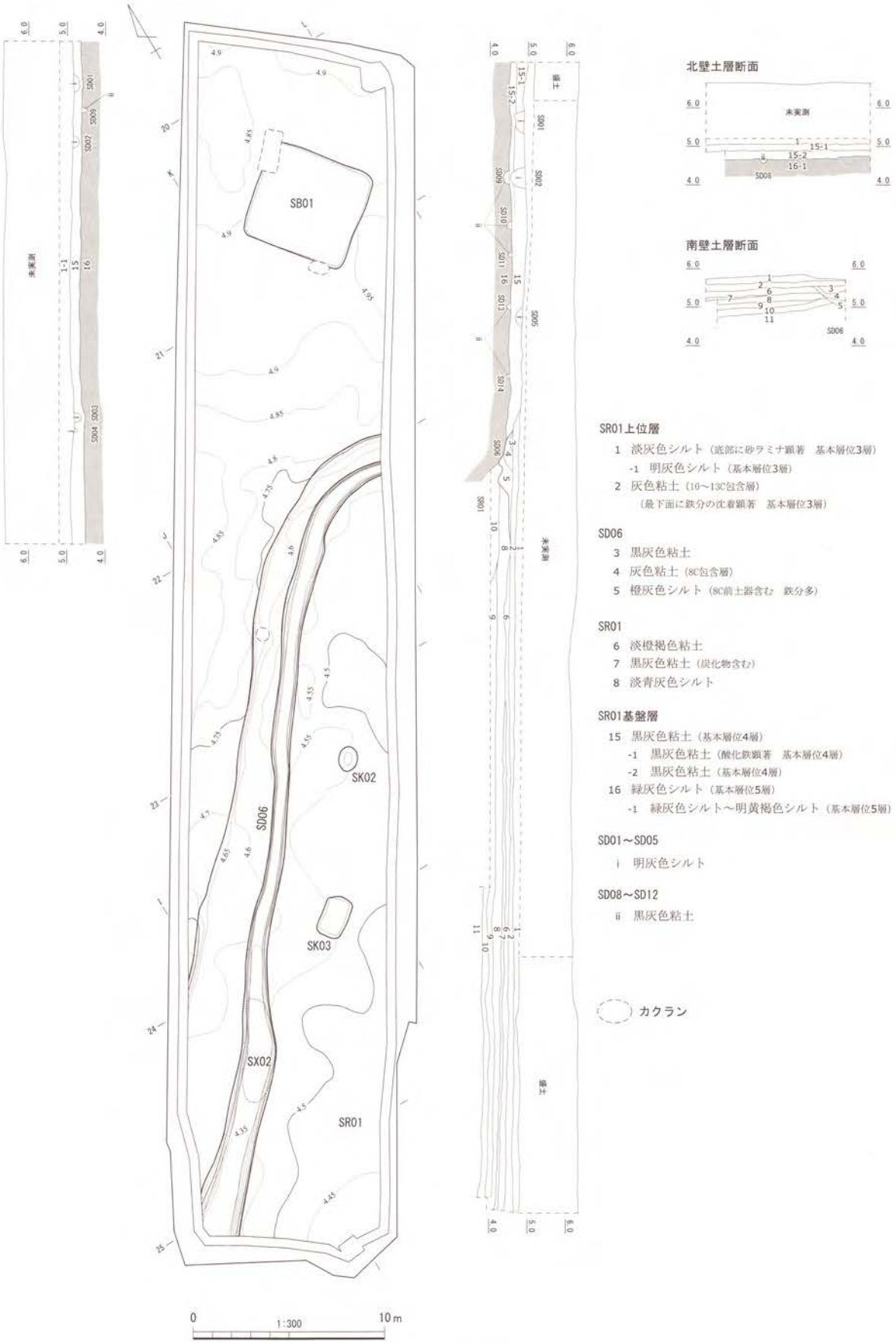


Fig.27　SX07 詳細



SR01上位層
- 1　淡灰色シルト（底部に砂ラミナ顕著　基本層位3層）
- -1　明灰色シルト（基本層位3層）
- 2　灰色粘土（10～13C包含層）
- （最下面に鉄分の沈着顕著　基本層位3層）

SD06
- 3　黒灰色粘土
- 4　灰色粘土（8C包含層）
- 5　橙灰色シルト（8C前土器含む　鉄分多）

SR01
- 6　淡橙褐色粘土
- 7　黒灰色粘土（炭化物含む）
- 8　淡青灰色シルト

SR01基盤層
- 15　黒灰色粘土（基本層位4層）
- -1　黒灰色粘土（酸化鉄顕著　基本層位4層）
- -2　黒灰色粘土（基本層位4層）
- 16　緑灰色シルト（基本層位5層）
- -1　緑灰色シルト～明黄褐色シルト（基本層位5層）

SD01～SD05
- i　明灰色シルト

SD08～SD12
- ii　黒灰色粘土

カクラン

Fig.28　古代面上層 全体図

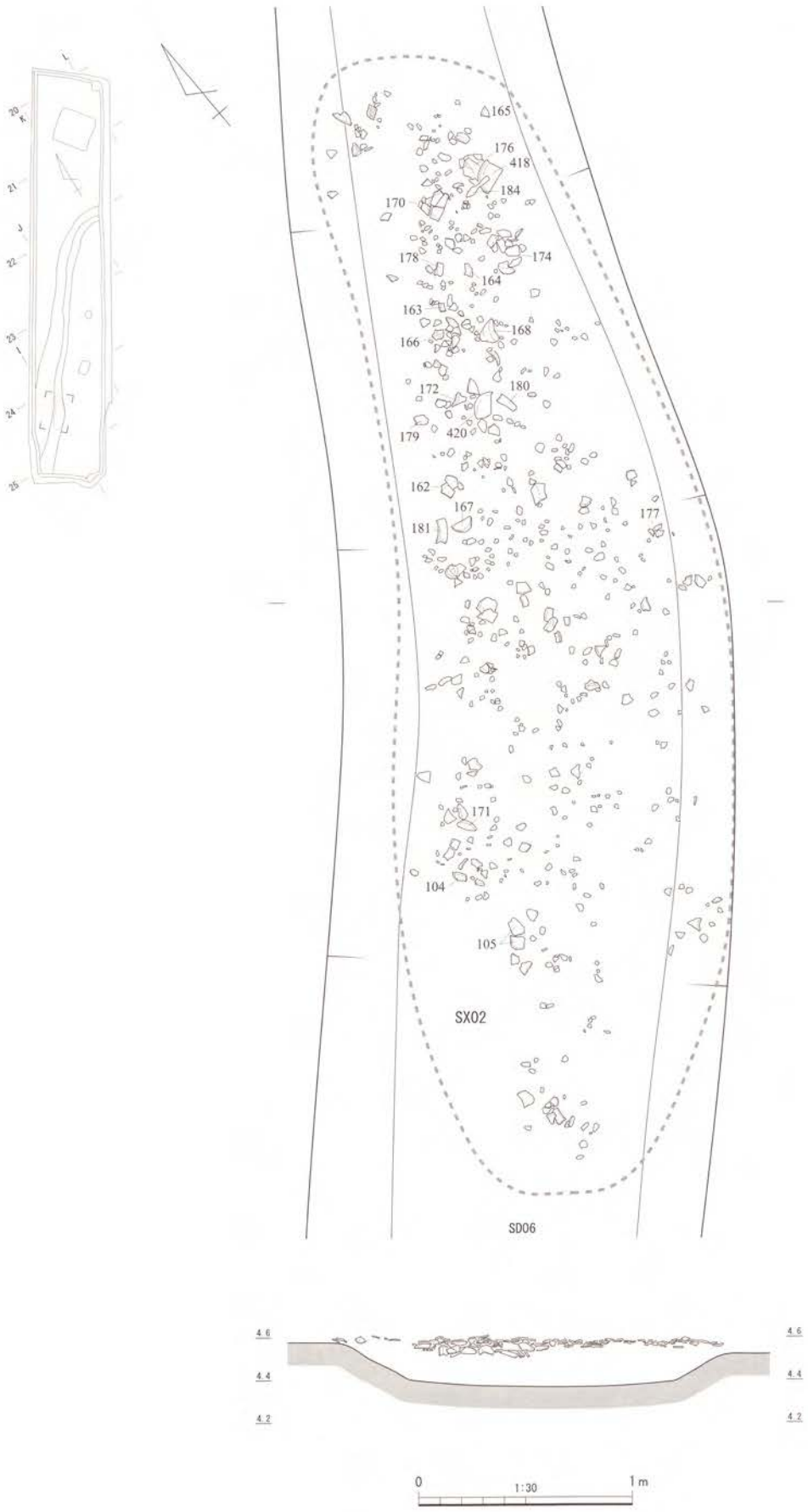


Fig.29　SX02 詳細

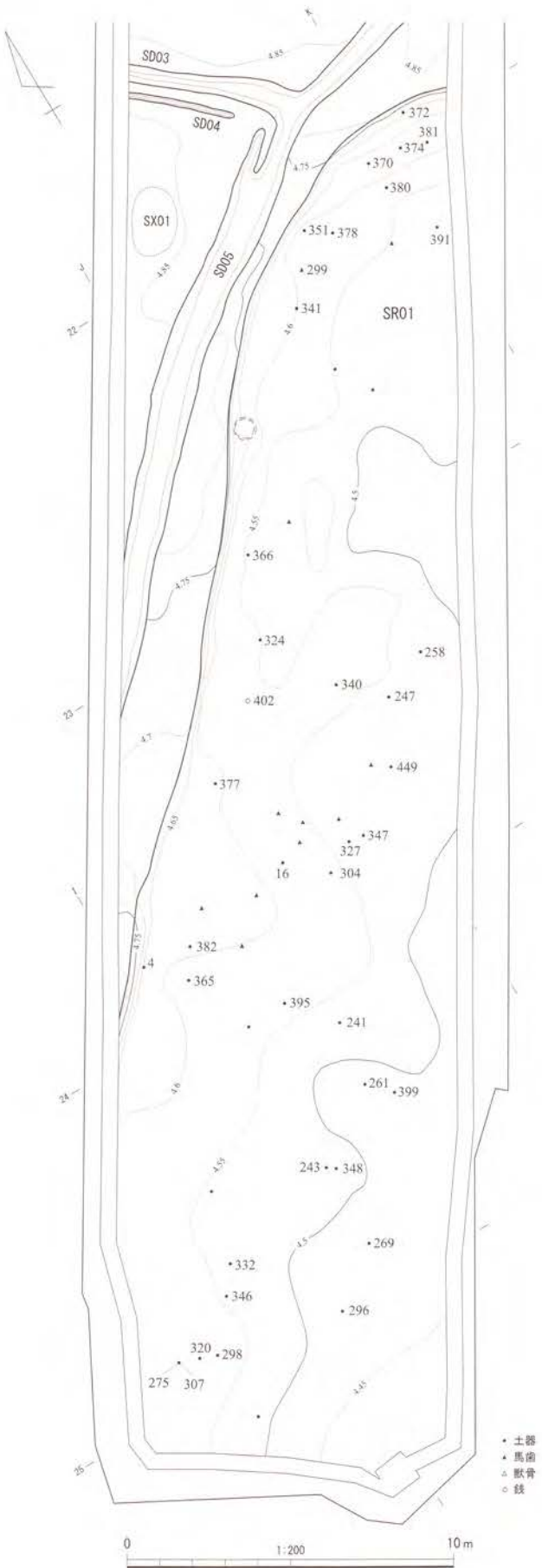


Fig.30　SR01 上位層遺物分布図

安時代中期）の墨書土器（灰釉陶器）もみられるので、宮竹野際遺跡の官衙施設はこの頃まで残存していたとみてよいだろう。

土　坑（SK02･03、Fig.28）　SR01 上位層の堆積が始まる時期よりも古い段階に湿地帯内に土坑（SK02･03）が掘削されている。SK03 は長軸 2.2 m、短軸 1.4 mほどの方形の大型土坑で、検出面からの深さは 1.3 mである。埋土には単位の大きな斑土がみられ、急速に埋め戻されたとみられる。出土遺物が全くなかったため、正確な形成時期や土坑の用途は明確でない。

方形遺構（SB01、Fig.28）　SD06 よりも北側の高位面において形成された遺構で、長軸 5.5 m、短軸 5.2 m、検出面からの深さ 20cmほどの規模をもつ。平面的な形状は竪穴建物跡に似るが、柱穴や竈の痕跡など、建物として認定してよい要素が認められない。出土遺物もないため遺構の時期も明確でない。

小　結　A区における奈良時代～平安時代の遺構は、自然流路 SD06 が中心的存在である。流路の規模こそ小さいが、3 層にわたる層位的な遺物埋没状況が確認でき、それぞれ豊富な遺物が出土した。出土遺物には、円面硯、風字硯、墨書土器、水滴といった文字と関連するもののほかに、製塩土器が 25 点分確認できた。遠江では土器

Fig.31　SR01 出土馬歯

製塩が行われず、製塩土器は製品としての塩の容器として生産地である三河湾沿岸から搬入されたものとみられる。その出土地は後述するように官衙遺跡に集中する傾向が強い（第５章後論２）。これらの出土遺物から、宮竹野際遺跡には官衙関連の遺構群が展開していた可能性が高まった。

当遺跡の東南約 1kmには、遠江国長上（長田）郡家想定地である永田遺跡群がある。敷智郡家跡と目される伊場遺跡群では、自然流路である伊場大溝を中心に東西 1.5kmにわたり郡家関連施設が展開している（鈴木一2009）。その広がりを参考にするなら、永田遺跡群と宮竹野際遺跡は一連の郡家関連施設が展開している範囲とみて矛盾はない。SD06 から出土した豊富な文字関連資料をふまえれば、宮竹野際遺跡には長上郡家に関連する施設があったとみてよいだろう（鈴木一2011）。その中心的施設は、宮竹野際遺跡２次調査で検出した掘立柱建物群とみられ、これら郡家関連施設で使用されていた土器類が近在の河川（SD06）内に廃棄されたものと捉えられる。また、SD06 からは桃核や手づくね土器、土馬なども出土しており、河川内で何からの祭祀も執り行われたと考えてよいだろう。後述するように、SD06 やその上層の SR01 上位層から出土した墨書土器には、可能性があるものを含め「北家」と記されたものが 13 点ある。宮竹野際遺跡に展開していた長上郡家関連施設は、当時「北家」と呼ばれていた可能性がある。

（４）鎌倉時代

概　要　Ａ区における鎌倉時代の遺構は、調査区の中央を貫く湿地帯 SR01 の北側の高位面上に展開している。主な遺構は、井戸 SE01 と区画溝である。調査区の北側で検出した２本の溝（SD01･02）は道路側溝の可能性がある。井戸は素掘りのもので、13 世紀後半の遺物が出土している。

井　戸　（SE01、Fig.33）　SE01 は、Ａ区の北東端で検出した素掘りの井戸である。中段に平坦な部分を設けた２段構造である。平面は直径 2.4m ほどの円形を呈し、深さは 1.5m 程であったとみられる。最下部は湧水が顕著なため、正確な形状をうかがうことができなかったが、直径 70cmほどの円形を呈していたとみられる。SE01 埋土の上位から、Fig.65-463 が、中位から、Fig.65-462、464 ～ 467 の遺物が出土した。出土遺物から SE01 は、13 世紀後半頃の遺構と捉えられる。

小溝群　（SD01・02、Fig.32）　SD01･02 は調査区の北側で検出した２条の溝である。SD01 は幅 1m、深さ 40cm、SD02 は幅 60 ～ 80cm、深さ 40cmほどの規模である。北側の溝（SD01）が若干大きいが、出土遺物が示す時期が同じであること、埋土が酷似していること、走行方向が平行していること、などから両者は一連の遺構と捉えられる。両者を同一の遺構として捉えれば、２条の溝を側溝とした道路であったとみてもよいだろう。その場合、路面の幅は 2m ほどである。SD01 からの出土遺物には Fig.65-470 ～ 472 がある。出土遺物から、13 世紀後半の遺構と捉えられる。

SD05･03 は湿地帯 SR01 に面した位置に掘削された溝である。埋土、規模などは SD01･02 と同様である。SD05 は湿地帯 SR01 の汀線と平行しており、SR01 と SD05 で区画された道路遺構と捉えることも可能である。SD05 からは、Fig.65-473 ～ 478 の遺物が出土した。出土遺物から SD05 は 13 世紀後半の遺構と捉えられる。

これら溝群で区画された地割りは、近代に作成された地籍図中にもうかがうことができる（Fig.5）。中世に形作られた地割りが近代まで受け継がれたものといえるだろう。

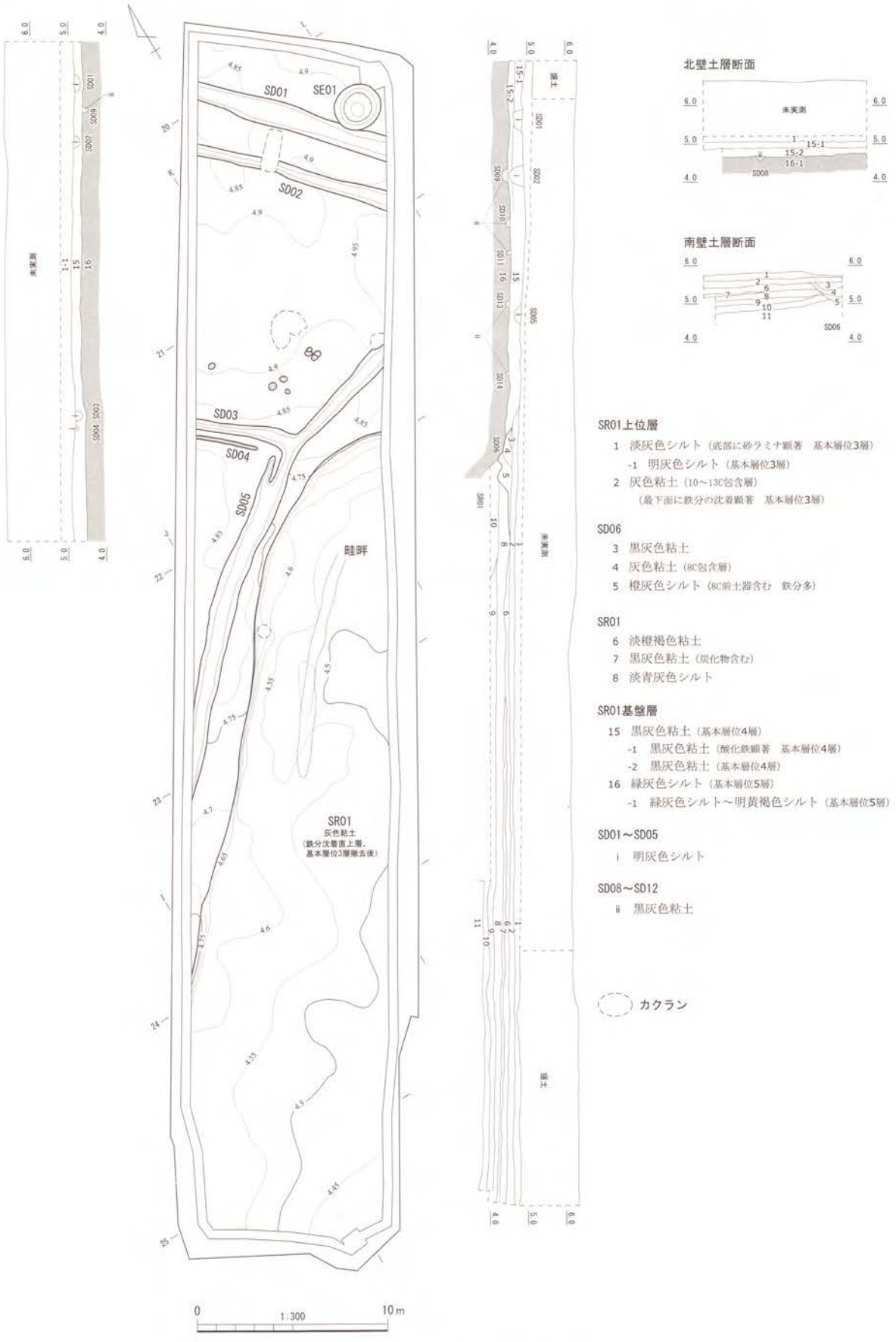


Fig.32　A区 鎌倉時代 全体図

湿地帯（旧自然流路）（SR01、Fig.32）　先述のとおり、微高地が展開する南側には湿地帯（SR01）が広がっている。湿地帯内には小規模な畦畔があり、一部は水田などにも活用された可能性がある。ただし、耕作に伴う攪拌などの痕跡は顕著でなく、水田としての利用は本格的ではなかったとみられる。Fig.61～62に示すとおり、湿地帯（SR01）の埋土からは鎌倉時代の遺物も少なからず出土している。湿地帯の出土遺物中には青白磁の合子（Fig.61-391）、白磁（Fig.61-392）、青磁（Fig.61-393～396）といった希少品が含まれ、集落居住者の性格の一端がうかがえる。

小　結　鎌倉時代の宮竹野際遺跡には、湿地帯SR01に面した微高地上に井戸や道路を伴う集落が営まれていたとみられる。中世の当地は蒲御厨の範囲内であるので、御厨を構成する農村が当地にあったとみて間違いない。湿地帯内の出土遺物には、青白磁の合子など希少品もみられることから、この集落には比較的上位階層の居住者が含まれる可能性がある。

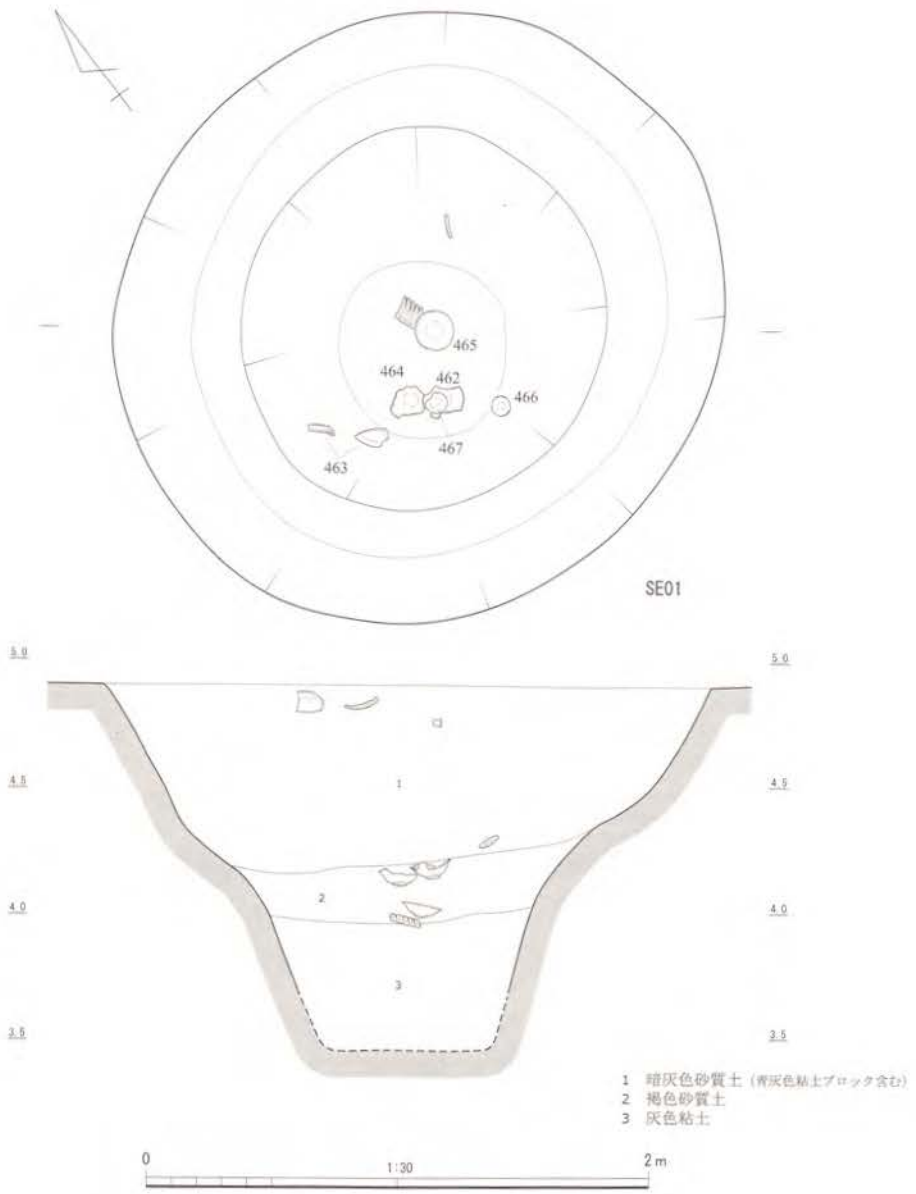


Fig.33　SE01詳細

2　B区の遺構

（1）B区における検出遺構の概要

B区は、6次調査区の中間に位置し、掘立柱建物や小溝群などの遺構を確認した。遺構密度は比較的低いが、桁間2間、梁間2間の掘立柱建物SH01や井戸SE04が検出できるなど、確実に遺跡の中心部に連なる区域といえる。

掘立柱建物は奈良時代に属し、柱穴の特徴などは宮竹野際遺跡2次調査で検出したものと酷似している。先述のとおり、A区で確認したSD06の出土遺物から判断して、宮竹野際遺跡には長上郡家の関連施設が及んでいたとみられることから、SH01も郡家にかかわる建物とみてよいだろう。この建物の検出によって、奈良時代の遺構群の東端が確定できたといえる。

（2）弥生時代

概　要　B区における弥生時代の遺構は、緑灰色シルト層（基本層位5層、Fig.35-11層）上面において検出した。弥生時代の遺構は小規模な溝と小穴が検出できたに過ぎない。これらの遺構は、検出層位から弥生時代まで溯るとみられるが、水田や集落など明確な施設を構成するものとは判断できない。土壌の攪拌も顕著でないことから、弥生時代の水田はB区の範囲まで広がっていなかったとみられる。

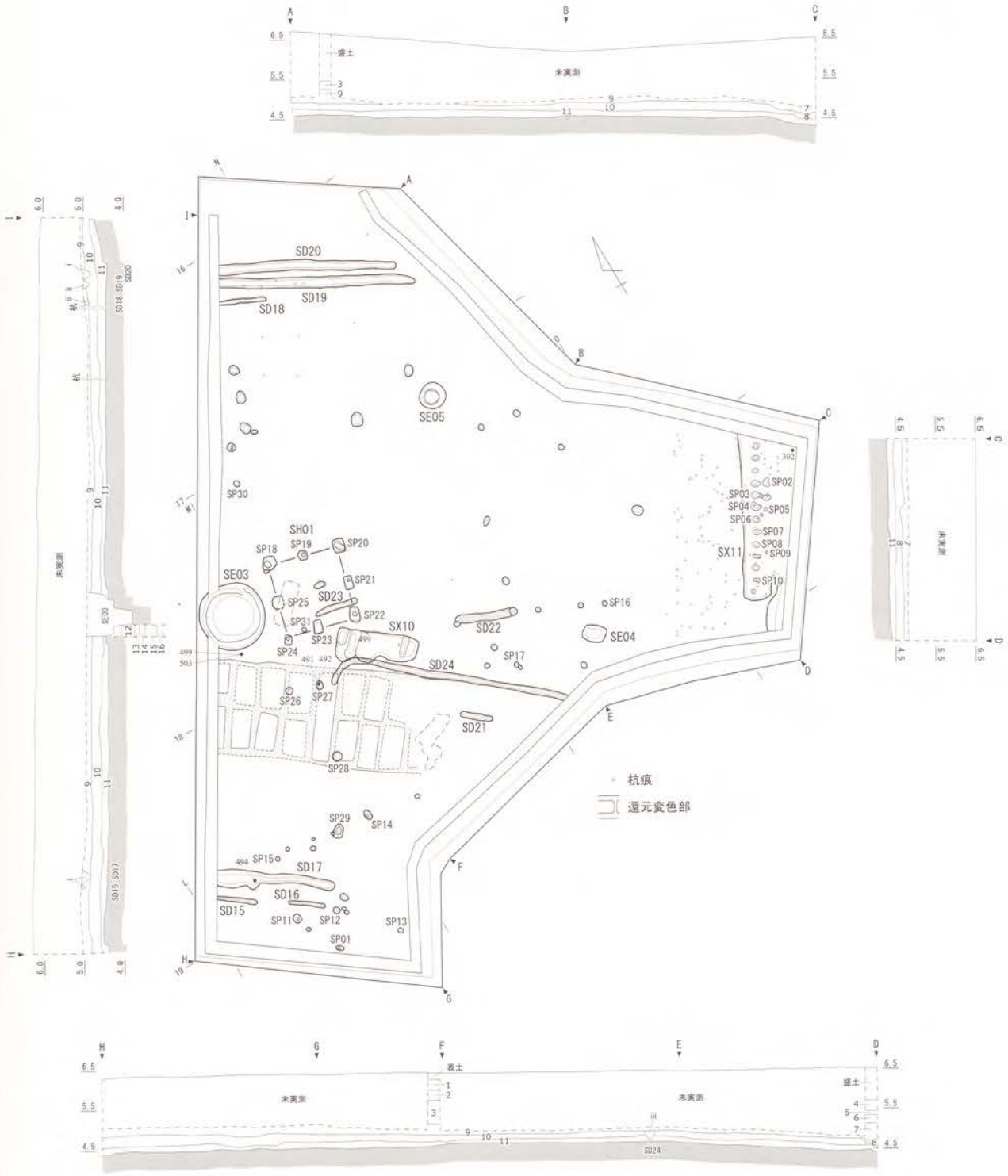
小　溝　（SD25、Fig.35）　調査区の中央において東西方向に掘削された溝（SD25）を検出した。遺構の検出層位や状態は、宮竹野際遺跡2次調査で検出した水田下層遺構群と同一であるが、水田にかかわる遺構か否かは関連する情報が少なく、判断が難しい。SD25からは遺物は出土していない。

小　穴　（Fig.35）　上述の小溝と同じ層位で小穴群を検出した。小穴はいずれも微妙な凹面状を呈しており、柱穴などを構成するものとはいえない。小穴中からは僅かな遺物が出土したが、いずれも細片化しており、遺構の形成時期を明確にすることは難しい。

（3）奈良時代～平安時代

概　要　B区で検出した奈良時代～平安時代の遺構は、掘立柱建物SH01のほか、井戸SE04、小穴、小溝である。遺構検出面は、基本層位4層である黒灰色粘土層（Fig.36-10層）である。遺構検出面は東に向って低く傾斜している状況が確認できる。調査区の東側には、A区で確認したような自然流路もしくは湿地帯があると想定できる。掘立柱建物は宮竹野際遺跡2次調査で確認したものとよく似ており、郡家関連施設の一つとみられる。遺構検出面は東側に向って低くなっているので、遺構群の東端を確認したとみてよいだろう。

掘立柱建物　（SH01、Fig.37）　SH01は調査区のほぼ中央で確認した、桁間2間、梁間2間の掘立柱建物である。建物の規模は東西、南北ともに3.6mであり、各柱間の間隔は1.8mである。柱穴は長方形を志向している。その規模は、北東の柱穴SP20を例にとると、長軸70cm、短軸60cm、検出



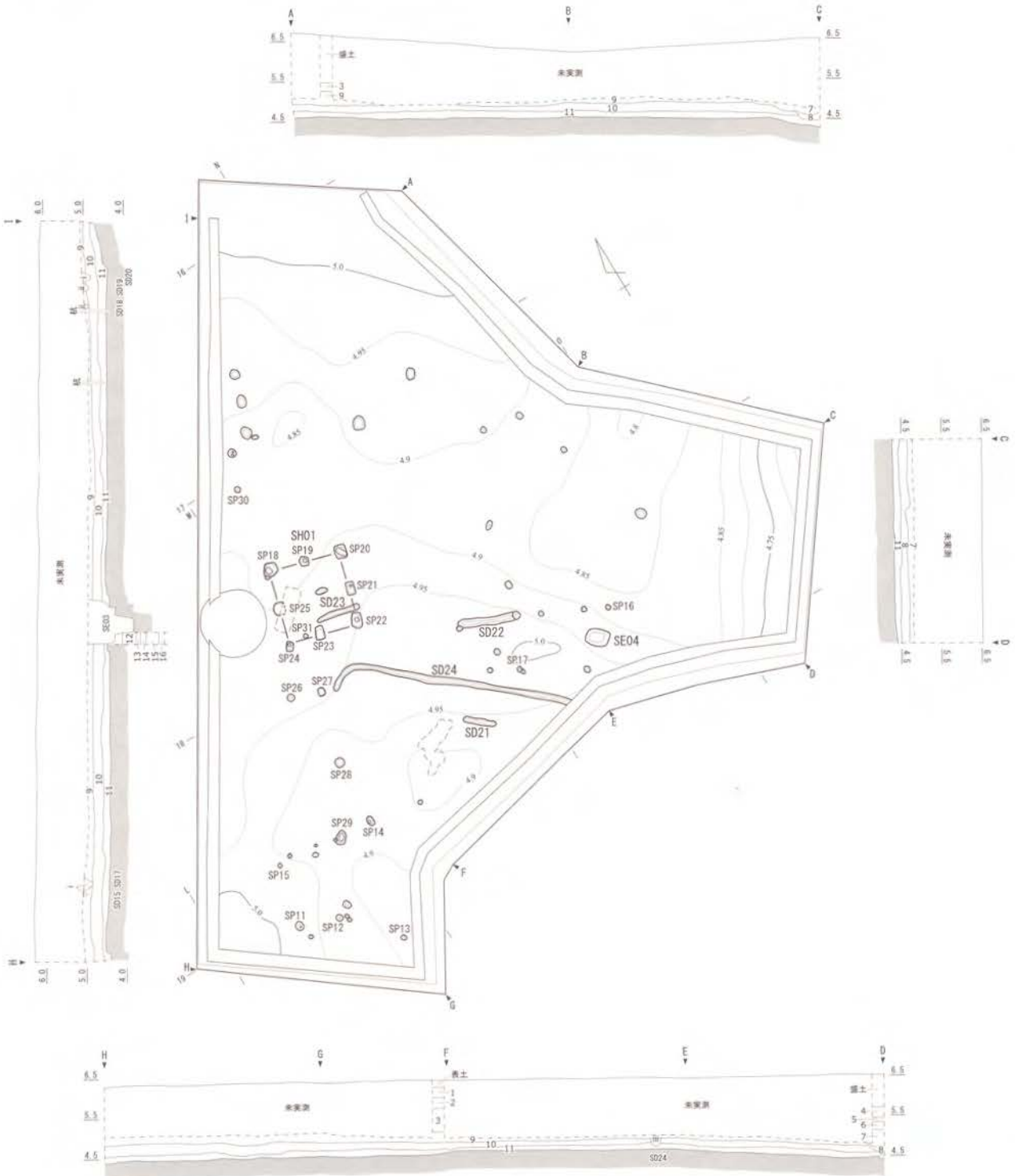
B区基本層

1　暗灰褐色砂質土
2　褐色砂質土（土器を含む）
3　茶褐色粘質土
4　灰色シルト
5　灰色砂
6　灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　暗灰色粘土
9　淡灰色シルト～砂（基本層位3層）
10　黒灰色粘土（基本層位4層）
11　緑灰色シルト（基本層位5層）
12　灰色粘土（基本層位6層）
13　明灰色粘土（基本層位6層）
14　黒灰色粘土（基本層位6層）
15　砂（基本層位7層）
16　礫（基本層位7層）

SD15・17・20
　i　暗灰色粘土
SD18・19
　ii　明灰色粘土
SD24
　iii　暗褐色シルト

0　1:300　20m

Fig.34　B区全体図



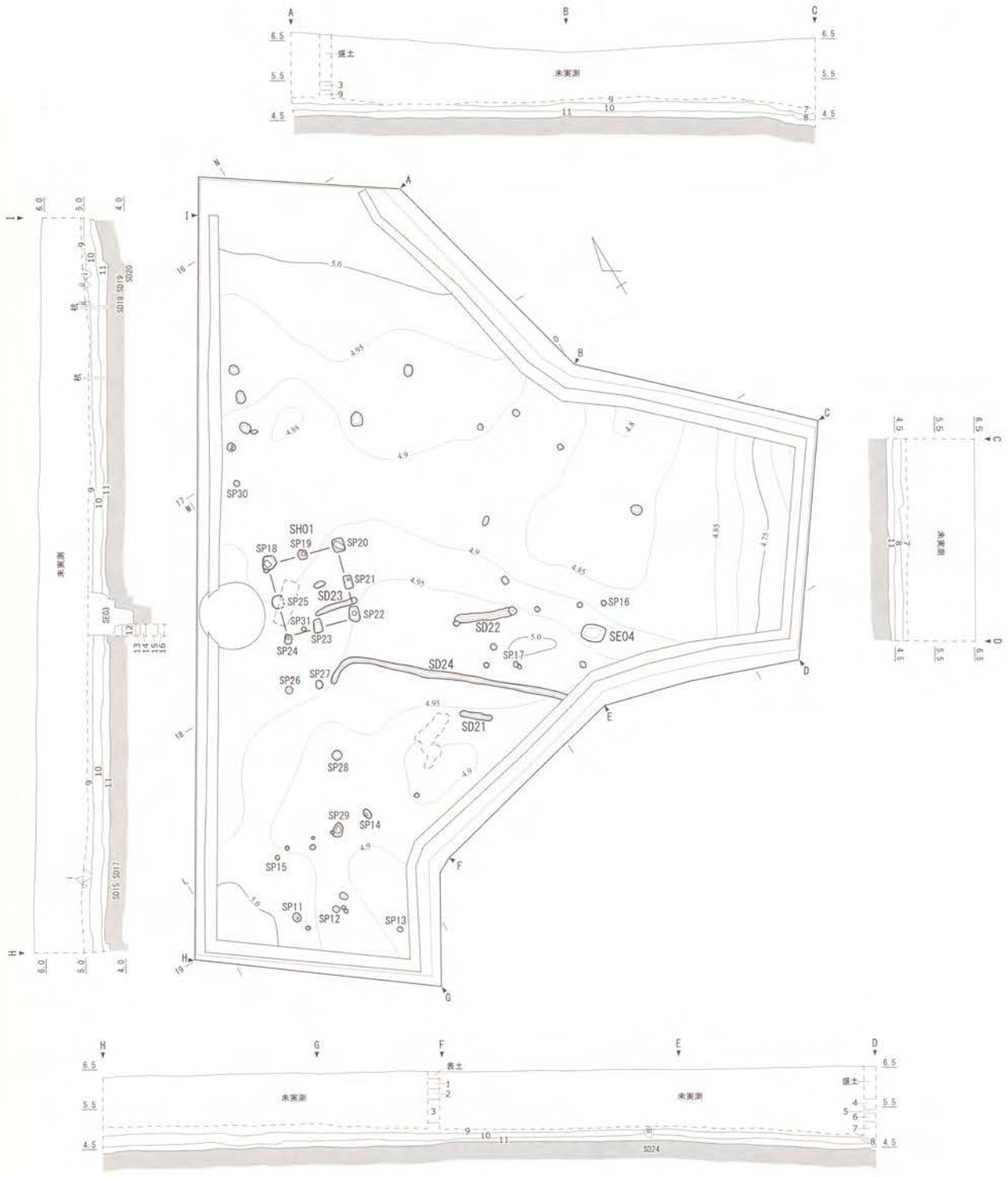
B区基本層

1　暗灰褐色砂質土
2　褐色砂質土（土器を含む）
3　茶褐色粘質土
4　灰色シルト
5　灰色砂
6　灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　暗灰色粘土
9　淡灰色シルト～砂（基本層位3層）
10　黒灰色粘土（基本層位4層）
11　緑灰色シルト（基本層位5層）
12　灰色粘土（基本層位6層）
13　明灰色粘土（基本層位6層）
14　黒灰色粘土（基本層位6層）
15　砂（基本層位7層）
16　礫（基本層位7層）

SD15・17・20
i　暗灰色粘土
SD18・19
ii　明灰色粘土
SD24
iii　暗褐色シルト

0　1:300　20m

Fig.35　B区 弥生時代 全体図



B区基本層

1　暗灰褐色砂質土
2　褐色砂質土（土器を含む）
3　茶褐色粘質土
4　灰色シルト
5　灰色砂
6　灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　暗灰色粘土
9　淡灰色シルト～砂（基本層位3層）
10　黒灰色粘土（基本層位4層）
11　緑灰色シルト（基本層位5層）
12　灰色粘土（基本層位6層）
13　明灰色粘土（基本層位6層）
14　黒灰色粘土（基本層位6層）
15　砂（基本層位7層）
16　礫（基本層位7層）

SD15・17・20
　i　暗灰色粘土
SD18・19
　ii　明灰色粘土
SD24
　iii　暗褐色シルト

0　1:300　20m

Fig.36　B区 古代面 全体図

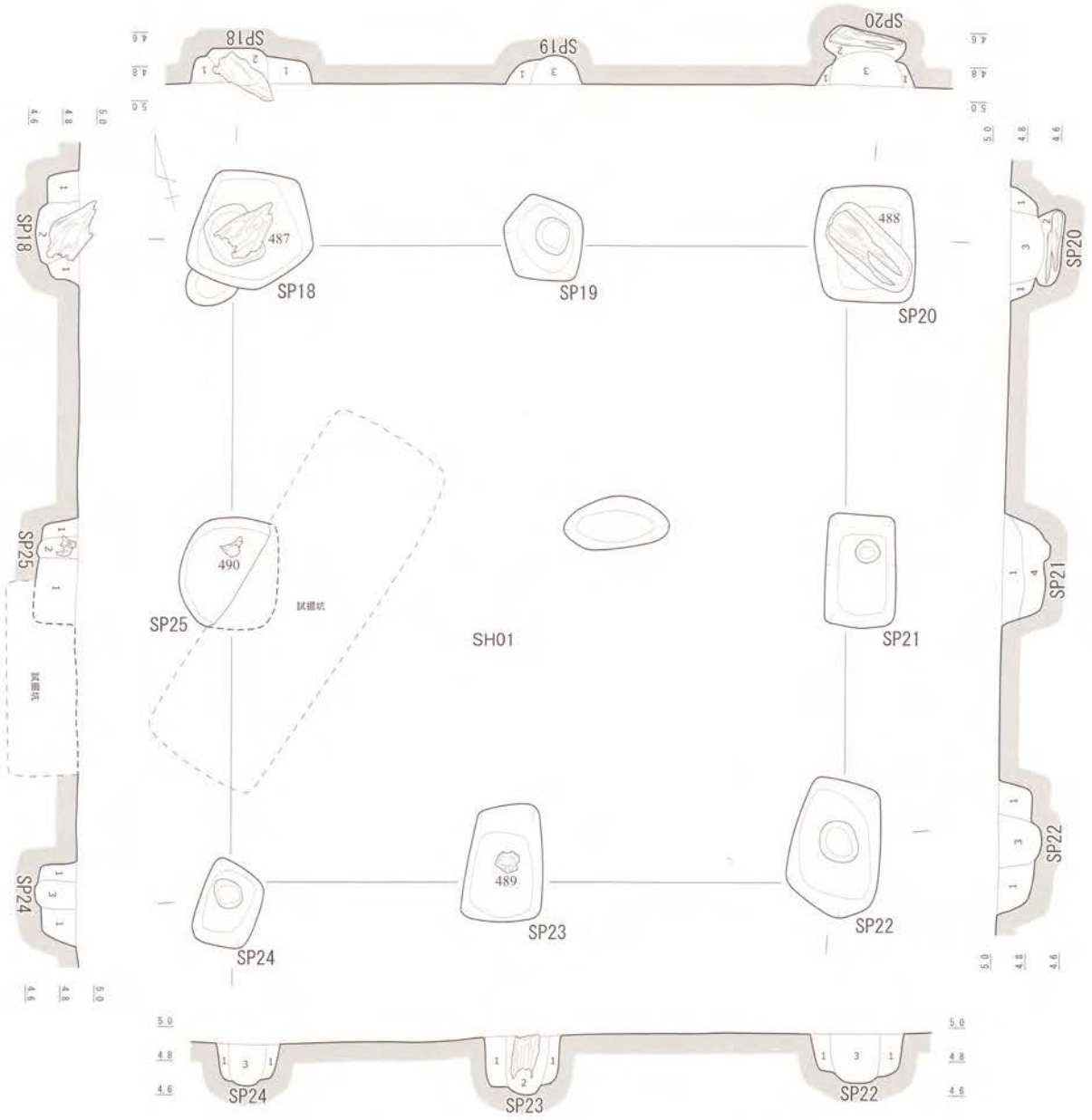


Fig.37　SH01 詳細

面からの深さ30cmほどである。柱穴を平面検出した状態で、柱痕もしくは柱抜き取り穴が明瞭に確認できた（Fig.37、下段）。柱材が遺存していた柱穴は3箇所（SP18、23、25）あり、一箇所（SP20）には礎板の可能性がある木材が遺存していた。使用されていた木材種はカヤ及びアスナロ材である（第4章参照）。

柱穴からはFig.67-483 ～ 486の遺物が出土した。検出層位と出土遺物から、SH01は8世紀後半頃（奈良時代後半）の建物と捉えられる。

井　戸　（SE04、Fig.38）　SH01の東側、低位面へ向けて傾斜が変換する地点で、隅丸方形の井戸SE04を検出した。SE04は素掘りの構造で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さ1.0mである。上位の層位には斑土が認められ、急激に埋め戻されたものであることが分かる。出土遺物はごく僅かであるが、奈良時代～平安時代の遺構と捉えられる。

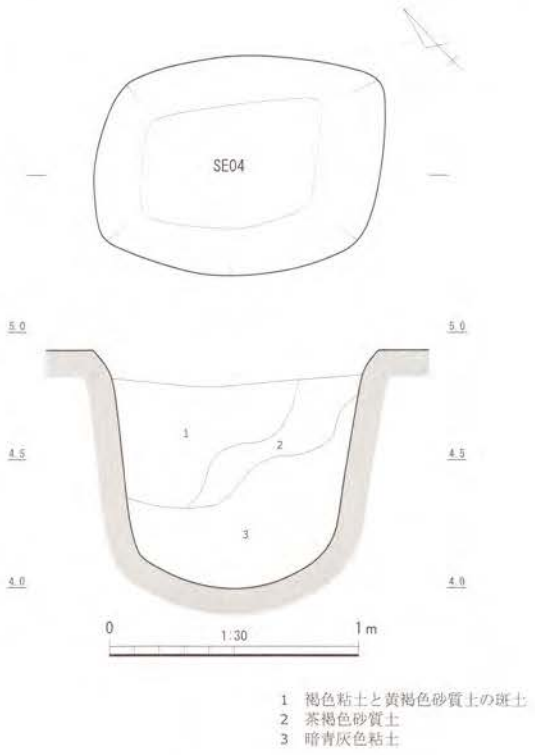


Fig.38　SE04詳細

小　溝　（Fig.36）　SH01の東側において小規模な溝群（SD21 ～ 24）を確認した。いずれも幅30cm以下、深さ10cm程度の大きさで、両端は途切れるように収束している。出土遺物は皆無であるため、正確な時期や用途は不明確であるが、埋土の状態から判断すると、古代の遺構である可能性が高い。

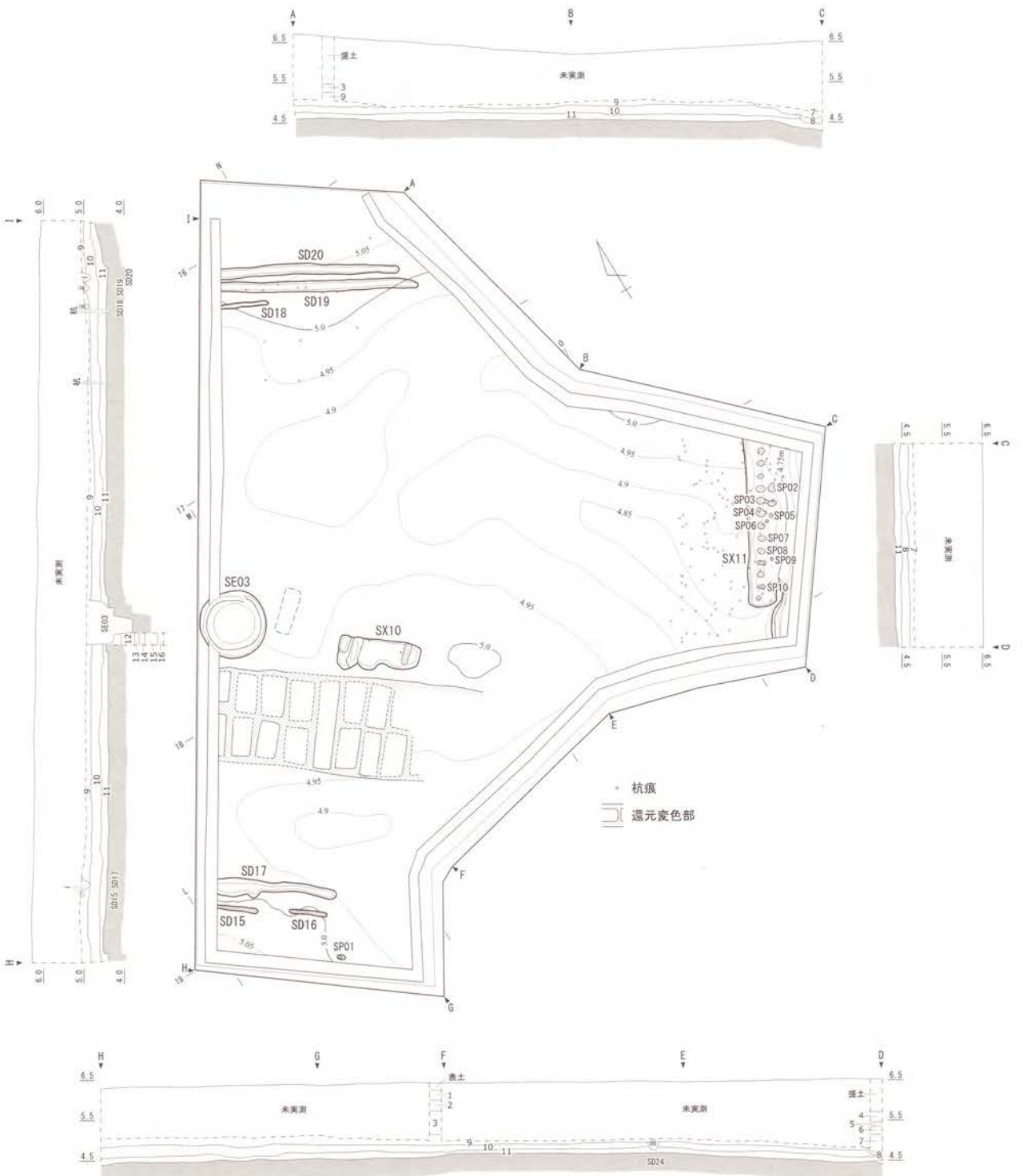
小　穴　（Fig.36）　SH01の周囲で直径50cm以下の不整形の小穴群（SP11 ～ 17など）を検出した。いずれも柱穴などの明確な遺構とはいえず、その正確な時期や遺構の性格は不明である。

小　結　B区における奈良時代～平安時代の調査では、掘立柱建物SH01を確認したことが最大の成果である。建物の東側には自然河川や湿地帯が広がっていたとみられ、掘立柱建物が展開する東限を確認したといえよう。掘立柱建物の特徴は宮竹野際遺跡2次調査で確認した建物群とよく似ており、A区の調査結果をふまえると、長上郡家に関連する施設とみてよいだろう。宮竹野際遺跡における掘立柱建物は東西250 m、南北150 mの範囲に広がっていることが明確になった。

（4）鎌倉時代

概　要　B区における鎌倉時代の主要な遺構は、調査区の西端で確認した井戸SE03と、小溝群である。また、調査区の東端には低位面があり、湿地帯SX11が広がっている状況が確認できた。井戸は素掘りのもので、12世紀中頃の遺物が出土している。

井　戸　（SE03、Fig.40）　SE03は、A区の北東端で検出した素掘りの井戸である。中段に平坦な部分を設けた2段構造をもつ。平面は直径3.3mほどの円形を呈し、深さは1.3m程であったとみられる。最下部は湧水が顕著なため正確な形状をうかがうことができなかったが、直径2mほどの



B区基本層

1　暗灰褐色砂質土
2　褐色砂質土（土器を含む）
3　茶褐色粘質土
4　灰色シルト
5　灰色砂
6　灰色粘土
7　暗灰色粘土
8　暗灰色粘土
9　淡灰色シルト～砂（基本層位3層）
10　黒灰色粘土（基本層位4層）
11　緑灰色シルト（基本層位5層）
12　灰色粘土（基本層位6層）
13　明灰色粘土（基本層位6層）
14　黒灰色粘土（基本層位6層）
15　砂（基本層位7層）
16　礫（基本層位7層）

SD15・17・20
ⅰ　暗灰色粘土
SD18・19
ⅱ　明灰色粘土
SD24
ⅲ　暗褐色シルト

0　1:300　20m

Fig.39　B区 鎌倉時代 全体図

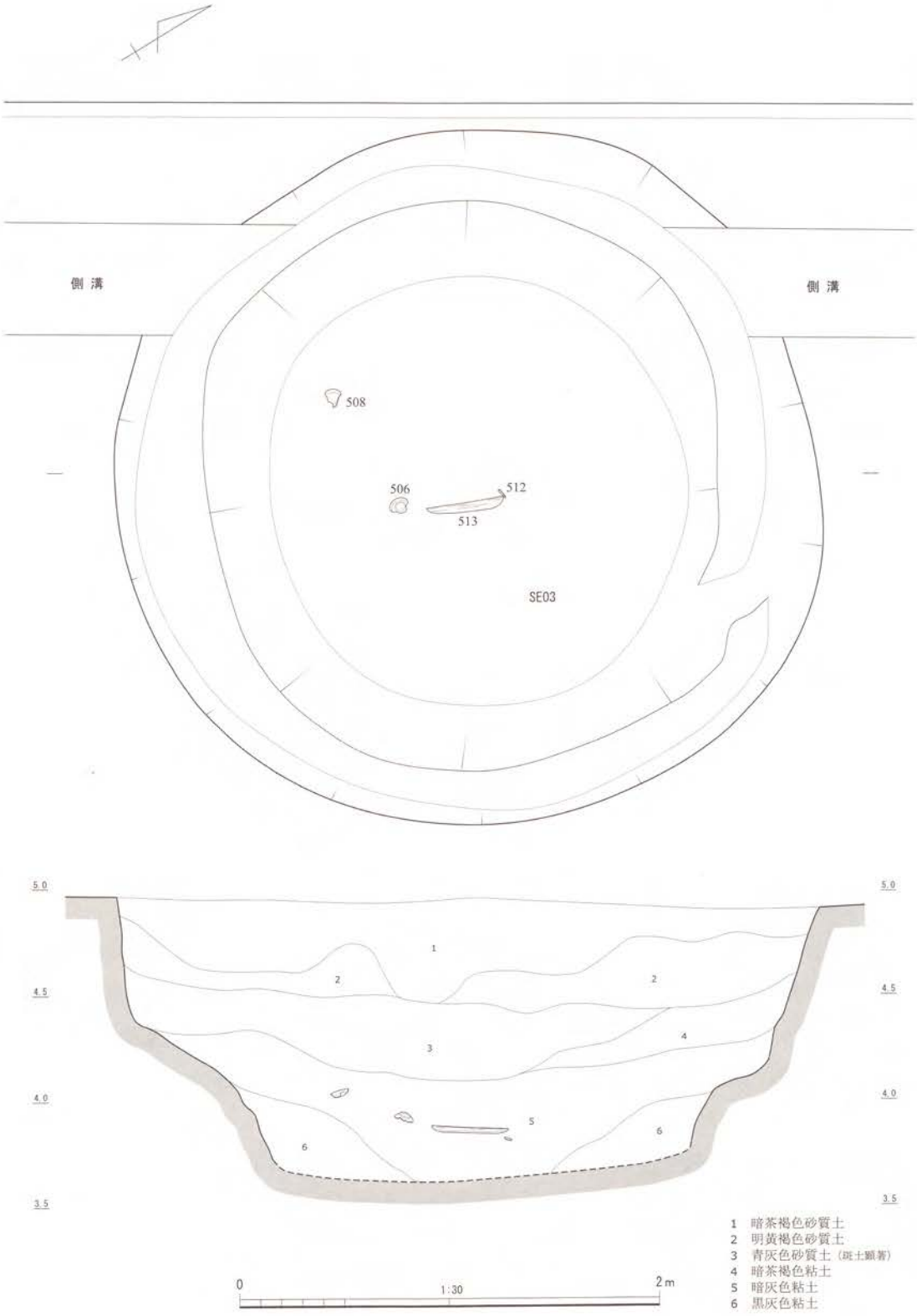


Fig.40　SE03 詳細

円形を呈していたとみられる。SE03 から、Fig.67-497 ～ 513 が出土した。出土遺物から SE01 は、12 世紀中頃の遺構と捉えられる。

小溝群　（SD15 ～ 20、Fig.39）　SE03 の周囲において東西方向に掘削された小規模な溝群 SD15 ～ 20 を確認した。これらの溝は幅 1m 以下、深さ 30cm 程度であり、A区で確認した小溝群と状態が似る。屋敷地や農地などを区画する溝であったとみられよう。

湿地帯　（SX11、Fig.39）　調査区の東端において、湿地帯が広がっている状況が確認できた。この低位面には近世以降に杭などが打ち込まれ、SX11 と呼ぶ遺構が形成されている。SX11 は近世以降に帰属する遺構であるが、ここでは、B区東端の低位面を示す遺構名として SX11 を用いる。SX11 の埋土は、A区における SR01 上位層と似ている。SX11 からは Fig.67-514 ～ 520 に示す遺物が出土した。

小　結　B区においてもA区と同様に、湿地帯（SX11）に面した微高地上に井戸や区画溝を伴う鎌倉時代の集落が営まれていたとみられる。出土遺物は 12 世紀中頃のものが多く、A区の遺構と比べて若干古いといえる。集落内の遺構形成時期には、若干の時期差があるとみられよう。

（5）江戸時代以降

概　要　B区で検出した江戸時代以降の遺構は、不定形土坑 SX10、杭を伴う湿地帯（SX11）がある。また、掘り方を伴う遺構ではないが、上位層位の環境の違いが下層に転写した痕跡（還元変色部）が確認できた。

不定形土坑　（SX10、Fig.39）　SX10 は調査区の中央で検出した不定形土坑である。長軸 4m、短軸 1.5m ほどの規模で、複数の土坑が重複したような状況である。遺構の埋土は灰色砂である。出土遺物は無いが、宮竹野際遺跡 2 次調査で確認した上位遺構と同じである。近世から近現代の土地改変に伴う遺構とみてよいだろう。

湿地帯　（SX11、Fig.41）　上述のとおり、調査区の東端には湿地帯が広がっている。この湿地帯には、数多くの杭をはじめ、杭を掘り起こしたような不定形小穴群が検出できた。この遺構を SX11 とする。SX11 は杭の木材が明確に遺存しており、不定形小穴群も埋土の識別が容易で、比較的新しい時期の遺構であると判断できる。近世から近現代にかけて、湿地帯を区画する施設が設けられ、数多くの杭が打たれたものと判断できるだろう。

還元変色部　（Fig.39）　調査区の中央で、茶褐色を呈する地面が青灰色に変色した箇所が認められた。変色部分は、東西幅 1.5m、南北幅 2.3m ほどの格子状にみられる。色調の差は明確であるが、掘り方は伴わない。この痕跡も宮竹野際遺跡 2 次調査で確認したように、近世～近現代に形成された上層遺構における環境の違い（著しい還元環境）が痕跡として下層に転写されたものと判断できる。

小　結　B区における江戸時代以降の遺構は、いずれも耕作に関連するものとみられる。出土遺物は極めて少ない点もこの想定と矛盾しない。不定形土坑にみる遺構の特徴や還元変色部の状態は、宮竹野際遺跡 2 次調査で確認したものと同様であり、江戸時代以降、近年の盛土による造成まで、水田や畑などが広がる環境であったとみられる。

Fig.41　SX11 詳細

3　C区～F区の遺構

（1）C区～F区における検出遺構の概要

C区～F区では、遺構密度が低くなる。そのうちC区～E区では、包含層から遺物が確認できたものの、遺構についてはほとんど確認されなかった。F-1区では、自然流路（SR02）と考えられる落ち込みが検出された。また、流路内や流路上面には粘土層や砂層が幾重にも堆積しており、時期ごとに流路を変化させながら機能したものと推定される。F-2区、F-3区では基盤層が安定しており、明確な遺構を捉える事ができた。F-2区では溝や土坑を、F-3区からは井戸が出土したことから、集落縁辺部で耕作が営まれていたと考えられる。

（2）C区の検出遺構

C-1区　(Fig.42)　不整形な台形に近いC-1区では、表土下に茶褐色粘土（3層）、暗灰色粘土（19層）、淡灰色シルト（9層）、暗茶褐色粘土（30層）の順で堆積していた。19層及び9層は奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。遺構は、小穴が2基確認された。両遺構とも暗茶褐色粘土（30層）を掘り込んでいる。埋土は暗茶褐色粘土（Fig.42-ｉ層）である。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

C-2区　(Fig.42)　C-2区は約4.7ｍ×約2.0ｍの長方形を呈する。基本層位は表土、茶褐色粘土（3層）、灰褐色砂（20層）、茶褐色粘土（27層）、暗茶褐色粘土（30層）、茶褐色粘土（31層）の順であった。27層は奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。遺構は、時期不明の小穴が1基検出された。

（3）D区の検出遺構

D-1区　(Fig.43)　D-1区は約2.0ｍ×約2.0ｍのほぼ正方形の調査区である。表土、灰褐色砂（20層）、明灰褐色砂（27層）、橙色砂（33層）、明灰色砂（34層）、淡灰色シルト（9層）、黒色粘土（10層）、緑灰色シルト（11層）の順に堆積が見られた。表土下に厚い20層および薄い27層や34層の砂層、そして鉄分が沈着した33層が検出されたため、調査区内は9層堆積後のある時期に幾度かの流水があったと思われる。9層以下はB区と共通しており、比較的安定した水平堆積が認められた。遺構は検出されなかった。

D-2区　(Fig.43)　D-2区は約2.3ｍ×約2.0ｍのほぼ正方形である。基本層位は表土、茶褐色粘土（3層）、暗灰色粘土（19層）、灰褐色砂（20層）、橙色砂（33層）、明灰色砂（34層）、橙色砂（35層）、淡灰色シルト（9層）の順である。20層・34層の分厚い砂層、鉄分を含んだ33層・35層の存在からD-1区と、同様に9層堆積後のある段階で流水にあったと考えられる。遺構、遺物は検出されていない。

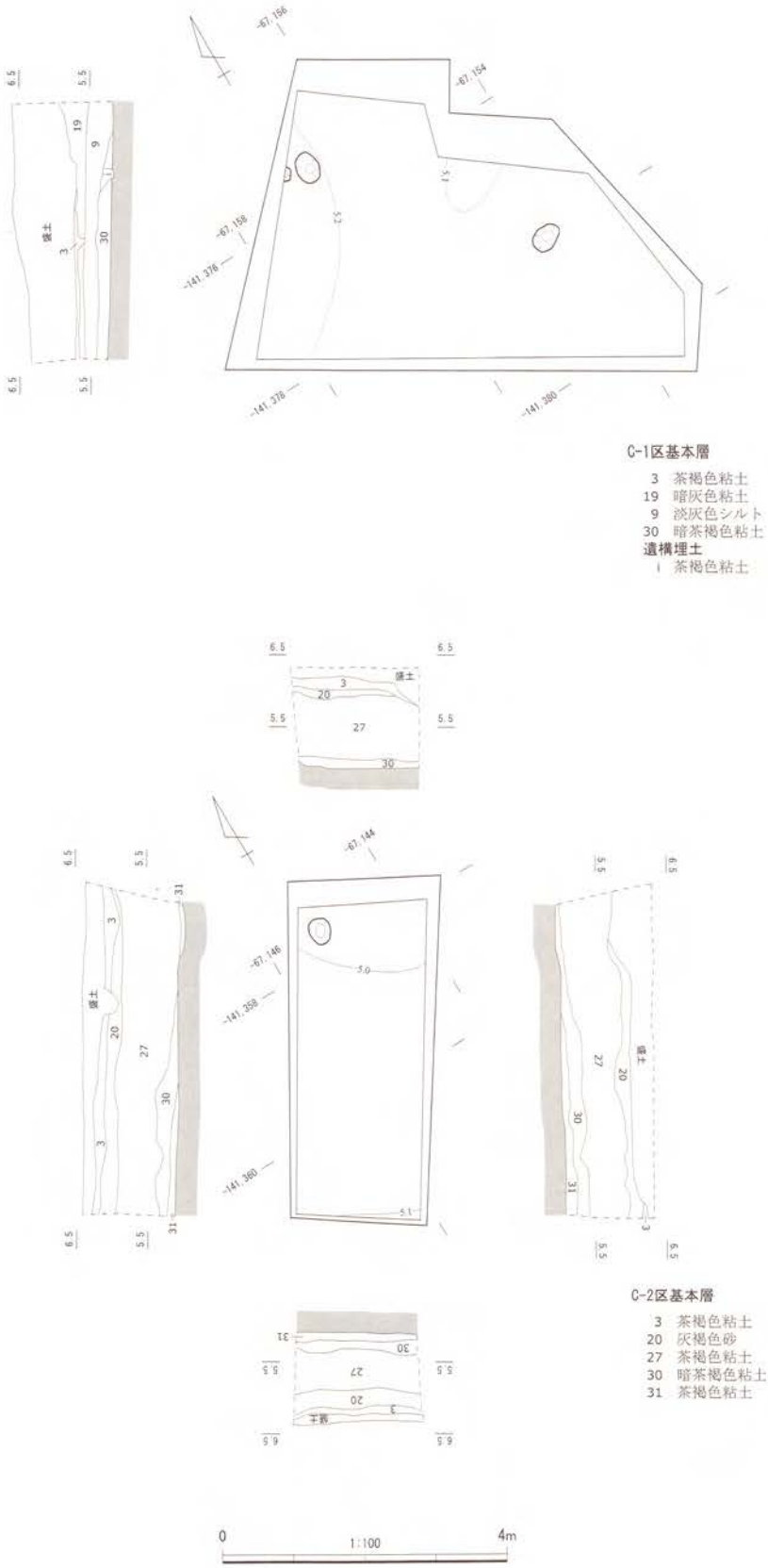

C-1区基本層
3　茶褐色粘土
19　暗灰色粘土
9　淡灰色シルト
30　暗茶褐色粘土
遺構埋土
1　茶褐色粘土
C-2区基本層
3　茶褐色粘土
20　灰褐色砂
27　茶褐色粘土
30　暗茶褐色粘土
31　茶褐色粘土
0
1:100
4m

Fig.42　C 区 全体図

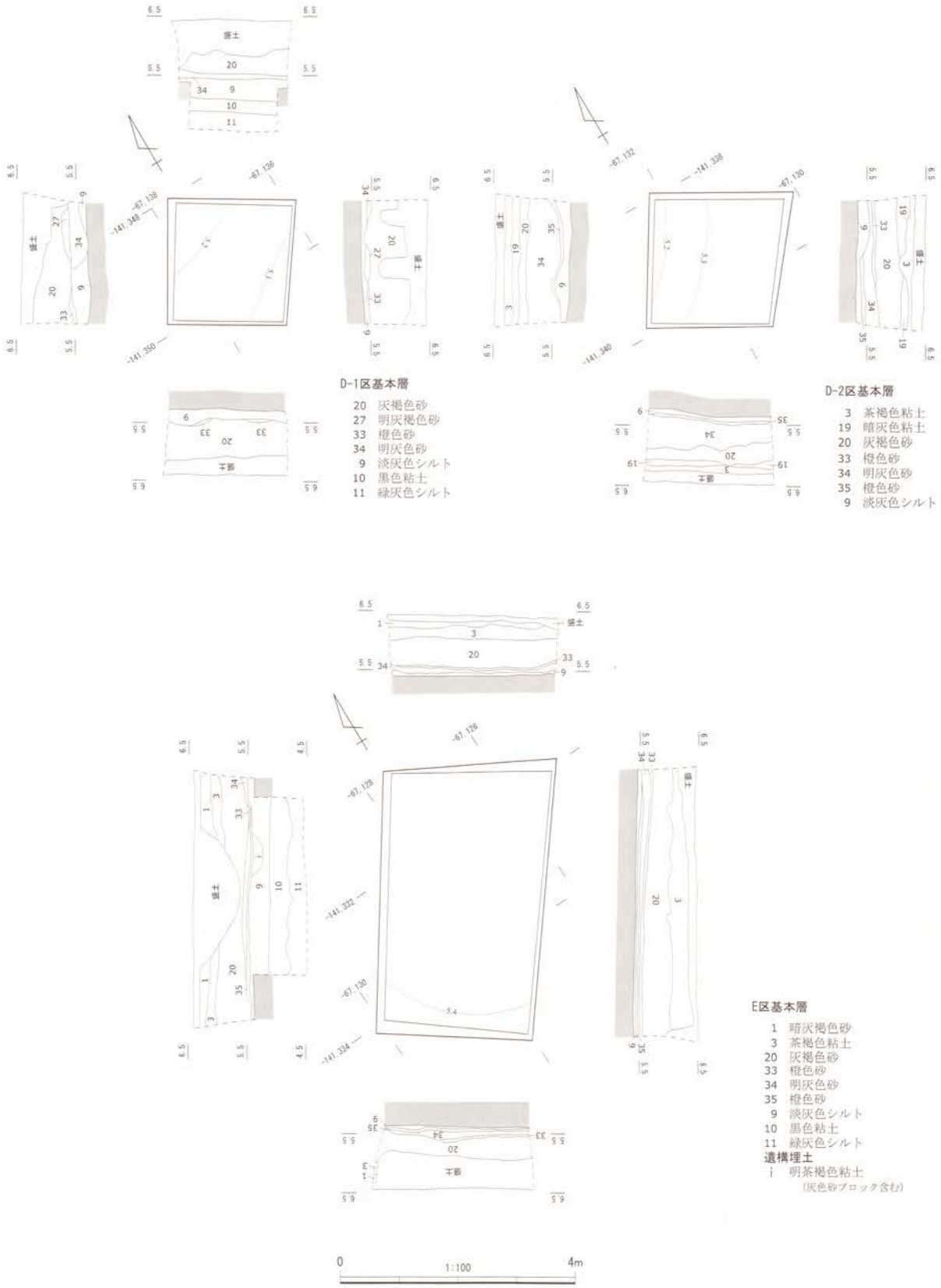


Fig.43　D区・E区全体図

（4）E区の検出遺構

E区は約4.5 m×約2.5 mの長方形の調査区である。基本層位をFig.43に示す。表土、茶褐色粘土（3層）、灰褐色砂（20層）、橙色砂（33層）、明灰色砂（34層）、橙色砂（35層）、淡灰色シルト（9層）、黒色粘土（10層）、緑灰色シルト（11層）の順に見られた。D区同様、分厚い砂層の20層・34層及び鉄分が沈着した33層・35層の堆積から流水の痕跡と考えられる。9層からは奈良時代～平安時代の遺物が出土した。

（5）F－1区の検出遺構

F区では、F-1区で自然流路が検出される一方、F-2区・F-3区では安定した基盤層が確認され、遺構が検出された。F-1区は、約14.0 m×約3.0 mの長方形の調査区である。

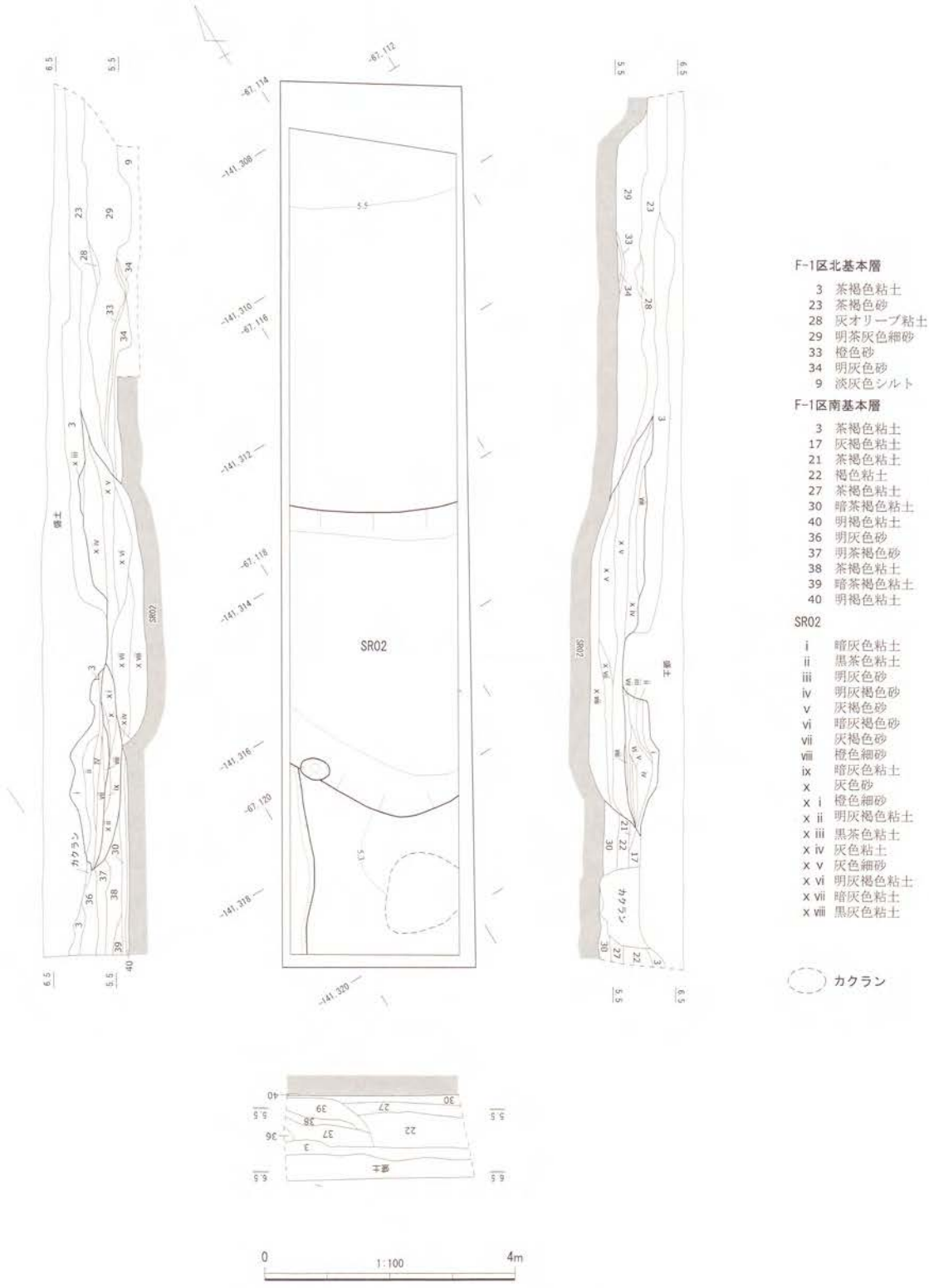
F-1区南側　（Fig.44）　F-1区において、3層以下の基本層位はSR02を挟んだ南北で異なる。南側は、表土、茶褐色粘土（3層）、灰褐色粘土（17層）、茶褐色粘土（21層）、褐色粘土（22層）、茶褐色粘土（27層）、明茶褐色粘土（30層）、明褐色粘土（40層）である。22層、27層、30層は奈良時代～鎌倉時代の遺物包含層である。なお南壁で明灰色砂（36層）、明茶褐色砂（37層）、茶褐色粘土（38層）、暗茶褐色粘土（39層）に相当する落ち込みが見られたが、遺物が出土せず北側の立ち上がりがSR01によって切られて不明であることから、自然に形成されたものか人為的なものであるかは判断できなかった。

SR02　（Fig.44）　調査区南寄りで検出された東西方向の自然流路である。3層と9層に挟まれる形で検出された。各土層について詳述は省くが、大きく1期（Fig.45- ⅰ層～ⅷ層）、2期（Fig.45- ⅸ層～ⅹⅱ層）、3期（Fig.45- ⅹⅲ層～ⅹⅷ層）の3段階に分けられる。なお、変遷時期は細分できる可能性がある。規模については、3時期合わせた最大幅が約7.2 m、地表面からの深さは約1.6 mであった。鉄分の沈着や砂の見られる地層が堆積を続けているため、時期により流路を細かく変えて機能していたと考えられる。また3期では、9層及び黒色粘質土（10層）を削り込んで形成されており、F-1区周辺では比較的規模の大きい流路であったと考えられる。遺物はほとんど出土しなかったため、時期等は不明である。

F-1区北側　（Fig.44）　調査区北側の基本層位は、表土、茶褐色粘土（3層）、茶褐色砂（23層）、灰オリーブ粘土（28層）、明茶灰色細砂（29層）、橙色砂（33層）、明灰色砂（34層）、淡灰色シルト（9層）である。SR02以北では砂層の23層、29層、34層や鉄分沈着の33層が見られることから、SR02と時期が異なる流水の痕跡と考えられる。また、時期不明の耕作土と考えられる28層が砂層である23層と29層に挟まれる形で存在しているため、流水と耕作を繰り返す土地利用形態が想定される。

（6）F－2区の検出遺構

F-2区では、安定した基盤層とともに比較的多くの遺構が検出されている。調査区は当初、長方形であったが、遺構が多く確認されたため拡張し、東西約6.0 m、南北約7.4 mの台形となった。基本



F-1区北基本層

3	茶褐色粘土
23	茶褐色砂
28	灰オリーブ粘土
29	明茶灰色細砂
33	橙色砂
34	明灰色砂
9	淡灰色シルト

F-1区南基本層

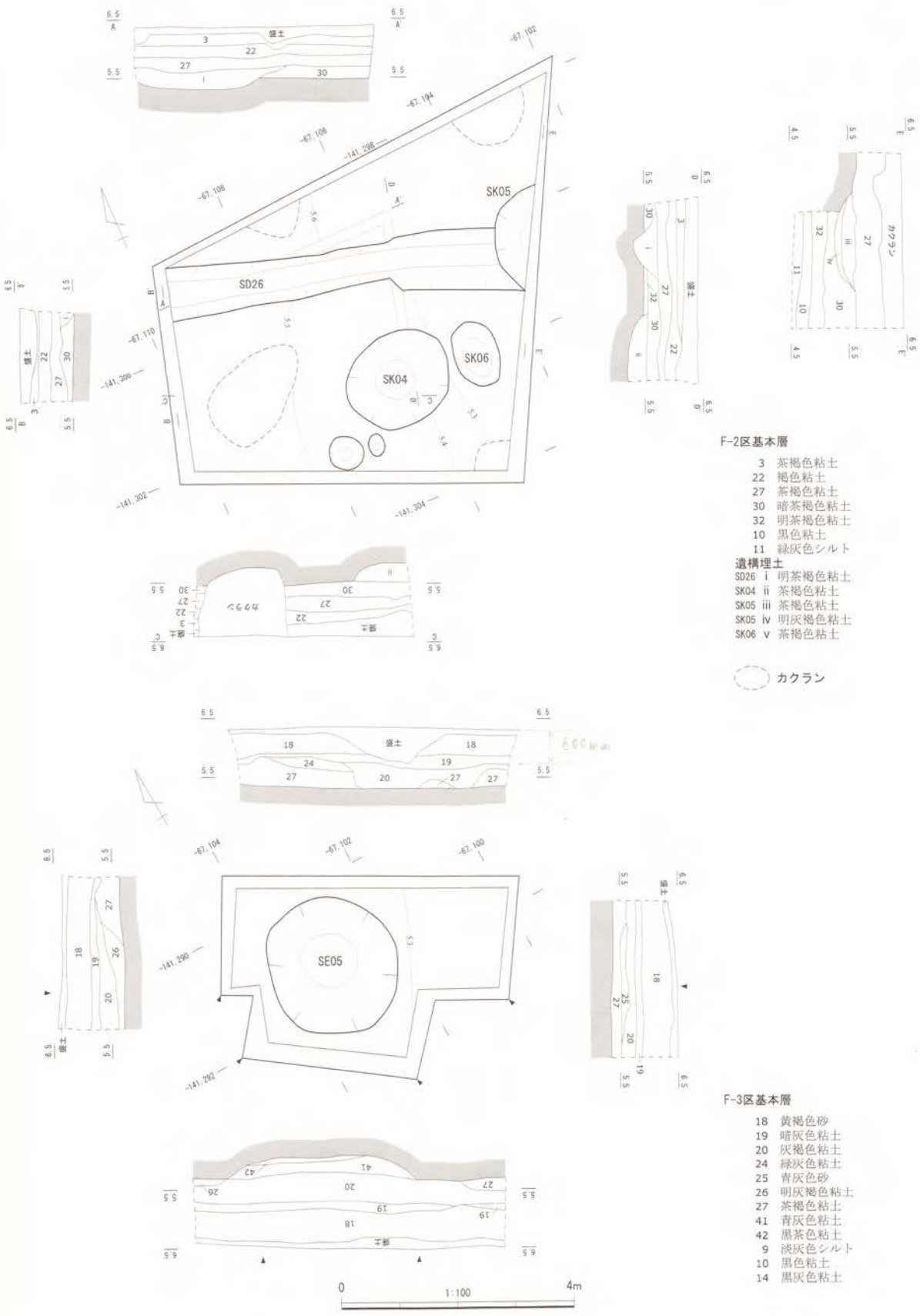
3	茶褐色粘土
17	灰褐色粘土
21	茶褐色粘土
22	褐色粘土
27	茶褐色粘土
30	暗茶褐色粘土
40	明褐色粘土
36	明灰色砂
37	明茶褐色砂
38	茶褐色粘土
39	暗茶褐色粘土
40	明褐色粘土

SR02

i	暗灰色粘土
ii	黒茶色粘土
iii	明灰色砂
iv	明灰褐色砂
v	灰褐色砂
vi	暗灰褐色砂
vii	灰褐色砂
viii	橙色細砂
ix	暗灰色粘土
x	灰色砂
x i	橙色細砂
x ii	明灰褐色粘土
x iii	黒茶色粘土
x iv	灰色粘土
x v	灰色細砂
x vi	明灰褐色粘土
x vii	暗灰色粘土
x viii	黒灰色粘土

カクラン

Fig.44　F-1 区 全体図



F-2区基本層

3　茶褐色粘土
22　褐色粘土
27　茶褐色粘土
30　暗茶褐色粘土
32　明茶褐色粘土
10　黒色粘土
11　緑灰色シルト

遺構埋土

SD26　i　明茶褐色粘土
SK04　ii　茶褐色粘土
SK05　iii　茶褐色粘土
SK05　iv　明灰褐色粘土
SK06　v　茶褐色粘土

カクラン

F-3区基本層

18　黄褐色砂
19　暗灰色粘土
20　灰褐色粘土
24　緑灰色粘土
25　青灰色砂
26　明灰褐色粘土
27　茶褐色粘土
41　青灰色粘土
42　黒茶色粘土
9　淡灰色シルト
10　黒色粘土
14　黒灰色粘土

Fig.45　F-2 区・F-3 区 全体図

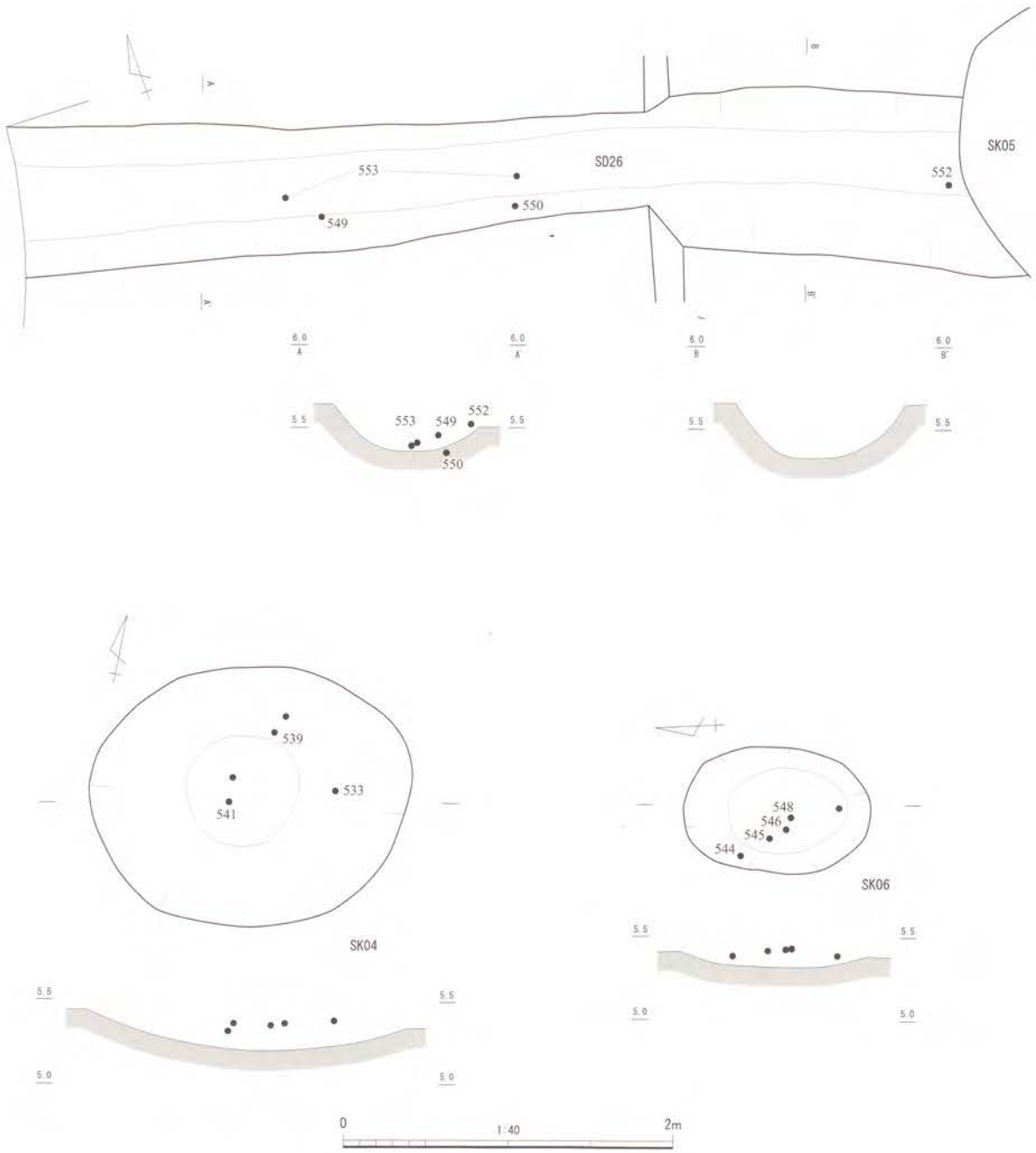


Fig.46　F-2 区 遺構詳細図

層位は Fig.45 に記した。表土、茶褐色粘土（3 層）、褐色粘土（22 層）、茶褐色粘土（27 層）、暗茶褐色粘土（30 層）、明茶褐色粘土（32 層）、黒茶褐色粘土（10 層）、緑灰色シルト（11 層）である。22 層、27 層、30 層は奈良時代～鎌倉時代の包含層である。なお、調査区内には攪乱が数箇所見られた。

SK04（Fig.46）　調査区のほぼ中央で検出された。直径約 1.9 m、深さ約 0.2 mであった。32 層を掘り込んでおり、埋土は茶褐色粘土である。遺物（Fig.69-533 ～ 541）は須恵器蓋や土師器甕、土錘が出土したことから、SK04 の時期は 8 世紀末～ 9 世紀前半頃と考えられる。

SK05（Fig.45）　調査区東端で約半分を検出した。SK05 は切り合い関係から SD26 より新しい。埋土は茶褐色粘土（Fig.45- iii 層）、明灰褐色粘土（Fig.45- iv 層）であった。遺物（Fig.69-542・543）

は土師器とともに山茶碗が出土したため、鎌倉時代の遺構と考えられる。

SK06（Fig.46）　SK06はSK04の東隣に位置し、最大径約1.1 m、深さ0.1 mの楕円形を呈する浅い土坑である。埋土は茶褐色粘土で、遺物（Fig.69-544 ～ 548）は土師器坏や甕が出土した。SK06の時期は8世紀末～9世紀前半頃と考えられる。

SD26（Fig.46）　F-2区北寄りで検出された。東西方向に約6 mを調査した。30層及び32層を掘り込んで形成され埋土は明茶褐色粘土（Fig.45-i層）である。幅約1 m、深さ約0.4 mであった。遺物（Fig.69-549 ～ 553）は古代の須恵器甕や土錘とともに近世陶器が検出された。また、溝の長軸が現在の地割と近似していることから、SD26は近世以降の掘削と考えられる。

その他の遺構　F-2区南側で小穴を2基検出した。土師器片が出土し、奈良時代～平安時代と考えられる。なお、調査区南側では平面形がはっきりしない遺構が多かった。よって遺構として捉えたものの中には、自然地形の低位部ないしは窪地へ遺物が溜まったものも含まれると考えられる。

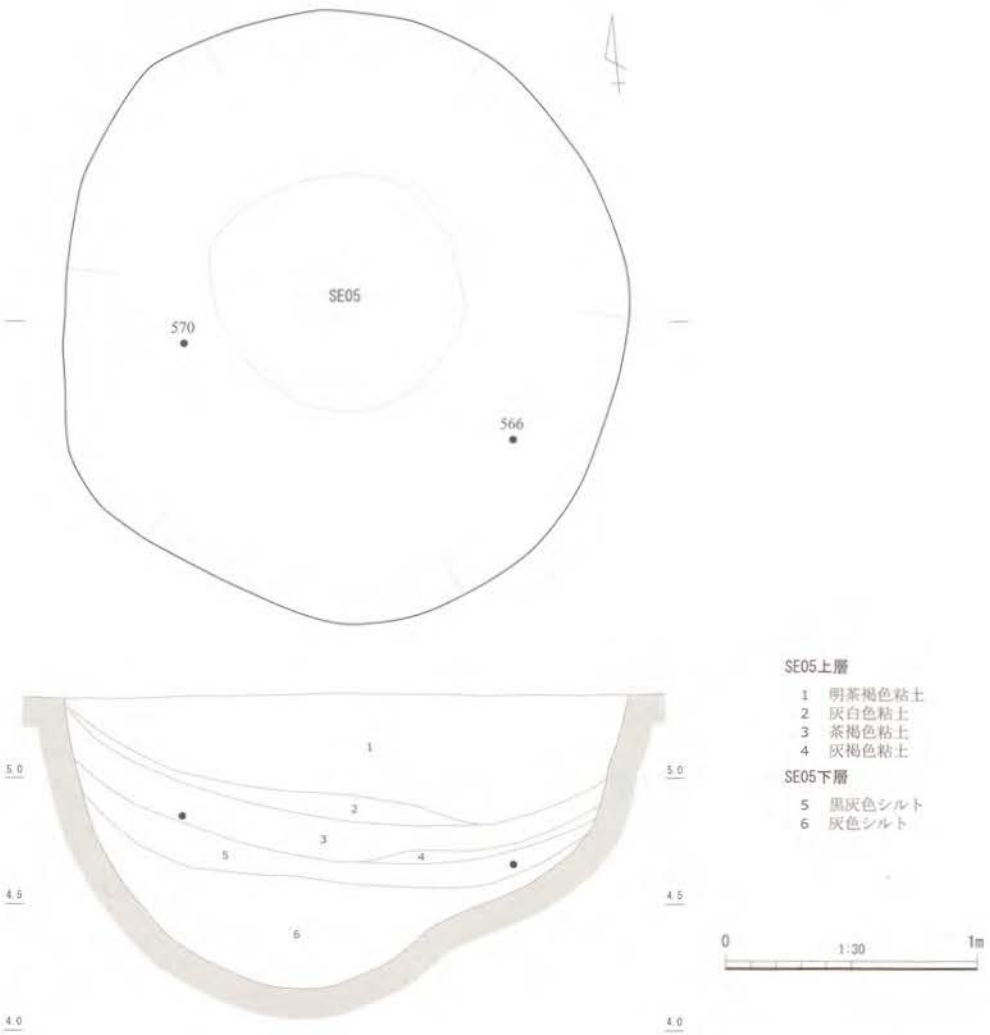


Fig.47　F-3区SE05詳細図

（7）F-3区の検出遺構

調査対象地の最も北側に位置する調査区である。検出遺構はSE05のみであった。調査区は5.0m×2.0mの長方形として設定したが、SE05検出に伴い、遺構部分を拡張した。基本層位はFig.45に示す。表土、黄褐色砂（18層）、暗灰色粘土（19層）、灰褐色粘土（20層）、緑灰色粘土（24層）、青灰色砂（25層）、明灰褐色粘土（26層）、茶褐色粘土（27層）、淡灰色シルト（9層）、黒色粘土（10層）、黒灰色粘土（14層）である。19層、20層、26層、27層は奈良時代～鎌倉時代の包含層である。なお、青灰色粘土（41層）、黒茶色粘土（42層）は井戸埋没後の攪乱と考えられる。

SE05（Fig.47）　直径は約2.2 m、深さは約1.2 mの断面U字形を呈する素掘りの井戸である。27層、9層、10層を掘り込んで形成される。埋土は明茶褐色粘土（Fig.47-1層）、灰白色粘土（Fig.47-2層）、茶褐色粘土（Fig.47-3層）、灰褐色粘土（Fig.47-4層）、黒灰色シルト（Fig.47-5層）、灰色シルト（Fig.47-6層）である。断面の観察より、粘土層を充填する上層（1層～4層）とシルト層である下層（5層・6層）では埋没に時期差があると考えられた。なお、遺物（Fig.69-564 ～ 571）については1層～6層で奈良時代～鎌倉時代の遺物が混在して出土した。遺構の時期は13世紀前半と考えられる。

小　結　C区～F区では、遺構密度がA区及びB区に比べると低くなる傾向にある。中でも、C区～F-1区では遺構があまり見られず、砂層の堆積が多く見られF-1区では比較的大規模な自然流路が検出されたため、流水が度重なる不安定な地域であったと考えられる。一方、F-2区及びF-3区ではまとまった遺構が検出された。溝や土坑が中心であり、遺物も砕片が多かった。よって、集落域からは若干離れた地であるとともに、井戸や土錘が検出されたことから、奈良時代～鎌倉時代において耕作や漁労が営まれていたと考えられる。

第３章　出土遺物

１　Ａ区の出土遺物

（１）弥生時代の遺物（Fig.48）

1～14 は弥生土器である。1 は弥生時代前期の可能性がある甕であり、外面には条痕文が見られる。2 は弥生時代中期の甕である。3 ～ 14 は弥生時代後期の土器である。3 は SE02 出土の小壺である。4 ～ 11 は壺、12 は高坏である。6 は折返し口縁壺の口縁部片で、口縁部内面と端部に刺突文が施される。9・10 は肩部片であり、ともに文様構成は波状文と横線文となる。13・14 は SX01 から出土した土器である。13 は高坏であり、坏部は下部で屈曲し稜を持ち、坏部と脚部ともに外面はミガキ調整される。14 は台付甕である。丸みを帯びた体部を持ち、口縁部は弱く外反し丸くおさめるもので、端部には刺突が施される。15・16 は SR01 から出土した弥生時代終末期（元屋敷Ⅰ式期）の土器で、SR01 の形成時期を伝える資料である。15 は高坏の脚部であり、「ハ」の字状に開く器形で、透かしは 3 方向にあいている。比較的精良な胎土で、器壁は薄く仕上げられている。16 は S 字状口縁甕の口縁部片である。口縁部外面には押引刺突文が見られ、外面はハケメ、内面はヨコハケ調整される。その特徴から、S 字甕 A 類と考えられる（赤塚 1990）。

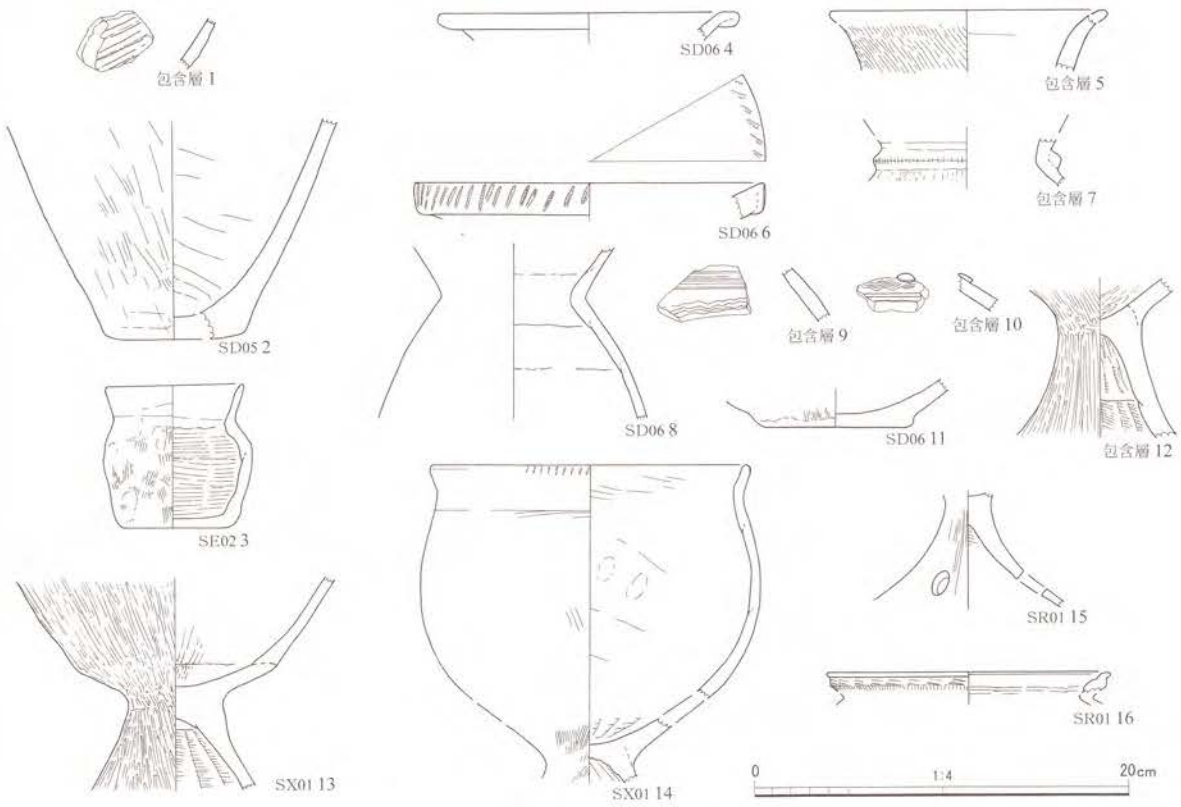


Fig.48　弥生時代　出土遺物

(2)古墳時代～平安時代の出土遺物(Fig.49 ～ Fig.66)

SD06 出土遺物概要　Fig.49-17～Fig.56-239、Fig.62-403～Fig.63-433 は SD06 出土の遺物であり、その内、17～53、403 が下層、54～161、404～417 が中層、162～210、418～427 が上層、211～239、428～433 が SD06 内から出土した。

SX08（SD06 下層）出土遺物　17～30、403 は SD06 下層で検出した SX08 出土の遺物である。29・30・403 を除いて須恵器であり、17～19は坏蓋で、18 と 19 には大型の扁平宝珠形の摘みが残る。20・21 は有台坏身であり、底部が丸みを持つもの(20)と平らなもの(21)がみられる。他に碗(22･23)、壷(24～26)、甕(27･28)が出土している。これらの須恵器は，坏蓋や有台坏身の特徴から、遠江編年Ⅴ-2～3期(鈴木敏2004･2005)にかけてのものと考えられる。29 は 8 世紀代の土師器甕・30 が台付甕である。403 は墨書土器であり、土師器坏身の底部に墨書される。この他に、桃核が 45 点以上出土している。

SX09（SD06 下層）出土遺物　31･32 は SD06 下層で検出した SX09 出土の遺物である。いずれも土師器であり、31 が坏身、32 が有台盤である。

SD06 下層出土遺物　33～53 は SD06 下層から出土した遺物である。33～35は須恵器である。33 は坏蓋で、大型の偏平宝珠形の摘みが残る。34・35 は有台坏身である。34 は腰部で屈曲し直線的に立ち上がる体部を持つもので、底部は高台より下に出るようである。35 は口縁部が外反する碗形の器形を持つもので、底部にはヘラ記号がみられる。36 ～ 38 は土師器で、37 は把手が付く器形で、鉢もしくは甕である。39～41 は土製品であり、39 は甑形、40 は高坏形、41 は人形か土馬である。42～53 は製塩土器であり、出土したものは口縁部や体部の破片で、底部や脚部の破片はみられなかった。出土した製塩土器は、いずれも胎土が精良なもので、口縁端部に面を持つものと丸くおさまるものがみられる。また、調整は外面がユビオサエ、内面はナデを基本とするが、45 には外面に布の圧痕も確認できる。この他に図示しなかったが体部片が 2 点出土した。SD06 下層から出土した遺物は、須恵器の特徴から遠江編年Ⅴ-3 期のものであり、実年代とすると 8 世紀中頃と考えられる。

SX03（SD06 中層）出土遺物　54 ～ 57、404、413 は SD06 中層で検出した SX03 出土の遺物である。54 ～ 56 は須恵器であり、54 が皿、55・56 は壷である。57 は土師器甕である。404・413 は墨書土器である。413 は須恵器皿の底部に「長」の墨書が確認できる。

SX04（SD06 中層）出土遺物　58 ～ 61 は SD06 中層で検出した SX04 出土の遺物である。58 ～ 60 は須恵器で、58・59 は壷、60 は甕である。61 は土製品の碗形である。

SX05（SD06 中層）出土遺物　62 ～ 70 は SD06 中層で検出した SX05 出土の遺物である。62 ～ 69 は須恵器である。62 は坏蓋で、扁平宝珠形の摘みが付き、器形が笠形で口縁部は明瞭に屈曲する。63 ～ 65 は有台坏身で、腰部が屈曲し底部が高台より下に突出するものとしないものが出土している。これらは遠江編年Ⅴ-2 ～ 3 期にかけてのものと考えられる。66・67 は箱坏で、67 の底部にはヘラ記号が付される。69 は有台鉢で、体部中位には列点文がみられる。70 は土師器坏身であり、ハの字状に開く体部で口縁端部に沈線がみられる。

SX06（SD06 中層）出土遺物　71～84、405・406 は SD06 中層で検出した SX06 出土の遺物である。

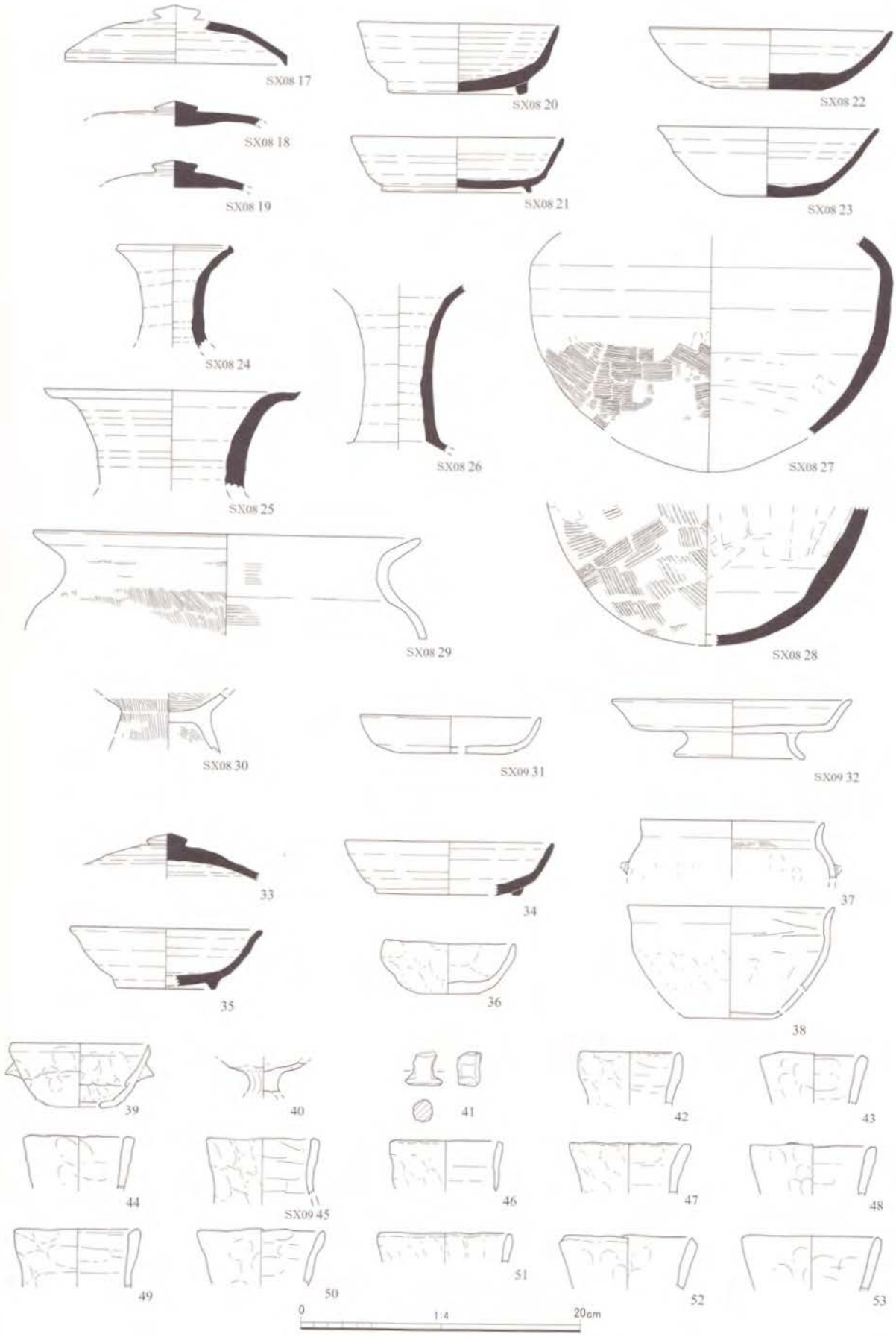


Fig.49　SD06 下層 SX08・09 出土遺物

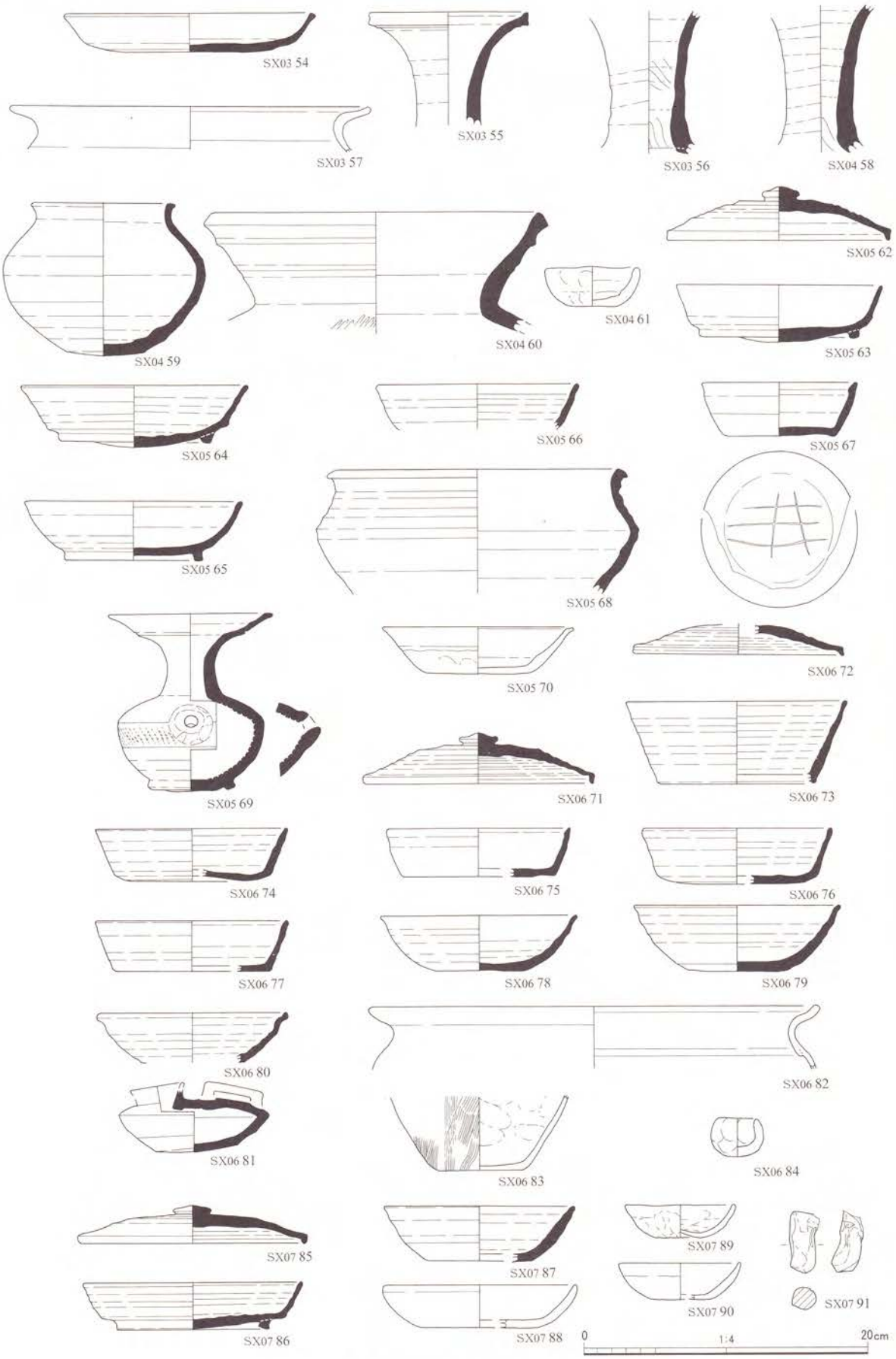


Fig.50　SD06 中層 SX03・04・05・06・07 出土遺物

71～81は須恵器であり、71・72が坏蓋、73～77が箱坏、78～80が碗である。81の水滴は，口縁端部と把手を欠損するがほぼ完形である。405・406は墨書土器である。405は須恵器箱坏の底部に墨書され、欠損部が多く判読は難しいが、「北家」の可能性がある。これらSX06出土の遺物は、須恵器の特徴から遠江編年Ⅵ-1期のものと考えられる。

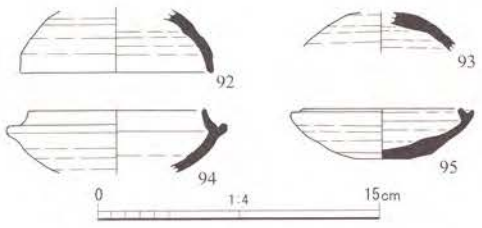


Fig.51　SD06形成期遺物

SX07（SD06中層）出土遺物　85～91はSD06中層で検出したSX07出土の遺物である。85～87は須恵器で、85が坏蓋、86が有台坏身、87が碗である。88～90は土師器坏身、91は陶馬の脚部片である。

SD06形成期遺物　92～95は古墳時代の須恵器である。いずれもSD06中層出土であるが、SD06の形成時期を示すものと考えられる。92・93は坏蓋である。92は半円形の体部を持つもので、天井部と口縁部の境界は不明瞭である。93も同様の器形を持つ坏蓋と考えられる。ともに遠江編年Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉のものである。94・95は坏身である。94は弧状を呈する体部に、内傾する口縁部を持つもので、Ⅲ期末葉の時期が考えられる。95はやや扁平な体部に、短く内傾する口縁部を持つもので、口縁部の立ち上がりは受け部の高さを若干上回る程度である。底部は周辺のみヘラケズリ調整される。その特徴からⅣ期前葉と考えられる。

SD06中層出土遺物　96～161、407～412、414～417はSD06中層から出土した遺物である。96～111は須恵器であり、96・97が坏蓋、98・99が有台坏身、100～103が箱坏である。104～107は碗であり、104・105・107は口縁部の特徴から鋺形と考えられる。108は小型の壷で、底部には糸切り痕が確認できる。109は壷の頸部片である。110は甕の頸部片であるが、縦方向に2条の沈線が施されており、円面硯の脚部である可能性も考えられる。111は円面硯の脚部から外堤にかけての破片である。中型の圏足硯で、脚部には幅の狭い透かしが見られるが、大きさや数は不明である。脚部上部の凸帯は鍔状に広がる。112～113は土師器である。112は坏蓋で、外面から口縁部まで赤彩される。113は有台坏身であり、内面に漆が付着する。114～122は坏身である。器形には、体部が「ハ」の字状に開くもの（114～116、120、122）と体部が内湾気味に立ち上がるもの（117・118、121）、体部が内湾するもの（119）が確認できる。また、116と119には内面に暗文が施され、古い様相がみられる。その他、123・124は皿，125・126は高盤、127～129は甕である。130～133は鉢であり、132・133には耳が付く。134～140は土製品で、134～137が碗形、138が高坏形、139・140が坏形である。141は砥石である。

142～161は製塩土器の口縁部片である。SD06下層と同様に底部や脚部の破片は確認できなかった。出土した製塩土器には、胎土が精良なもの（142～159）と砂粒が多く含まれるもの（160・161）がある。また、口縁部形態には、端部に面をもつもの（142・143、147、154～156）と端部が尖るもの（144～146、148～153、157～161）があり、前者に比べ後者の器壁は薄く仕上げられる。他に図示しなかったが体部片が3点出土した。

407～412、414～417は墨書土器である。407～409は須恵器坏蓋の内面、410は須恵器有台坏身の

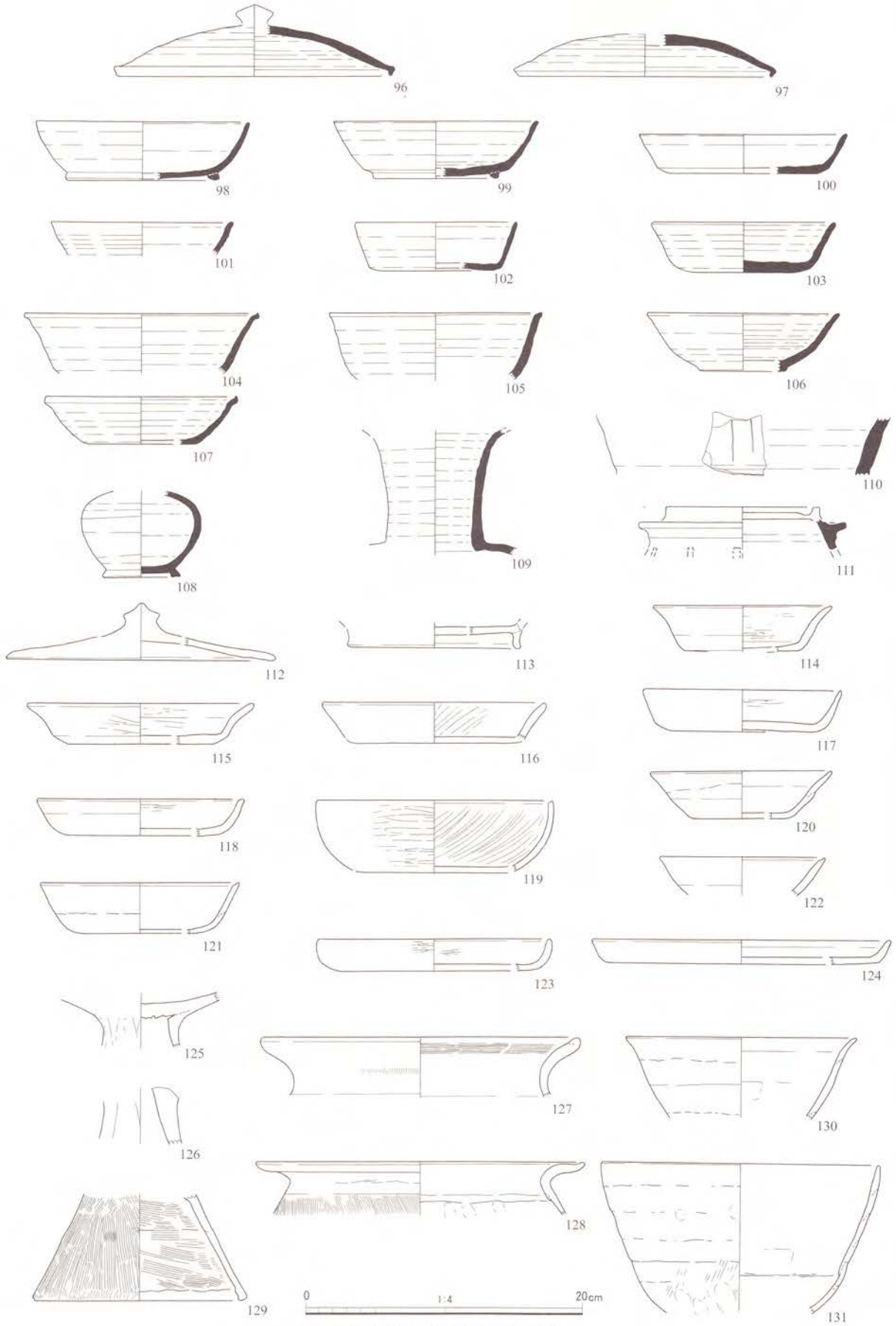


Fig.52　SD06 中層出土遺物（1）

底部、411・412は須恵器箱坏の底部、414は須恵器皿の底部、415は土師器坏蓋の内面、416は土師器皿の底部、417は土師器坏身の体部にそれぞれ墨書される。

SX02（SD06上層）出土遺物　162～184、418～420はSD06上層で検出したSX02出土の遺物である。162～173は須恵器である。162～164は坏蓋であり、いずれも器形は扁平で、口縁部の折り返しは小さく断面が三角形状のものである。また、162には小型の宝珠形摘みが付く。これらの坏蓋は、その特徴から遠江編年Ⅵ期のものと考えられる。165・166は碗であり、166の底部には糸切り痕が残る。167～169は箱坏であるが、169は口縁部などの特徴から鋺形と考えられる。170・171は皿であり、内湾する器形（170）と直線的に立ち上がる器形（171）が出土している。他に172の壷と173の甕がある。174～182は土師器である。174は坏身、175・176は皿、177～182は甕である。これらの土師器は、器種や器形などの特徴から、遠江編年Ⅵ期に併行する時期のものと考えられる。184は棒状の鉄製品であるが、用途は不明である。

418～420は墨書土器である。418は須恵器皿の底部に「北」の墨書がみられ、その下にもう一文字続きそうであるため、「北家」の墨書の可能性がある。419は土師器坏蓋の内面に「井」の墨書がみられるが、文字ではなく記号の可能性が考えられる。420は内面に「北家」の墨書がみられる須

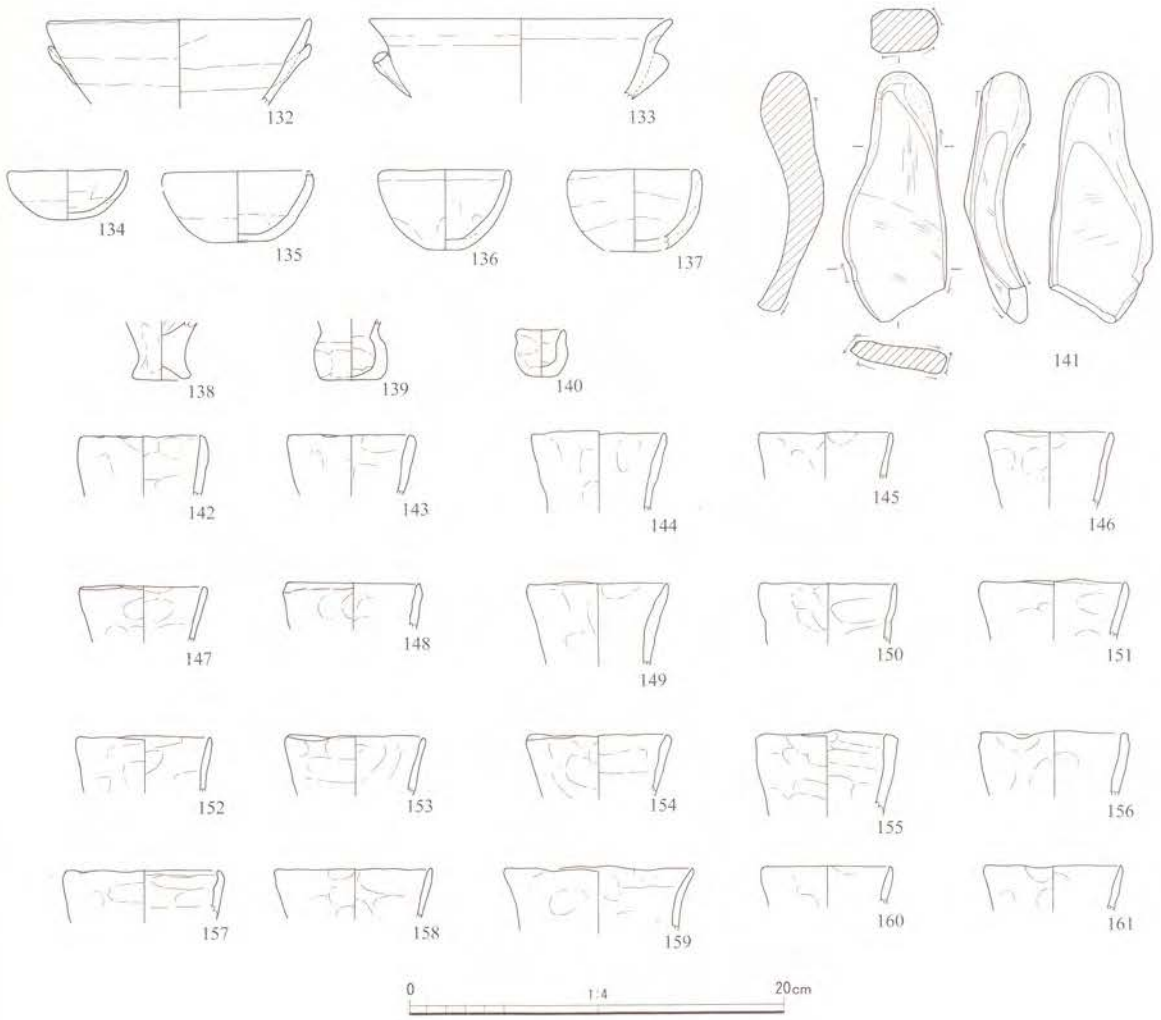


Fig.53　SD06中層出土遺物（2）

恵器坏蓋である。420は扁平な器形で、口縁部は折り返しが小さく断面三角形状となるもので、遠江編年Ⅵ期の特徴を持つ坏蓋である。そのため、この遺物から、少なくともSD06が機能していた9世紀初頭まで、「北家」という名称が使用されていたことがわかる。

SD06上層出土遺物　185～210、421～429はSD06上層から出土した遺物である。185～190は須恵器で、185が有台坏身、186・187は箱坏であるが、口縁部などの特徴から鋺形と考えられる。188・189は碗であり、189は底部に糸切り痕を残す。190は無台の盤であり、底部はヘラケズリ調整される。191～206は土師器である。191は坏蓋で、外面にはミガキが入り、赤彩されている。192～201は坏身であり、器高が低い浅身の器形（192～199）と器高が高く箱坏状になる器形（200・201）がみられる。202・203は皿であり、203は口縁端部に面を持ち外側につまみだされる口縁部を持つ。204・205は口縁部がラッパ状に開く鉢である。207～210は土製品で、207が甑形、208が碗形、209が坏形、210が人形である。210の人形は、目を刺突により表現し、側面には粘土が張り付けられ、

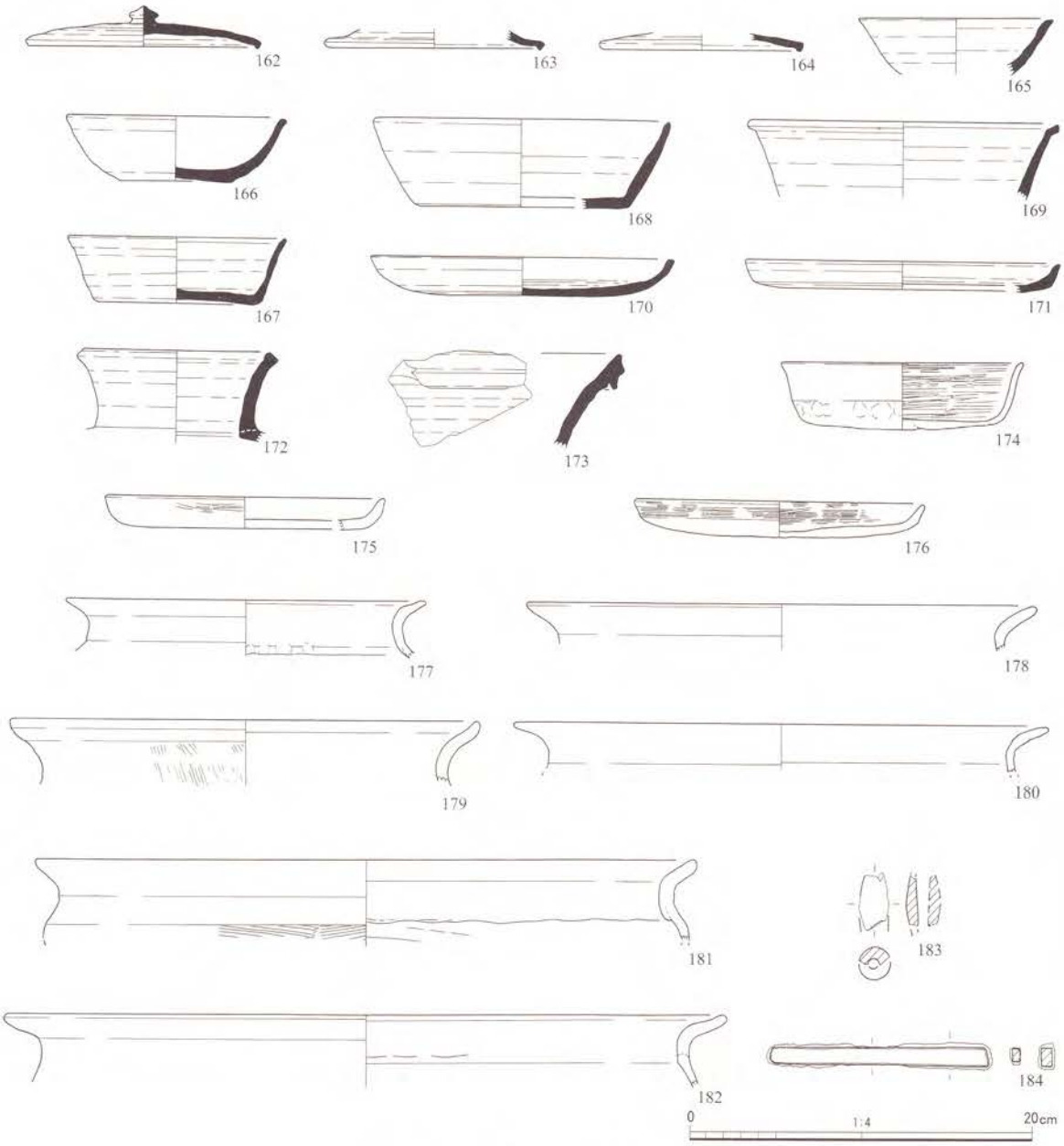


Fig.54　SD06上層SX02出土遺物

耳状のものが表現されている。

421～429 は墨書土器である。421 は須恵器箱坏の底部に墨書がみられるもので、字数は不明であるが記号と考えられる。類似するものには 441 や 445 があり、則天文字などの特殊な文字の可能性もある。422 は須恵器箱坏で、底部に「北家」の墨書が判読できる。423・424 は須恵器碗で、どちらも底部に墨書されるが判読はできなかった。425 は須恵器皿の底部に二文字墨書されるもので、二文字目は「四」と判読できる。426 は土師器坏蓋の内面に墨書されるが、字数も含め判読はできなかった。427 は土師器皿の底部、428 は須恵器箱坏の底部に墨書され、ともに判読不明であるが、427 は記号の可能性がある。428 は内面に墨痕も確認でき，転用硯として使用されていたと考えられる。429 は須恵器碗または皿の内面底部に墨書されるが、文字は判読できなかった。

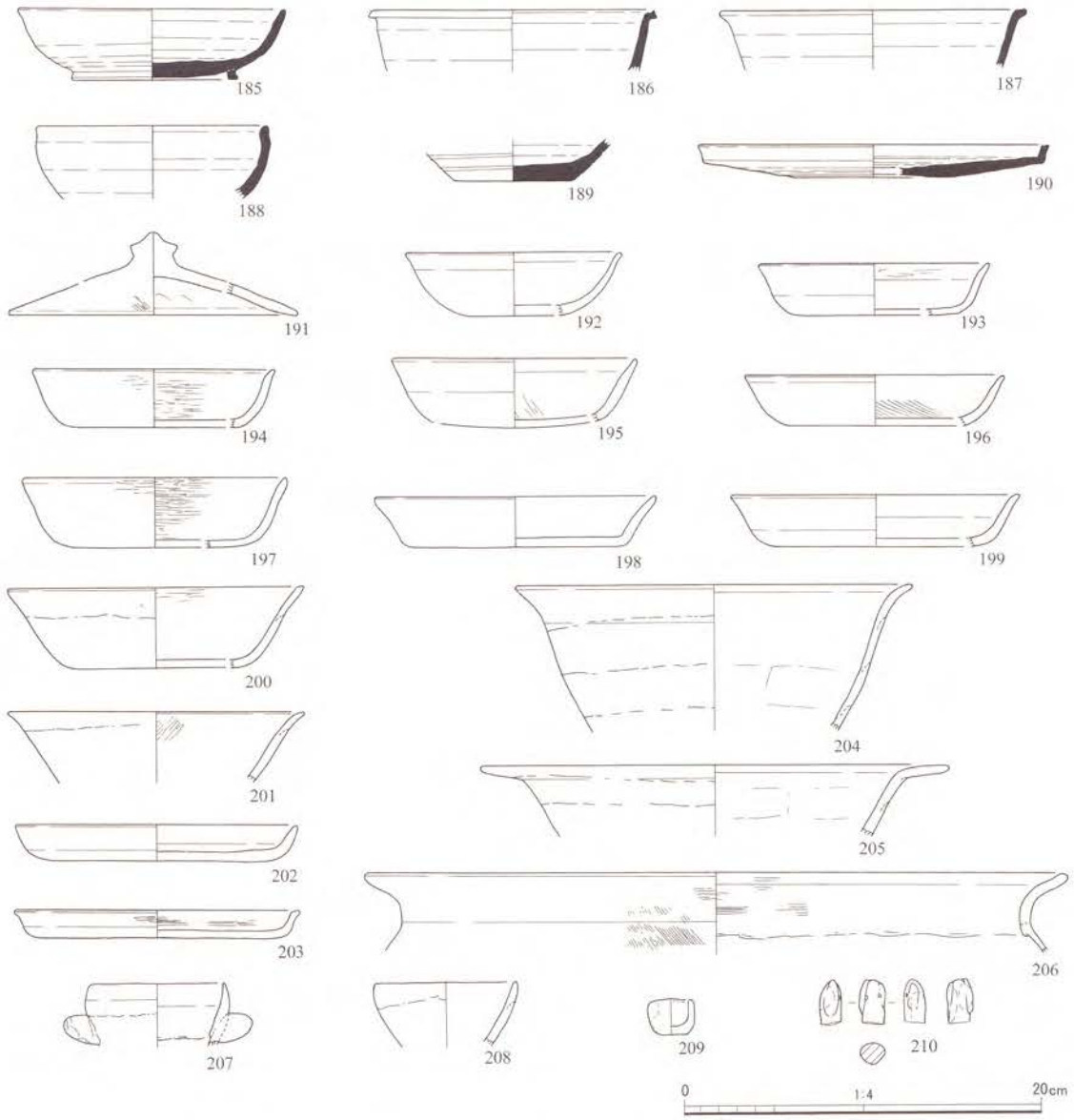


Fig.55　SD06 上層出土遺物

SD06 上層からは遠江編年Ⅵ期の遺物を中心に出土しており、実年代では 8 世紀後半から 9 世紀初頭が SD06 上層の堆積した時期と考えられる。

SD06 出土遺物　211～239、430～433 は SD06 出土の遺物である。211～224 は須恵器で、211 が坏蓋、212～214 が箱坏、215 が有台盤である。216～218 は壷であり、217・218 はいわゆる壷 G と呼ばれるものである。219 は鉢、220 は甕である。221～223 は転用硯であり、221・222 は坏蓋、223 は盤を利用している。224 は獣足であり、形や大きさから獣脚付壷の脚部と考えられる。225～228 は土師器で、225 が皿、226 が坏身、227 が高盤、228 が甕である。229～233 は製塩土器であり、いずれも胎土が精良なものである。234 は土錘である。235 は灰釉陶器段皿である。内面に灰釉がハケ塗り

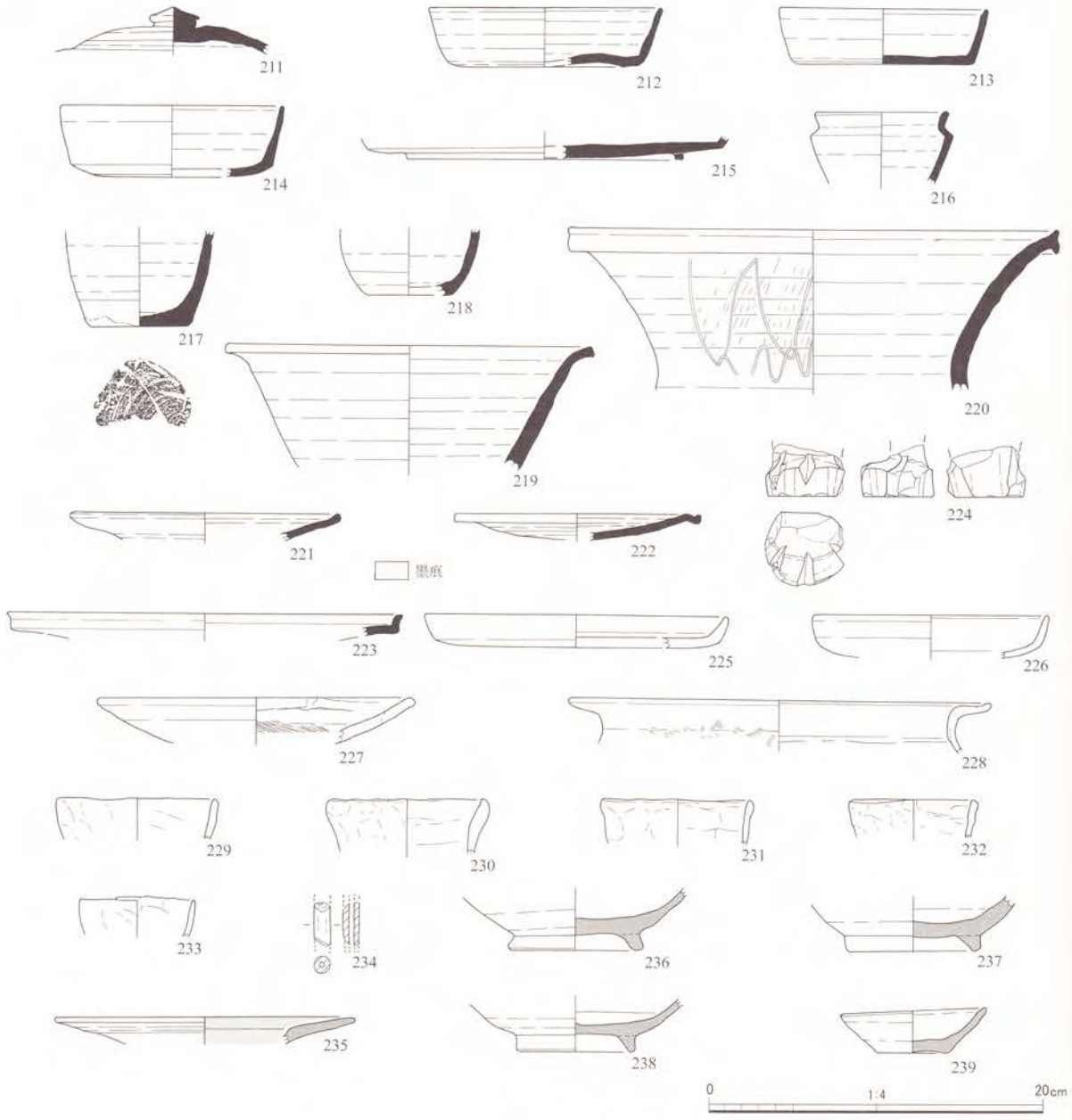


Fig.56　SD06 出土遺物

されており、黒笹 14 号窯式のものと考えられる。430～433 は墨書土器である。430 は須恵器坏蓋の内面に「大」、431 は須恵器坏蓋の外面に「中」の墨書がみられる。432 は箱坏もしくは皿の底部、433 が土師器の内面に墨書され、432 は判読不明であるが、433 は墨画の可能性も考えられる。

SR01 Ⅱ層出土遺物　Fig.57-240～261、Fig.64-434～450 は SR01 Ⅱ層出土の遺物である。240～258 は須恵器である。240・241 は坏蓋で、いずれも摘みは残っていない。242・243 は有台坏身、244～246 は箱坏である。247～249 は無台碗であり、249 には内面に「十」字状の刻書が施される。250 は耳部を欠損するが双耳坏であり、251・252 は鋺形、253 は皿である。これらの須恵器は、いずれも遠江編年Ⅴ -2 ～Ⅵ期にかけてのものである。256・257 は転用硯で、坏蓋の内面を硯面として使用している。258 は陶馬で、頭部から胴部にかけて残存し、脚部は欠損する。手綱を線刻で表現し、鞍は剥離しているが、粘土を張り付けて表現していたようである。その特徴から遠江編年Ⅴ -2 ～ 3 期と考えられる。259 は土師器の有台坏身で、内外面赤彩される。260・261 は土製品であり、260 が高坏形、261 が土錘である。

434～450 は墨書土器である。いずれも須恵器で、器種は蓋や箱坏、盤、皿などであるが、箱坏

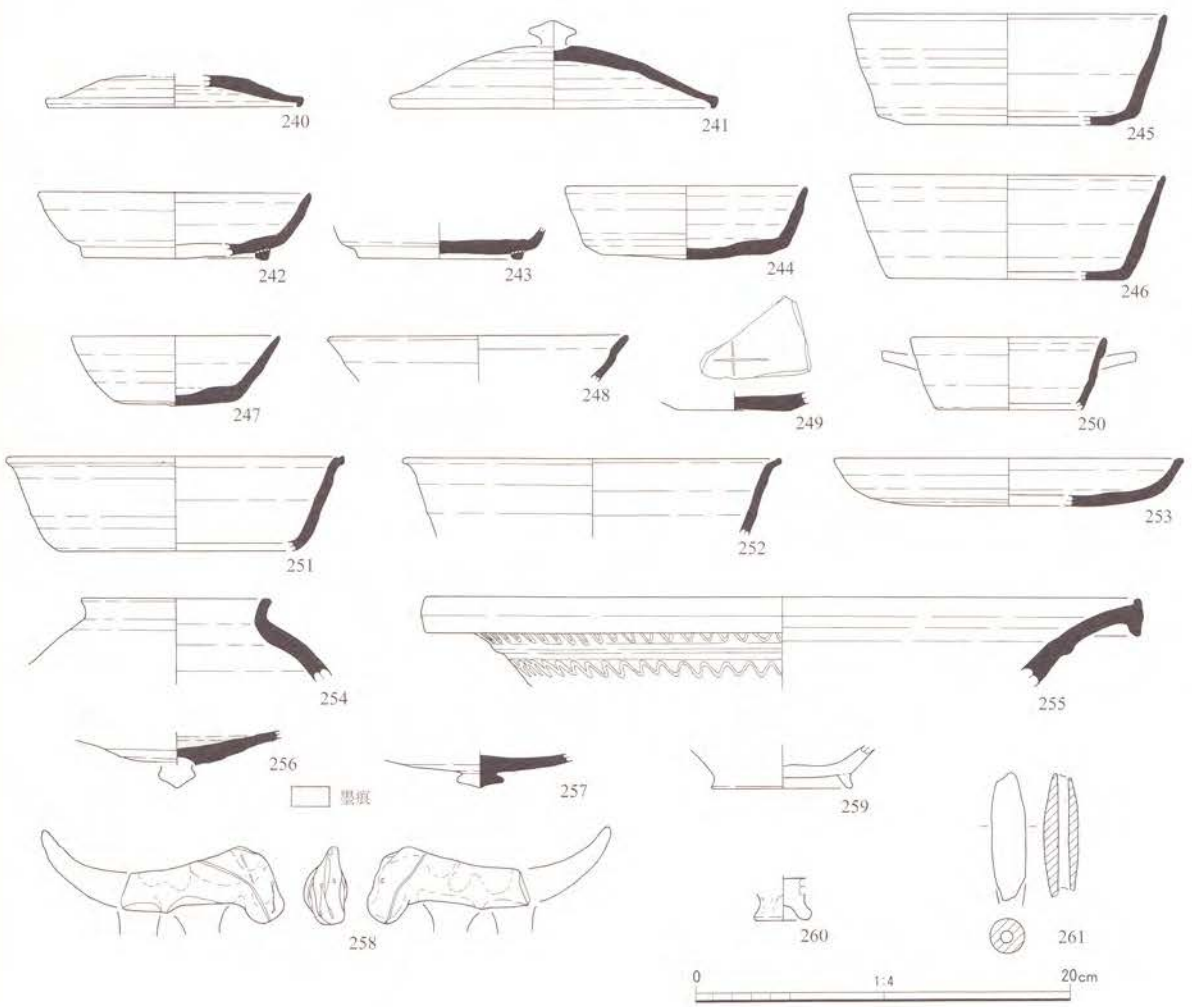


Fig.57　SR01 Ⅱ層出土遺物

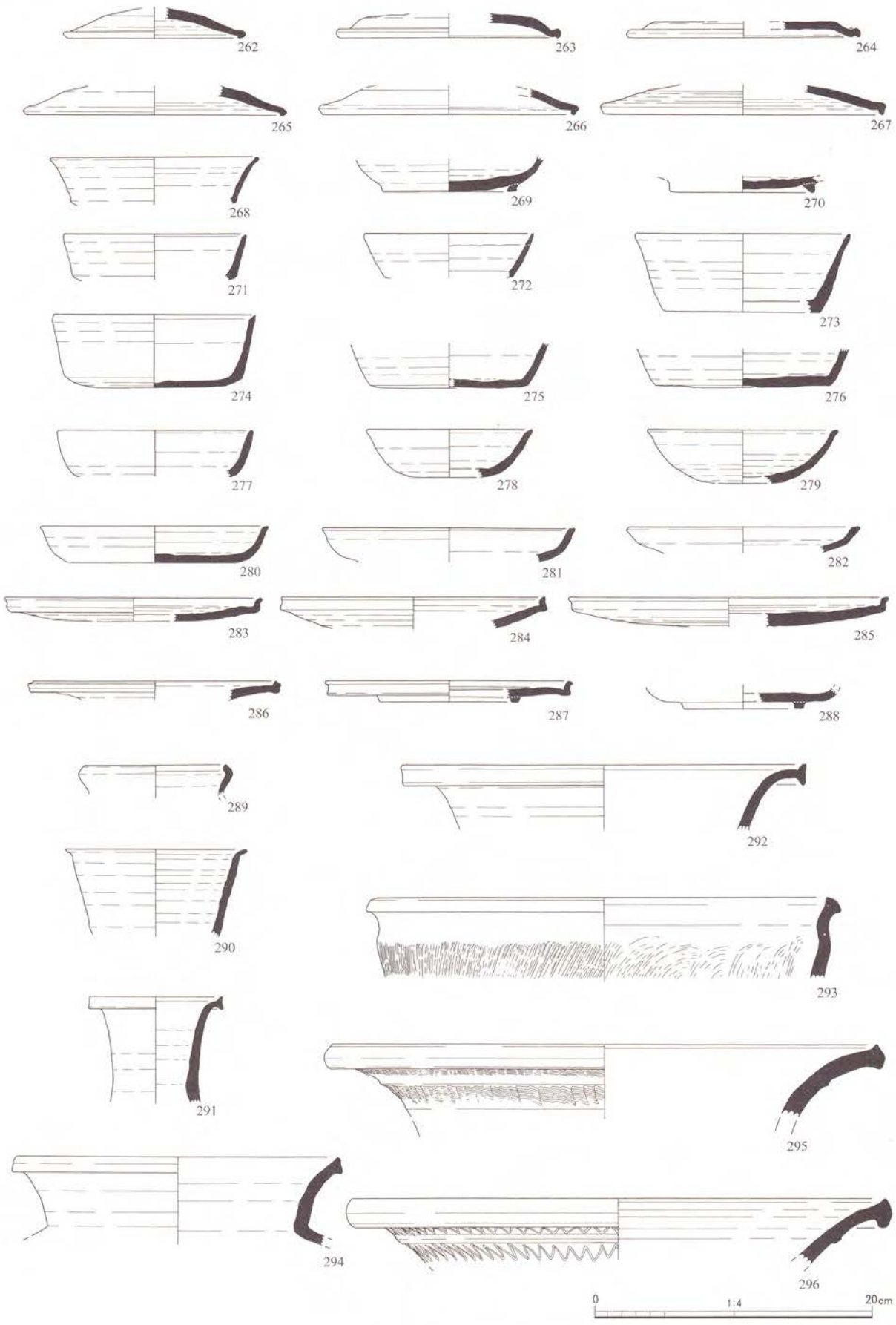


Fig.58　SR01 Ⅰ層出土遺物（1）

に墨書される例が多い。墨書は判読不明のものが多数を占めるが、その中で 438・450 は「北家」と判読でき、442 も「北家」の可能性がある。また、441・445 は記号と見られるが、則天文字などの特殊な文字の可能性も考えられる。墨書土器の時期はⅤ -3 期以降であり、Ⅱ層出土の遺物の様相から、Ⅵ期におさまると考えられる。

SR01 Ⅰ層出土遺物　262～402（Fig.58～Fig.61）、Fig.64-451～461 は SR01 Ⅰ層出土の遺物である。262～301 は須恵器である。262～267 は坏蓋で、いずれも偏平な器形となり、口縁部の折り返しは小さく断面が三角形状となる。時期は遠江編年Ⅵ期のものと考えられる。268～270 は有台坏身、271～277 は箱坏、278・279 は無台碗、280 ～ 288 は皿・盤で、遠江編年Ⅴ～Ⅶ期にかけてのものである。他の器種には壷（289～292）、鉢（293）、甕（294～296）がある。297～299 は円面硯である。297 は脚部に剥離の痕跡が見られることから蹄脚硯と考えられる。大型の圏足硯で、脚部から海部まで残存している。脚部には幅の狭い透が施され、復元すると 20 以上の透があったと見られる。298 は中

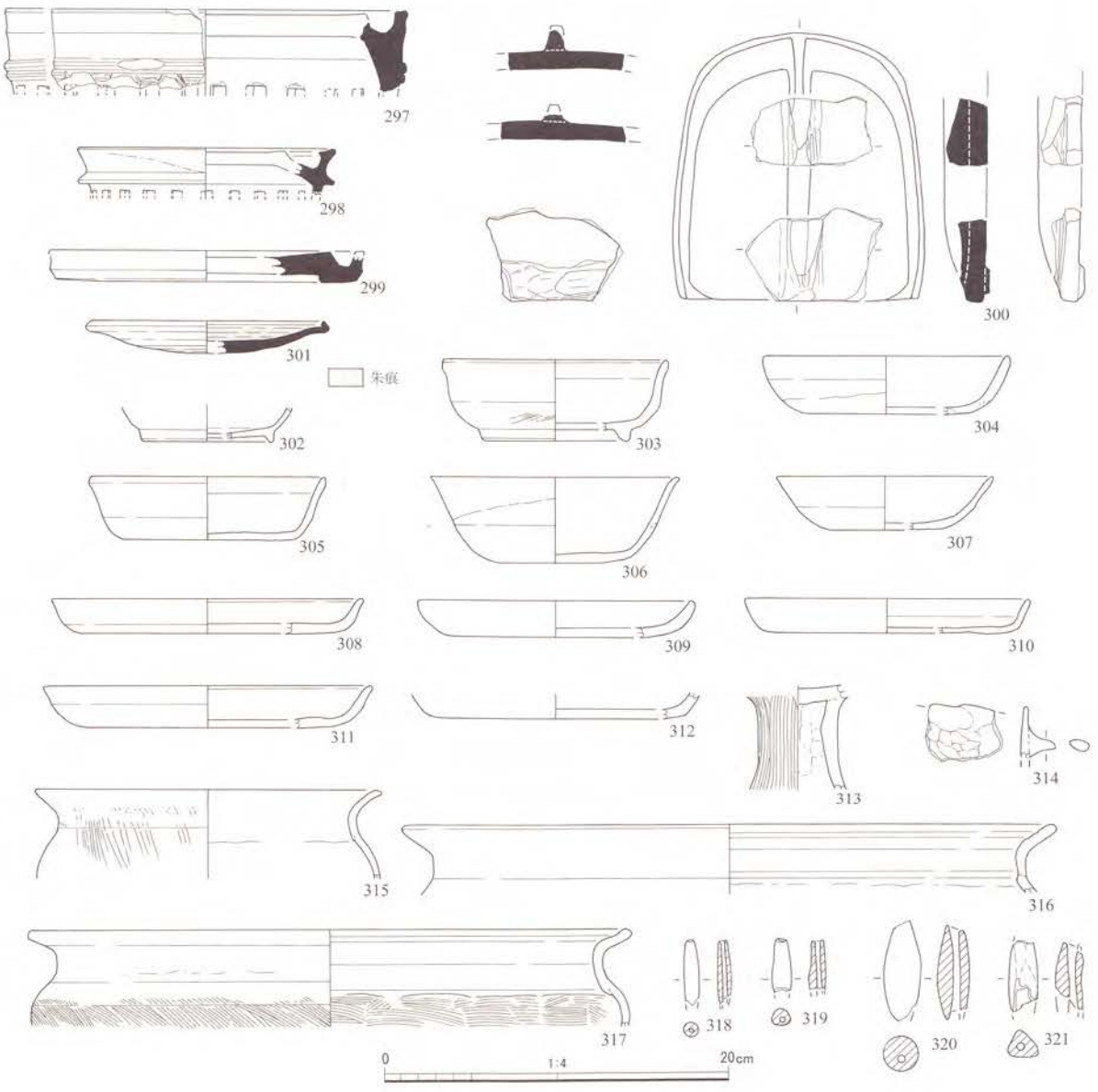


Fig.59　SR01 Ⅰ層出土遺物（2）

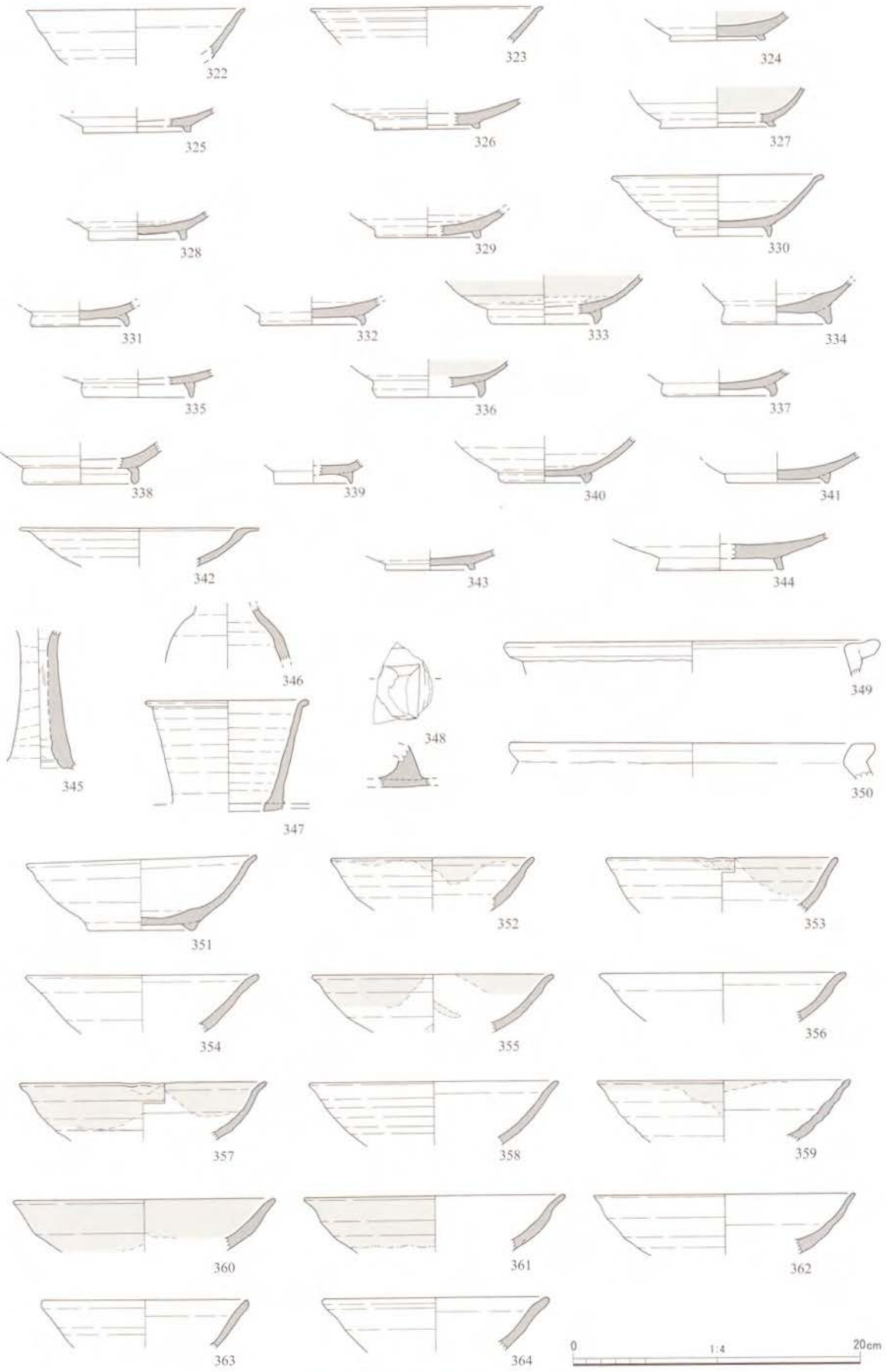


Fig.60　SR01 Ⅰ層出土遺物（3）

型の圏足硯で、脚部から海部までの破片である。胎土などの特徴から猿投窯産と考えられ、外堤と硯部内面には自然釉がかかるため、裏返して焼成されたことがわかる。脚部には幅の狭い透かしが施され、多数の透かしが巡っていたとみられる。299は無脚硯であるが、全体の五分の一程度が残る資料であるため、独立した脚が付く可能性も残る。外堤から硯面まで残る資料であり、全体形が復元できる。器形は、硯面が内側に向かって傾斜し、海部は硯面との段差と外堤により作りだされている。また、硯面は磨滅しており使用されていたとみられ、硯部裏面には自然釉がかかり、裏返して焼成されたことがわかる。300は風字硯で、硯面が縦に二割される二面風字硯である。脚部は低い凸帯が硯尻に付され、硯面は磨滅し、使用の痕跡がみられる。また、須恵器として報告してい

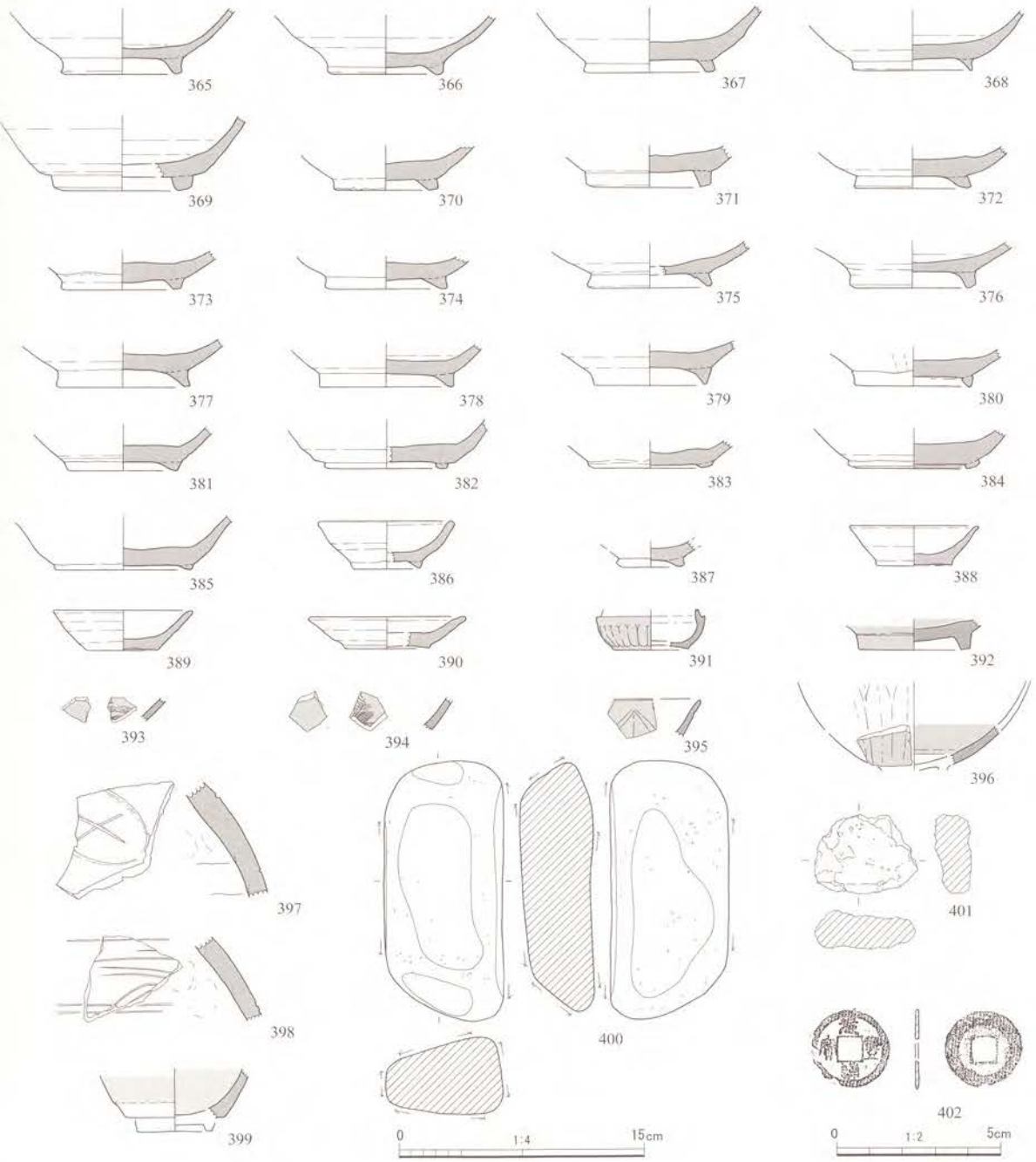


Fig.61　SR01 Ⅰ層出土遺物（4）

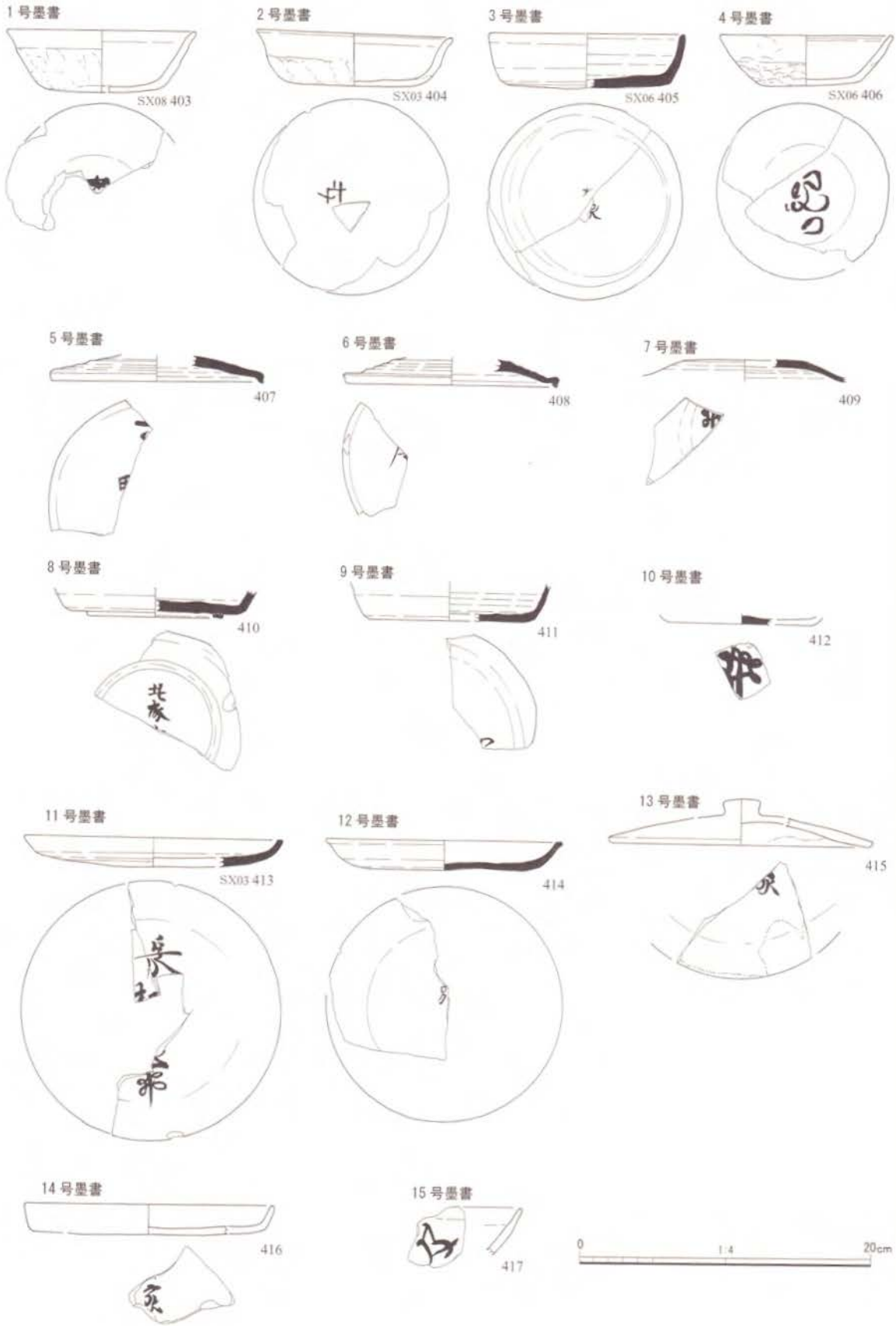


Fig.62　SD06 下層・中層出土墨書土器

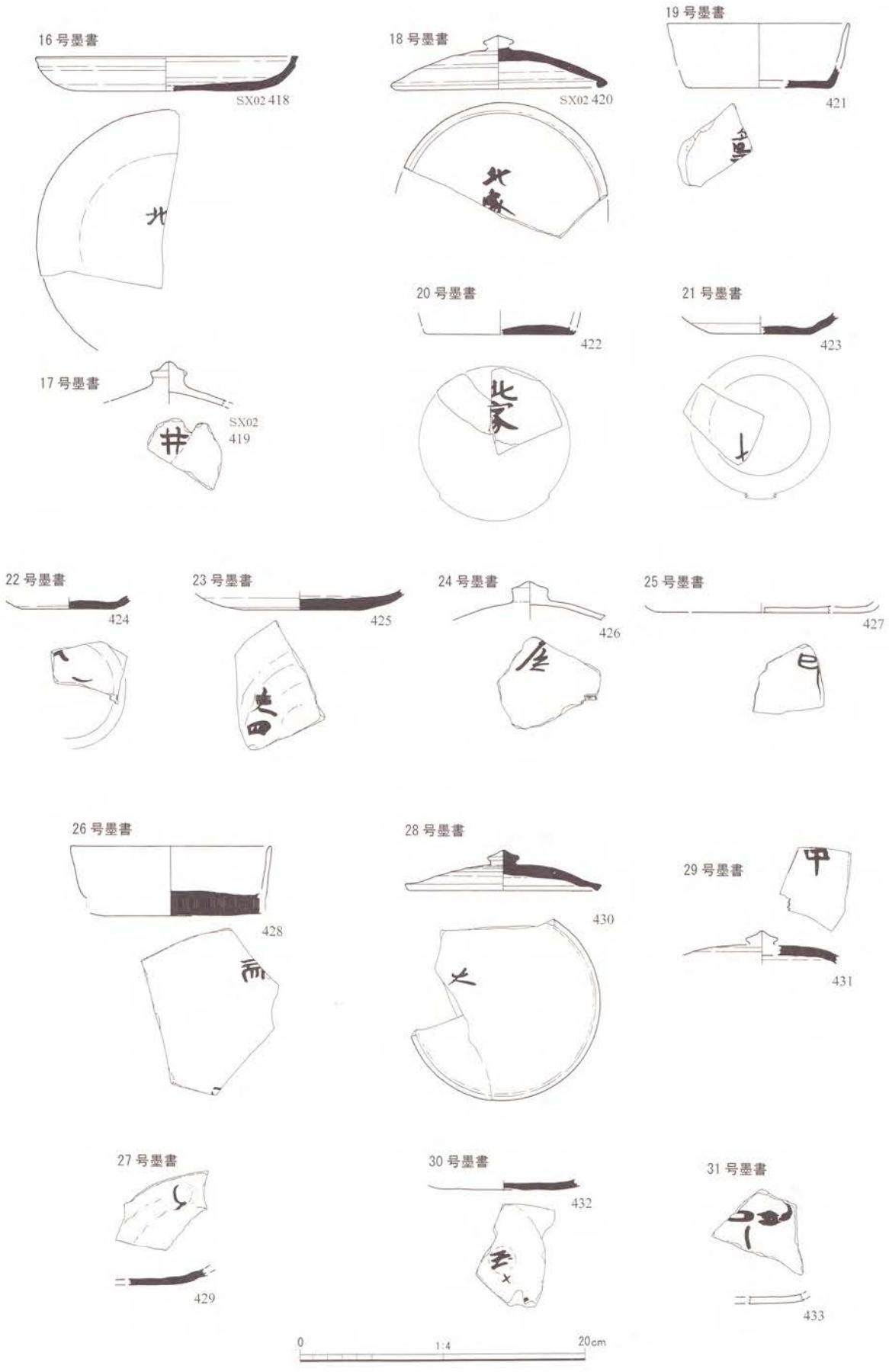


Fig.63　SD06 出土墨書土器

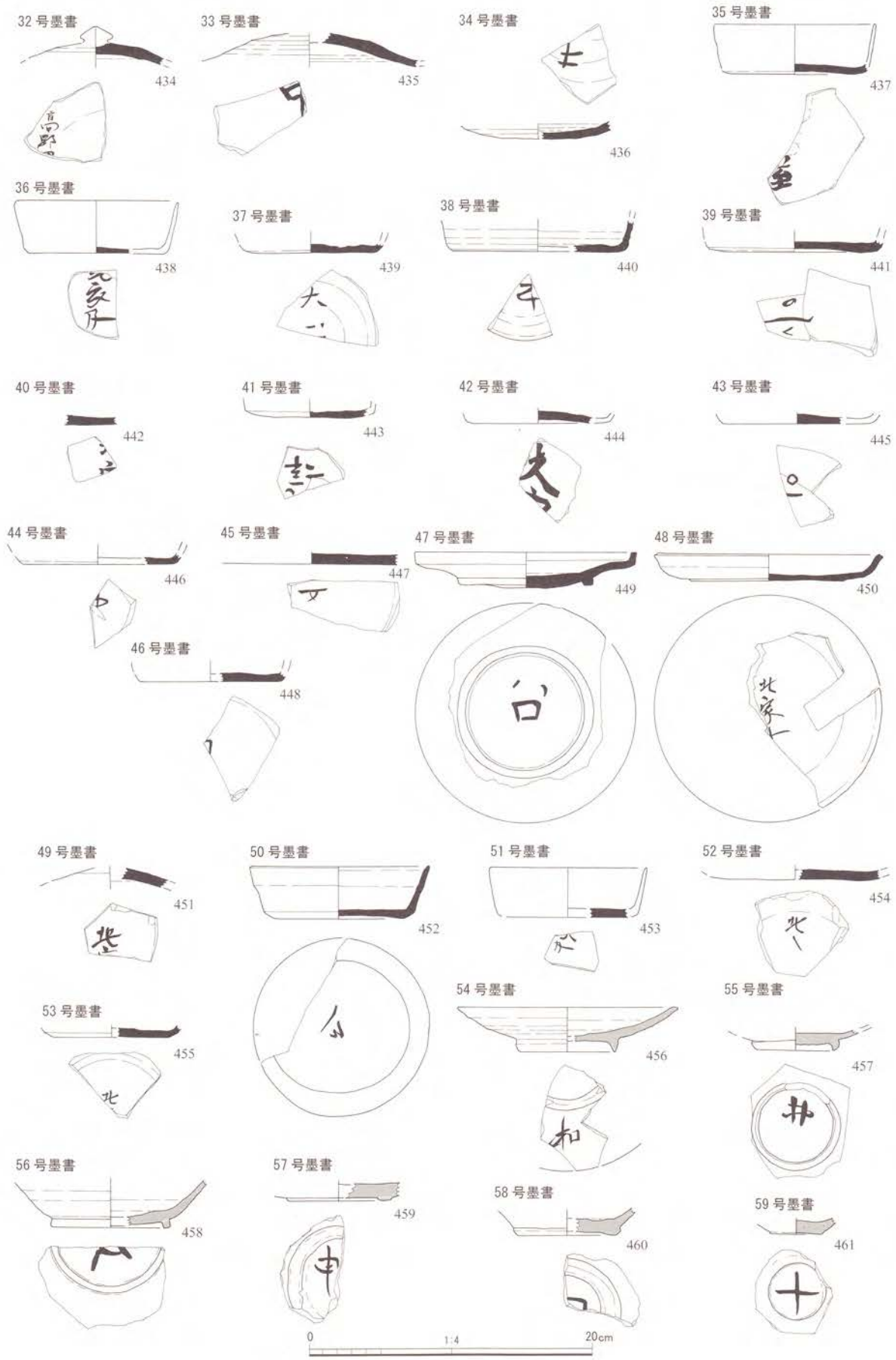


Fig.64　SR01 出土墨書土器

るが、焼成状態などからは灰釉陶器の可能生もある。301 は朱が付着する転用硯であり、坏蓋の内面を利用している。302 ～317、349・350 は土師器である。302・303 は有台坏身、304～307 は坏身である。308～312 は皿、313 は高盤であり、312 の内面には漆が付着している。これらの土師器はおおむね 8 世紀後半～ 9 世紀初頭の時期のものと考えられる。315～317､349・350 は甕であり､349・350 は清郷型甕と呼ばれるものである。322～348 は灰釉陶器である。322～341 は碗、342 は段皿、343・344 は皿であり、324～329、342～344 が黒笹 14 号窯式、322、323、330～333、335～338 が黒笹 90 号窯式、334、339～341 が折戸 53 号窯式のものである。他に水瓶（345）、小壷（346）、平瓶（347・348）がある。

451～461 は墨書土器であり、451～455 が須恵器、456～458 が灰釉陶器、459～461 が山茶碗である。墨書は、451 が内面、456 が外面体部に書かれる他は、いずれも外面底部に墨書される。多くは判読不明であるが、451、454・455 は「北」と判読でき、Ⅱ層出土の「北家」墨書との関連がうかがえる。また、灰釉陶器や山茶碗の墨書の多くが記号の可能性が高く、時期による墨書内容の変化が見られる。他に馬歯が 11 点と獣骨が出土している。

A 区出土墨書土器　墨書土器については一部前述したが、宮竹野際遺跡の性格を知る上で重要な遺物であるため再度触れる。今回 A 区からは 59 点の墨書土器が出土した。（Tab.2）土器の種類は須恵器が 43 点、土師器が 10 点、灰釉陶器が 3 点、山茶碗が 3 点である。記載部位は、坏蓋は 1 点が外面に墨書される他はすべて内面であり、その他の器種は 3 点が内面底部、1 点が外面体部である他はすべて外面底部である。今回出土した墨書土器の年代は、須恵器や土師器が遠江編年Ⅴ -3 ～Ⅵ期にかけてのもので、実年代で 8 世紀後半～ 9 世紀初頭頃の遺物である。また、灰釉陶器は黒笹 14 号窯式～折戸 53 号窯式、山茶碗は 13 世紀代のものであり、幅広い時期の墨書土器が出土し

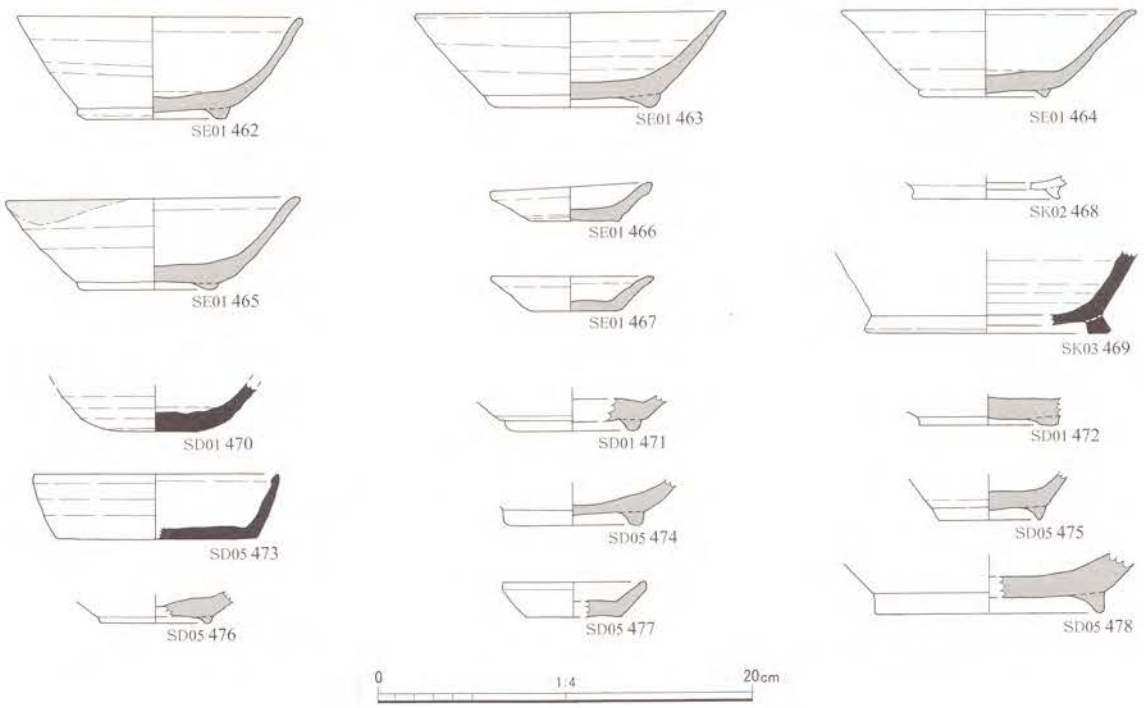


Fig.65　A 区 遺構出土遺物

ているが、須恵器や土師器などの8世紀後半～9世紀初頭の土器が多数を占めている。

出土した墨書土器のなかで特筆されるのは「北家」墨書である。「北家」と判読できるものは420・422・438・450である。さらに、「北家」の可能性がある土器としては405・410・415・416・418・442・451・454・455がある。これら「北家」墨書は施設名を表している可能性が高く、古代における宮竹野際遺跡の性格と直接関係してくる遺物である。また、同様の事例として梶子北遺跡で出土した「南家」墨書土器があり、郡家の施設を「方位＋家」で表現していたとみられる。

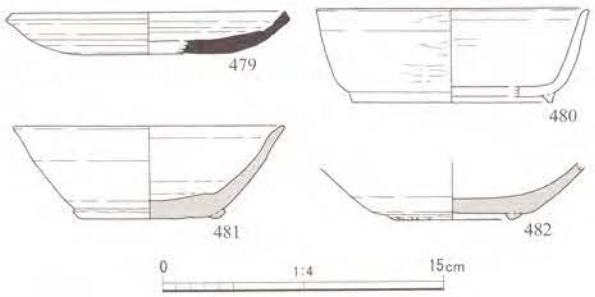


Fig.66　A区包含層出土遺物

「北家」以外で判読できた文字としては、413の「長□□（記号）」や425の「□四」、430の「大」、431の「中」、434の「高野□」、439の「大□」がある。多くは意味を捉え難いものであるが、434の「高野□」は地名または人名の可能性が考えられる。

A区遺構出土遺物　Fig.65-462～478はA区の遺構出土の遺物である。468はSK02出土の土師器有台坏身、469はSK03出土の須恵器壷である。470～472はSD01出土の遺物である。470は須恵器碗であり、底部はヘラ切り未調整である。時期は遠江編年Ⅴ期と考えられる。473～478はSD05出土の遺物である。473は須恵器箱坏であり、底部は周辺部を残してケズリ調整される。

A区包含層出土遺物　Fig.66-479～482はA区の包含層から出土した遺物である。479は須恵器皿であり、480は土師器有台坏身である。この他に馬歯が4点出土している。

（3）鎌倉時代以降の遺物（Fig.56・60・65・66）

236～239はSD06出土の山茶碗である。上層からの混入品と考えられる。236～238が碗、239が小皿である。いずれも12世紀後半～13世紀初頭頃のものと考えられる。351～390はSR01Ⅰ層出土の山茶碗である。351～385は碗、386・387は小碗、388～390は小皿で、12世紀後半～13世紀後半までのものが出土している。391～396は貿易陶磁器である。391は青白磁合子であり、内面と受口部を除く外面体部に施釉される。392は白磁碗であり、大宰府分類Ⅷ類（太宰府市教育委員会2000）のもので、内面底部にのみ施釉され、周囲を環状に釉剥ぎしている。393～396は龍泉窯系青磁碗である。393・394は劃花文碗、395・396は蓮弁文碗である。397・398は渥美窯産の刻花文壷である。いずれも体部上半の破片であり、草花文が篦書きされる。402は銅銭で、北宋銭の元豊通宝（初鋳1078年）である。462～467はSE01出土の遺物である。462～467は山茶碗であり、462～465が碗、466・467が小皿である。いずれも13世紀前半頃の遺物と考えられる。この他、馬歯が1点出土している。471・472はSD01出土の山茶碗であり、13世紀代の年代が考えられる。474～478はSD05から出土した山茶碗である。474が碗で、13世紀前半のものである。475・476は小碗であり、12世紀後半頃のもので、476の高台には籾痕がみられる。477は小皿、478は鉢である。481・482はA区包含層より出土した山茶碗である。

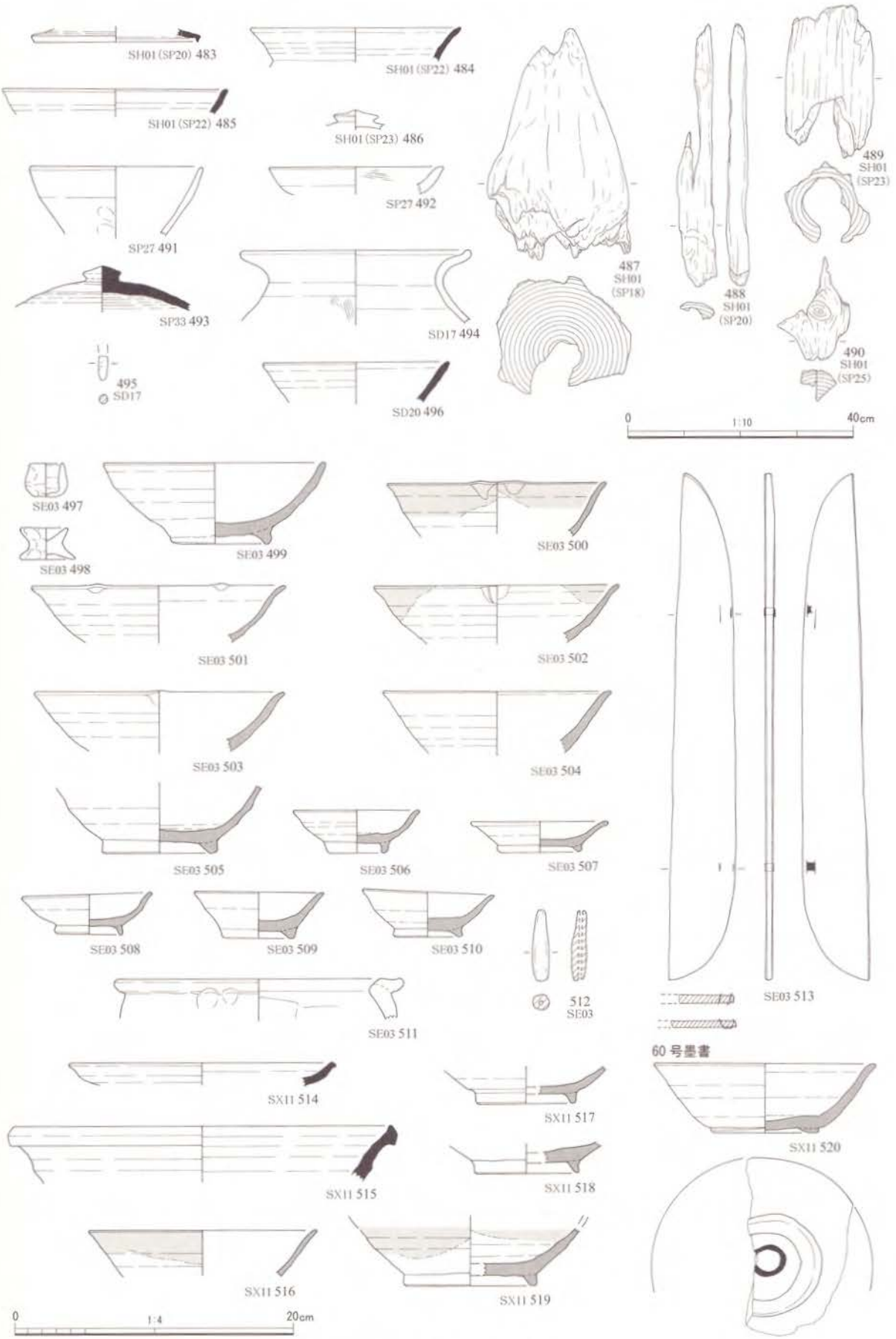


Fig.67　B 区 遺構出土遺物

2　B区の出土遺物

（1）奈良時代～平安時代の遺物（Fig.67・68）

B区遺構出土遺物　483～520はB区の遺構出土遺物である。483～490はSH01出土の遺物である。483はSP20出土の須恵器坏蓋、484・485はSP22出土の須恵器で、484は坏身、485は皿である。486はSP23出土の土師器坏蓋である。487～490は柱痕もしくは礎板である。487がSP18、488がSP20、489がSP23、490がSP25から出土した。491・492はSP27出土の遺物で、491が土師器坏身、492が土師器皿である。493はSP33出土の須恵器坏蓋である。494・495はSD17出土の遺物で、494が土師器甕、495は土製品であるが、どのような器種か不明である。496はSD20出土の須恵器坏身である。497～498はSE03出土の遺物である。497・498は土製品で、497が坏形、498が高坏形であり、下層からの混入品とみられる。511は土師器で、清郷型甕と呼ばれるものである。512は土錘である。514～518はSX 11出土の遺物である。514は須恵器皿、515は須恵器甕である。516～518は灰釉陶器碗であり、黒笹90号窯式～折戸53号窯式のものと考えられる。

B区包含層出土遺物　521～530はB区の包含層から出土した遺物である。521は須恵器壷に付く耳部である。522～525は土師器である。522が坏蓋、523が有台坏身、524・525が坏身である。526は灰釉陶器碗である。

（2）鎌倉時代の遺物（Fig.67・68）

499～513はSE03出土の遺物である。499～510は山茶碗である。499～505が碗、506～510が小碗であり、いずれも12世紀中頃～後半頃の年代が想定される。513は木製品で、曲げ物の底板である。519・520はSX 11出土の遺物である。519・520は山茶碗であり、520の底部には記号と考えられる「○」が墨書される。527～530はB区の包含層から出土した遺物である。527は土師質土器小皿（かわらけ）であり、ロクロ成形で作られ底部には糸切り痕が残る。528・529は山茶碗で、528が碗、529が鉢である。530は砥石である。

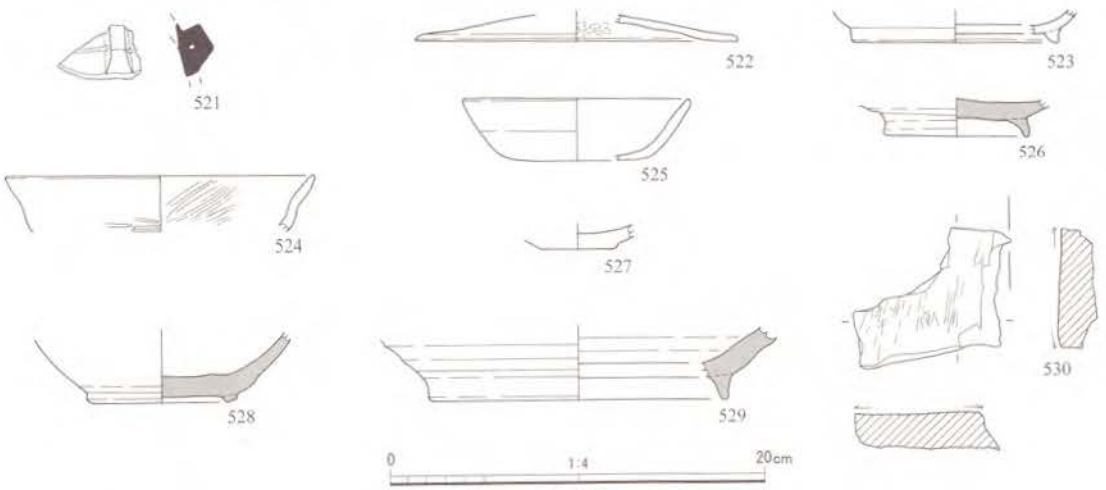


Fig.68　B区包含層出土遺物

3　C区～F区の出土遺物

（1）奈良時代～平安時代の遺物（Fig.69）

531～577は2011年度調査で出土した遺物である。531はC-1区の包含層から出土した土師器坏蓋の摘みで、外面には赤彩が施される。532はF-1区の包含層から出土した灰釉陶器碗である。高台は断面形が三角形であり、10世紀以降の年代が考えられる。533～563はF-2区から出土した遺物である。533～541はSK04出土の遺物である。533～535は須恵器であり、533が坏蓋、534・535が箱坏である。これら須恵器の特徴はおおむね遠江編年Ⅵ-2～Ⅶ-1期の特徴を示す。536～540は土師器で、536が坏身、537～540は甕である。541は土錘である。542はSK05から出土した土師器坏身である。544～548はSK06出土の遺物である。544は土師器坏身、545～548は土師器甕であり、8世紀後半～9世紀初頭の遺物である。549～553はSD26出土の遺物である。549は須恵器甕、550は土錘、551は灰釉陶器碗である。554～563はF-2区の包含層から出土した遺物である。554～559は須恵器で、554が坏蓋、555が有台坏身、556・557が箱坏、558・559が壷である。560・561は土師器甕、563は土錘である。564～577がF-3区から出土した遺物である。564～571はSE05出土の遺物である。その内の564～566は須恵器で、564が坏蓋、565は坏身、566は壷である。567～569は土師器で、567が坏身、568が皿、569が清郷型甕である。572～577はF-3区包含層から出土した遺物である。572～574は須恵器で、572・573が有台坏身、574が盤か皿である。575は土師器坏身、576は灰釉陶器碗である。

（2）鎌倉時代以降の遺物（Fig.69）

543はF-2区SK05から出土した山茶碗である。552・553はSD26出土の遺物である。552は近世陶器の小碗、553は土師質土器である。562はF-2区の包含層から出土した山茶碗である。570・571はSE05出土の山茶碗であり、12世紀中頃～後半の年代が想定される。577はF-3区包含層から出土した山茶碗である。

[参考文献]

赤塚次郎　1990「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第10集

鈴木敏則　2004「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』

鈴木敏則　2005「出土須恵器について」『東若林遺跡』

鈴木敏則　2009「祭祀遺物」『舞阪町天白遺跡』

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財　第49集

浜松市文化協会　1998『梶子北遺跡　遺物編（本文）』

藤沢良祐　1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号　三重県埋蔵文化財センター

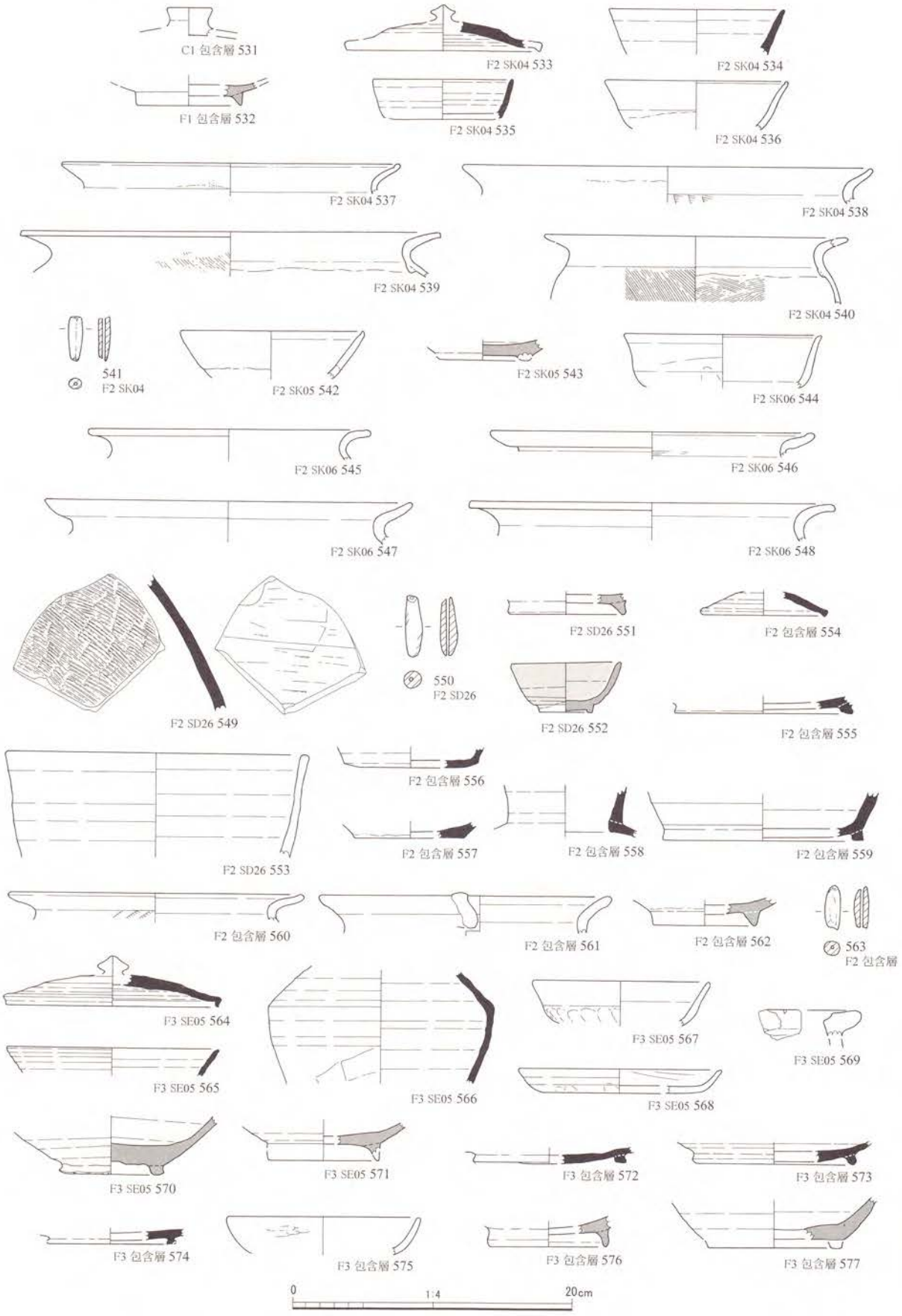


Fig.69　C区～F区　出土遺物

Tab.2　宮竹野際遺跡墨書土器一覧

墨書番号	挿図番号	取上番号	遺構名・層位等	種別	器種	墨書部位	釈文	年代観	実年代	備考
1	403	463	SD06 下層　SX08	土師器	坏身	外底	「□」	V-2～3	8世紀前半	
2	404	204	SD06 中層　SX03	土師器	坏身	外底	「□」	V-3～VI-1	8世紀後半	記号カ
3	405	345・352	SD06 中層　SX06	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI-1	8世紀後半	「北家」カ
4	406	338	SD06 中層　SX06	土師器	坏身	外底	「□□」	VI～VII-1	8世紀後半～9世紀前半	
5	407	287	SD06 中層	須恵器	蓋	内	「□、□」	V-3～VI-1	8世紀後半	
6	408	284	SD06 中層	須恵器	蓋	内	「□」	V-3～VI-1	8世紀後半	
7	409	284	SD06 中層	須恵器	蓋	内	「□」記号	V-3～VI-1	8世紀後半	
8	410	284	SD06 中層	須恵器	有台坏身	外底	「□□」	V-3	8世紀中葉	「北家」カ
9	411	205・284	SD06 中層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
10	412	284	SD06 中層	須恵器	箱坏	外底	「□」記号	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
11	413	310	SD06 中層　SX03	須恵器	皿	外底	「長□□(記号)」	V-3～VI	8世紀後半～9世紀初頭	
12	414	284	SD06 中層	須恵器	皿	外底	「□□」	V-3～VI	8世紀後半～9世紀初頭	
13	415	287	SD06 中層	土師器	蓋	内	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	「家」カ
14	416	284	SD06 中層	土師器	皿	外底	「□□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	「□家」カ
15	417	288	SD06 中層	土師器	坏身	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
16	418	232	SD06 上層　SX02	須恵器	皿	外底	「北□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
17	419	211	SD06 上層　SX02	土師器	蓋	内	「井」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	記号カ
18	420	244	SD06 上層　SX02	須恵器	蓋	内	「北家」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
19	421	280	SD06 上層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	記号カ
20	422	280	SD06 上層	須恵器	箱坏	外底	「北家」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
21	423	280	SD06 上層	須恵器	碗	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
22	424	280	SD06 上層	須恵器	碗	外底	「□□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
23	425	280	SD06 上層	須恵器	皿	外底	「□四」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	「大四」カ
24	426	280	SD06 上層	土師器	蓋	内	「□□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
25	427	280	SD06 上層	土師器	皿	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	記号カ
26	428	195	SD06 上層	須恵器	箱坏	外底	「□、□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	内面墨痕あり
27	429	199	SD06 上層	須恵器	碗 / 皿	内底	「□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
28	430	110	SD06	須恵器	蓋	内	「大」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
29	431	110	SD06	須恵器	蓋	外	「中」	V～VI	8世紀前半～9世紀初頭	
30	432	206	SD06	須恵器	箱坏 / 皿	外底	「□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
31	433	202	SD06	土師器		内底	「□」		不明	墨画カ
32	434	111	SR01 II層	須恵器	蓋	内	「高野□」	V-3～VI-1	8世紀後半	
33	435	508	SR01 II層	須恵器	蓋	内	「□」	V-3～VI-1	8世紀後半	「中」カ
34	436	382	SR01 II層	須恵器	碗	内底	「□」記号	V～VI-1	8世紀初頭～8世紀後半	
35	437	175	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI-1	8世紀後半	
36	438	175	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「北家□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	「北家久」カ
37	439	387	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「大□」	VI-1	8世紀後半	
38	440	382	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI-1	8世紀後半	
39	441	289	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI-1	8世紀後半	記号カ
40	442	289	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	「北家」カ
41	443	508	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI-1	8世紀後半	
42	444	302	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
43	445	304	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	記号カ
44	446	505	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
45	447	383	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
46	448	303	SR01 II層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
47	449	310	SR01 II層	須恵器	盤	外底	「□」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	
48	450	382・383	SR01 II層	須恵器	皿	外底	「北家」	VI	8世紀後半～9世紀初頭	「北家□」カ
49	451	156	SR01 I層	須恵器	蓋	内	「北□」	V～VI	8世紀前半～9世紀初頭	「北家」カ
50	452	43	SR01 I層	須恵器	箱坏	外底	「□□」	V-3～VI-1	8世紀後半	
51	453	102	SR01 I層	須恵器	箱坏	外底	「□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	「□久」カ
52	454	162	SR01 I層	須恵器	皿 / 坏身	外底	「北□」	VI～VII	8世紀後半～9世紀	
53	455	103	SR01 I層	須恵器	箱坏	外底	「北□」	VI-1	8世紀後半	
54	456	287	SR01 I層	灰釉陶器	皿	外側	「□」	VII-2(K90)	9世紀後半	
55	457	289	SR01 I層	灰釉陶器	碗	外底	「井」	VIII-1(O53)	10世紀前半	記号カ
56	458	286	SR01 I層	灰釉陶器	碗	外底	「□」記号	VII-1(K14)	9世紀前半	
57	459	92	SR01 I層	山茶碗	碗	外底	「□」		13世紀後半	記号カ
58	460	89	SR01 I層	山茶碗	碗	外底	「□」記号		13世紀後半	
59	461	125	SR01 I層	山茶碗	小皿	外底	「十」		13世紀前半	
60	520	629	SX11	山茶碗	碗	外底	「□」記号		13世紀後半	

第4章　分　析

汐見　真　白﨑泰子（株）吉田生物研究所

はじめに

今回は、宮竹野際遺跡より出土した木製品の樹種について調査を行なった。

1　試料

試料は浜松市宮竹野際遺跡 B 区 SE03 から出土した曲げ物 1 点、B 区 SH01 から出土した柱痕もしくは礎板 4 点の合計 5 点である。

2　観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3　結果

樹種同定結果（針葉樹 3 種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

（1）イチイ科カヤ属カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）

（遺物 No.2 ～ 4）

（写真 No.2 ～ 4）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。晩材部は狭く年 輪界は比較的不明瞭である。軸方向柔細胞を欠く。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ～ 4 個ある。仮道管の壁には対になった螺旋肥厚が存在する。板目では放射組織はすべて単列であった。カヤは本州（中・南部）、四国、九州に分布する。

（2）ヒノキ科ヒノキ属（*Chamaecyparis* sp.）

（遺物 No.1）

（写真 No.1）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行が急であった。樹脂細胞は晩材部に偏在している。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で 1 分野に 1 ～ 2 個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。ヒノキ属はヒノキ、サワラがあり、本州 (福島以南)、四国、九州に分布する。

（3）ヒノキ科アスナロ属（*Thujopsis* sp.）

（遺物 No.5）

（写真 No.5）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2～4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

4　結論

今回の樹種同定の結果、SH01より出土した4点の木製品のうち、SP18出土の487（No.2）、SP20出土の488（No.3）、SP23出土の489（No.4）はカヤであり、SP25より出土した490（No.5）はヒノキ科アスナロ属であった。よって、SH01においては、異なる2種類の樹種を用いて建物が作られたと考えられる。また、出土状態を加味すると、SP20出土の488（No.3）は礎板の可能性がある。

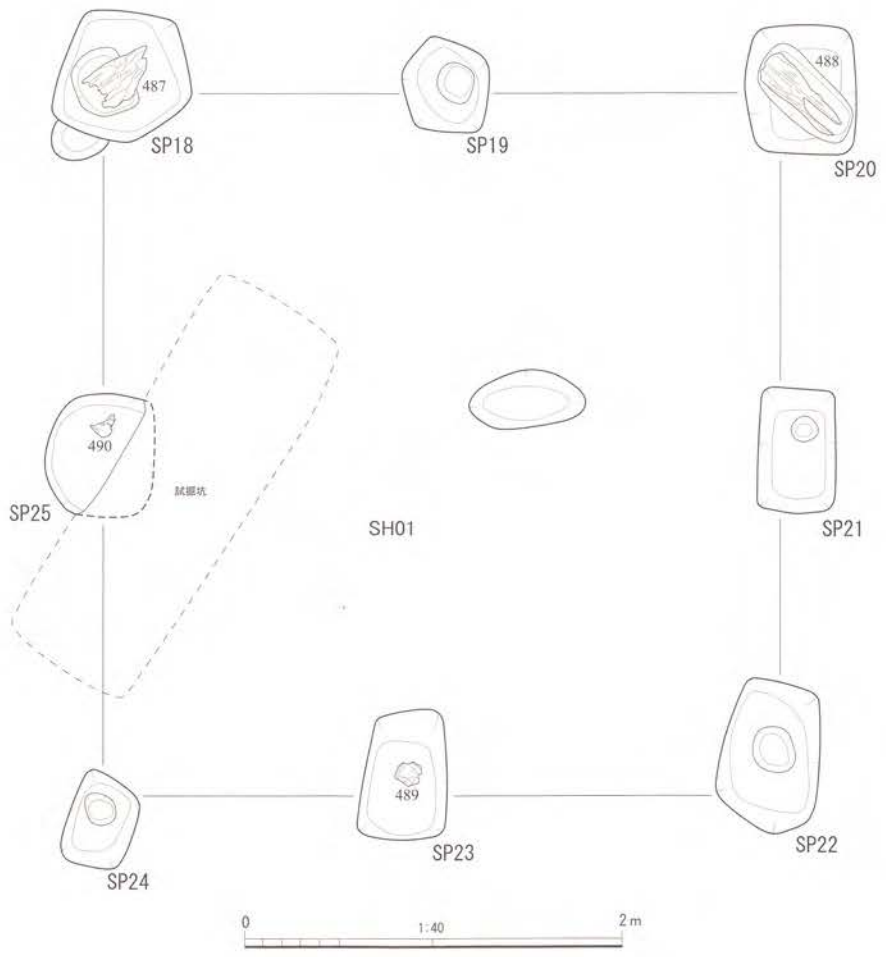


Fig.70　B区 SH01

Tab.3 宮竹野際遺跡出土木製品同定表

No.	遺構名	遺物番号	品名	樹種
1	SE03	513	曲げ物	ヒノキ科ヒノキ属
2	SH01-SP18	487	柱痕	イチイ科カヤ属カヤ
3	SH01-SP20	488	礎板	イチイ科カヤ属カヤ
4	SH01-SP23	489	柱痕	イチイ科カヤ属カヤ
5	SH01-SP25	490	柱痕	ヒノキ科アスナロ属

[参考文献]

島地 謙・伊東隆夫 1988『日本の遺跡出土木製品総覧』雄山閣出版

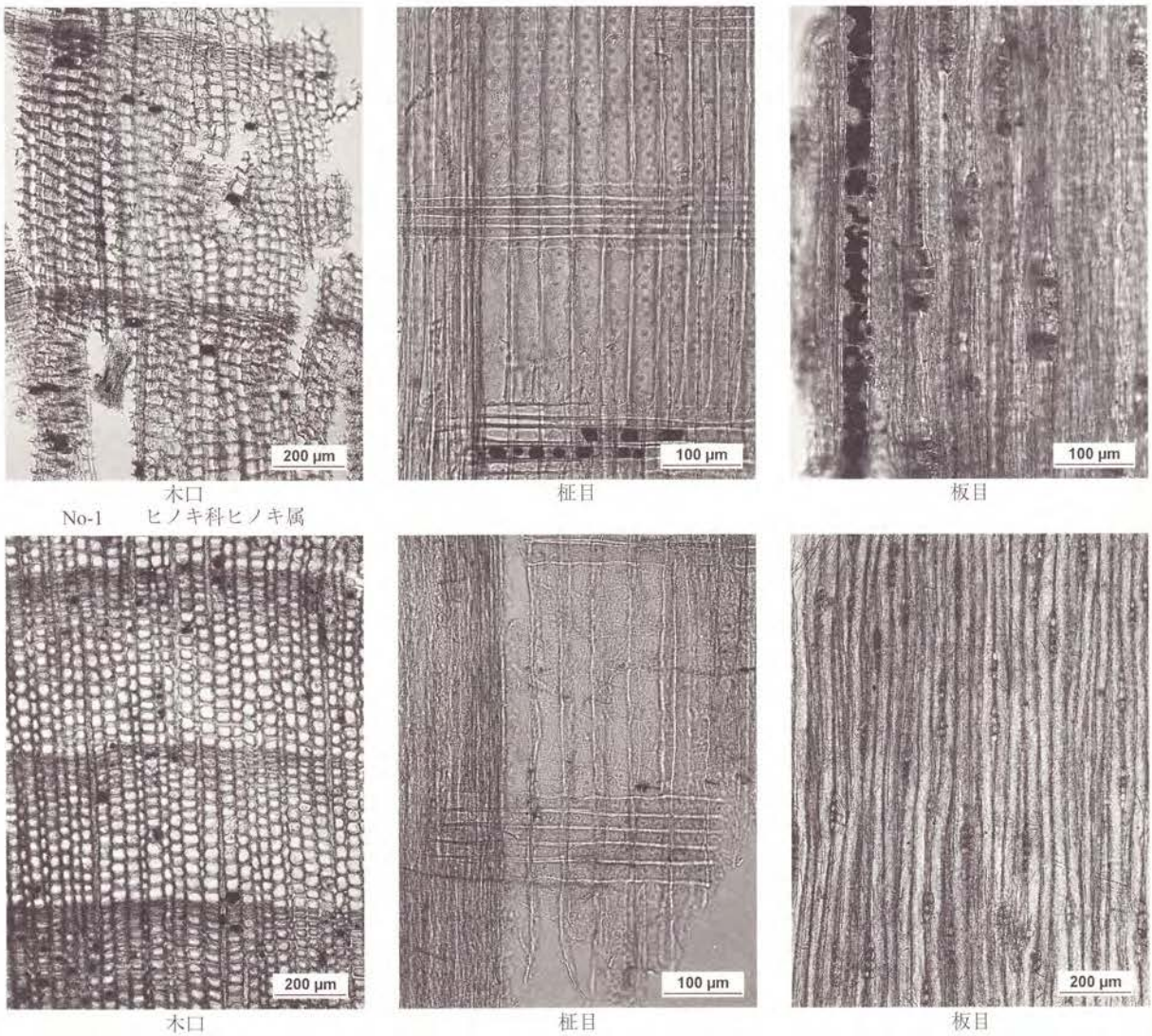
伊東隆夫 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ』京都大学木質科学研究所

北村四郎・村田 源 1979『原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ』保育社

奈良国立文化財研究所 1985『奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇』

奈良国立文化財研究所 1993『奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇』

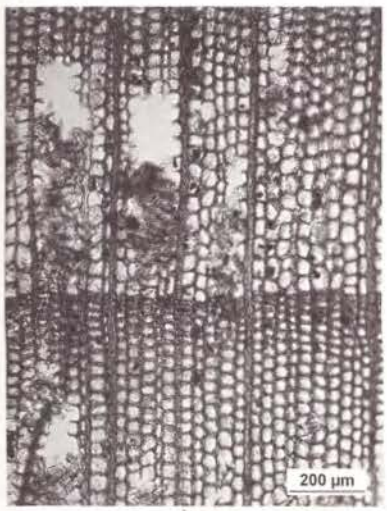
[使用顕微鏡]



No-1 ヒノキ科ヒノキ属　木口　柾目　板目

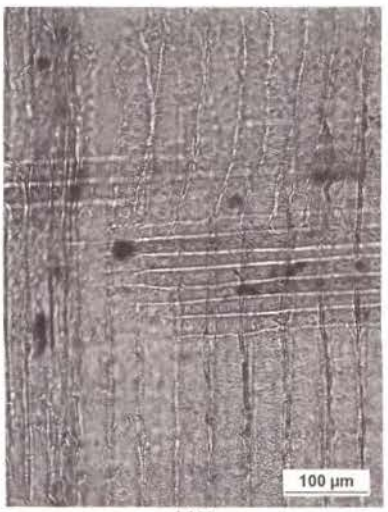
No-2 イチイ科カヤ属カヤ　木口　柾目　板目

Fig.71 顕微鏡写真（1）

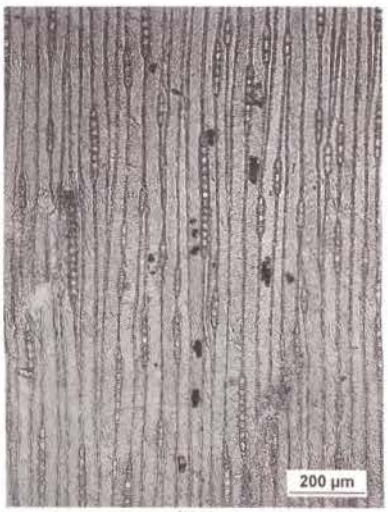


木口

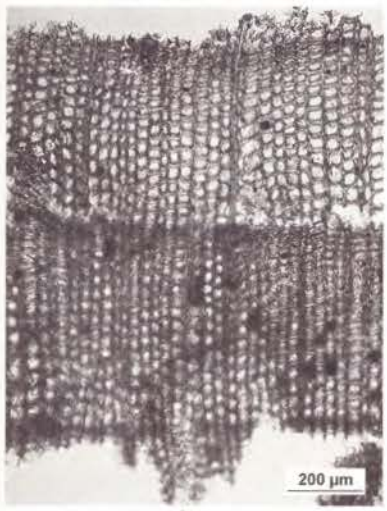
No-3　イチイ科カヤ属カヤ



柾目



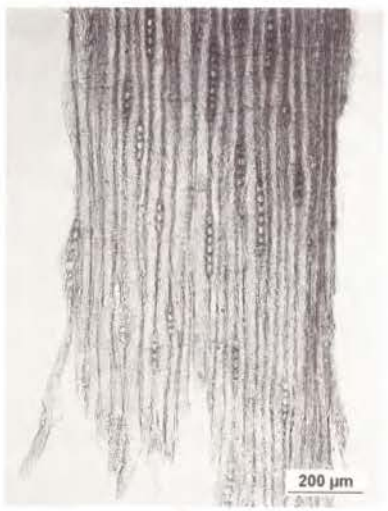
板目



木口

No-4　イチイ科カヤ属カヤ

柾目

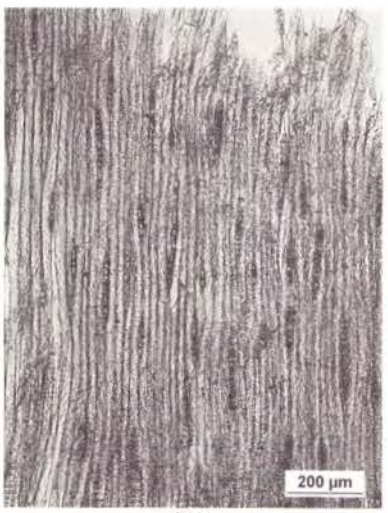


板目

木口

No-5　ヒノキ科アスナロ属

柾目



板目

Fig.72　顕微鏡写真（2）

第5章　後　論

1　西遠江における陶硯の様相と地方官衙

（1）はじめに

陶硯は古代の文房具であり、文字を書く際には欠かせない道具の一つである。また、文字の使用が限定的であった時代には、一部の人たちだけが保有していた道具であるため、使用されていた場所が限定される遺物でもある。そのため、古代においては、律令制の開始による文書行政の導入と関連して、陶硯が出土する遺跡は、当時の行政機関である国府や郡家などの官衙遺跡と考えられる。

今回実施した宮竹野際遺跡6次調査では5点の陶硯が出土しており、これまでの調査分と併せて計12点の陶硯が当遺跡では出土している。この数は西遠江では、吉美中村遺跡や井通遺跡に次ぐ数量であり、当該地域での出土数としては突出して多い。さらに、宮竹野際遺跡では「北家」と墨書される土器が出土しており、郡家に付属する施設での陶硯の使用実態を知るうえで注目される。そこで本稿では、西遠江における陶硯の様相を各型式の消長や出土遺跡の分布の特徴から検討し、宮竹野際遺跡出土陶硯をその中で位置づける。さらに、宮竹野際遺跡の性格についても地方官衙との関係から考察したいと思う。なお、本稿でいう西遠江とは主に天竜川西岸地域の遠江国の範囲を指すものである。

（2）西遠江出土陶硯の分類と変遷

まず、西遠江で出土した陶硯を分類し、共伴遺物や他地域での出土状況から各型式の年代を推定し、その消長を検討する。陶硯の分類については多くの先行研究があるが、今回は平城京出土陶硯の分類（奈文研2006・2007）と横田氏・杉本氏の分類（横田1983、杉本1987）を参考とした。そのため、分類について詳述しないが、圏足硯については細分したので、その点については詳述する。

分　類　西遠江で出土した陶硯には、円面硯（圏足硯・蹄脚硯・獣脚硯・低脚硯・無脚硯・中空硯）や形象硯（亀形硯・宝珠硯）、高坏形硯、風字硯がある。円面硯の内、圏足硯は脚部の透かしにより細分し、脚部の透かしが細い長方形で、数が多いものを圏足硯a、脚部の透かしが方形や円形、またはそれらを組合せたもので、数が少ないものを圏足硯b、透かしと透かしの間に線刻を施すか、または透かしがなく線刻のみのものを圏足硯cとした。これら圏足硯は分類ごとに形態や大きさも異なり、透かしの形態が器形にも反映されている。

圏足硯a　（Fig.73-1～17）　圏足硯aは西遠江で17点出土している。硯面は、平坦で陸部と海部を凸帯により分けるものと分けないもの、陸部と海部を段差により区別するものがある。脚部形態は壺・甕類の口縁部と共通する。その出現時期は、7世紀後半～8世紀前半頃の遺物と共伴する1・2の時期と考えられる。さらに、9世紀以降の確実な事例はないため、8世紀代で生産・使用が終わる型式と捉えられる。そのことから、宮竹野際遺跡出土の4は、9世紀以降の層位から出土しているが、8世紀代の遺物と想定され、さらに、愛知県黒笹3号窯跡に類例があるため（小幡

2005)、8世紀後半頃の時期と考えられる。

圏足硯b　(Fig.73-18～35)　圏足硯bは西遠江で18点出土している。硯面は、陸部と海部を段差により区別するもので、その境界に凸帯を付すものが多い。脚部形態は脚付き器種の脚部や大型平瓶・鉢などの口縁部と共通するものが多い。出現時期は、他地域の状況から7世紀と考えられる。西遠江では7世紀代の資料と共伴する事例はみられないが、18・22は形態的特徴から7世紀代の遺物とみてよいだろう。さらに、この型式は8世紀後半以降の遺物と共伴する事例がみられないため、8世紀後半に生産・使用が終わると考えられる。そのため、宮竹野際遺跡で出土した35は8世紀中頃～後半にかけての層位から出土したことを考慮すると、8世紀中頃の資料と推測される。

圏足硯c　(Fig.74-36～46)　圏足硯cは西遠江で11点出土している。硯面はいずれも陸部と海部を段差により区別するものである。脚部形態は鋺形の口縁部と共通するものが多いが、吉名窯出土の44は同窯から出土する壷類の口縁部と同じである。この型式の出現は、36が8世紀中頃と考えられる他は8世紀後半以降の遺物と共伴する事例が多く、生産地においても8世紀後半の窯跡から出土しているため、8世紀後半頃と想定される。また、他の圏足硯と異なり9世紀以降も使用が確認でき、隣国の三河国でも同様の傾向がみられる(小幡2005)。さらに、生産地の吉名窯や二川窯で確認できることから、10世紀以降も生産している可能性があり、圏足硯a・bの衰退後も継続して生産・使用されていたことがうかがえる。加えて、この型式は東日本で広く出土しており(田中2004・2005・2011)、その出現に東国からの影響が少なからず想定される。また、圏足硯bと形態や大きさが類似し、その衰退と入れ替わる形で出現することから、西遠江では圏足硯bを祖形とした型式と捉えることも可能である。

蹄脚硯　(Fig.74-47～49)　蹄脚硯は西遠江で3点出土している。いずれも、都城で出土する典型的な蹄脚硯ではなく、47・48は圏足硯aの脚上部に粘土を貼り付けたものである。その出現時期は、平城宮で硯部と脚部を一体で作る蹄脚硯が8世紀中頃に出現していることから(奈文研2006)、8世紀中頃以降と考えられる。

把手付中空硯　(Fig.74-51～55)　把手付中空硯は西遠江で5点出土している。この型式は7世紀代に特徴的にみられるものであるが(杉本1987、田中2004)、西遠江では、出土状況から7世紀末～8世紀初頭頃に使用が開始され、8世紀前半～中頃には使用されなくなると考えられる。

低脚硯・無脚硯・獣脚硯　(Fig.74)　低脚硯(56・57)・無脚硯(58・59)・獣脚硯(60・61)はそれぞれ2点ずつ出土している。これらの陶硯は、56が7世紀代の可能性がある他は、他地域の状況を参考にすると、8世紀代の陶硯とみられる。

風字硯　(Fig.75-72～85)　風字硯は西遠江で14点出土している。出土した多くは硯面を縦に二分する2面硯であるが、1点だけ硯面を分割しない風字硯(79)もある。その出現時期は、8世紀末～9世紀初頭の遺物と共伴する72の時期と考えられる。また、10～11世紀の灰釉陶器窯からも出土していることから、比較的長い期間生産され続けていたことがわかる。さらには、山茶碗窯の皿山窯跡群からも出土しているため(菊川市教委2006)、12世紀に入っても需要があったことがうかがえる。

小　結　以上の検討から、西遠江では陶硯の様相が8世紀初頭と9世紀初頭に変化することがみ

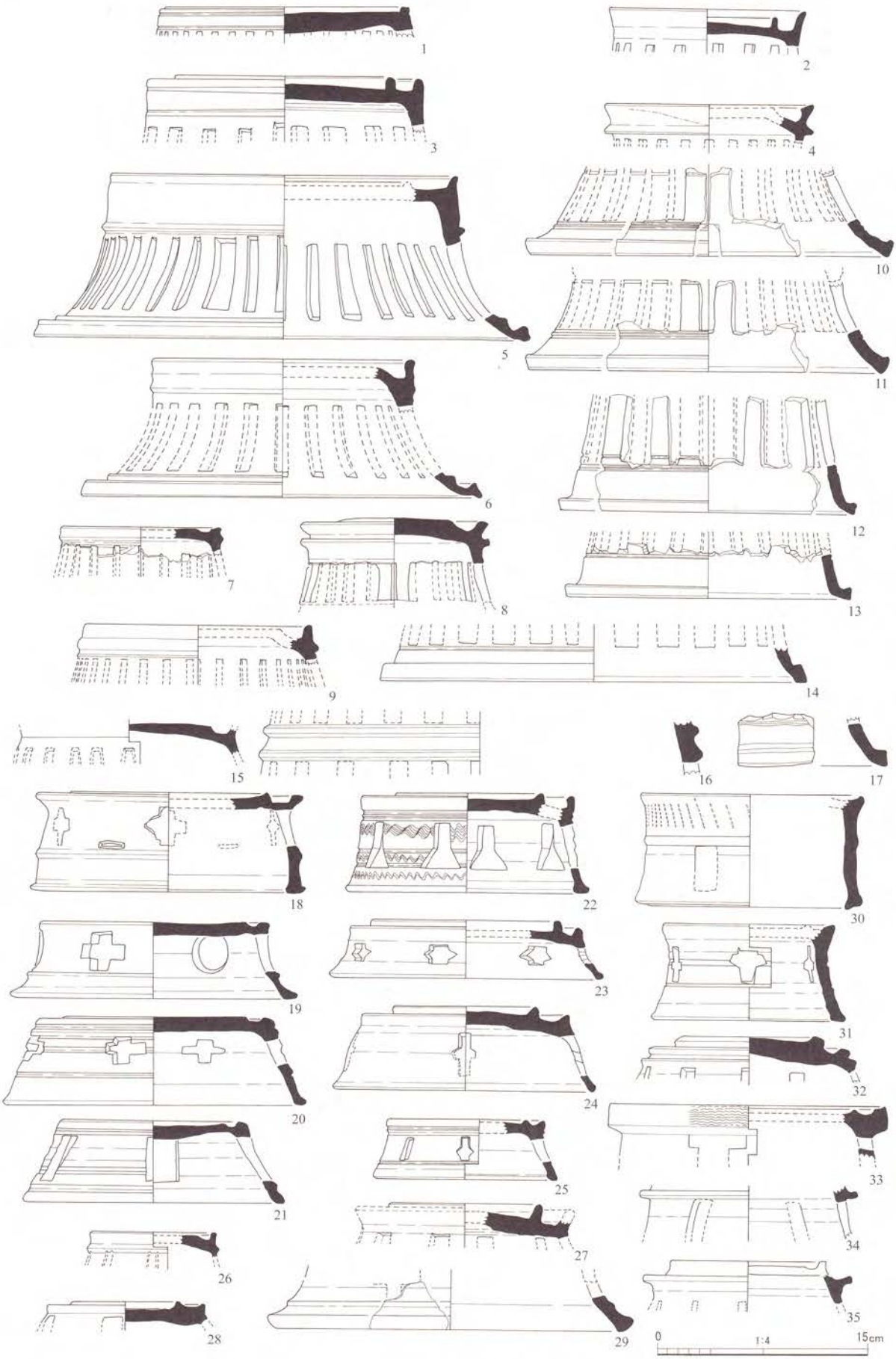
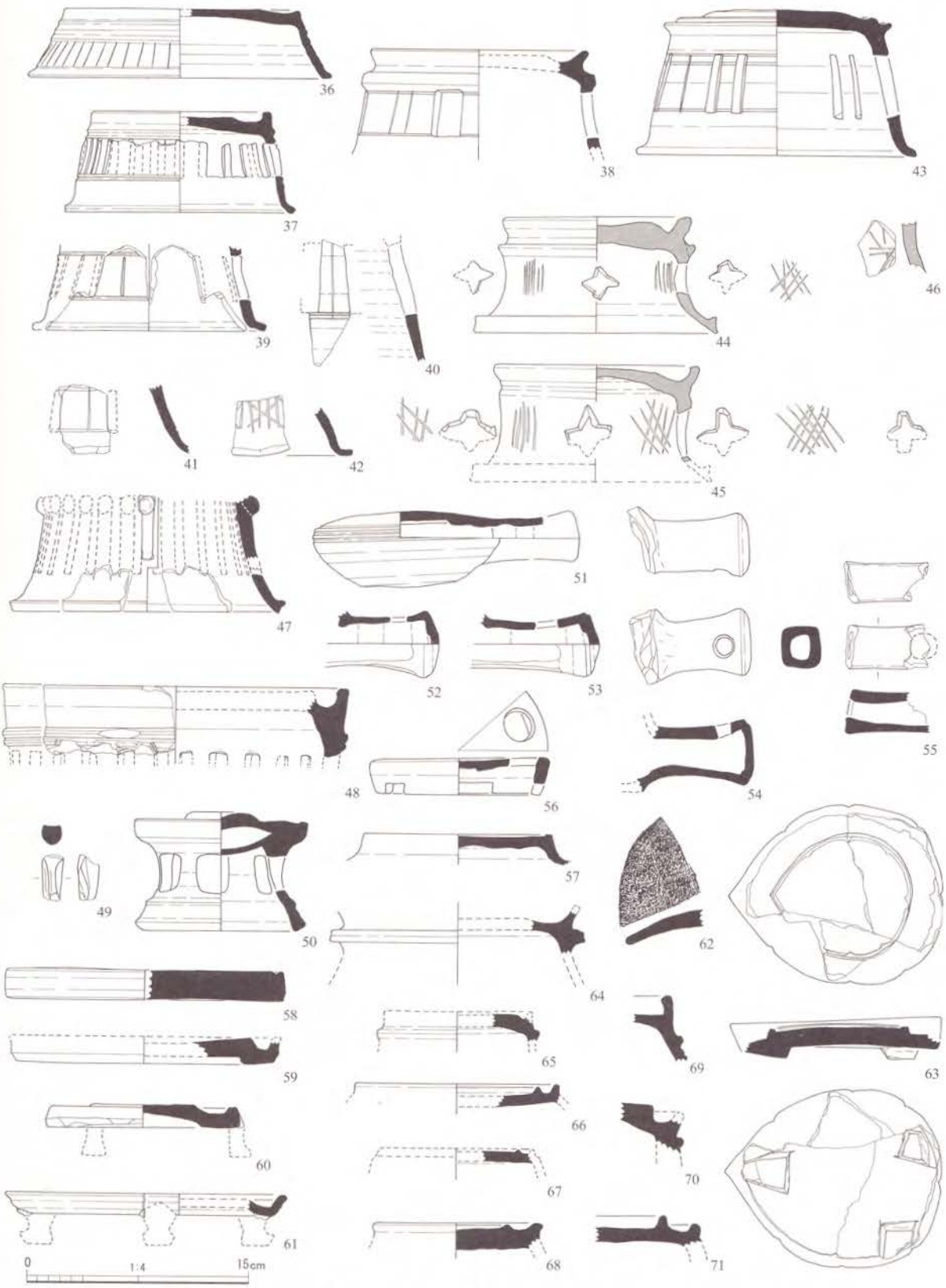


Fig.73　西遠江出土陶硯（1）



1·2·19 ～ 23·28·51 ～ 53·56·62·69 ～ 71: 吉美中村　3·25·36·67: 城山　4·14·17·35·40·42·48・49·59·64: 宮竹野際
5 ～ 8·10 ～ 13·24·37·39·47·54·61·63·66: 井通　9: 社口　15·26·34·41: 笠井若林　16: 中村　18: 湖西運動公園内
27: 伊場　29: 梶子　30: 大沢　31: 谷上 2 地点　32: 一ノ宮事業場　33: 中田北　38: 横枕Ⅱ　43: 東笠子 43 地点
44 ～ 46: 吉名 1 号　50: 殿田 4 地点　55: 鳥居松　57: 梶子北　58·60: 森西　65: 矢畑　68: 中屋

Fig.74　西遠江出土陶硯（2）

72: 祝田　73・74: 宮竹野際　75: 井通　76: 伊場　77: 笠井若林
78: 中屋　79: 大知波峠　80・81: 東笠子 24 地点　82: 吉名 1 号
83・84: 大屋敷 1 号　85: 大屋敷 1・2 号

陶硯分類

1 ～ 17: 圏足硯 a　18 ～ 35: 圏足硯 b　36 ～ 46: 圏足硯 c　47 ～ 49: 蹄脚硯
50: 高坏形硯　51 ～ 55: 把手付中空硯　56・57: 低脚硯　58・59: 無脚硯
60・61: 獣脚硯　62・63: 形象硯　64 ～ 71: 円面硯　72 ～ 85: 風字硯

Fig.75　西遠江出土陶硯（3）

いだせる。8世紀初頭は、大宝令の施行により全国的に郡家が成立する時期であり、官衙の整備に伴い西遠江では陶硯が普及したと想定され、それにより陶硯の様相も一変するとみられる。また、9世紀初頭は平安京に遷都して間もない時期であり、それに伴う生産体制変化の影響が陶硯にも及んだ可能性が考えられる。

（3）西遠江出土陶硯の分布と特徴

続いて、陶硯が出土した遺跡の分布傾向や出土数などから、陶硯出土遺跡の特徴について検討する。なお、律令期にみられる特徴的な遺物の獣脚付壺（Fig.78）についても陶硯の分布と関連させて検討する。獣脚付壺（以下、本稿では獣足とする）は、短頸壺などの底部付近に獣の足を模した脚部を複数付けるもので、多くは3ヵ所に付けられる。ただし、獣の足を模した脚部は陶硯に付けられる場合もあり、本来は両者を区別しなければいけないが、獣脚硯は出土数が少ないため、ここでは区別せずに検討する。

陶硯出土遺跡の分布　西遠江で陶硯が出土した遺跡は27遺跡あり（Fig.76、Tab.4）、およそ80の陶硯が出土している。陶硯出土遺跡は各郡に分布し、一定の範囲内に集中する傾向がみられる。郡内における分布を詳細にみていくと、遺跡が密集する場合と分散する場合の二つの傾向がみられる。このような傾向が現れる背景として、個々の遺跡の多くが郡家に関連する遺跡である点を考慮すると、郡家の施設や出先機関の存在が分布傾向に現れている可能性が考えられる。また、遺跡の分布傾向と陶硯の出土数の関連性については、遺跡が分散する中にある井通遺跡で陶硯の出土数が多いのに対して、遺跡が集中する伊場遺跡群内では陶硯の出土が少ない特徴がある。井通遺跡は出先機関（郡津）、伊場遺跡群は郡家の中枢域であり、西遠江では陶硯が郡家の中心施設よりもその出先

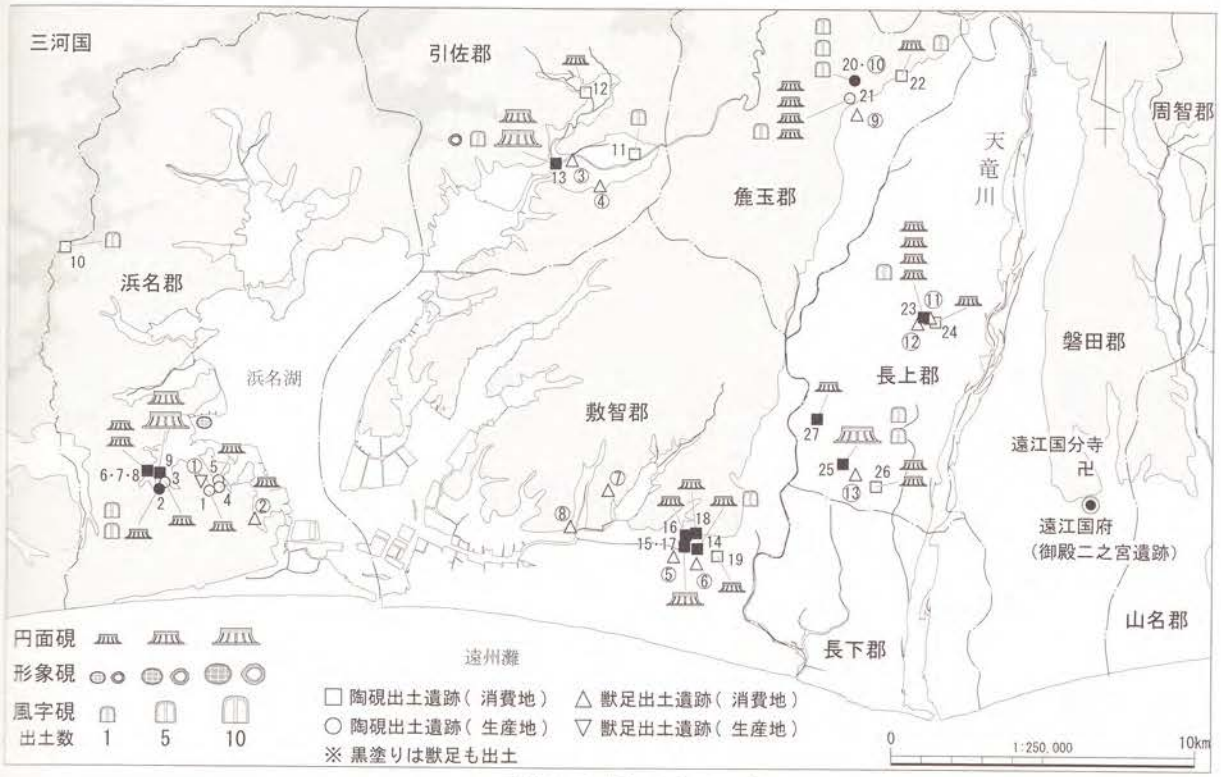


Fig.76　西遠江陶硯出土遺跡分布図

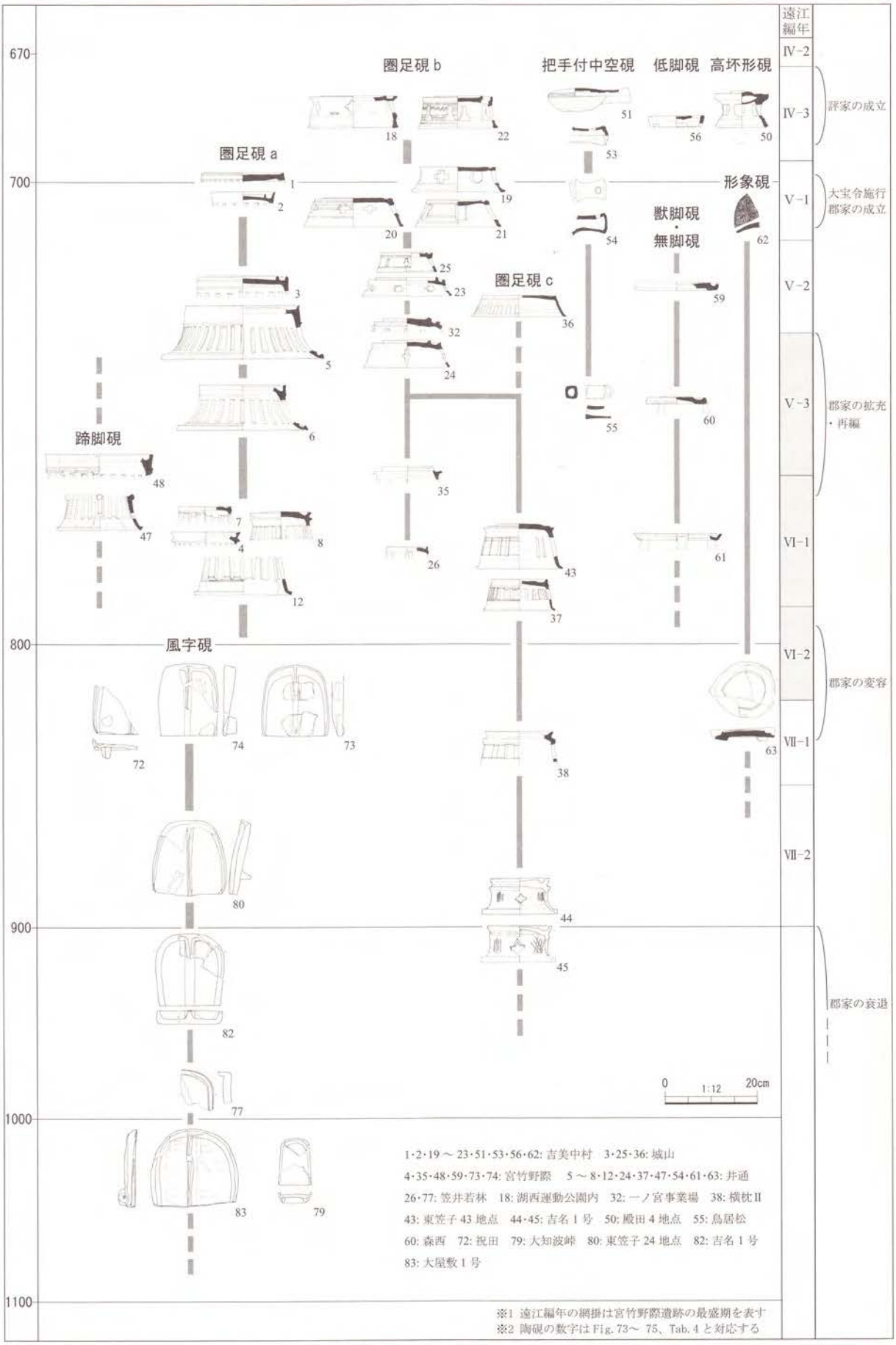


Fig.77　西遠江陶硯変遷図

Tab.4　西遠江陶硯出土遺跡一覧

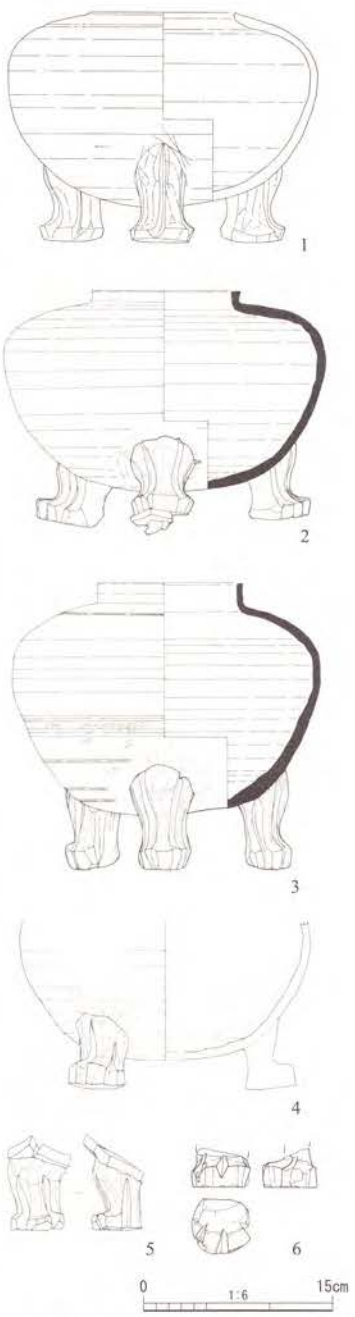
番号	遺跡名		郡名	遺跡の性格	図版	遺構・層位	種類	分類	転用硯	年代観	獣足	文献
1	大沢		浜	須恵器窯	30	灰原	円	圏足硯 b		Ⅳ-1～Ⅴ-3		1
2	東笠子 24 地点		浜	須恵器窯	80	灰原	風	2 面		Ⅶ-2		2
					81	灰原	風	2 面		Ⅶ-2		
	東笠子 43 地点		浜	須恵器窯	43	Ⅰ号窯前庭部	円	圏足硯 c		Ⅵ-1	1	3
3	一ノ宮事業場		浜	須恵器窯	32	流出層	円	圏足硯 b		Ⅴ-2～ 3		3
4	殿田4 地点		浜	須恵器窯	50	灰原	高			Ⅳ-1		3
5	谷上2 地点		浜	須恵器窯	31	Ⅱ号灰原	円	圏足硯 b		Ⅴ-1?		30
6	横枕Ⅰ		浜	不明	図無		円		不明			30
7	横枕Ⅱ		浜	郡家関連か	38		円	圏足硯 c	不明		1	31
8	湖西運動公園内		浜	不明	18	表採	円	圏足硯 b	不明	Ⅳ?		4
9	吉美中村		浜	集散地	1	包含層4 層	円	圏足硯 a	0	Ⅳ-2～Ⅴ-3	3	5
					2	包含層1 層	円	圏足硯 a		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					19	包含層 2, 4 層	円	圏足硯 b		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					20	包含層4 層	円	圏足硯 b		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					22	包含層4 層	円	圏足硯 b		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					28	包含層4 層	円	圏足硯 b		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					51	包含層1 層	円	把手付中空硯		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					52	包含層4 層	円	把手付中空硯		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					53	包含層4 層	円	把手付中空硯		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					56	包含層4 層	円	低脚硯		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					62	包含層3 層	形	亀形硯		Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					69	包含層3 層	円			Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					70	包含層2 層	円			Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					71	包含層4 層	円			Ⅳ-2～Ⅴ-3		
					21		円	圏足硯 b	不明			30
					23		円	圏足硯 b				
10	大知波峠		浜	寺院	79	下段池跡	風	1 面	0	百代寺		6
11	祝田		引	集落	72	SD40	風	2 面	1	Ⅵ-1～ 2		7
12	矢畑		引	郡家関連か	65	包含層	円		2			8
13	井通		引	郡家関連	6	SX10	円	圏足硯 a	0	Ⅴ-3	1	9
					66	包含層	円					
					5	大溝中層Ⅱ区	円	圏足硯 a	112 (76)	Ⅴ-2～ 3	15	10
					10	大溝中層Ⅱ区	円	圏足硯 a		Ⅴ-2～ 3		
					24	大溝中層Ⅱ区	円	圏足硯 b		Ⅴ-2～ 3		
					37	大溝中層Ⅲ区	円	圏足硯 c		Ⅵ-1～ 2		
					8	大溝中層Ⅳ区	円	圏足硯 a		Ⅵ-1		
					12	大溝中層Ⅳ区	円	圏足硯 a		Ⅵ-1		
					13	大溝Ⅳ区	円	圏足硯 a				
					7	SD3004 上層	円	圏足硯 a		Ⅵ-1		
					61	SD3004 下層	円	獣脚硯		Ⅵ-1		
					54	SD3010	円	把手付中空硯		Ⅴ-1		
					47	SP3007	円	蹄脚硯		Ⅴ～Ⅵ		
					63	SK2015	形	宝珠硯		Ⅵ-2～Ⅶ-1		
					11	包含層	円	圏足硯 a				
					39	包含層	円	圏足硯 c				
					75	包含層	風	2 面		Ⅶ以降		
14	伊場	伊場遺跡群	敷	郡家関連	76	大溝Ⅳ層	風	2 面	141	Ⅶ以降	1	11
					27	大溝Ⅴ層	円	圏足硯 b	(4)	Ⅴ		
15	城山		敷	郡家関連	3	整地層南縁Ⅳ層	円	圏足硯 a	15	Ⅴ-2～ 3	1	12
					36	整地層南縁Ⅳ層	円	圏足硯 c		Ⅴ-2～ 3		
					25	包含層	円	圏足硯 b	1	Ⅴ～Ⅵ		13
					67	包含層	円			Ⅴ～Ⅵ		
16	梶子北		敷	郡家関連	57	旧河道Ⅳ層	円	低脚硯	2	Ⅴ以降	2	14
17	梶子		敷	郡家関連	29	砂丘包含層	円	圏足硯 b	2(1)		2	15
18	中村		敷	郡家関連	16	包含層	円	圏足硯 a?	4		2	16
19	鳥居松		敷	郡家関連	55	大溝Ⅴ層	円	把手付中空硯	9(1)	Ⅴ		17
20	大屋敷1 号		龍	灰釉陶器窯	83	灰原	風	2 面		百代寺		18
					84	灰原	風			百代寺		
	大屋敷 1･2 号		龍	灰釉陶器窯	85	表採	風					18･19
21	吉名1 号		龍	灰釉陶器窯	44	灰原	円	圏足硯 c		K90～ 053		19･20
					45	灰原	円	圏足硯 c		K90～ 053		
					46	灰原	円	圏足硯 c		K90～ 053		
					82	灰原	風	2 面		K90～ 053		
	吉名6 号		龍	灰釉陶器窯	図無		円			K14～ 053		19･21
22	中屋		龍	集落	68	SD1001 上層	円					22
					78	撹乱	風	2 面				
23	笠井若林	笠井遺跡群	長？	郡家関連か	26	SD243	円	圏足硯 b		Ⅵ	1	23
					41	SB206	円	圏足硯 c		Ⅵ-2		
					34	遺構外	円	圏足硯 b	0			
					15	遺構外	円	圏足硯 a				
					77	SD296	風		0	H72		24
24	社口		長？	郡家関連か	9	包含層	円	圏足硯 a	0	Ⅴ～Ⅵ		25
25	宮竹野際	永田遺跡群	長	郡家関連	40	SP15	円	圏足硯 c	1(1)			26
					74	SR01	風	2 面	8(4)	Ⅵ-2～Ⅶ-1	2	27
					14	古代水田	円	圏足硯 a		Ⅴ-1～Ⅵ-1		
					17	古代水田	円	圏足硯 a?		Ⅴ-1～Ⅵ-1		
					49	古代水田	円	蹄脚硯？		Ⅴ-1～Ⅵ-1		
					42	古代水田	円	圏足硯 c		Ⅶ以降		
					64	古代水田	円			Ⅴ-1～Ⅵ-1		
					35	SD06 中層	円	圏足硯 b?	6(1)	Ⅴ-3～Ⅵ-1	1	本書
					4	SR01 Ⅰ層	円	圏足硯 a		Ⅵ以降		
					48	SR01 Ⅰ層	円	蹄脚硯		Ⅵ以降		
					59	SR01 Ⅰ層	円	無脚硯		Ⅵ以降		
					73	SR01 Ⅰ層	風	2 面		Ⅵ以降		
26	森西		長	郡家関連か	58	試掘	円	無脚硯	2			28
					60	包含層	円	獣脚硯		Ⅴ～Ⅶ		
27	中田北		長	集落	33	包含層Ⅳa 層	円	圏足硯 b	0		1	29

※1 番号の数字は、Fig. 76 に対応する
※2 郡名 浜：浜名、引：引佐、敷：敷智
　　龍：龍玉、長：長上
※3 図版の数字は、Fig. 73～ 75・77 に対応する
※4 種類 円：円面硯、風：風字硯、形：形象硯、高：高坏形硯
※5 転用硯の（ ）内は、朱が付着するものの数である
※6 獣足は、獣足の数である

Tab.5　西遠江獣足出土遺跡一覧

番号	遺跡名	郡名	遺跡の性格	獣足	文献
①	古見 16 地点	浜	須恵器窯	3	32
②	梶ヶ谷Ⅳ	浜	集落	1	33
③	川久保船渡	引	集落	2	34
④	岡の平	引	集落	1	35
⑤	村西	敷	集落	1	36
⑥	東若林	敷	集落	1	37
⑦	村前山東	敷	集落	1	38
⑧	角江	敷	集落	1	39
⑨	清水	龍	郡家関連か	1	19
⑩	大屋敷5 号	龍	灰釉陶器窯	1	19
⑪	恒武東覚	長？	郡家関連か	2	40
⑫	山の花	長？	郡家関連か	1	41
⑬	山の神	長	郡家関連か	2	42

※1 陶硯出土遺跡は除く
※2 郡名 浜：浜名、引：引佐、敷：敷智
　　龍：龍玉、長：長上
※3 獣足は、獣足の数である



1 梶子遺跡　2・3 井通遺跡　4 川久保船渡遺跡
5 東笠子 43 地点窯跡　6 宮竹野際遺跡

Fig.78　西遠江出土獣脚付壷

機関で多く用いられた可能性が考えられる。加えて、生産地を除く陶硯出土遺跡では転用硯も出土する例が多く、多数の人間が文書行政のため文字を書いていた状況がうかがえる。しかし、すべての遺跡で転用硯が出土するわけではないため、その場合には象徴としての側面も考慮すべきかもしれない（田中 2004）。ただし、西遠江では大きさや希少性などの観点からは象徴的側面はみられず、むしろ遺跡の性格と保有状況をみていくと、文字の使用と無縁ではないことがうかがい知れる。

大知波峠廃寺と中屋遺跡は古代後半～中世の寺院、祝田遺跡は荘園（祝田御厨）に関わる集落であり、識字層の存在が想定される。出土した陶硯はいずれも風字硯であるため、陶硯の年代と識字層の存在が想定される年代とは矛盾せず、陶硯の出土を文字の使用と関係づけて考えても差支えないだろう。また、中屋遺跡は中田北遺跡と同様に 7 ～ 8 世紀に盛行する集落でもあり、ともに円面硯が出土している。両遺跡とも郡家に関連する遺跡とは考えにくいが、遺構や遺物からは一般集落と一線を画していることがうかがえる。そのため、律令制社会で文字を使用する状況を考慮すると、貢納に関わる文書や荷札の作成が郷（里）段階で行われていた可能性を示唆する事例と評価できるのではないだろうか。この点については、荷札木簡の分析から郷における荷札木簡の作成に批判的な見解がだされている（樋口 2003）。そのため、現時点では判断しかねるが、上記のような事例に注目することで、考古学的側面から地方の末端行政の実態について明らかにする手掛かりになると考えられる。

獣足出土遺跡の分布　ここまで陶硯の出土傾向について検討してきたが、続いては獣足の分布と陶硯の関係について検討する。

西遠江では 24 遺跡で獣足が出土し（Fig.76、Tab.4・5）、その内の 11 遺跡では陶硯も出土している。獣足出土遺跡の分布は陶硯出土遺跡やその周辺に多く、それらの遺跡から遠く離れて出土することが少ないため、分布傾向は陶硯と類似する（大野 2006）。また、獣足のみが出土する遺跡についてみていくと、集落遺跡で出土する割合も高く、郡家での使用に限定されないことも指摘できる。そのため、分布傾向と併せて考えると郡家に勤務する階層に保有されていたことが推測される。そして、獣脚付壺は、形態的特徴が火舎などの金属製品と類似するため、金属器の代わりとして使用された可能性も考慮される。しかし、遠江の古代寺院において、これまでの調査では、獣足の出土が皆無である点を考慮すると（静岡県教委 2003）、仏教関連遺物とするよりは官衙関連遺物と捉えるほうが現状では妥当と考える。

（4）宮竹野際遺跡の陶硯と地方官衙

ここでは、宮竹野際遺跡出土の陶硯について郡家との関連から検討し、地方官衙における陶硯の実態について触れる。

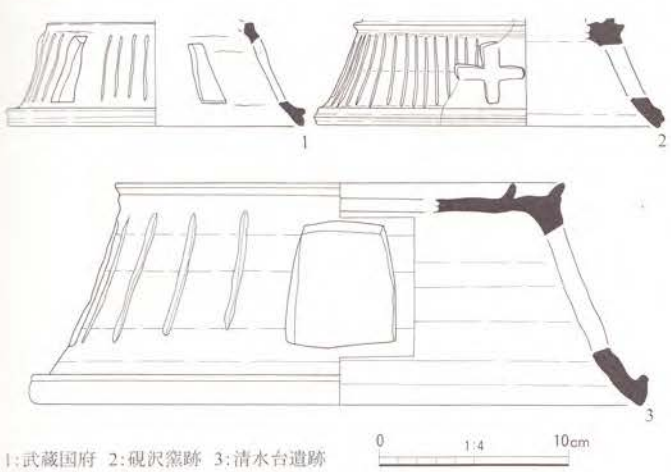
宮竹野際遺跡の概要　ここまでの検討を基に宮竹野際遺跡の陶硯についてまとめると、出土した陶硯は共伴する遺物から 8 世紀以降のものであり、7 世紀に遡る陶硯は出土していない。また、確実な圏足硯 b や把手付中空硯を含まず、圏足硯 a・c や蹄脚硯、風字硯で構成されていることから、8 世紀中頃以降の様相と判断できる。加えて、専用硯と転用硯の比率が拮抗する点も特徴であり、専用硯の 10 倍以上の転用硯が出土した伊場遺跡群と対照的である（鈴木一 2012）。さらに、陶硯を

多数保有する状況は、類例が乏しいものの、郡家の中枢域というよりは出先機関のような性格を持つと考えられる。この点に関しては、宮竹野際遺跡出土の「北家」墨書土器からも指摘できる。史料上で郡の施設を「郡家」と記す場合があることから、「北家」の意味を郡家の北の施設と捉えることも可能であり、郡家に関連する表記の可能性は高いと言える。さらに、宮竹野際遺跡は、長上郡家中枢と想定される大蒲町村東遺跡近辺からおよそ1km北側に位置し、立地状況から「北家」と呼ばれたと推測される。また、「北家」と呼称され始めた時期は墨書土器から8世紀中頃（遠江編年Ⅴ-3期）と考えられ、この時期に出先機関として本格的に整備され郡家機能の一部を担うようになったため、多くの陶硯が消費されたとみられる。

宮竹野際遺跡の性格　宮竹野際遺跡と同様に、西遠江で多数の陶硯を出土した遺跡には、井通遺跡や伊場遺跡群、笠井遺跡群（笠井若林遺跡、社口遺跡）、吉美中村遺跡がある。これらの遺跡で出土した陶硯や転用硯の様相から、宮竹野際遺跡の性格についてみていく。

井通遺跡は、多種の陶硯を持つがその中でも圏足硯aの数が多いのが特徴である。また、圏足硯bや把手付中空硯を少量含み、7～8世紀初頭に陶硯が使用され始めたことがうかがえる。宮竹野際遺跡とは圏足硯aの割合が高い点で同じ傾向を示しており、これは両遺跡とも官衙的機能を8世紀中頃に備えたためと考えられる。西遠江では、圏足硯aは7世紀末～8世紀初頭頃に出現することから、郡家の成立に伴って導入される陶硯であり、律令的様相を持つ陶硯と言える。

伊場遺跡群は、各種の陶硯がみられるが出土傾向に偏りはみられず、さらに調査面積に比べて陶硯の出土量が相対的に少ない特徴がある。この現象は、伊場遺跡群が敷智郡家の中枢域であることに起因するとみられ、出先機関と想定される井通遺跡とは対照的である。また、笠井遺跡群では、各種の陶硯が出土するが、転用硯を1点も出土しない特徴がある。転用硯が出土した硯の大半を占める伊場遺跡群とは対照的な様相がみられる。これは宮竹野際遺跡や井通遺跡でも同じである。転用硯の割合が高い伊場遺跡群（郡家の中心施設）と転用硯の割合が低い宮竹野際遺跡や井通遺跡、笠井遺跡群（郡家の出先機関または関連施設）とで対比することができ、転用硯の比率からも遺跡の性格を判断する基準になり得る可能性は高い（鈴木2012）。このような転用硯の比率と遺跡や出土地区ごとの性格については、硯の研究で触れられることは少ないが、陸奥国府である多賀城では、政庁地区の転用硯の割合が最も高いことが指摘されている（生田2003）。これは官衙の中心施設で転用硯の割合が高い西遠江の状況と同様であり、全国的に官衙の中枢では転用硯の割合が高い可能性があることを示唆する事例である。



1:武蔵国府　2:硯沢窯跡　3:清水台遺跡

Fig.79　東国出土圏足硯cの類例

陶硯の東国的様相　これまでは消費地での状況について分析してきたが、生産地における陶硯の様相と特徴について検討する。吉美中村遺跡を含む湖西窯跡群では、7世紀に特徴的な圏足硯bを多く生

産している一方で、事例は少ないが、8世紀以降には圏足硯aではなく圏足硯cを生産していることがうかがえる。しかしながら消費地では圏足硯cの割合はそれほど高くなく、生産地と様相を異にしている。では、この圏足硯cについてどのような位置づけが可能であるか検討しておこう。

圏足硯cは東国で多く出土する状況から（Fig.79）、東国的様相を持つ陶硯と考えられる。西遠江における圏足硯cの成立は、出土状況から8世紀中頃と考えられ、宮竹野際遺跡や井通遺跡が官衙的性格を帯びる時期と重なる。圏足硯cは西遠江で出土量は少なく、その出現には東国からの影響が想定され、東国の需要をまかなうために生産された可能性も考慮される。そのため、圏足硯cの多くは東国に供給されたと見られ、西遠江の消費地で出土量が少ないと考えられる。また、隣国の三河国も同様の状況にある（小幡2005）。そのことから、西遠江周辺の生産地が東国の需要にこたえていた状況がうかがえる。これをふまえて、西遠江における陶硯の地域的特徴について最後に触れる。

西遠江における陶硯の様相は、生産地を中心とするが、圏足硯cを含む点で東国的様相を持っている。そして、消費地で希薄な状況からは東国的様相の境界に位置する可能性がある。一方で、消費地では、宮竹野際遺跡や井通遺跡のように、圏足硯aが主体で蹄脚硯も出土する遺跡があることから、都城的様相も持つことが指摘できる。つまりこの地域は、東国的様相と都城的様相が混在する地域であることが最も大きな特徴である。

（5）おわりに

本稿では、西遠江の陶硯について変遷や分布傾向から検討し、それらをふまえ宮竹野際遺跡での陶硯のあり方から、地方官衙における陶硯の実態の一端について明らかにした。特に出先機関での特徴を明らかにすることができたことで、陶硯や転用硯の様相が官衙施設の性格を知る手掛かりを示す可能性があることがわかった。

また、十分な検討を経なければいけないが、西遠江の陶硯は西と東の様相が混在することを指摘できた。それにより、西遠江独自の陶硯の様相が見えてくるだろう。今後は本稿で指摘した東国的様相に注目することで、律令的性格が強い陶硯においても、中央からの一方向的な影響だけではない情報の伝達がみいだせると期待される。

[参考文献]

生田和宏　2003「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
大野勝美　2006「特殊遺物の性格について」『宮竹野際遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第165集
小幡早苗　2005「三河における古代陶硯の展開」『考古遺物から見た古代三河』第1回三河考古学談話会研究集会
菊川市教育委員会　2006『皿山古窯跡群—第7次調査—』菊川市埋蔵文化財報告書 第4集
郡山市教育委員会　2007『清水台遺跡—総括報告2006—』
静岡県教育委員会　2003『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県文化財調査報告書 第57集
杉本宏　1987「飛鳥時代初期の陶硯—宇治隼上がり瓦窯跡出土陶硯を中心として—」『考古学雑誌』第73巻 第2号
鈴木一有　2011「長田郡家と木船廃寺」『木船廃寺跡2次』(財)浜松市文化振興財団
鈴木一有　2012「宮竹野際遺跡と長上郡家」『宮竹野際遺跡6次』(財)浜松市文化振興財団
田中広明　2004「7世紀の陶硯と東国の地方官衙」『歴史評論』655号
田中広明　2005「東国の地方官衙・集落と陶硯」『古代地方官衙周辺における集落の様相』茨城県考古学協会シンポジウム
田中広明　2011「坂東と陸奥の陶硯」『東国の地域考古学』六一書房

豊橋市教育委員会　2002『二川古窯址群(Ⅱ)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書　第61集
楯崎彰一　1982「日本古代の陶硯—とくに分類について—」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会
奈良文化財研究所　2006『平城京出土陶硯集成Ⅰ—平城宮跡—』奈良文化財研究所史料　第77冊
奈良文化財研究所　2007『平城京出土陶硯集成Ⅱ—平城京・寺院—』奈良文化財研究所史料　第80冊
西口壽生　2003「畿内における陶硯の出現と普及—飛鳥藤原地域出土資料を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
樋口知志　2003「荷札木簡から見た末端文書行政の実態」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
平野吾郎　1992「陶硯」『静岡県史　資料編3　考古三』静岡県
府中市教育委員会・府中市遺跡調査会　2007『武蔵国府の調査35』
丸杉俊一郎　2008『地方官衙における徴税形態の様相』『静岡県考古学研究』No.40
宮城県教育委員会　1987「硯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集
山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
横田賢次郎　1983「福岡県内出土の硯について—分類と編年に関する一試案—」『九州歴史資料館研究論集』9

[図出典]

Fig.73-1 ～ 3・5 ～ 34、Fig.74-36 ～ 43・47・49 ～ 57・61 ～ 71、Fig.75-72・74 ～ 81・83 ～ 85：各遺跡の文献より引用、再トレース
Fig.74-44 ～ 46、Fig.75-82：再整理中の遺物図版より引用　Fig.74-58・60：報告書掲載遺物を再実測し、トレース
Fig.77-1 ～ 6：各遺跡の文献より引用　Fig.78-1 ～ 3：府中市教委ほか2007・宮城県教委1987・郡山市教委2007より引用、再トレース　Fig.79：各遺跡の文献より引用、筆者作成

[文献]

1 遠江考古学研究会　1966『大沢・川尻古窯跡調査報告書』
2 湖西市教育委員会　1983『東笠子遺跡群発掘調査概報　昭和57年度』
3 湖西市教育委員会　1992『湖西市一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』
4 鈴木敏則　1983「湖西市運動公園内遺跡群での表採資料」『ホリデー考古』第1号
5 湖西市教育委員会　1990『吉美中村遺跡』
6 湖西市教育委員会　1997『大知波峠廃寺確認調査報告書』
7 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994『祝田遺跡』
8 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008『矢畑遺跡』
9 細江町教育委員会　1996『井通遺跡』
10 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2007『井通遺跡』
11 浜松市教育委員会　1994『伊場遺跡遺物編6』
12 可美村教育委員会　1981『城山遺跡調査報告書』
13 (財)浜松市文化協会　1993『城山遺跡Ⅴ』
14 (財)浜松市文化協会　1998『梶子北遺跡　遺物編(図版)』
(財)浜松市文化協会　1998『梶子北遺跡　遺物編(本文)』
15 (財)浜松市文化振興財団　2010『梶子遺跡11次』
(財)浜松市文化振興財団　2012『梶子遺跡13次』
16 (財)浜松市文化振興財団　2006『中村遺跡—古墳・奈良時代編—』
(財)浜松市文化振興財団　2005『中村遺跡(南伊場地区)』
17 (財)浜松市文化振興財団　2009『鳥居松遺跡5次』
18 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯』
19 浜北市　2004『浜北市史　資料編　原始・古代・中世』
浜北市教育委員会　1989『明神池運動場内遺跡群発掘調査報告書』
20 松井一明・太田好治　2009「吉名窯出土の施文灰釉陶器碗・硯・瓦・相輪」『浜松市博物館報』第21号
21 浜北市教育委員会　1988『浜北市吉名5号・6号古窯跡』
22 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010『中屋遺跡』
23 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2002『恒武西宮遺跡Ⅱ・笠井若林遺跡』
(財)浜松市文化協会　2000『笠井若林遺跡4次』
24 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2005『恒武西宮遺跡Ⅲ・笠井若林遺跡Ⅱ』
25 (財)浜松市文化協会　1994『社口遺跡』
26 (財)浜松市文化協会　1994『宮竹野際遺跡2』
27 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『宮竹野際遺跡』
28 (財)浜松市文化振興財団　2005『森西遺跡』
29 (財)浜松市文化振興財団　2007『中田北遺跡』
30 平野吾郎　1992「陶硯」『静岡県史　資料編3　考古三』
31 静岡県教育委員会　2003『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
32 湖西市教育委員会　1991『加賀山第1 ～ 3地点・古見第14・16地点古窯跡発掘調査報告書』
33 新居町教育委員会　1991『三ッ谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
34 細江町教育委員会　1993『川久保船渡遺跡』
35 細江町教育委員会　2005『岡の平遺跡発掘調査報告書』
36 (財)浜松市文化協会　1996『若林 村西遺跡』
37 (財)浜松市文化振興財団　2005『東若林遺跡』
38 (財)浜松市文化協会　1992『佐鳴湖西岸遺跡群』
39 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996『角江遺跡』
40 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2004『恒武東覚遺跡』
41 (財)浜松市文化協会　1998『山の花遺跡』
42 (財)浜松市文化協会　1986『山の神遺跡発掘調査報告書』
(財)浜松市文化協会　1989『山の神遺跡』

2　宮竹野際遺跡と長上郡家

（1）はじめに

浜松市東区宮竹町に所在する宮竹野際遺跡では、2011年までに6次にわたる発掘調査が実施され、奈良時代から平安時代にいたる古代の遺構、遺物が比較的豊富に確認されている。今回実施した6次調査では、自然流路SD06（SR01上位層を含む）から、墨書土器や陶硯、水滴など古代の文字関連遺物が豊富に出土した。これら文字関連資料は、一般集落で出土することが稀であり、地方においては国府や郡家といった官衙関連遺跡で集中的に出土する傾向が強いことが知られている（山中1994、静岡県教委2003、静岡県考古学会2006）。宮竹野際遺跡における官衙的様相は、既に2次調査の成果によっても指摘されていたが（太田1994）、5次調査および、この度の6次調査で確認した自然流路からの出土品によって、その特徴はより一層鮮明になった。さらに今回の調査では、文字関連遺物のほかに製塩土器が32点分確認できたことも特筆できる。後述するように、遠江の製塩土器出土地は郡家関連遺跡に集中する傾向があり、製塩土器の大量出土は、当遺跡に官衙的様相を見出す視点の一つに加えてよいだろう。

本稿では、宮竹野際遺跡の官衙的様相を整理した上で、当遺跡とその周囲に展開する木船廃寺、大蒲村東遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡を一括して「永田遺跡群」と総称し、この遺跡群の内容と、当地に想定できる古代の長田（長上）郡家との関連性にふれてみたい。なお、長田郡は、『続日本紀』の記載によって、和銅2年（709）に長上郡と長下郡に分割されたことが知られる。分割後の当地は長上郡に属していた。このことから、本稿では特に断りがない限り、この地に想定できる郡名として「長上」という呼称を用いる。

（2）官衙的様相を示す出土遺物

宮竹野際遺跡における官衙的様相は、過去の調査でも断片的に指摘されてきた。まずは、既往の調査と今回の6次調査で出土した官衙的様相を示す遺物についてその特徴を確認し、当遺跡の具体像に迫りたい。

2次調査出土遺物　1993年に実施された宮竹野際遺跡2次調査（浜文協1994）では、規格性がある掘立柱建物群や陶馬を含む祭祀土坑が確認され、円面硯や布目瓦小片、馬歯などが出土した。円面硯は掘立柱建物（SH08）を構成する柱穴（SP15）から出土したもので、方形のスカシ孔をもつ脚部の破片とみられる。布目瓦は包含層からの出土品が2点分報告されている。いずれも平瓦とみられ、胎土や焼成などの特徴から木船廃寺との関連が指摘されている。また、祭祀土坑（SX01）から出土した陶馬は、当地方に多い類例と比べると小振りであり、形態的には都城型の土馬と似ている。これら官衙的な性格をもつ出土遺物が認められたことを受け、報告書中において長上郡家との関連が指摘された（太田1994）。

5次調査出土遺物　宮竹野際遺跡5次調査区は今回の対象地の南側にあたり、低位面に広がる水田を確認した（静文研2006）。調査区の北東隅で検出された流路SR01を中心に官衙関連の遺物群

がまとまって出土している。なお、5次調査におけるSR01は、今回の調査で確認した自然流路SR01の上層部分と同一の遺構と捉えられる。

5次調査では、古代の墨書・刻書土器が合計25点出土した。その内訳は、墨書須恵器18点、刻書須恵器2点、墨書灰釉陶器4点、墨書土師器1点である。文字が判読できる墨書土器はいずれも「大」、「中」、「生」など一文字を記したものか記号が書かれたものである。いっぽう、刻書土器には、底部内面に「大夫」と刻まれた須恵器箱坏が知られる。この刻書土器をもって当遺跡と大夫とのかかわりを示すと解釈することには慎重にならざるを得ないが、一文字のみを記す墨書土器と比較して官人世界との深い結びつき示す文字資料と評価することは許されよう。5次調査ではこの他、円面硯4点、風字硯1点、布目瓦8点等が出土しており、宮竹野際遺跡が古代官衙関連の遺跡であることをさらに具体的に示すものとなった（大野 2006）。

5次調査では、古代の布目瓦の破片が8点出土していることも注目できる。この瓦は永田遺跡群の中心部に近い木船廃寺との関連を考慮してよい。遠江では官衙的様相をもつ遺跡であっても瓦が出土することは稀である。宮竹野際遺跡で比較的まとまった数の瓦片が確認できることは、何らかの瓦葺き建物（註1）が遺跡内にあった可能性を示唆するものといえる。

6次調査出土遺物　今回実施した6次調査では、報告に示したように56点にのぼる古代の墨書土器のほか、円面硯4点、風字硯1点、水滴1点といった豊富な古代文字関連資料が自然流路SD06（SR01上層を含む）から出土した。宮竹野際遺跡において出土が確認できた陶硯の数は合計12点を数えるまでになった。その内訳は、円面硯10点、風字硯2点である。こうした宮竹野際遺跡における陶硯の集中は近隣の官衙遺跡と比べても遜色ない内容をもち、当遺跡の実態解明にかかわる大きな鍵を握っている（関根 2012）。

専用硯と転用硯　ここで、西遠江における硯の出土傾向を整理しておきたい。敷智郡家の想定地である伊場遺跡群では比較的調査が進んでいるものの、陶硯の出土数は10点にとどまる。また、引佐郡家関連施設とみられる井通遺跡では17点の陶硯が出土しており、消費地として西遠江では最多の出土数を誇る。さらに、里（郷）に附属する施設が想定できる笠井遺跡群（笠井若林遺跡、社口遺跡）（註2）では、6点の陶硯が出土している。

いっぽう、須恵器坏蓋などを硯として使用した転用硯の数に注目すると、伊場遺跡群で174点、井通遺跡112点、宮竹野際遺跡15点、笠井遺跡群0点と、出土数に著しい違いがある。転用硯の認定には調査担当者の認識に委ねられる部分が大きいが、ある程度、出土量の傾向を示すと解釈することは許されよう。上述の数値を用い、専用硯である陶硯と転用硯の比率を比較しておく（Fig.80）。陶硯を1とした場合の転用硯の比率を示すと、伊

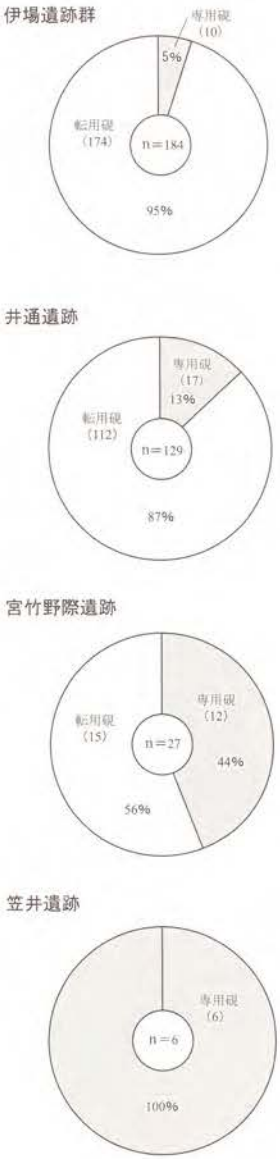


Fig.80　各遺跡硯比較

場遺跡群が1：17.4、井通遺跡が、1：6.6、宮竹野際遺跡が1：1.25、笠井遺跡群が1：0である。伊場遺跡群では専用硯の10倍以上の数の転用硯が用いられていることに対し、宮竹野際遺跡では専用硯と転用硯との比率が拮抗している。6点の専用硯が出土した笠井遺跡群にいたっては、転用硯が見出されておらず、文字を記す道具として専用硯が選択的に用いられていた可能性が指摘できる。このように、陶硯の出土数は官衙関連遺跡の中でも偏差があり、郡家の範囲内においても各施設のおかれた性格が陶硯使用の多少を決定付けていた可能性が指摘できよう（註3）。上述の各遺跡の性格をふまえると、郡家の中枢施設から離れるに従い転用硯の比率が減少し、専用硯の割合が高くなる傾向を認めてよい。実務的な道具としては転用硯が用いられることに対して、専用硯には「文字を使用する」ことに対する象徴的な意義が付されていた可能性がある。

「北家」墨書土器　6次調査で出土した墨書土器は、5次調査での出土品と比べて遺存状態が良好なものが多く、2字以上が記されたものも目立つ。とくに「北家」と記されるものがその可能性を含むものを含めて13点確認できることは、宮竹野際遺跡にあった施設の性格を考える上でも重要である（Fig.81）。

長上郡家の中枢部に近いと想定されている木船廃寺や大蒲町村東遺跡は宮竹野際遺跡の南に約1kmの至近距離にある。宮竹野際遺跡の出土遺物に認められる官衙的様相を考慮すると、当該地まで郡家の関連施設がおよんでいたと捉えるのが自然である。すなわち、宮竹野際遺跡で検出された掘立柱建物は長上郡家を構成する施設の一つで、郡庁など郡家の中枢地が想定できる南部域に対して、古代には「北家」と呼ばれていたとみてよいだろう。「北家」墨書土器は、遠江Ⅴ-3期以降のものであることも重要である。出土遺物の年代観が示すとおり、宮竹野際遺跡においては8世紀中葉から9世紀前葉頃に郡家関連施設が最も整い、その地が新たに「北家」として整備された可能性が指摘できる（註4）。

製塩土器　宮竹野際遺跡6次調査の出土品のうち、官衙的様相を示す遺物として製塩土器にも注

Fig.81　「北家」墨書の詳細

目したい。遠江では土器製塩が行われず、製塩土器は固形塩の容器として生産地である三河湾沿岸部から搬入されたものとみられる（森 1997）。その出土地は、伊場遺跡群や井通遺跡など官衙遺跡に集中する傾向が強い（鈴木敏 2010）。宮竹野際遺跡における製塩土器の集中も、この地で食事に供された官人の存在を示すものと評価してよいだろう。今回出土が確認できた製塩土器は、いずれも直径 7 ～ 10cm 程度の小型品で、形態や胎土の特徴から、渥美半島で製作されたものと捉えられる。また、出土した製塩土器はいずれも口縁を中心とした坏部の破片のみで、棒状の脚部は全く確認できない。宮竹野際遺跡で廃棄された製塩土器は、当地に持ち込まれた時点で坏部だけにされていたとみられ、脚部は別の地域で取り外されていたと考えられる。こうした特徴は、伊場遺跡群内の鳥居松遺跡で確認された状況と酷似しており（鈴木一 2009）、両者とも類似した塩の生産、供給体制の影響下にあったと解釈できる。

製塩土器が河川内に集中する宮竹野際遺跡や鳥居松遺跡の様相から判断すると、固形塩が三河から当地に運搬されたのは、遠州灘を介した水上交通路を経由してのことであったとみられる。後述するように、製塩土器が大量に出土した自然河川 SD06（宮井戸川）は、下流で芳川、馬込川、遠州灘と繋がり、大局的には鳥居松遺跡と同じ水系に属している。伊場遺跡群における鳥居松遺跡と同様、宮竹野際遺跡も郡家内の物資の集散地として機能していた可能性が指摘できよう。

獣脚付壷　宮竹野際遺跡 6 次調査の出土品には、獣脚付壷の脚部（いわゆる獣足）が含まれる点も留意される。獣脚付壷も官衙関連の遺跡から集中的に出土する傾向が認められ（関根 2012）、当遺跡の性格を表す遺物として評価できよう。

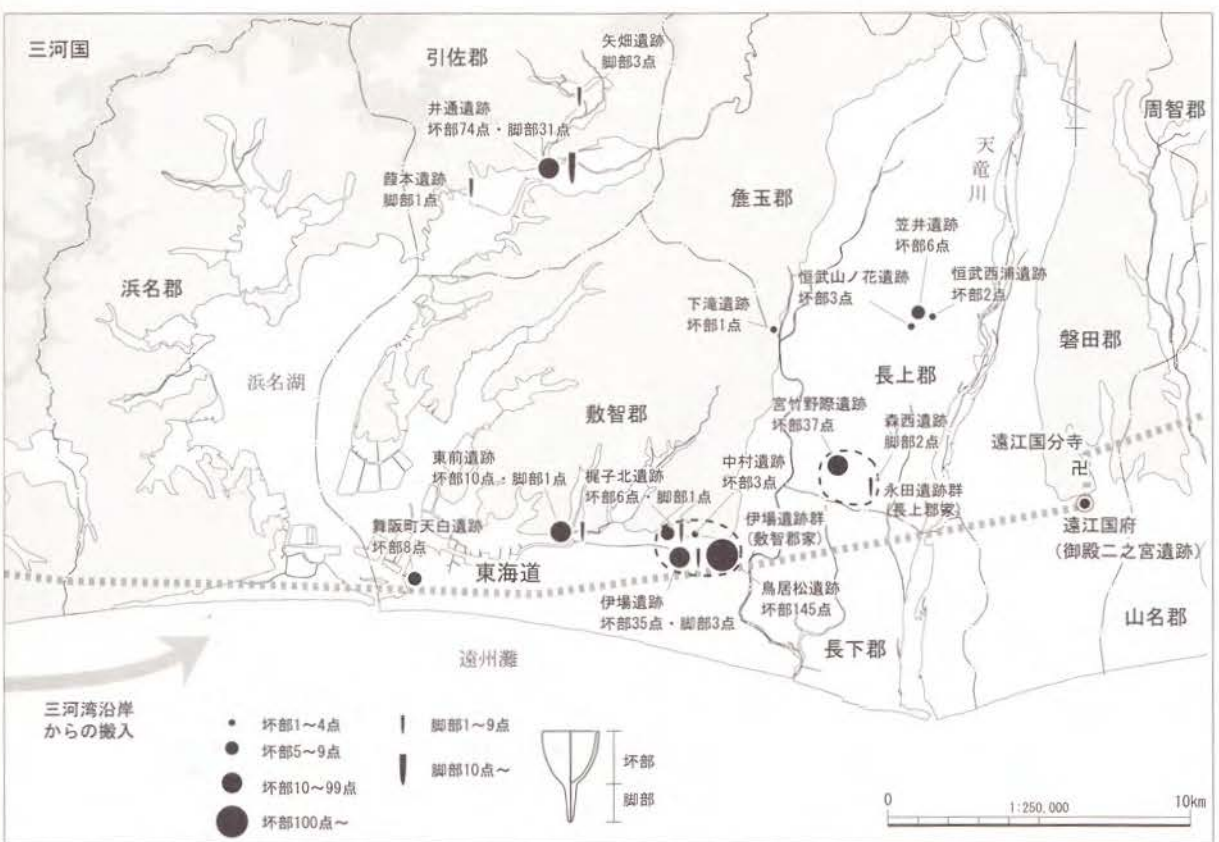


Fig.82　西遠江における製塩土器の分布

(3)宮竹野際遺跡における遺構群の詳細

宮竹野際遺跡で確認できる古代の遺構を通覧し、古代官衙関連施設の詳細と周囲の景観についてまとめておく。

掘立柱建物　宮竹野際遺跡で検出された中心的な遺構として掘立柱建物がある。今回実施した6次調査では1棟（SH01）が検出できたにすぎないが、1次および2次調査では、比較的まとまった数の掘立柱建物が確認されている。これら掘立柱建物は、2×2間、2×3間、2×4間、3×3間といった比較的小型のもので、建物の方位は自然流路（宮井戸川）の方角に規制されている。こうした建物群のあり方は、伊場遺跡において検出された建物群と良く似ている。

宮竹野際遺跡の掘立柱建物群は、方形を意識した柱穴を備える点に特徴がある。古代における一

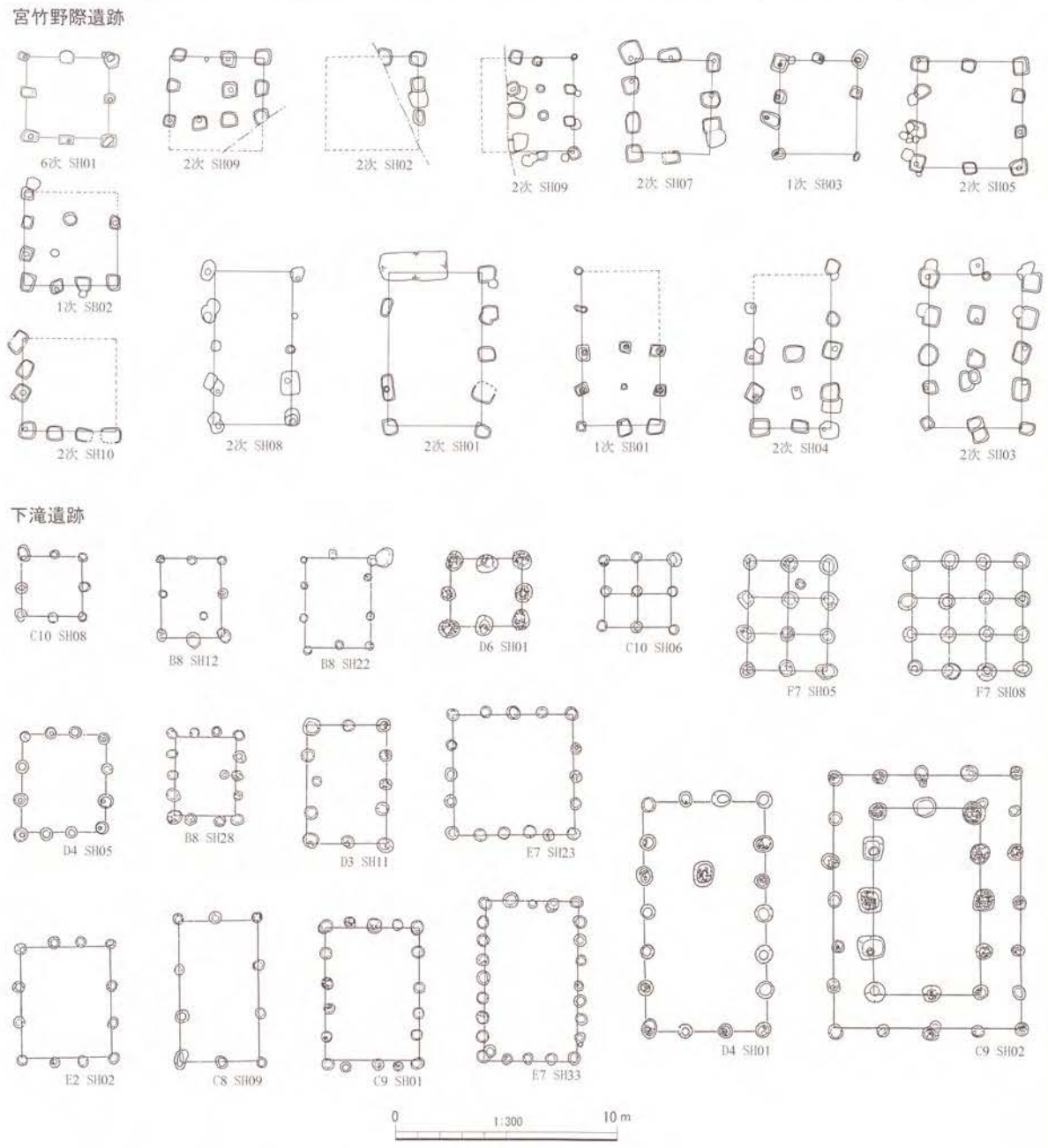


Fig.83　宮竹野際遺跡と下滝遺跡における掘立柱建物

般集落の典型例として、浜松市東区半田山に所在する下滝遺跡群の掘立柱建物（鈴木一1999）を比較対象にすると、柱穴形態の差異が明確である（Fig.83）。下滝遺跡群では190例にのぼる掘立柱建物が検出されているが、ほとんどの柱穴形状は円形であり、方形の柱穴をもつ建物はごく少数例に留まる。いっぽう、宮竹野際遺跡で確認された掘立柱建物の柱穴は、不整形のものも含むが、基本的には方形を意識したものとみてよいだろう。当遺跡の掘立柱建物は、一般的な集落の建物とは異なり、官衙的な建物の約束事を踏襲していると捉えられるだろう（丸杉2004）。

宮竹野際遺跡における建物群は、掘立柱建物のみで構成される点も見逃せない。当遺跡では、7世紀代には竪穴建物（2次調査SB701）が確認できるものの、8世紀以降には確実な竪穴建物は確認できない。竪穴建物が姿を消し、その後、掘立柱建物のみで構成される建物群が出現することをふまえると、当遺跡では、官衙関連の施設を整備するにあたり、先行する一般的な居住域を改変した可能性が指摘できる。

祭祀遺構　古代の祭祀の痕跡は宮竹野際遺跡の各所で確認できる。2次調査で確認されたSX01からは都城型の土馬と形態的に似た陶馬が出土しており、何らかの祭祀に用いた遺構とみてよい。また、5次調査で確認された水田では、畦畔上で土器を用いた祭祀が行われている。さらに、6次調査で確認した自然河川SR06では、桃核が集中して出土しており、桃の実や種を用いた祭祀が実施されたとみられる。

このように宮竹野際遺跡では、古代の祭祀の痕跡が比較的明確に認識できる。こうした遺構に加

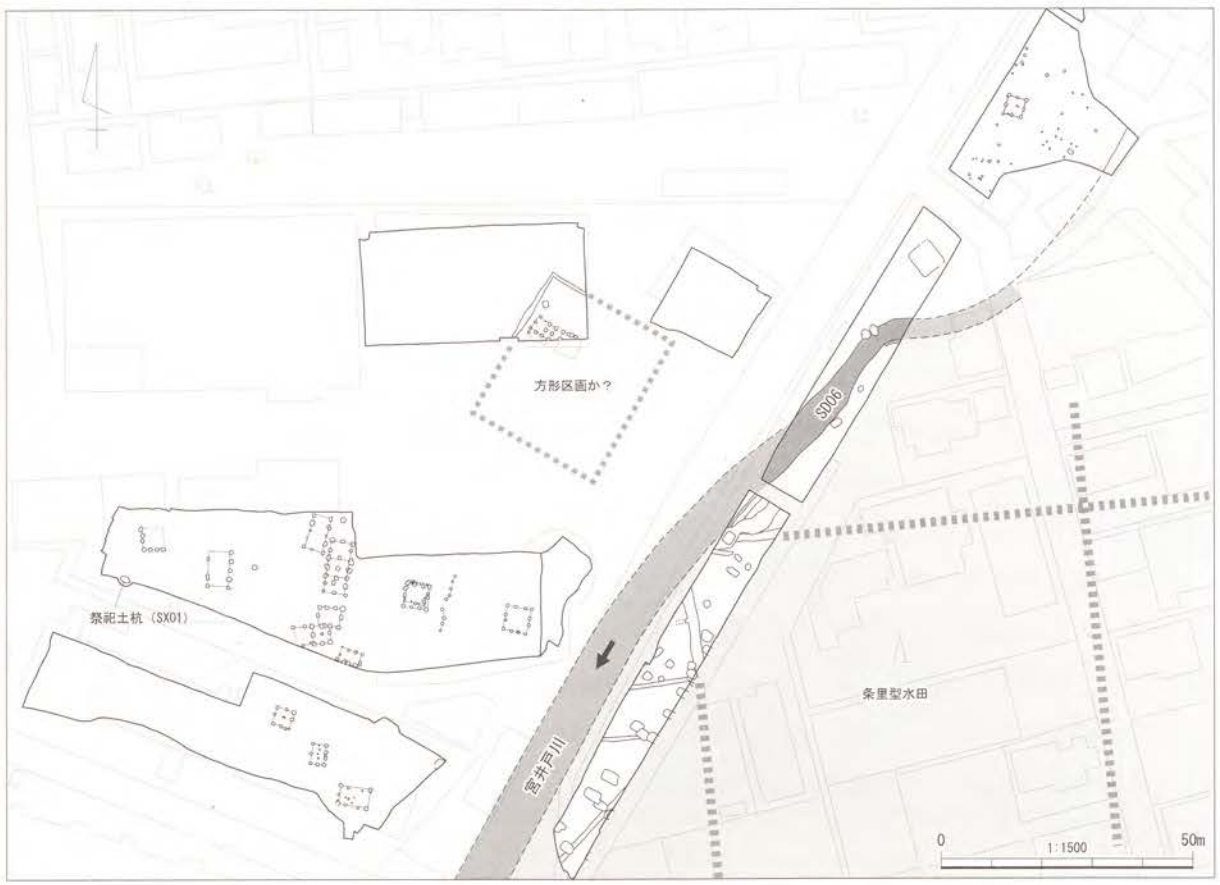


Fig.84　宮竹野際遺跡における古代の様相

えて、断片的に出土している土馬・陶馬や馬歯・馬骨などの馬にかかわる祭祀遺物、各種の手づくね土器の存在は、官衙関連施設で執り行われた大小の祭祀の実態を伝えている。

条里型水田　宮竹野際遺跡の5次調査では自然流路とその外側に広がる低位面を確認し、古代の水田が営まれていたことが判明した。この水田の畦畔が設定される方向は南北方位から半時計回りに約8度西に振れている。この方角は、近接する河川の流れとは無関係で、天竜川平野にみられる古代条里の区画（矢田1994）を踏襲している。河川の流れに影響を受けず、計画的な土地区画の理念が貫徹されていると評価できよう。5次調査で確認された条里型水田遺構には幅1.5mほどの大畦畔SK01·02が伴っている。この大畦畔は坪界線にあたる可能性が指摘されており（静文研2006、pp.60-61）、古代の地割を分析する上での基準線のひとつとして注目できる。

SD06と宮井戸川　宮竹野際遺跡6次調査で確認された自然流路SD06は、古代以前に成立起源が遡る旧河道SR01とともに遺跡の東端を区切り、南に向かって流れている。この古代河川は地籍図にも名残がうかがえ（Fig.87）、下流域の山の神遺跡、大蒲町村東遺跡で確認された自然流路とも繋がる蓋然性が高い。現在、この河道は宮井戸川としてその名を留めており、その流れも古代と大きく変わらないとみられる。以下、宮竹野際遺跡の東端を流れ、永田遺跡群を貫く自然流路として宮井戸川という名称を用いたい。この河川は後述するように、永田遺跡群に展開する長上郡家の諸施設を有機的に結びつける役目を果たしている。

（4）永田遺跡群とその周辺遺跡の構造

永田遺跡群とは、浜松市東区和田町から大蒲町、宮竹町を中心に展開している木船廃寺、大蒲町村東遺跡、森西遺跡、越前遺跡、山の神遺跡、宮竹野際遺跡を包括する地域概念である。その範囲は、東西1.2km、南北1.3kmほどである。和田町の中心集落は「永田」と呼ばれ、近世以前には「長田」と表記されることもあった。「長田」は古代遠江国の郡名に通じることが示唆しているように、長田（分割後は長上）郡の中心部は現在の和田町にあったと捉えられる。

永田遺跡群に長上郡家を想定する考古学的証拠として古くから注目されていたのは、白鳳様式の軒丸瓦を出土した木船廃寺である。木船廃寺は2010年の発掘調査によって古代瓦の資料が充実し、白鳳期の創建以降、奈良時代から平安時代前半に至るまで補修を加えられながら維持され続けていたことが判明している。このほか、周辺の大蒲町村東遺跡や越前遺跡、森西遺跡においても官衙的様相が認められる遺物が出土しており、長上郡家をこの地に想定する根拠が揃いつつある。

また、永田遺跡群の南側に位置する浜松市南区飯田町から渡瀬町一帯にも、山寺野遺跡や上組遺跡など、古代の遺跡が知られている。現在、これらの遺跡と永田遺跡群とは東海道本線や東海道新幹線によって隔てられているが、近接する位置関係から、飯田地区の遺跡も永田遺跡群と密接にかかわるものとみてよい。さらに古代東海道についても、永田遺跡群の南側に推定する所見があり、飯田地区における古代の様相は無視できない。以下、永田遺跡群とその周辺遺跡の様相について概要を示しておこう。

木船廃寺　木船廃寺は1954年に実施された区画整理事業によって古代瓦が出土したことで知られるようになった古代寺院で、2010年の発掘調査によって、その正確な位置が判明した（浜文振

2011a)。伽藍配置などは不明であるが、瓦が集中的に出土する範囲から判断して、寺域は南北120m以上の規模があったとみられる。

木船廃寺には、比較的多くの種類の古代瓦が確認されている（鈴木一2011)。軒丸瓦には、創建期の山田寺式、川原寺式の各型式に加え、奈良時代には在地系の重圏文縁蓮華文軒丸瓦や都城系の単弁蓮華文軒丸瓦が用いられている。軒平瓦には、創建期の三重弧文軒平瓦のほかに、平城宮系統（6663型式）の唐草文軒平瓦、遠江国分寺式のS字唐草文軒平瓦が知られる。丸瓦には無段式（行基式）と有段式（玉縁式）が、平瓦には桶巻作りと一枚作りの双方が認められ、それぞれ製作時期差を示すものとみてよい。

木船廃寺の創建時期は、軒瓦の年代観から白鳳期でも比較的新しい時期と考えられる（平野1990)。瓦の特徴や遺跡の立地環境を考慮すると、木船廃寺は後の長上郡の郡司層を担う勢力が地域秩序の精神的な核とすべく、7世紀末から8世紀の初頭頃に創建した私寺とみてよいだろう。長田評家の機能や諸施設が充実した時期に評家域の一角に造営されたもので、郡衙（郡家）隣接寺院（山中2005、櫻井1987）の典型例といえる。木船廃寺では明確な建物遺構が確認できないことから、

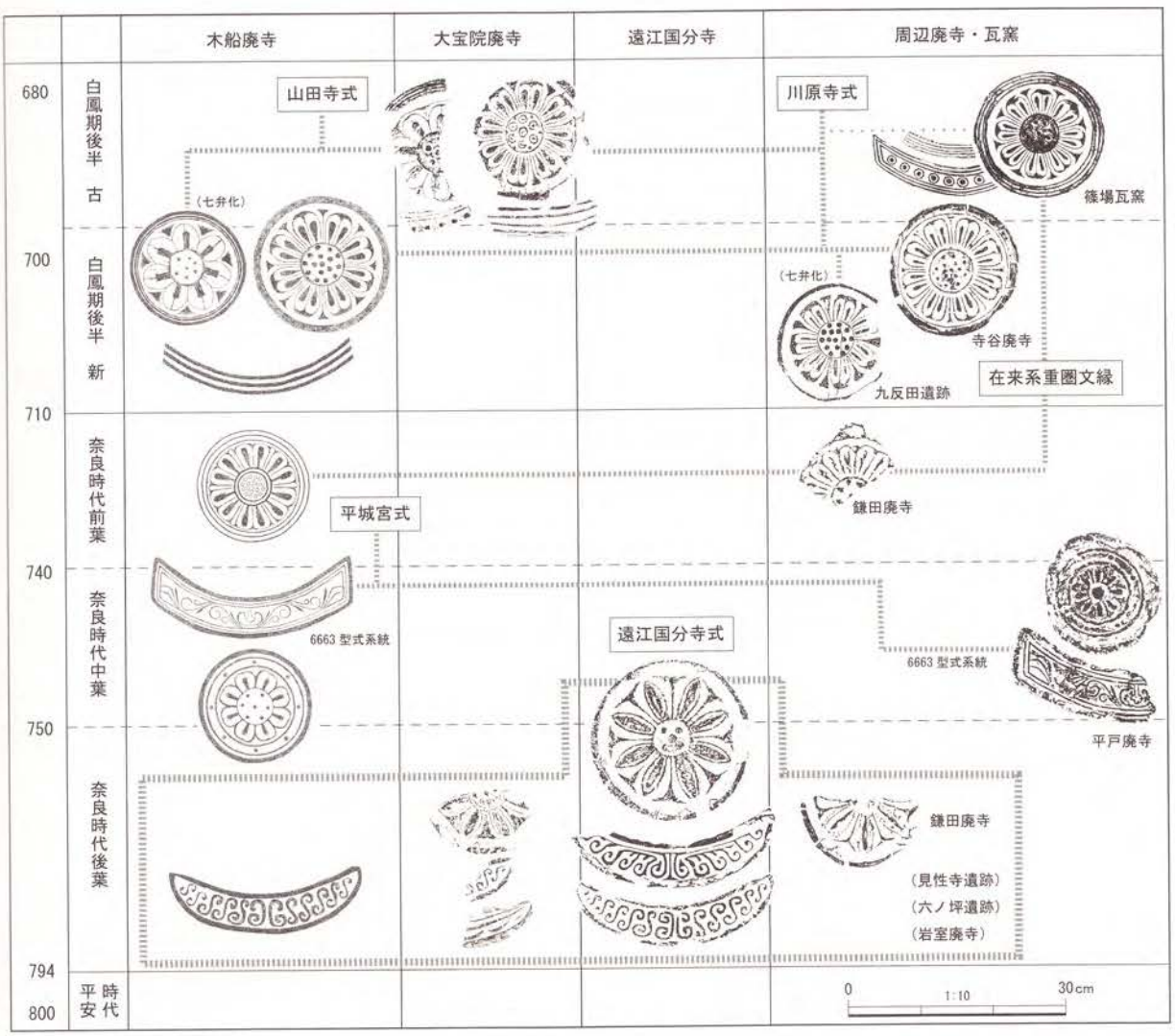


Fig.85　木船廃寺出土瓦の時期と系譜

七堂伽藍を備えた大寺院とはいいがたい。しかし、古代瓦の分布域は比較的広く、時期差が顕著であることから、一定の寺域をもち本格的な堂宇が建ち並んでいたと想定できる。木船廃寺の建物は、奈良時代を通じて在来系の軒丸瓦や、都城系の軒平瓦、遠江国分寺の軒平瓦がもたらされ、補修が繰り返されている。長上郡の郡司層が国分寺造営に参画していた経緯がうかがえるとともに、供給された瓦は中央もしくは国司勢力との関連が強いことから、木船廃寺は定額寺としての寺格を得ていた可能性も指摘できる。

大蒲町村東遺跡　大蒲町村東遺跡は木船廃寺の西に接する遺跡で、2004年に発掘調査が実施され、その詳細が初めて判明した（浜文協2004）。調査では宮井戸川にあたる自然流路を検出し、その堆積土中から木簡4点のほか、容器、木履、機織具や、斎串、人形、馬形、舟形などの祭祀具を含む木製品約400点が出土した。出土した木簡には、8世紀前葉の大税出挙の運用状況を示すもの（1号木簡）や駅起稲（駅の運営財源）の使用にかかわる可能性があるもの（2号木簡）が含まれ（渡邉ほか2008、pp.48-49）、調査地の近隣に長上郡家の中枢部があることが判明した。

大蒲村東遺跡から比較的豊富に出土した機織具も郡家の存在を考究する上で看過できない遺物である。古代の調や庸として求められた布は、寸法や品質が厳格に定められていたと考えられている。伊場遺跡群（敷智郡家）から出土した機織具を分析した向坂鋼二は、調庸布を郡家や有力農民のもとに備えた高規格の機織具を用いて専業性の高い織手が生産したものと想定し、一般農民は自己に課せられた織布に必要な絹糸や麻糸を持ち込み工賃に値する対価物を副えて成果物を受け取っていたと捉えた（向坂1985）。同様の視点を敷衍するならば、大蒲村東遺跡から出土した機織具も、長上郡家で行われた調庸布生産にかかわる遺物と評価してよいだろう（鈴木敏2004）。

森西遺跡　森西遺跡は木船廃寺の東側に接する遺跡で、2004年から2005年にかけて発掘調査が行われた（浜文協2005）。古代の遺構は明確でないが、包含層中から比較的豊富に遺物が出土した。注目できる出土品として、円面硯2点、須恵器坏蓋転用硯1点、墨書土器5点、緑釉陶器2点、製塩土器脚部2点、布目瓦3点があげられる。いずれも官衙との関連が指摘できるものである。森西遺跡にも、長上郡家に関連する施設が広がっていた可能性は高いとみられよう。緑釉陶器がみられることから、その中心的な時期は平安時代まで降るとみてよい。

越前遺跡　越前遺跡は木船廃寺の北側に接しており、旧来から両者は一連の遺跡と捉えられている（静岡県教委2003）。遺跡認定の発端となった採集品の中に陶馬があり、古代官衙に関連する遺跡の可能性が古くから指摘されていた。1981年には発掘調査が実施され、奈良時代の遺構・遺物を確認した（浜松市遺跡調査会1982）。この調査では、建物跡こそ検出できなかったものの、奈良時代前葉頃の暗文を施した赤彩土器が10点以上含まれる祭祀土坑（P5）が検出され、包含層からは布目瓦3点が出土した。

Fig.86 「長田」墨書山茶碗

山の神遺跡　山の神遺跡は、木船廃寺から北西に700mほど離れた位置にあり、宮竹野際遺跡とは埋没河川（宮井戸川）を挟んで南に接する。現在までに6次にわたる発掘調査が行われ、弥生時代後期と鎌倉時代の2時期に遺跡の中心があることが判明している（浜文協2000）。

1次調査の出土品の中には、「長田」の墨書がある山茶碗（Fig.86）が知られており、古代の郡名「長田」は中世にも引き継がれていたことが分かる。山の神遺跡においても、奈良時代から平安時代にかけての遺構・遺物が確実に認められる。とくに、1995年に実施された3次調査（静文研1997）では古代の自然流路（SD303）が検出され、まとまった量の遺物が出土している点で注目できる。この河川跡では未使用状態の甕を破砕した状態が確認でき、墨書土器1点や斎串1点のほか大量の小型土器も共伴している。当該調査地における地形の状態や地籍図からうかがえる旧河道の位置から、この自然流路（SD303）は、宮竹野際遺跡6次調査で確認されたSD06（SR01を含む）と繋がる宮井戸川である可能性が高い。この他、山の神遺跡1次調査では、古代の井戸（SE61）が検出されており、布目瓦1点が出土している。

上組遺跡　上組遺跡は木船廃寺から南西に1.3kmほど離れた位置にある。永田遺跡群からは外れるが、近接する古代の遺跡として紹介しておきたい。この遺跡では2010年に発掘調査が実施され、古代の遺物がまとまって出土した（浜文振2011b）。この調査で出土した陶馬は、全長19cmの市内最大級のものであることに加え、尾が下がる形態的特徴から、奈良時代前葉の所産と考えられる。一般集落の出土品としては特異であり、長上郡家とのかかわりの中で入手、使用されたものと想定できるだろう。

山寺野遺跡　山寺野遺跡は、木船廃寺から南に800 mほど離れた位置にある。1999年に発掘調査され（浜文協2000）、古代の土器や陶馬が出土した。この遺跡では調査地点の他でも、奈良時代の須恵器や土師器を表面採集することができる。調査が部分的であるため不明瞭であるが、山寺野遺跡に古代の遺構が埋没している可能性は極めて高い。

（5）長上郡家と古代の景観

長上郡家と密接にかかわる郡内の郷（里）や古代東海道および水上交通路などの様相に触れ、古代長上郡とその周辺の景観の復元を試みておきたい。

郷との関係　長上郡の郷里名としては、『倭名類聚抄』の記載によって、茅原（チハラ）、碧海（アヲウミ）、長田、河辺（カハヘ）、蟾沼（ヒキヌマ）、壱志（イチシ）がみえる（蟾沼、壱志は大急記念文庫本にのみ記載、残りの郷里名は、高山寺本、名古屋市立博物館本、大急記念文庫本に記載）。いずれもその比定地には諸説あるが（静岡県1994、pp.1142-1143）、概ねFig.91に示すような位置関係が想定できる。

出土した古代文字資料には、これら郷里名を直接的に示すものは知られない。ただし、長田郷についてはここまでの記述で示した諸様相が示すように、永田遺跡群を相当させるのが穏当であろう。この他の郷里名と比定地を結びつける根拠は薄い。また、官衙的様相がみられる笠井遺跡群については、所属する郡名、郷の中枢における文字使用の評価など、今後の検討課題が多い。笠井遺跡群では文字関連遺物が比較的豊富に出土しているので、資料の増加を待って慎重に議論を重ねる必要がある。

古代条里と東海道　天竜川平野における古代東海道の位置については、考古学的証拠が全く無く、歴史地理学的手法によって推定するしかない。地籍図からうかがえる天竜川平野の条里は、南北軸

Fig.87　永田遺跡群における地籍図

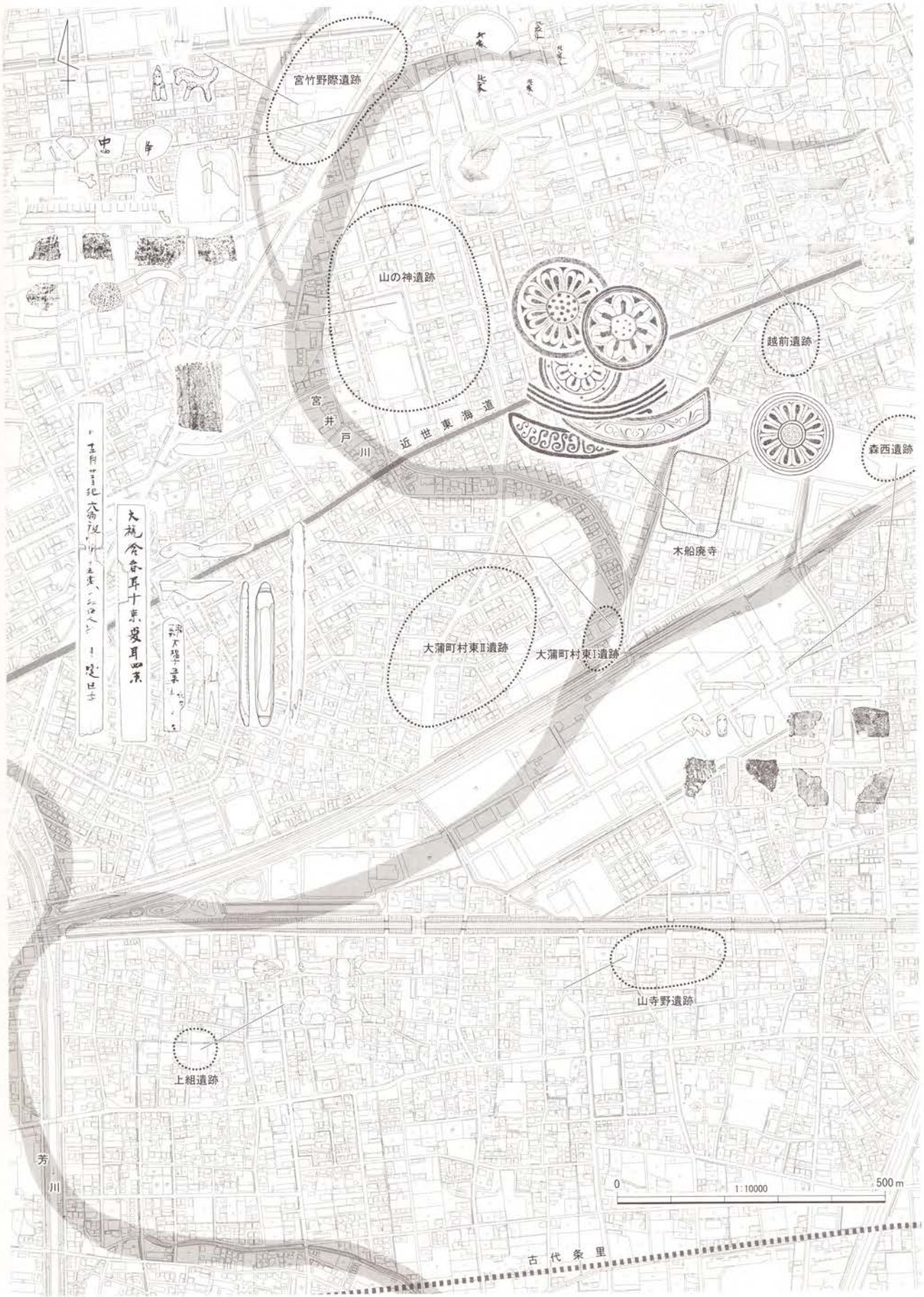


Fig.88　永田遺跡群の構造

Fig.89　天竜川平野西岸の表層条里分布図

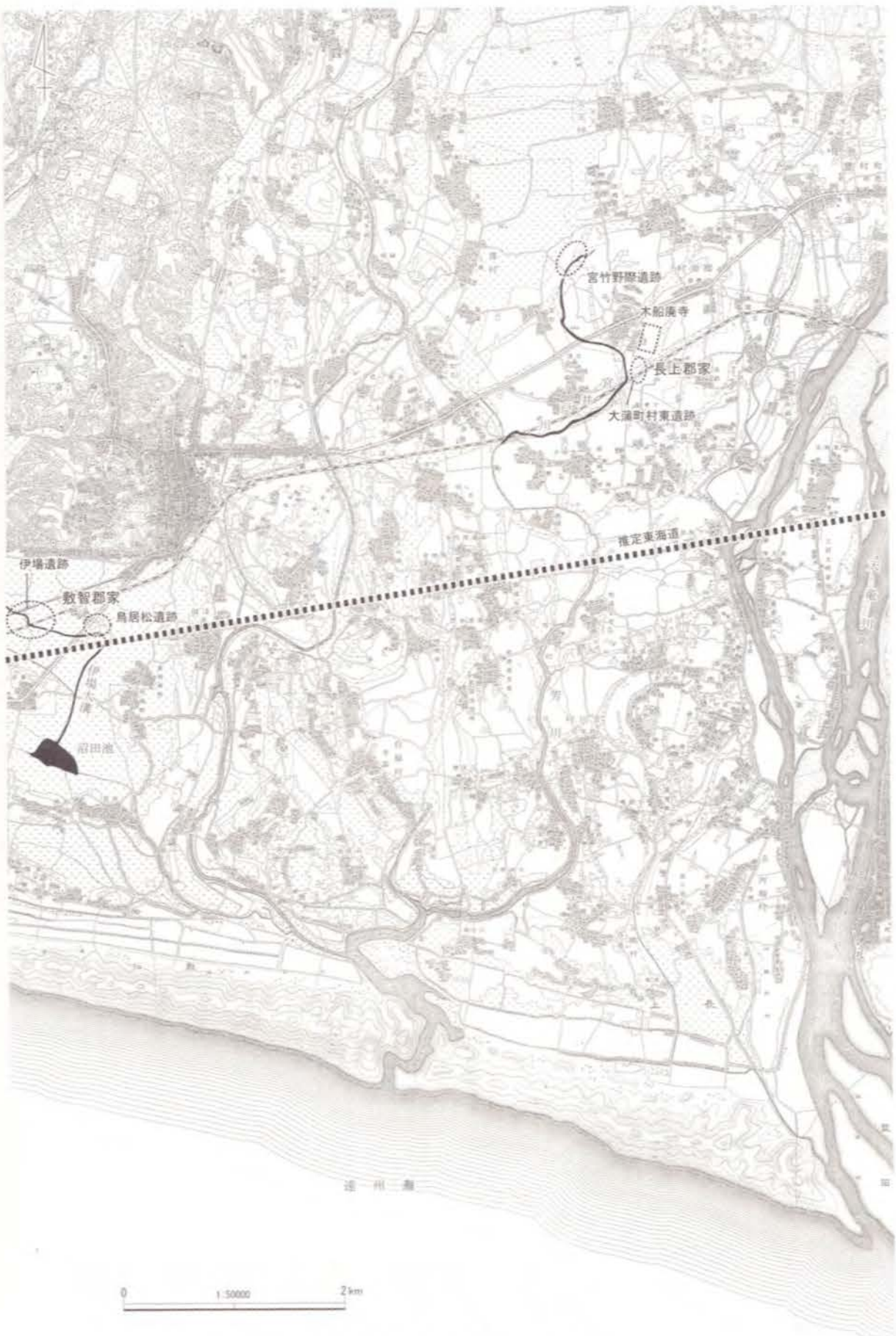


Fig.90 長上郡家とその周辺の景観

Fig.91　長上郡とその周辺の施設配置

から反時計方向に 8 度ほど傾いており、浜松市東区天王町や南区飯田町にもその名残とみられる地割が知られている。また、飯田町には「一ノ坪」「二ノ坪」「三ノ坪」といった条里坪付にかかわる字名が伝わり、坪付の境界があったことが知られる（Fig.87）。その地は現在の浜松市立東部中学校付近であり、条理地割の名残は現代にも引き継がれている。

古代条里は、宮竹野際遺跡 5 次調査で確認された水田畦畔にもうかがえる。先述のとおり、自然河川の流路に規制されない計画的な地割理念が貫かれている。近接する掘立柱建物群が自然流路（宮井戸川）の方向と関連性が高いことと比べると、水田などの土地の区画と建物の方位の選択は、別の次元であることが鮮明である。

敷智郡家である伊場遺跡群やその近辺に想定できる栗原駅家と、遠江国府の推定地である磐田市御殿二之宮遺跡を上述の条里方向に沿って直線的に結ぶと Fig.90 に示す位置に、条里の境界線が想定できる。この境界線は先述の条里坪付関連の字名とも関連をもち、天竜川平野の地割りの基準線として意識されていたことを示している。暫定的ながら、この境界線を古代東海道の想定位置として捉えておきたい（太田 2001）。推定する古代東海道と永田遺跡群とは最短で 2km ほど離れているが、幹線道路の北側に立地する永田遺跡群の位置は、古代官道と郡家の空間配置としても矛盾はない。

芳川と宮井戸川　前近代においては、道路を利用した陸上交通とともに、河川を利用した水上交通が果たした役割は少なくない。永田遺跡群の立地環境を考えるにあたっては、この地を南北に貫く芳川とその支流である宮井戸川の流路が重要であろう。これら河川は、現在、度重なる改修を受けて大きく変化しているが、地籍図の判読によってその位置がほぼ確定できる。芳川は下流において、かつて小天竜と呼ばれた馬込川と合流しており、広義での天竜川の支流の一つに数えることができる。芳川と馬込川が合流し遠州灘に注ぐ地は水上交通の結節点であり、中世には「白羽湊」と呼ばれた港湾施設が整えられている。この地から西方に溯上すれば敷智郡家である伊場遺跡群に、東方に溯れば長上郡家である永田遺跡群に辿りつく好地にあたる。芳川は古代東海道と確実に交わる地点があり、その地は長上郡家とも繋がる物資集散地として機能していた可能性がある。

宮井戸川は、現在の JR 東海道本線芳川橋付近から芳川と分岐し、大きく蛇行しながら永田遺跡群を貫いている。先に紹介した古代の遺跡はすべて宮井戸川とその支流に沿って分布しており、遺跡群を束ねる幹の役割を果たしている。宮竹野際遺跡に郡家の関連施設が置かれたのも、宮井戸川の水運があるからこそにほかならない。長上郡家の郡庁は不明確ながら、木船廃寺や大蒲町村東遺跡の近辺にあるとみてよい。推定できる郡庁の位置から宮竹野際遺跡までは、直線距離にしておよそ 1km である。この程度の距離であれば頻繁に往来が可能であり、郡家と関連施設が展開する範囲としても充分に想定できる範疇である。事実、隣接する伊場遺跡群では、自然流路である伊場大溝を中心に東西 1.5 kmにわたり官衙関連の施設が想定されている。伊場遺跡群における伊場大溝と永田遺跡群における宮井戸川は、互いに郡家内の施設を繋ぎとめる役割を果たしていたとみてよいだろう。さらに、両河川は下流域で合流し遠州灘に至る事実は、遠隔地交易にかんして敷智郡と長上郡が連携をとっていた可能性を示唆している。

（6）結　語

ここまでの検討を通じて、宮竹野際遺跡には当時「北家」と呼ばれた長上郡家の関連施設があったことを指摘し、永田遺跡群内に想定できる長上郡家の構造、郷とその周辺の景観について整理した。長上郡家の中枢は、木簡が出土した大蒲町村東遺跡の近辺と捉えるのが妥当と考えられ、近隣地には郡家隣接寺院である木船廃寺がある。この地は近世集落「永田」の範囲とも重なり、継続的に在地の中心地として機能していた地域といえる。地籍図からうかがえる地割や木船廃寺で想定できる軸線は、天竜川平野で広域に確認できる条里地割りとは異なり、自然地形に合わせた伝統的な土地区画が踏襲されている。律令体制の成立以前から続く在地有力者の本貫地として矛盾ない特徴を有しているだろう。

いっぽう、宮竹野際遺跡では、8世紀中葉以降に急速に施設が整えられた状況がうかがえる。当地に想定できる長上郡家関連施設は、それまでの開発が顕著でない新興地に建設されたものであり、その中心的な時期は古代でも比較的新しい時期、奈良時代後半から平安時代前葉にあたる。郡家の所在地が郡域の南側に偏っている長上郡の地理的要因に対処するため、北方に新たに郡家の関連施設を整備した可能性が指摘できるだろう。その施設の性格究明は、初期荘園とのかかわりも視野に入れながら、郡家中枢域の調査、分析と共に今後進めるべき課題である。

宮竹野際遺跡に想定できる「北家」とよばれた郡家関連施設と郡庁などの郡家中枢とは、宮井戸川の水運を媒介に結ばれていた。自然河川を基軸に郡家施設が展開する構造は、伊場大溝が貫く敷智郡家でも共通しており、馬込川・芳川水系（小天竜水系）に展開した古代地方行政施設として共通した機能、景観が指摘できる。

宮竹野際遺跡の調査によって長上郡家の様相が豊富に描けるようになった意義は大きい。この地における郡家の具体像が示せたことは、隣接する敷智郡家（伊場遺跡群）の構造分析にも資するところがあり、さらには遠江国府と周辺郡家、官衙関連施設との複合的な検討によって、古代地方官衙の有機的関連が解明できる展望が開けたといえる。今後の周辺地域における資料蓄積と、遠近双方向の視点をふまえた総合化が求められよう。

[註]

註1　宮竹野際遺跡における瓦葺き建物は、部分的に瓦を用いるような簡易な建造物の可能性がある。

註2　笠井遺跡群は長上郡の範囲にあると捉えているが、古代の郡域については不明瞭な点が多いため、帰属する郡については確定的でない。また、この遺跡群を郡家と想定することは、郡域の広がりから考えても難しい。暫定的ながら、郷（里）に関連する施設と解釈しておきたい。郡家から離れている立地環境が、官衙的様相を深めた一因とみることも許されよう。

註3　時期が新しい遺跡には専用硯の比率が高くなる傾向を認めてよい。

註4　北家と呼ばれた区域には、初期荘園にかかわる施設が展開していた可能性も考えられる。ここでは、初期荘園施設の可能性を含めて「郡家関連施設」と捉えておきたい。

[参考文献]

太田好治　1994「総括」『宮竹野際遺跡2』(財)浜松市文化協会

太田好治　2001「浜松域遠州灘沿岸部における地形変化と遺跡の分布」『浜松市博物館報』第14号　浜松市博物館

大野勝美　2006「特殊遺物の性格について」『宮竹野際遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

櫻井信也　1987「評・郡衙隣接寺院について」『尋源』第37号　大谷大学国史研究会

静岡県　1992『静岡県史』資料編3　考古三

静岡県　1994『静岡県史』通史編1　原始・古代

静岡県教育委員会　2003『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県文化財調査報告書　第57集

静岡県考古学会　2006『古代の役所と寺院—郡衙とその周辺—』静岡県考古学会2005（平成17)年度シンポジウム

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　1997『山の神遺跡』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『宮竹野際遺跡』

鈴木一有　1999「律令時代の遺構について」『下滝遺跡群2』(財)浜松市文化協会

鈴木一有　2009「鳥居松遺跡における伊場大溝調査の意義」『鳥居松遺跡5次　伊場大溝編』(財)浜松市文化振興財団

鈴木一有　2011「木船廃寺出土瓦の時期と系譜」『木船廃寺跡2次』(財)浜松市文化振興財団

鈴木敏則　2004「出土木製品」『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』(財)浜松市文化協会

鈴木敏則　2010「静岡県内の製塩土器」『東海土器製塩研究』考古学フォーラム

関根章義　2012「西遠江における陶硯の様相と地方官衙」『宮竹野際遺跡6次』(財)浜松市文化振興財団

平野吾郎　1990「遠江・駿河における屋瓦と寺院」『静岡県史研究』第6号

丸杉俊一郎　2003「遺物から見た官衙遺跡」『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県教育委員会

丸杉俊一郎　2004「古代遠江国における遺構研究の基礎的整理」『設立20周年記念論文集』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

浜松市遺跡調査会　1982『越前遺跡発掘調査報告書』

(財)浜松市文化協会　1989『山の神遺跡』

(財)浜松市文化協会　1994『宮竹野際遺跡2』

(財)浜松市文化協会　2000『山寺野遺跡2000』

(財)浜松市文化協会　2004『大蒲村東Ⅰ・Ⅱ遺跡』

(財)浜松市文化協会　2005『森西遺跡』

(財)浜松市文化振興財団　2011a『木船廃寺2次』

(財)浜松市文化振興財団　2011b『上組遺跡』

森　泰通　1997「東海地方における消費地出土の製塩土器—特に固形塩の問題をめぐって—」『製塩土器の諸問題—古代における塩の生産と流通—』塩の会シンポジウム実行委員会

山中敏史　1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

山中敏史　2005「地方官衙と周辺寺院をめぐる諸問題」『地方官衙と寺院—郡衙周辺寺院を中心として—』奈良文化財研究所

渡邉晃宏ほか　2008「伊場遺跡群木簡釈文」『伊場遺跡総括編(文字資料・時代別総括)』浜松市教育委員会

矢田　勝　1994「表層条里型地割の分布からみた箕輪遺跡周辺」『箕輪遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

[図出典]

Fig.89　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『箕輪遺跡』および、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所2006『宮竹野際遺跡』を参考にして新規作成

第6章　総　括

本書で報告した調査結果は、長上郡家にかかわる豊富な情報を提供した。検出遺構や出土遺物の分析を通じて得られた成果は多岐にわたるが、さいごに調査内容と後論で明らかにされた事がらを時代ごとに要約し、総括としたい。

弥生時代　当遺跡は、弥生時代における初源期の水田遺構が埋没している地として著名である。今回の調査地では畦畔など明確な水田遺構は確認できなかったが、A区やB区の下層で確認できた溝や土器集積などは弥生時代の水田にかかわる遺構の可能性がある。遺構の形成時期は明確でないが、出土遺物量の傾向をふまえると弥生時代後期に中心があるとみられる。

古墳時代　当該期の遺構、遺物は極めて希薄であった。自然流路SR06からは若干ながら7世紀中頃の遺物が出土しており、集落の再形成時期がうかがえる。

奈良・平安時代　遺跡の東端を流れる自然流路（SD06）と掘立柱建物（SH01）を検出した。自然流路は周辺遺跡の調査状況と地籍図の検討結果から、古代長上郡家の想定地である永田遺跡群を貫くものあることが判明し、現在も宮井戸川としてその名を留めている。この自然流路からは、56点にのぼる古代の墨書土器や5点の陶硯（円面硯4点、風字硯1点）、水滴1点など、古代の文字

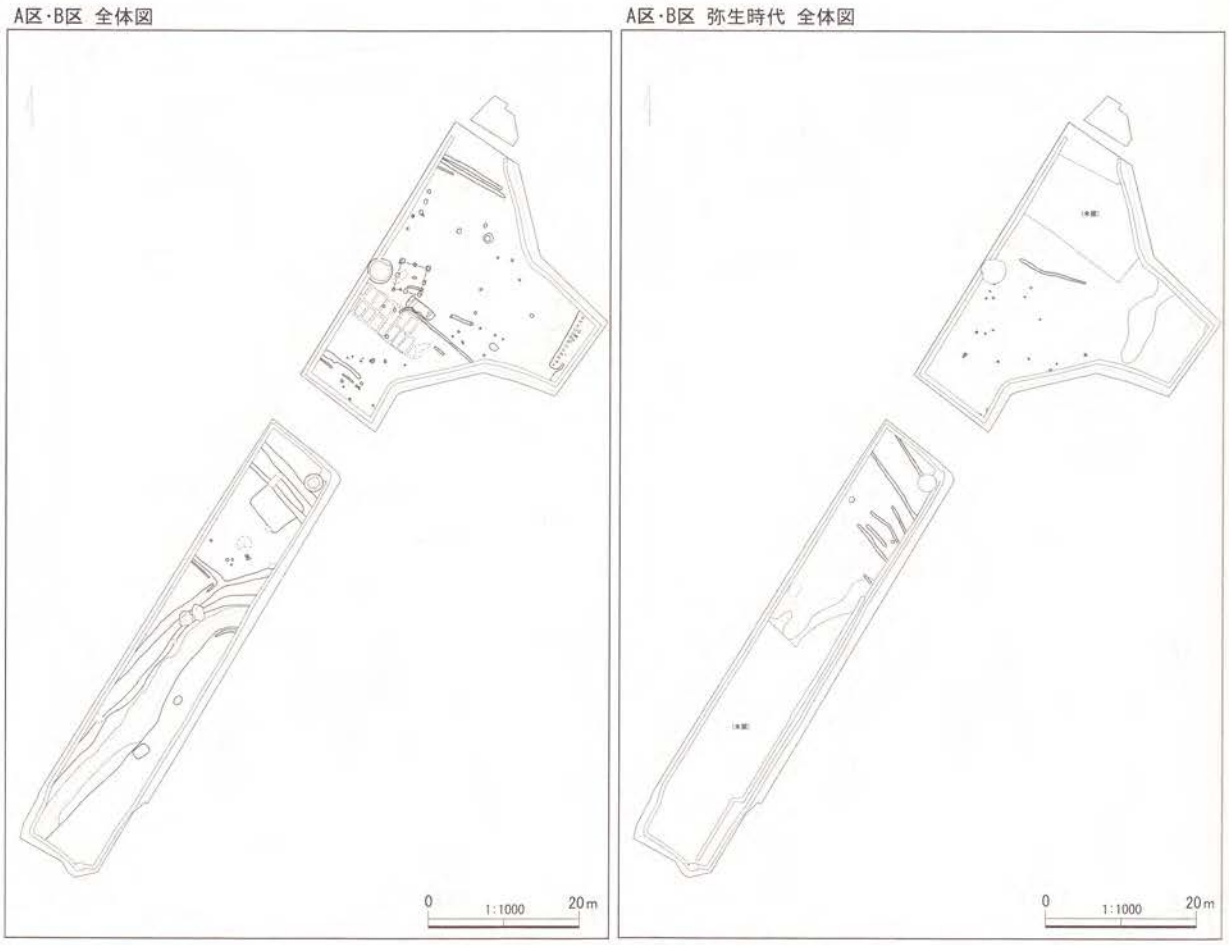


Fig.92　宮竹野際遺跡6次調査区の変遷(1)

関連資料を始め、製塩土器や獣脚付壷といった官衙的様相がうかがえる遺物が豊富に出土した。

宮竹野際遺跡から出土した陶硯は、今回の出土品を含めて12点を数えるまでに増加した。いずれも8世紀中葉から9世紀のものである。12点という陶硯の出土数は、周辺地域の官衙遺跡と比べても遜色なく、当地が地方官衙にかかわる遺跡であることを明確に物語る（第5章1）。

宮竹野際遺跡には南1kmほどにある長上郡家中枢地と有機的関連をもつ郡家関連施設があったとみられる。今回の調査で確認した掘立柱建物（SH01）も、従来の調査で確認された建物群と一連の遺構と捉えられよう。墨書土器などの特徴から、当地に設けられた施設は古代には「北家」と呼ばれ、長上郡家の施設拡張に伴い、8世紀中葉以降に整備された経緯がうかがえる（第5章2）。なお、ここでいう郡家関連施設には初期荘園に関連する可能性も考慮してよい。

鎌倉時代　遺跡の東端を区切る自然流路は堆積が進み湿地化が進む（SR01上層）。この湿地は、鎌倉時代まで水田として利用することもあったとみられる。湿地の中からは鎌倉時代の遺物も比較的多く出土した。近在の集落から投棄されたものとみられよう。今回の調査で検出した3基の井戸（SE01・03・05）はいずれも当該期のものので、鎌倉時代の居住域の一部を確認したといえる。

当地に構築された集落は、蒲御厨内の農村と判断できる。ただし、湿地からの出土品に青白磁の合子（Fig.61-391）が含まれることから、従来考えられてきたようにこの遺跡を居住地と限定することが難しくなった。宮竹野際遺跡には比較的上位階層の居住者も想定してよいだろう。

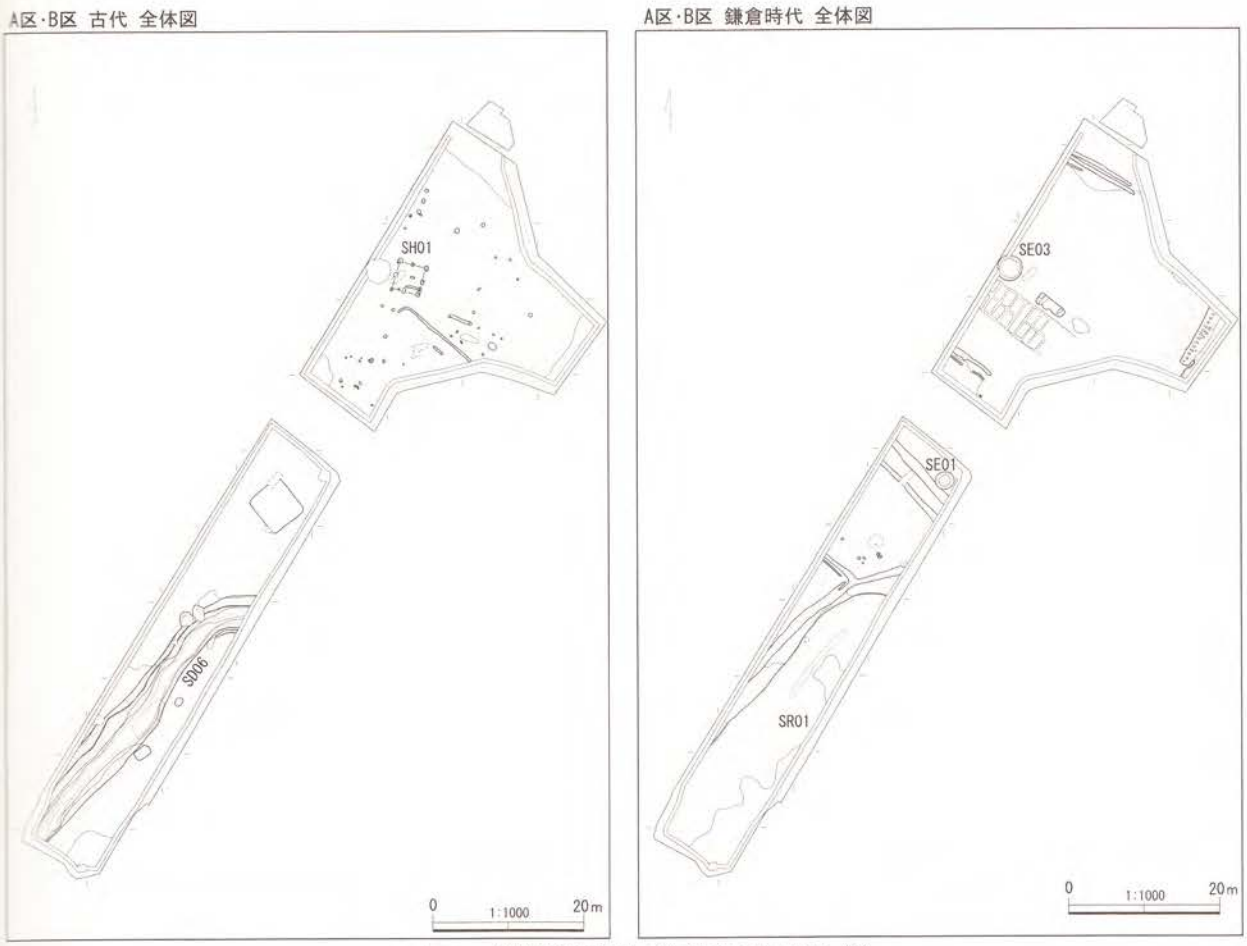


Fig.93　宮竹野際遺跡6次調査区の変遷（2）

Tab.6　出土遺物観察表

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
48	1	497	A	包含層	弥生土器	甕	5					にぶい黄橙	
48	2	130	A	SD05	弥生土器	甕	20	反				にぶい橙	底径 7.6
48	3	492	A	SE02	弥生土器	小壺	90		7.8	7.7	7.3	浅黄橙	底径 5.5
48	4	280	A	SD06 上層	弥生土器	壺	5				16.0	橙	
48	5	497	A	包含層	弥生土器	壺	5				13.6	にぶい黄橙	
48	6	272	A	SD06 上層	弥生土器	壺	5				18.6	灰黄	
48	7	41	A	包含層	弥生土器	壺	5					にぶい黄橙	頸径 10.0
48	8	280	A	SD06 上層	弥生土器	壺	20	反				橙	頸径 7.6
48	9	41	A	包含層	弥生土器	壺	5					灰黄	
48	10	41	A	包含層	弥生土器	壺	5					浅黄	円形浮文
48	11	379	A	SD06 下層	弥生土器	壺	10					灰黄	底径 8.0
48	12	498	A	包含層	弥生土器	高坏	30					にぶい黄橙	脚頸径 4.4
48	13	74・75	A	SX01	弥生土器	高坏	20					橙	脚頸径 5.0、内面灰褐色
48	14	76·78 他	A	SX01	弥生土器	甕	30		18.0		17.0	にぶい黄橙	
48	15	506	A	SR01	古式土師器	高坏	40	反				にぶい橙	脚頸径 2.4、ｽｶｼ 3 方向
48	16	499	A	SR01	古式土師器	S 字甕	5				15.0	にぶい黄橙	A 類、押引
49	17	477	A	SD06 下層	須恵器	坏蓋	40	反	15.6			暗灰	ｹｽﾞﾘ方向左、SX08
49	18	462	A	SD06 下層	須恵器	坏蓋	30	反				灰白	摘径 3.0、自然釉、ｹｽﾞﾘ方向左、SX08
49	19	464	A	SD06 下層	須恵器	坏蓋	20	反				灰白	摘径 3.2、自然釉、ｹｽﾞﾘ方向左、SX08
49	20	270・329	A	SD06 下層	須恵器	有台坏身	90		14.2		5.1	灰白	底径 9.9、SX08
49	21	393·475	A	SD06 下層	須恵器	有台坏身	50	反		3.9	15.0	灰白	ｹｽﾞﾘ方向左、SX08
49	22	271	A	SD06 下層	須恵器	碗	50	反		4.3	15.0	灰白	SX08
49	23	479	A	SD06 下層	須恵器	碗	30	反		5.0	15.6	灰白	ｹｽﾞﾘ方向左、SX08
49	24	370	A	SD06 下層	須恵器	壺	30				8.1	灰白	SX08
49	25	476	A	SD06 下層	須恵器	壺	20	反			18.0	灰	SX08
49	26	474	A	SD06 下層	須恵器	壺	30					灰白	SX08
49	27	469	A	SD06 下層	須恵器	甕	20	反	25.8			灰	SX08
49	28	471	A	SD06 下層	須恵器	甕	10	反				灰	SX08
49	29	478	A	SD06 下層	土師器	甕	10	反			27.4	橙	SX08
49	30	479	A	SD06 下層	土師器	台付甕	10					にぶい黄橙	SX08
49	31	453	A	SD06 下層	土師器	坏身	30	反		2.6	12.8	明赤褐	内外面赤彩？、SX09
49	32	455	A	SD06 下層	土師器	有台盤	90		17.0	4.3		にぶい黄橙	底径 9.3、内外面赤彩、SX09
49	33	506	A	SD06 下層	須恵器	坏蓋	40					灰白	摘径 2.9、自然釉、ｹｽﾞﾘ方向左
49	34	379	A	SD06 下層	須恵器	有台坏身	30	反		3.8	14.8	灰白	底径 10.4
49	35	506	A	SD06 下層	須恵器	有台坏身	30	反			13.6	灰	底径 7.4、ﾍﾗ記号「ー」
49	36	389	A	SD06 下層	土師器	坏身	20		9.6	3.8	9.4	にぶい橙	底径 4.0
49	37	506	A	SD06 下層	土師器	鉢（甕）	20	反			17.0	浅黄橙	把手付
49	38	378	A	SD06 下層	土師器	鉢	30				14.7	にぶい橙	底径 6.4
49	39	506	A	SD06 下層	土製品	甑形	30	反	10.7	4.5	9.7	にぶい橙	
49	40	506	A	SD06 下層	土製品	高坏形	40	反				にぶい橙	
49	41	378	A	SD06 下層	土製品	人形（土馬）	10					にぶい黄橙	表面鉄分付着
49	42	378	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	5	反			7.4	灰黄褐	内面にぶい黄橙
49	43	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			7.6	にぶい黄橙	
49	44	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	5	反			7.9	灰黄	
49	45	506·456	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	20				8.0	灰黄褐	外面に布圧痕、SX09
49	46	379	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	5	反			8.0	褐灰	内面灰褐
49	47	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			8.6	淡赤橙	
49	48	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			8.9	灰黄	
49	49	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	20				9.0	褐灰	
49	50	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			9.0	にぶい黄橙	
49	51	379	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	5	反			9.6	褐灰	
49	52	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			9.8	にぶい褐	
49	53	506	A	SD06 下層	土師器	製塩土器	10	反			9.8	にぶい橙	
50	54	320	A	SD06 中層	須恵器	皿	30	反	17.6	2.7		灰	ｹｽﾞﾘ方向左、SX03
50	55	321	A	SD06 中層	須恵器	壺	30	反			11.1	灰白	内外面自然釉、焼膨れ有り、SX03
50	56	314	A	SD06 中層	須恵器	壺	30					灰白	内外面自然釉、SX03
50	57	316	A	SD06 中層	土師器	甕	20	反			25.0	にぶい橙	SX03
50	58	322	A	SD06 中層	須恵器	壺	30					灰	内外面自然釉、SX04
50	59	323	A	SD06 中層	須恵器	広口壺	70		14.0		10.6		底径 4.4、SX04
50	60	324	A	SD06 中層	須恵器	甕	30	反			24.0	灰白	外面自然釉（暗ｵﾘｰﾌﾞ色）、SX04
50	61	325	A	SD06 中層	土製品	碗形	60	反	6.6	2.7		にぶい黄橙	底径 3.4、SX04
50	62	225	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	70		15.6	3.7	15.6	灰	摘径 2.6、SX05
50	63	326	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	70	反	14.4	4.1		灰白	底径 11.2、ｹｽﾞﾘ方向左、SX05
50	64	226·276	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	80	反		4.4	15.8	灰白	底径 10.6、ｹｽﾞﾘ方向左、SX05
50	65	328	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	30	反	15.2	4.1		灰白	底径 9.6、SX05
50	66	331	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	10	反			14.0	灰	SX05
50	67	334	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	60	反	10.8	3.7	10.8	灰白	底径 7.8、ｹｽﾞﾘ方向左、ﾍﾗ記号、SX05
50	68	331	A	SD06 中層	須恵器	広口壺	20	反	22.4		21.0	灰白	SX05
50	69	333	A	SD06 中層	須恵器	有台壺	90		10.2	12.4	11.4	灰白	底径 6.0、ｹｽﾞﾘ方向右、SX05
50	70	332	A	SD06 中層	土師器	坏身	50	反	13.4	3.3		浅黄橙	底径 7.0、内面赤彩、口唇部内面沈線、SX05
50	71	340	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	40		16.2	3.5		灰白	摘径 2.5、SX06
50	72	347	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	10	反			14.6	灰	SX06
50	73	350	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	20	反		5.7	15.4	青灰色	底径 10.8、SX06
50	74	351	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	30	反		3.7	13.4	灰	底径 9.2、ｹｽﾞﾘ方向左、SX06
50	75	308	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	20	反	13.0	3.3		灰白	底径 10.6、ｹｽﾞﾘ方向右、SX06

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
50	76	344·331 他	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	40	反		3.9	13.2	灰白	底径 9.4、SX06
50	77	345	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	20	反		3.7	13.4	灰	底径 11.0、SX06
50	78	354·284 他	A	SD06 中層	須恵器	碗	80			3.9	13.6	灰	底径 6.1、糸切、SX06
50	79	337	A	SD06 中層	須恵器	碗	20	反	14.4	4.6		灰白	底径 7.0、SX06
50	80	341	A	SD06 中層	須恵器	碗	20	反			13.2	青灰色	SX06
50	81	307	A	SD06 中層	須恵器	水滴	90		10.4			灰	底径 5.6、ﾍｽﾞﾘ方向左、SX06
50	82	309	A	SD06 中層	土師器	甕	5	反			31.6	にぶい橙	SX06
50	83	342・343	A	SD06 中層	土師器	甕	30	反				浅黄橙	底径 6.0、SX06
50	84	339	A	SD06 中層	土製品	碗形	100		3.7	2.7	1.4	灰白	底径 1.8、SX06
50	85	192	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	40	反	16.0	2.7	15.7	灰白	摘径 2.8、ﾍｽﾞﾘ方向右、SX07
50	86	362・202 他	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	70	反		3.3	15.2	灰	底径 10.4、ﾍｽﾞﾘ方向左、SX07
50	87	361	A	SD06 中層	須恵器	碗	30	反		3.8	13.2	灰	ﾍｽﾞﾘ方向左、SX07
50	88	359	A	SD06 中層	土師器	坏身	40	反		3.0	13.4	橙	内外面赤彩、SX07
50	89	357	A	SD06 中層	土師器	坏身	30	反		2.3	7.6	淡黄	SX07
50	90	357	A	SD06 中層	土師器	坏身	20	反		2.5	8.4	淡黄	外面接合痕、SX07
50	91	358	A	SD06 中層	須恵器	陶馬	5					灰白	脚部片、SX07
51	92	393	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	20	反			10.2	灰	
51	93	393	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	5					灰	
51	94	284	A	SD06 中層	須恵器	坏身	5	反	11.6		9.4	灰	
51	95	195	A	SD06 中層	須恵器	坏身	60		9.7	2.7	8.5	灰	
52	96	283	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	40	反	20.0			灰白	内面自然釉
52	97	282	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	30	反	18.8			灰白	内面自然釉
52	98	376	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	40	反		4.2	15.2	灰	底径 11.0
52	99	300	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	30	反		4.1	14.6	灰	底径 9.0
52	100	287	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	5	反		2.8	14.9	灰	底径 10.7、ﾍｽﾞﾘ方向左
52	101	284	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	5	反			13.0	灰白	口縁部漆付着
52	102	284	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	30	反		3.5	11.6	灰	底径 8.1
52	103	285	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	20	反		3.6	13.2	灰	底径 7.4、ﾍｽﾞﾘ方向左
52	104	273	A	SD06 中層	須恵器	鋺形	5	反			16.8	灰	
52	105	283	A	SD06 中層	須恵器	鋺形	10	反			15.2	灰	
52	106	284	A	SD06 中層	須恵器	碗	10	反		4.2	13.8	灰	底径 6.2
52	107	284	A	SD06 中層	須恵器	鋺形	20	反		3.4	13.8	灰	底径 7.8
52	108	284	A	SD06 中層	須恵器	壷	70		8.6			灰	底径 5.6、体部ﾍｽﾞﾘ方向左、糸切
52	109	287・304	A	SD06 中層	須恵器	壷	20					灰	自然釉
52	110	284	A	SD06 中層	須恵器	甕	5					暗灰	頸径 18.2、自然釉
52	111	288	A	SD06 中層	須恵器	円面硯	5	反				灰	突帯径 14.8、ｽｶｼ数不明
52	112	284	A	SD06 中層	土師器	坏蓋	20	反	19.2			にぶい橙	外面赤彩（明赤褐）
52	113	283	A	SD06 中層	土師器	有台坏身	10	反				灰褐	底径 12.4、内面赤彩、内面漆付着
52	114	283	A	SD06 中層	土師器	坏身	20	反			12.8	明赤褐	内外面赤彩
52	115	272	A	SD06 中層	土師器	坏身	10	反		2.9	16.2	明赤褐	内外面赤彩
52	116	300	A	SD06 中層	土師器	坏身	5	反			16.0	明赤褐	暗文、内外面赤彩
52	117	284	A	SD06 中層	土師器	坏身	20	反		3.0	14.7	明赤褐	内外面赤彩
52	118	283	A	SD06 中層	土師器	坏身	10	反			14.8	明赤褐	
52	119	283	A	SD06 中層	土師器	坏身	30	反			17.0	赤褐	暗文、内外面赤彩
52	120	287	A	SD06 中層	土師器	坏身	10	反			13.0	明赤褐	内外面赤彩
52	121	284	A	SD06 中層	土師器	坏身	20	反		3.6	14.2	浅黄橙	
52	122	283	A	SD06 中層	土師器	坏身	5	反			11.8	にぶい黄橙	内面赤彩
52	123	284	A	SD06 中層	土師器	皿	10	反		2.4	16.8	明褐色	内外面赤彩
52	124	284	A	SD06 中層	土師器	皿	10	反		1.7	21.4	浅黄橙	内面赤彩、内面明赤褐
52	125	273	A	SD06 中層	土師器	高盤	20	反				明赤褐	内外面赤彩
52	126	393	A	SD06 中層	土師器	高盤	10					灰黄	
52	127	376·281	A	SD06 中層	土師器	甕	10	反			23.0	灰黄	
52	128	284	A	SD06 中層	土師器	甕	10	反			23.6	にぶい黄橙	
52	129	283・293	A	SD06 中層	土師器	甕	20	反				灰黄	台径 15.4
52	130	284	A	SD06 中層	土師器	鉢	10	反			16.4	浅黄橙	
52	131	288	A	SD06 中層	土師器	鉢	20				20.0	浅黄橙	
53	132	288	A	SD06 中層	土師器	鉢	10	反			14.0	浅黄橙	耳付
53	133	284	A	SD06 中層	土師器	鉢	10	反			16.0	浅黄橙	耳付
53	134	288	A	SD06 中層	土製品	碗形	30	反		2.6	6.4	浅黄橙	
53	135	272	A	SD06 中層	土製品	碗形	30				8.0	にぶい橙	
53	136	376	A	SD06 中層	土製品	碗形	30	反		4.2	6.8	にぶい橙	
53	137	376	A	SD06 中層	土製品	碗形	30		7.2		6.6	浅黄橙	
53	138	376	A	SD06 中層	土製品	高坏形	20	反				にぶい橙	底径 3.0
53	139	299	A	SD06 中層	土製品	坏形	10		3.9			にぶい橙	
53	140	283	A	SD06 中層	土製品	坏形	5		2.8	2.5	2.7	にぶい橙	底径 1.7
53	141	288	A	SD06 中層	石製品	砥石			12.6	5.5	3.1		175 g、凝灰岩
53	142	392	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			6.6	にぶい黄橙	
53	143	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			6.8	にぶい橙	
53	144	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	10	反			7.0	にぶい黄橙	
53	145	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.0	灰褐	
53	146	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	20	反			6.6	明褐灰	
53	147	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	10	反			6.4	浅黄橙	
53	148	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.0	にぶい黄橙	
53	149	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.2	にぶい黄橙	
53	150	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.2	にぶい橙	

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
53	151	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.6	にぶい黄橙	
53	152	393	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.2	浅黄	
53	153	393	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.2	にぶい黄橙	
53	154	300	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.4	灰黄	
53	155	393	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	10	反			7.5	にぶい黄橙	
53	156	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.8	にぶい橙	
53	157	283	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			8.0	にぶい黄橙	
53	158	393	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			8.2	にぶい黄橙	
53	159	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			10.0	にぶい黄橙	
53	160	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.0	灰褐	胎土：砂多い
53	161	276	A	SD06 中層	土師器	製塩土器	5	反			7.4	にぶい橙	胎土：砂多い
54	162	246	A	SD06 上層	須恵器	坏蓋	40	反		2.4	13.6	青灰	摘径 1.7、ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
54	163	238	A	SD06 上層	須恵器	坏蓋	10	反			12.8	青灰	SX02
54	164	236	A	SD06 上層	須恵器	坏蓋	10	反			11.8	青灰	ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
54	165	230	A	SD06 上層	須恵器	碗	10	反			11.2	青灰	SX02
54	166	239	A	SD06 上層	須恵器	碗	70	反		3.7	12.8	灰白	底径 6.4、糸切、SX02
54	167	248・280 他	A	SD06 上層	須恵器	箱坏	70			3.8	12.6	灰	墨書、底辺 9.0、ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
54	168	240	A	SD06 上層	須恵器	箱坏	20	反		5.1	17.1	灰白	底径 12.4、ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
54	169	207	A	SD06 上層	須恵器	鋺形	10	反			18.0	灰	SX02
54	170	233	A	SD06 上層	須恵器	皿	40	反		2.2	17.5	青灰	底径 9.0、SX02
54	171	266	A	SD06 上層	須恵器	皿	10	反		1.6	18.2	青灰	底径 14.4、SX02
54	172	242	A	SD06 上層	須恵器	壷	10	反			10.6	暗青灰	SX02
54	173	268	A	SD06 上層	須恵器	甕	10					青灰	SX02
54	174	237	A	SD06 上層	土師器	坏身	60	反		3.9	14.0	にぶい黄褐色	底径 11.0、内面赤褐色、SX02
54	175	242	A	SD06 上層	土師器	皿	10	反		1.8	16.2	浅黄橙	内外面赤彩、SX02
54	176	231	A	SD06 上層	土師器	皿	50	反		2.1	16.8	赤褐色	内外面赤彩、SX02
54	177	254	A	SD06 上層	土師器	甕	10	反			20.8	浅黄橙	SX02
54	178	235	A	SD06 上層	土師器	甕	10	反			29.6	橙	SX02
54	179	243	A	SD06 上層	土師器	甕	10	反			27.2	浅黄橙	SX02
54	180	245	A	SD06 上層	土師器	甕	10	反			31.0	橙	SX02
54	181	247	A	SD06 上層	土師器	甕	20	反			38.4	にぶい橙	SX02
54	182	211	A	SD06 上層	土師器	甕	10	反			41.8	橙	SX02
54	183	220	A	SD06 上層	土製品	土錘	20		3.4	1.7	1.1	にぶい黄橙	5.5g、SX02
54	184	193	A	SD06 上層	鉄製品	不明			13.1	1.6	1.2		42.4g、SX02
55	185	276	A	SD06 上層	須恵器	有台坏身	70			4.0	14.8	灰白	底径 9.2
55	186	276	A	SD06 上層	須恵器	鋺形	10	反			16.0	灰	
55	187	194	A	SD06 上層	須恵器	鋺形	10	反			17.0	灰	
55	188	196	A	SD06 上層	須恵器	碗	5	反	13.0		12.8	灰白	内外面自然釉（ｵﾘｰﾌﾞ灰色）
55	189	280	A	SD06 上層	須恵器	碗	30					灰	底径 6.6、底部に糸切痕、ｹｽﾞﾘ方向左
55	190	280	A	SD06 上層	須恵器	盤	30	反		1.8	19.4	灰	ｹｽﾞﾘ方向左
55	191	280	A	SD06 上層	土師器	坏蓋	10	反			16.0	橙	外面赤彩、、内面浅黄橙
55	192	280	A	SD06 上層	土師器	坏身	20	反			12.0	灰白	
55	193	280	A	SD06 上層	土師器	坏身	20	反		2.9	12.8	にぶい赤褐色	内外面赤彩
55	194	280	A	SD06 上層	土師器	坏身	20	反		3.2	13.4	にぶい赤褐色	内外面赤彩
55	195	276	A	SD06 上層	土師器	坏身	10	反			13.6	明赤褐灰	内外面赤彩
55	196	276	A	SD06 上層	土師器	坏身	5	反		2.8	14.4	明赤褐灰	内外面赤彩、暗文、口唇部に面有
55	197	276	A	SD06 上層	土師器	坏身	10	反		3.9	14.6	明赤褐灰	内外面赤彩
55	198	276	A	SD06 上層	土師器	坏身	50	反		2.8	15.6	橙	内外面赤彩？
55	199	280	A	SD06 上層	土師器	坏身	10	反		2.9	16.0	明赤褐灰	内外面赤彩
55	200	276	A	SD06 上層	土師器	坏身	20	反		4.5	16.4	明赤褐灰	口唇部に面有
55	201	280	A	SD06 上層	土師器	坏身	10	反			16.4	明赤褐灰	内外面赤彩
55	202	276	A	SD06 上層	土師器	皿	30	反		2.0	15.6	にぶい橙	内外面赤彩
55	203	276	A	SD06 上層	土師器	皿	40	反		1.5	15.8	にぶい橙	内外面赤彩（外面底部を除く）
55	204	280	A	SD06 上層	土師器	鉢	20	反			22.0	浅黄橙	
55	205	280	A	SD06 上層	土師器	鉢	5	反			26.0	にぶい橙	外面赤彩
55	206	280	A	SD06 上層	土師器	甕	5	反			39.0	にぶい橙	外面ｽｽ付着
55	207	195	A	SD06 上層	土製品	甑形	20	反			7.5	にぶい橙	
55	208	272	A	SD06 上層	土製品	碗形	30	反			8.0	にぶい橙	
55	209	280	A	SD06 上層	土製品	坏形	60			2.0	2.5	浅黄橙	
55	210	280	A	SD06 上層	土製品	人形	20					にぶい黄橙	頭部のみ
56	211	202・506	A	SD06	須恵器	坏蓋	20					灰	摘径 3.0、ｹｽﾞﾘ方向左
56	212	301	A	SD06	須恵器	箱坏	20	反		3.5	13.8	灰白	底辺 11.0、ｹｽﾞﾘ方向左
56	213	301	A	SD06	須恵器	箱坏	40	反		3.3	12.4	灰	底辺 10.8、ｹｽﾞﾘ方向左
56	214	204	A	SD06	須恵器	箱坏	20	反		4.2	13.2	灰白	
56	215	119	A	SD06	須恵器	有台盤	40	反				灰白	底辺 16.4、ｹｽﾞﾘ方向左
56	216	508	A	SD06	須恵器	壷	10	反	8.4		7.8	灰	
56	217	195・63	A	SD06	須恵器	壷	20	反				灰	壺 G、底辺 5.8、底部糸切
56	218	293	A	SD06	須恵器	壷	10	反				暗灰	壺 G、底辺 5.0、ｹｽﾞﾘ方向左、底部糸切
56	219	501	A	SD06	須恵器	鉢	10	反			21.8	灰	ｹｽﾞﾘ方向左
56	220	293	A	SD06	須恵器	甕	5	反			29.0	灰	自然釉（灰ｵﾘｰﾌﾞ色）、波状紋
56	221	504	A	SD06	須恵器	転用硯	10	反			16.0	灰	坏蓋、内面墨痕
56	222	110	A	SD06	須恵器	転用硯	20	反			14.6	灰白	坏蓋、内面墨痕、ｹｽﾞﾘ方向左
56	223	205	A	SD06	須恵器	転用硯	5	反			23.5	灰	盤、内面墨痕
56	224	16	A	SD06	須恵器	獣足	5		4.4	4.6		灰白	底面以外自然釉
56	225	195	A	SD06	土師器	皿	10	反		1.9	18.0	明赤褐	内外面赤彩

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
56	226	110	A	SD06	土師器	坏身	10	反		2.5	14.0	淡橙	内外面赤彩
56	227	26	A	SD06	土師器	高盤	10	反			19.0	灰白	内外面赤彩
56	228	195	A	SD06	土師器	甕	5	反			25.0	灰白	
56	229	80	A	SD06	土師器	製塩土器	5	反			9.6	にぶい橙	
56	230	206	A	SD06	土師器	製塩土器	5	反			9.6	褐灰	
56	231	80	A	SD06	土師器	製塩土器	5	反			9.0	浅黄橙	
56	232	206	A	SD06	土師器	製塩土器	5	反			7.6	にぶい橙	外面黒褐色
56	233	301	A	SD06	土師器	製塩土器	5	反			7.6	浅黄	
56	234	204	A	SD06	土製品	土錘	50		2.6	1.0	1.0	明赤褐色	2.3 g
56	235	288	A	SD06	灰釉陶器	段皿	5	反			17.8	灰白	内面灰釉ハケ塗り、ｹｽﾞﾘ方向左
56	236	301	A	SD06	山茶碗	碗	20					灰白	底径 8.0、内面自然釉、糸切
56	237	283	A	SD06	山茶碗	碗	20	反				灰白	底径 8.2、糸切、籾痕
56	238	283	A	SD06	山茶碗	碗	20	反				灰白	底径 7.8
56	239	204	A	SD06	山茶碗	小皿	70			2.6	8.7	灰白	底径 4.2、内面自然釉、糸切
57	240	382	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	坏蓋	10	反	13.6			灰白	ｹｽﾞﾘ方向左
57	241	369	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	坏蓋	40	反	17.6		17.0	灰白	ｹｽﾞﾘ方向左
57	242	385	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	有台坏身	20	反		3.5	14.4	灰白	底径 9.8
57	243	367	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	有台坏身	40					灰白	底径 8.6、ｹｽﾞﾘ方向左
57	244	294	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	箱坏	30	反		4.0	12.4	暗灰	底径 10.6
57	245	303	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	箱坏	20	反		5.9	16.8	灰白	底径 13.2
57	246	289	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	箱坏	30				16.6	灰白	底径 12.6、ｹｽﾞﾘ方向左
57	247	311	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	坏身	70		11.2	3.7		灰白	底径 6.5、静止ﾍﾗﾅﾃﾞ
57	248	382	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	坏身	5	反			16.0	灰白	窯胎付着
57	249	382	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	坏身	10	反				灰白	底径 6.0、内面底に刻書、外底部糸切
57	250	383	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	双耳坏	10	反			10.4	灰	底径 7.8
57	251	383	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	鋺形	10			5.0	17.8	灰	
57	252	302	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	鋺形	5	反			20.0	灰白	
57	253	382	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	皿	30	反		3.5	18.4	灰白	底径 9.6
57	254	304	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	短頸壺	5	反			10.0	灰白	自然釉（ｵﾘｰﾌﾞ灰色）
57	255	289	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	甕	5	反			38.2	灰白	波状紋
57	256	304・385	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	転用硯	20					灰白	内面墨痕、ｹｽﾞﾘ方向左
57	257	382	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	転用硯	30					灰白	内面墨痕
57	258	312	A	SR01 Ⅱ層	須恵器	陶馬	20					灰白	
57	259	286	A	SR01 Ⅱ層	土師器	有台坏身	20					にぶい橙	底径 7.4、内外面赤彩
57	260	286	A	SR01 Ⅱ層	土製品	高坏形	20					浅黄橙	底径 3.0
57	261	368	A	SR01 Ⅱ層	土製品	土錘	80		6.9	1.8	1.8	黄灰	20.8 g
58	262	191	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	20	反	13.0			灰	
58	263	176	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	10	反			16.0	灰白	
58	264	123	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	20	反	11.0			灰白	
58	265	184	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	5	反	18.8			灰	内外面に重ね焼痕
58	266	158	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	5	反	18.6			灰	
58	267	102	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	坏蓋	20	反	20.4			灰	
58	268	191	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	有台坏身	5	反			14.9	灰白	
58	269	365	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	有台坏身	50	反				灰白	底径 19.6、ｹｽﾞﾘ方向左
58	270	180	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	有台坏身	20	反				灰	底径 10.2、ｹｽﾞﾘ方向左
58	271	176	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	10	反			13.0	灰	
58	272	178	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	5	反			12.1	灰白	
58	273	179	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	10	反			15.4	灰白	底径 11.0、外面黒斑有り
58	274	105	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	40	反		5.2	14.4	灰白	底径 12.4、ｹｽﾞﾘ方向左
58	275	151	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	10	反				灰	底径 11.2、ｹｽﾞﾘ方向左
58	276	111	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	20	反				灰白	底径 12.4
58	277	191	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	箱坏	10	反			14.0	灰	
58	278	191	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	碗	20	反	11.8	3.4		灰	
58	279	69	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	碗	30	反		3.8	13.6	灰	
58	280	123	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	皿	30	反		2.5	16.2	灰白	底径 12.0、ｹｽﾞﾘ方向左
58	281	176	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	皿	5	反			18.0	灰	
58	282	138	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	皿	10	反			16.6	褐灰	
58	283	138	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	盤	50	反	18.4			灰	ﾍﾗ記号「ー」、ｹｽﾞﾘ方向左
58	284	180	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	盤	5	反			18.8	灰	
58	285	179	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	盤	20	反	22.8			灰	ｹｽﾞﾘ方向右
58	286	180	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	盤	5	反	8.0		17.2	灰	
58	287	92	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	有台盤	20	反	17.6	1.5		灰白	底径 10.0
58	288	184	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	有台盤	20	反				灰	底径 8.6
58	289	206	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	壷	10	反			10.0	灰	自然釉
58	290	178・118 他	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	壷	10	反			13.0	灰白	
58	291	179・199 他	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	長頸壷	30	反	9.6		9.4	灰	自然釉
58	292	185	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	壷	5	反			29.0	外面褐	内面黒色、焼膨れ
58	293	92	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	鉢	5	反			34.0	灰	外面ﾀﾀｷ、内面当て具痕
58	294	44	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	甕	20	反			23.6	灰白	
58	295	143	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	甕	5	反			40.0	灰	波状紋
58	296	313	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	甕	10	反			39.0	灰白	波状紋
59	297	102	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	円面硯	10	反	23.7		23.1	灰白	ｽｶｼ数不明
59	298	153	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	円面硯	5	反	14.8		14.8	にぶい赤褐色	自然釉、ｽｶｼ数不明、猿投産
59	299	33	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	円面硯	20	反	18.2			灰	硯面径 14.2、自然釉、倒置で焼成
59	300	178・284	A	SR01 Ⅰ層	須恵器	風字硯	20					灰白	SD06

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
59	301	123	A	SR01 I層	須恵器	転用硯	30	反	14.0		13.4	灰白	内面朱付着
59	302	218	A	SR01 I層	土師器	有台坏身	10	反				にぶい黄橙	高台径 7.4、外面赤彩
59	303	110	A	SR01 I層	土師器	有台坏身	50	反		4.8	13.1	にぶい橙	高台径 8.2、内外面赤彩
59	304	364	A	SR01 I層	土師器	坏身	30	反		3.4	14.0	淡黄	底径 9.2、内外面赤彩、外面煤付着
59	305	110	A	SR01 I層	土師器	坏身	50	反		3.5	13.8	灰黄	底径 10.0、内外面赤彩
59	306	110	A	SR01 I層	土師器	坏身	80			4.9	12.4	黄褐色	底径 9.4
59	307	151	A	SR01 I層	土師器	坏身	10	反			12.5	浅黄橙	
59	308	206	A	SR01 I層	土師器	皿	20	反			18.0	浅黄橙	底径 14.4、内外面赤彩
59	309	86	A	SR01 I層	土師器	皿	5	反		2.1	16.0	明赤褐色	内外面赤彩
59	310	69	A	SR01 I層	土師器	皿	5	反		2.0	16.4	明赤褐色	内外面赤彩
59	311	123	A	SR01 I層	土師器	皿	10	反		2.4	19.0	浅黄橙	底径 14.0、内外面赤彩
59	312	138	A	SR01 I層	土師器	皿	5	反				にぶい黄橙	赤彩、漆付着
59	313	128	A	SR01 I層	土師器	高盤	5	反				橙	11 角、外面赤彩
59	314	166	A	SR01 I層	土師器	甑	10					浅黄橙	把手
59	315	140	A	SR01 I層	土師器	甕	5	反			20.0	にぶい橙	
59	316	69	A	SR01 I層	土師器	甕	5	反			37.6	にぶい橙	
59	317	206	A	SR01 I層	土師器	甕	20	反			35.0	にぶい黄橙	
59	318	188	A	SR01 I層	土製品	土錘	90		3.8	0.9	0.8	にぶい黄橙	2.7g
59	319	180	A	SR01 I層	土製品	土錘	60		3.1	1.1	1.0	にぶい橙	2.6 g
59	320	152	A	SR01 I層	土製品	土錘	90		5.8	2.1	1.9	にぶい黄橙	8.5g
59	321	178	A	SR01 I層	土製品	土錘	60		4.2	1.7	1.6	にぶい黄橙	3.0g
60	322	179	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反	15.0			灰白	
60	323	179	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	5	反	16.0			灰白	
60	324	174	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 6.6、内面灰釉
60	325	197・203	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.4、内面灰釉、ｹｽﾞﾘ方向左
60	326	20	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.4、内面灰釉、糸切、ｹｽﾞﾘ方向右
60	327	169	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 8.0、内面灰釉、ｹｽﾞﾘ方向左
60	328	89	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径 6.8、ｹｽﾞﾘ方向左
60	329	19	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.4
60	330	506	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	60	反		4.1	14.6	灰白	底径 6.8、ｹｽﾞﾘ方向左、重ね焼き痕
60	331	171	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	20					灰白	底径 6.6、糸切
60	332	505	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径 7.2、ｹｽﾞﾘ方向左
60	333	196	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.2、灰釉ﾊｹ塗り
60	334	508	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	40	反				灰白	底径 7.6、内外面灰釉、糸切
60	335	184	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	5	反				灰	底径 7.6
60	336	142	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.8、内面灰釉
60	337	179	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	20	反				灰	底径 8.0、ｹｽﾞﾘ方向左
60	338	178	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	10					灰白	底径 8.0、ｹｽﾞﾘ方向左
60	339	176	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	20	反				灰白	底径 5.4
60	340	363	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	50	反				灰白	底径 6.2、重ね焼痕、糸切、ｹｽﾞﾘ方向右
60	341	150	A	SR01 I層	灰釉陶器	碗	30					灰白	底径 7.2、内面灰釉、重ね焼痕、糸切
60	342	178	A	SR01 I層	灰釉陶器	段皿	20	反	16.4			灰白	
60	343	109	A	SR01 I層	灰釉陶器	皿	20	反				灰白	底径 6.2、内面灰釉（ｵﾘｰﾌﾞ灰）、ｹｽﾞﾘ方向左
60	344	99	A	SR01 I層	灰釉陶器	皿	20	反				灰白	底径 8.8、ｹｽﾞﾘ方向左。
60	345	102	A	SR01 I層	灰釉陶器	水瓶	20					灰	
60	346	172	A	SR01 I層	灰釉陶器	小壷	10	反				灰白	外面灰釉
60	347	292・277 他	A	SR01 I層	灰釉陶器	平瓶	20	反				灰黄	外面灰釉
60	348	170	A	SR01 I層	灰釉陶器	平瓶	10					灰白	把手、外面灰釉
60	349	143	A	SR01 I層	土師器	甕	5	反			22.0	明褐	清郷型甕
60	350	86	A	SR01 I層	土師器	甕	5	反			25.2	にぶい橙	清郷型甕
60	351	58	A	SR01 I層	山茶碗	碗	60		15.8	5.2		にぶい黄橙	底径 7.9
60	352	92	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反			14.0	灰	漬け掛け
60	353	92	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反			16.0	灰	漬け掛け
60	354	179	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	16.0			灰	漬け掛け、輪花
60	355	191	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	16.6			灰	漬け掛け
60	356	163	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	17.0			灰	
60	357	277	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反			17.0	灰白	漬け掛け（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）
60	358	138	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	17.2			灰	
60	359	163	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	17.4			灰白	漬け掛け
60	360	180	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	18.0			灰白	漬け掛け、内面黒変
60	361	179	A	SR01 I層	山茶碗	碗	20	反	18.0			灰白	漬け掛け
60	362	138	A	SR01 I層	山茶碗	碗	20	反	18.0			灰	漬け掛け
60	363	166	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反	14.2			灰白	自然釉
60	364	163	A	SR01 I層	山茶碗	碗	10	反			15.6	灰	
61	365	104	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.4、内面自然釉、糸切、籾痕、12 世紀
61	366	97	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.0、内面灰釉、重ね焼痕、糸切
61	367	92	A	SR01 I層	山茶碗	碗	20	反				灰白	底径 8.0
61	368	356・283	A	SR01 I層	山茶碗	碗	70					灰白	底径 7.2、糸切、ｽｽ付着、籾痕
61	369	277	A	SR01 I層	山茶碗	碗	20	反				灰白	底径 8.3、内面自然釉、糸切、籾痕
61	370	149	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30					灰白	底径 6.3、内面自然釉、窯胎付着
61	371	72	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.6、糸切、籾痕
61	372	45	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.0、ﾍﾗｹｽﾞﾘ
61	373	99	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30					灰白	底径 7.3
61	374	148	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30					灰	底径 7.4、糸切、重ね焼痕
61	375	116	A	SR01 I層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.4

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
61	376	277	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30					灰白	底径 7.6、糸切
61	377	91	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 8.1
61	378	57	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 8.2
61	379	112	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	40	反				灰白	底径 7.0
61	380	154	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30					灰	底径 7.1
61	381	46	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 7.1
61	382	187	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰	底径 7.4
61	383	180	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰	底径 7.6
61	384	92	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30					灰白	底径 8.0
61	385	180	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	30	反				灰	底径 8.4
61	386	138	A	SR01 I 層	山茶碗	小碗	40	反	8.3	2.9		灰白	底径 4.2
61	387	176	A	SR01 I 層	山茶碗	小碗	10					灰白	底径 4.1
61	388	508	A	SR01 I 層	山茶碗	小皿	40	反		2.9	7.9	灰白	底径 4.6、糸切
61	389	160	A	SR01 I 層	山茶碗	小皿	70		8.4	2.4		灰白	底径 4.4、糸切
61	390	93	A	SR01 I 層	山茶碗	小皿	40	反	9.6	1.9		灰白	底径 5.2
61	391	146	A	SR01 I 層	青白磁	合子	25	反	6.6			水色透明	底径 4.5
61	392	109	A	SR01 I 層	白磁	碗	5	反				灰白色透明	底径 6.8
61	393	160	A	SR01 I 層	青磁	碗	5					白色透明	
61	394	141	A	SR01 I 層	青磁	碗	5					緑灰透明	
61	395	227	A	SR01 I 層	青磁	碗	5					オリーブ黄色	
61	396	67	A	SR01 I 層	青磁	碗	5					緑色釉	
61	397	286·69	A	SR01 I 層	中世陶器	壷	5					灰	渥美産
61	398	119	A	SR01 I 層	中世陶器	壷	5					灰	渥美産
61	399	73	A	SR01 I 層	黒釉陶器	天目茶碗	10	反				乳白色	
61	400	60	A	SR01 I 層	石製品	砥石							
61	401	89	A	SR01 I 層		鉄滓			4.8	6.3	2.3		80.5g
61	402	90	A	SR01 I 層	銅製品	銭貨			2.4		0.1		北宋銭（元豊通宝）
62	403	463	A	SD06 下層	土師器	坏身	40	反		4.2	12.8	浅黄橙	1 号墨書、内外面赤彩、SX08
62	404	204・318	A	SD06 中層	土師器	坏身	70			3.8	13.3	にぶい橙	2 号墨書、底径 7.9、内外面赤彩、SX03
62	405	345·352	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	90			3.8	13.3	灰白	3 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左、SX06
62	406	338	A	SD06 中層	土師器	坏身	60			3.5	11.8	浅黄橙	4 号墨書、外面一部赤彩、SX06
62	407	287・304	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	20	反			14.6	灰	5 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
62	408	284	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	10	反			14.7	灰	6 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
62	409	284	A	SD06 中層	須恵器	坏蓋	10					灰	7 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
62	410	284	A	SD06 中層	須恵器	有台坏身	40	反				灰	8 号墨書、底径 9.2、ｹｽﾞﾘ方向左
62	411	284・205	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	20	反				暗灰	9 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
62	412	284	A	SD06 中層	須恵器	箱坏	10					灰	10 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向右
62	413	315	A	SD06 中層	須恵器	皿	60			2.0	17.6	灰	11 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左、SX03
62	414	284	A	SD06 中層	須恵器	皿	40	反		2.0	16.0	灰白	12 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
62	415	287	A	SD06 中層	土師器	坏蓋	20				18.0	浅黄橙	13 号墨書、内面一部・外面赤彩
62	416	284	A	SD06 中層	土師器	皿	10	反				にぶい黄橙	14 号墨書、内外面赤彩
62	417	288	A	SD06 中層	土師器	坏身	5					にぶい橙	15 号墨書
63	418	232	A	SD06 上層	須恵器	皿	40	反		2.4	18.2	灰	16 号墨書、底径 12.3、ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
63	419	211	A	SD06 上層	土師器	坏蓋	20	反				にぶい黄橙	17 号墨書、摘径 2.5、内外面赤彩、SX02
63	420	244	A	SD06 上層	須恵器	坏蓋	40	反			15.0	灰白	18 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左、SX02
63	421	280	A	SD06 上層	須恵器	箱坏	10	反				灰	19 号墨書、底径 10.0、ｹｽﾞﾘ方向左
63	422	280	A	SD06 上層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	20 号墨書、底径 10.4、ｹｽﾞﾘ方向左
63	423	280	A	SD06 上層	須恵器	碗	5	反				灰白	21 号墨書、底径 7.0、ｹｽﾞﾘ方向左
63	424	280	A	SD06 上層	須恵器	碗	5	反				灰白	22 号墨書、底径 6.4、ｹｽﾞﾘ方向左
63	425	280	A	SD06 上層	須恵器	皿	20					灰	23 号墨書、底径 8.4、ｹｽﾞﾘ方向左
63	426	280	A	SD06 上層	土師器	坏蓋	10	反				にぶい橙	24 号墨書、摘径 2.4、外面赤彩
63	427	280	A	SD06 上層	土師器	皿	10	反				にぶい橙	25 号墨書
63	428	195	A	SD06 上層	須恵器	転用硯	40	反				灰白	26 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左、内面墨痕
63	429	199	A	SD06 上層	須恵器	碗（皿）	10	反				灰白	27 号墨書
63	430	110·280 他	A	SD06	須恵器	坏蓋	60	反		2.8	13.6	灰白	28 号墨書、摘径 2.1、ｹｽﾞﾘ方向左
63	431	110	A	SD06	須恵器	坏蓋	10	反				灰	29 号墨書
63	432	206	A	SD06	須恵器	箱坏（皿）	10	反				灰	30 号墨書、糸切
63	433	202	A	SD06	土師器	不明	10					にぶい黄橙	31 号墨書、内外面赤彩
64	434	111	A	SR01 II 層	須恵器	蓋	10	反				灰	32 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向
64	435	508	A	SR01 II 層	須恵器	蓋	10	反				灰白	33 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	436	382	A	SR01 II 層	須恵器	坏身	10	反				灰	34 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	437	175	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	20	反				灰白	35 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	438	175	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	36 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	439	387	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	37 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	440	382	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	38 号墨書
64	441	289	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	39 号墨書
64	442	289	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	5	反				灰	40 号墨書
64	443	508	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	5	反				灰	41 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	444	302	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	5	反				灰白	42 号墨書
64	445	304	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰	43 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	446	505	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	44 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	447	383	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	45 号墨書
64	448	303	A	SR01 II 層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	46 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	449	310	A	SR01 II 層	須恵器	有台盤	60			2.5	15.6	灰白	47 号墨書
64	450	382·383	A	SR01 II 層	須恵器	皿	30	反		1.9	16.0	灰白	48 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
64	451	156	A	SR01 I 層	須恵器	蓋	10	反				灰白	49 号墨書
64	452	43	A	SR01 I 層	須恵器	箱坏	70			3.7	12.6	灰白	50 号墨書
64	453	102	A	SR01 I 層	須恵器	箱坏	5	反					51 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	454	162	A	SR01 I 層	須恵器	箱坏	20	反				灰白	52 号墨書、ｹｽﾞﾘ方向左
64	455	103	A	SR01 I 層	須恵器	皿	20	反				灰白	53 号墨書
64	456	287	A	SR01 I 層	灰釉陶器	皿	10	反		3.1	15.4	灰白	54 号墨書
64	457	289	A	SR01 I 層	灰釉陶器	皿	30					灰白	55 号墨書
64	458	286	A	SR01 I 層	灰釉陶器	碗	30	反				灰白	56 号墨書、灰釉 K14（新）
64	459	92	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	20	反				灰白	57 号墨書
64	460	89	A	SR01 I 層	山茶碗	碗	20	反				灰白	58 号墨書
64	461	125	A	SR01 I 層	山茶碗	小皿	20					灰白	59 号墨書
65	462	488	A	SE01	山茶碗	碗	70			5.6	15.0	灰白	底径 7.8、内面ｽｽ付着、糸切
65	463	48・49	A	SE01 上層	山茶碗	碗	60			5.0	16.4	灰白	底径 8.8、糸切
65	464	489	A	SE01	山茶碗	碗	60			4.6	15.5	灰白	底径 6.8、内面ｽｽ付着
65	465	490	A	SE01	山茶碗	碗	100			4.9	15.6	灰白	底径 7.4、外面灰釉、糸切、籾痕
65	466	486	A	SE01	山茶碗	小皿	90			2.1	8.5	灰白	底径 4.8、自然釉、糸切
65	467	487	A	SE01	山茶碗	小皿	90			1.8	8.6	灰白	底径 4.6、糸切
65	468	380	A	SK02	土師器	有台坏身	10	反				橙	底径 7.6
65	469	381	A	SK03	須恵器	壷	10					灰	底径 13.0
65	470	47	A	SD01	須恵器	碗	30	反				灰白	底径 7.6
65	471	42	A	SD01 上層	山茶碗	碗	10	反				灰白	底径 7.2、籾痕
65	472	42	A	SD01 上層	山茶碗	碗	10	反				灰白	底径 7.4
65	473	129	A	SD05	須恵器	箱坏	30	反		3.5	13.0	灰	底径 10.6、ｹｽﾞﾘ方向左
65	474	131	A	SD05	山茶碗	碗	10					灰白	底径 7.4
65	475	306	A	SD05	山茶碗	小碗	30	反				灰白	底径 7.3
65	476	129	A	SD05	山茶碗	小碗	10	反				灰白	底径 6.8、糸切、籾痕
65	477	129	A	SD05	山茶碗	小皿	30	反		1.9	7.6	灰白	底径 5.0
65	478	131	A	SD05	山茶碗	鉢	20					灰白	底径 12.0、ｹｽﾞﾘ方向左
66	479	9	A	包含層	須恵器	皿	20	反	15.0		14.6	灰白	ｹｽﾞﾘ方向右
66	480	10-14	A	包含層	土師器	有台坏身	40	反		4.9	14.4	明赤褐色	底径 10.7、ｹｽﾞﾘ方向左
66	481	7	A	包含層	山茶碗	碗	20	反		4.9	14.4	灰白	底径 8.0、自然釉、糸切
66	482	66	A	包含層	山茶碗	碗	30	反				灰白	底径 6.8、自然釉、重ね焼痕、糸切、籾痕
67	483	698	B	SH01(SP20)	須恵器	坏蓋	10	反			11.6	灰白	
67	484	701	B	SH01(SP22)	須恵器	坏身	10	反			15.0	灰	
67	485	701	B	SH01(SP22)	須恵器	皿	10	反			16.0	青灰	
67	486	705	B	SH01(SP23)	土師器	坏蓋	10	反				にぶい橙	摘径 3.1、内面一部・外面赤彩
67	487	727	B	SH01(SP18)	木製品	柱根			41.2	22.7			
67	488	728	B	SH01(SP20)	木製品	柱根			46.8	6.4	4.1		
67	489	729	B	SH01(SP23)	木製品	柱根			27.3	15.3			
67	490	730	B	SH01(SP25)	木製品	柱根			18.3	12.5	9.8		
67	491	726	B	SP27	土師器	坏身	10	反			12.2	橙	
67	492	726	B	SP27	土師器	皿	10	反			12.4	橙	内面赤彩
67	493	736	B	SP33	須恵器	坏蓋	10	反				灰	摘径 2.7
67	494	654	B	SD17	土師器	甕	10	反			16.4	橙	
67	495	655	B	SD17	土製品	不明	10	反	1.7	0.7		明黄褐色	
67	496	694	B	SD20	須恵器	坏身	10	反			13.2	灰白	
67	497	689	B	SE03	土製品	坏形	80		3.0	2.3	2.6	にぶい橙	
67	498	689	B	SE03	土製品	高坏形	50			2.3	3.4	にぶい橙	胴径 2.3、底径 3.9
67	499	617	B	SE03	山茶碗	碗	70	反		5.8	15.8	灰白	底径 6.9
67	500	689	B	SE03	山茶碗	碗	20	反			15.6	灰白	輪花
67	501	689	B	SE03	山茶碗	碗	20	反			18.0	灰白	輪花
67	502	689	B	SE03	山茶碗	碗	30	反			17.4	灰白	輪花
67	503	617	B	SE03	山茶碗	碗	10	反			17.8	灰白	輪花、内面ｽｽ付着、自然釉
67	504	709	B	SE03 1 層	山茶碗	碗	20	反			16.2	灰	自然釉
67	505	711・709	B	SE03 3・1 層	山茶碗	碗	40	反				灰	底径 8.2、ｽｽ付着
67	506	724	B	SE03 6 層	山茶碗	小碗	60	反		3.1	9.0	灰白	底径 4.3、自然釉
67	507	709	B	SE03 1 層	山茶碗	小碗	50	反		2.2	9.8	灰白	底径 6.0、糸切、自然釉
67	508	723	B	SE03 5 層	山茶碗	小碗	70			3.0	9.3	灰白	底径 4.8、自然釉、籾痕
67	509	652	B	SE03	山茶碗	小碗	50	反		3.4	9.2	灰白	底径 5.2
67	510	689	B	SE03	山茶碗	小碗	70			3.3	9.4	灰白	底径 4.9、自然釉
67	511	689	B	SE03	土師器	甕	10	反			20.6	にぶい褐色	清郷型甕
67	512	725	B	SE03	土製品	土錘	100		5.1	1.2	1.1	灰黄褐	
67	513	691	B	SE03	木製品	曲げ物			36.3	4.9	0.8		底板
67	514	632	B	SX11	須恵器	皿	10	反			19.0	青灰	
67	515	632	B	SX11	須恵器	甕	10	反			26.8	青灰	
67	516	754	B	SX11	灰釉陶器	碗	10	反			16.2	灰白	
67	517	632	B	SX11	灰釉陶器	碗	20	反				灰	底径 7.0、重ね焼痕
67	518	632	B	SX11	灰釉陶器	碗	10	反				灰白	底径 7.4, 高台のみ灰色
67	519	746	B	SX11 最下層	山茶碗	碗	20	反				灰白	底径 9.4、糸切
67	520	629	B	SX11	山茶碗	碗	40	反		5.0	15.8	灰白	60 号墨書、底径 7.8、糸切
68	521	614	B	包含層	須恵器	壺耳	5					灰白	自然釉
68	522	634	B	包含層	土師器	坏蓋	10	反				橙	外面赤彩
68	523	675	B	包含層	土師器	有台坏身	10	反				橙	底径 11.0、内面赤彩
68	524	739	B	包含層	土師器	坏身	10	反			16.4	橙	内外面赤彩、暗文
68	525	601	B	包含層	土師器	坏身	10	反		3.3	12.0	灰白	底径 7.8、内面赤彩

Fig.	番号	取上番号	区	遺構層位	種別	細別	残存率	反転	器径	器高	口径	色調	備考
68	526	613	B	包含層	灰釉陶器	碗	40					灰白	底径 7.6、重ね焼痕、糸切
68	527	635	B	包含層	土師質土器	小皿	40					橙	底径 4.1、糸切
68	528	601	B	包含層	山茶碗	碗	50					灰白	底径 7.9、籾痕、内面ｽｽ付着
68	529	609・645	B	包含層	山茶碗	鉢	10	反				灰	底径 16.0
68	530	615	B	包含層	石製品	砥石			7.6	8.2	2.0		110 g
69	531	1006	C1	包含層	土師器	坏蓋	10					にぶい黄橙	摘径 3.2、摘頸径 2.7、外面赤彩
69	532	1009	F1	包含層	灰釉陶器	碗	5	反				灰白	底径 7.4
69	533	1046	F2	SK04	須恵器	坏蓋	10	反				灰	ｹｽﾞﾘ方向左
69	534	1011	F2	SK04	須恵器	箱坏	5	反			12.4	灰	
69	535	1042	F2	SK04	須恵器	箱坏	10	反			10.0	ｵﾘｰﾌﾞ黒	内面灰色、外面自然釉
69	536	1042	F2	SK04	土師器	坏身	20	反			13.0	にぶい黄褐	内外面赤彩
69	537	1011	F2	SK04	土師器	甕	5	反			24.0	明赤褐	
69	538	1042	F2	SK04	土師器	甕	5	反			29.2	にぶい橙	
69	539	1038	F2	SK04	土師器	甕	5	反			29.8	浅黄	
69	540	1042	F2	SK04	土師器	甕	5					橙	頸径 18.0
69	541	1036	F2	SK04	土製品	土錘	70		3.2	0.9	0.8	浅黄	2.6g
69	542	1027	F2	SK05	土師器	坏身	10	反			12.0	灰白	内面赤彩
69	543	1027	F2	SK05	山茶碗	碗	5	反				灰白	
69	544	1054	F2	SK06	土師器	坏身	20	反			14.0	にぶい橙	内外面赤彩
69	545	1051	F2	SK06	土師器	甕	5	反			20.0	橙	
69	546	1050	F2	SK06	土師器	甕	5	反			23.0	にぶい橙	
69	547	1043	F2	SK06	土師器	甕	10	反			26.0	橙	
69	548	1050	F2	SK06	土師器	甕	10	反			26.0	にぶい橙	
69	549	1033	F2	SD26	須恵器	甕	5					灰白	ﾀﾀｷ
69	550	1035	F2	SD26	土製品	土錘	100		4.4	1.2	1.2	灰白	5.4g
69	551	1044	F2	SD26	灰釉陶器	碗	5	反				灰白	底径 8.2、内面自然釉
69	552	1045	F2	SD26	近世陶器	小碗	70			3.6	7.8	灰白	底径 3.8、施釉、被熱、削り出し高台
69	553	1025・1034	F2	SD26	土師質土器	焙烙	5	反			22.0	明黄橙	外面ｽｽ付着
69	554	1018	F2	包含層	須恵器	坏蓋	10	反	9.0		8.6	灰	
69	555	1017	F2	包含層	須恵器	有台坏身	5	反				灰白	底径 12.6
69	556	1017	F2	包含層	須恵器	箱坏	5	反				灰白	底径 9.4
69	557	1028	F2	包含層	須恵器	箱坏	10	反				灰白	底径 7.8、糸切
69	558	1017	F2	包含層	須恵器	壷	5	反				灰	頸径 8.2、自然釉
69	559	1047	F2	包含層	須恵器	壷	10	反				灰白	底径 14.2、自然釉
69	560	1031	F2	包含層	土師器	甕	5	反			24.0	黄橙	頸径 20.0
69	561	1017	F2	包含層	土師器	甕	5	反			20.8	にぶい橙	頸径 17.2
69	562	1017	F2	包含層	山茶碗	碗	10	反				灰白	底径 7.4、自然釉、重ね焼痕
69	563	1052	F2	包含層	土製品	土錘	100		3.1	1.1	1.1	浅黄橙	3.0g
69	564	1058	F3	SE05 上層	須恵器	坏蓋	30	反	15.4		15.0	灰	ｹｽﾞﾘ方向左
69	565	1057	F3	SE05 下層	須恵器	坏身	5	反			15.0	灰	
69	566	1023・1020	F3	SE05	須恵器	坏身	20	反	16.0			灰	ｹｽﾞﾘ方向左
69	567	1021	F3	SE05 下層	土師器	坏身	10	反			12.6	橙	内外面赤彩
69	568	1030	F3	SE05	土師器	皿	20	反		1.7	14.4	にぶい橙	内外面赤彩
69	569	1030	F3	SE05	土師器	甕	5					明赤褐	清型郷甕
69	570	1022	F3	SE05	山茶碗	碗	60					灰白	底径 7.4、漬け掛け、糸切、籾痕
69	571	1030	F3	SE05	山茶碗	碗	20	反				灰白	
69	572	1005	F3	包含層	須恵器	有台坏身	5	反				灰白	底径 11.0
69	573	1010	F3	包含層	須恵器	有台坏身	5	反				灰白	底径 11.6
69	574	1010	F3	包含層	須恵器	盤（皿）	5	反				灰白	底径 7.8
69	575	1056	F3	包含層	土師器	坏身	5	反			13.7	灰白	内外面赤彩
69	576	1010	F3	包含層	灰釉陶器	碗	5	反				灰白	底径 8.6
69	577	1010	F3	包含層	山茶碗	碗	10	反				灰白	

凡　例

残存率：％表示、10％単位での切り上げ

反転：「反」は反転して図化したもの

大きさの単位は cm

回転体以外の大きさ表示　器径：長さ　器高：幅　口径：厚み

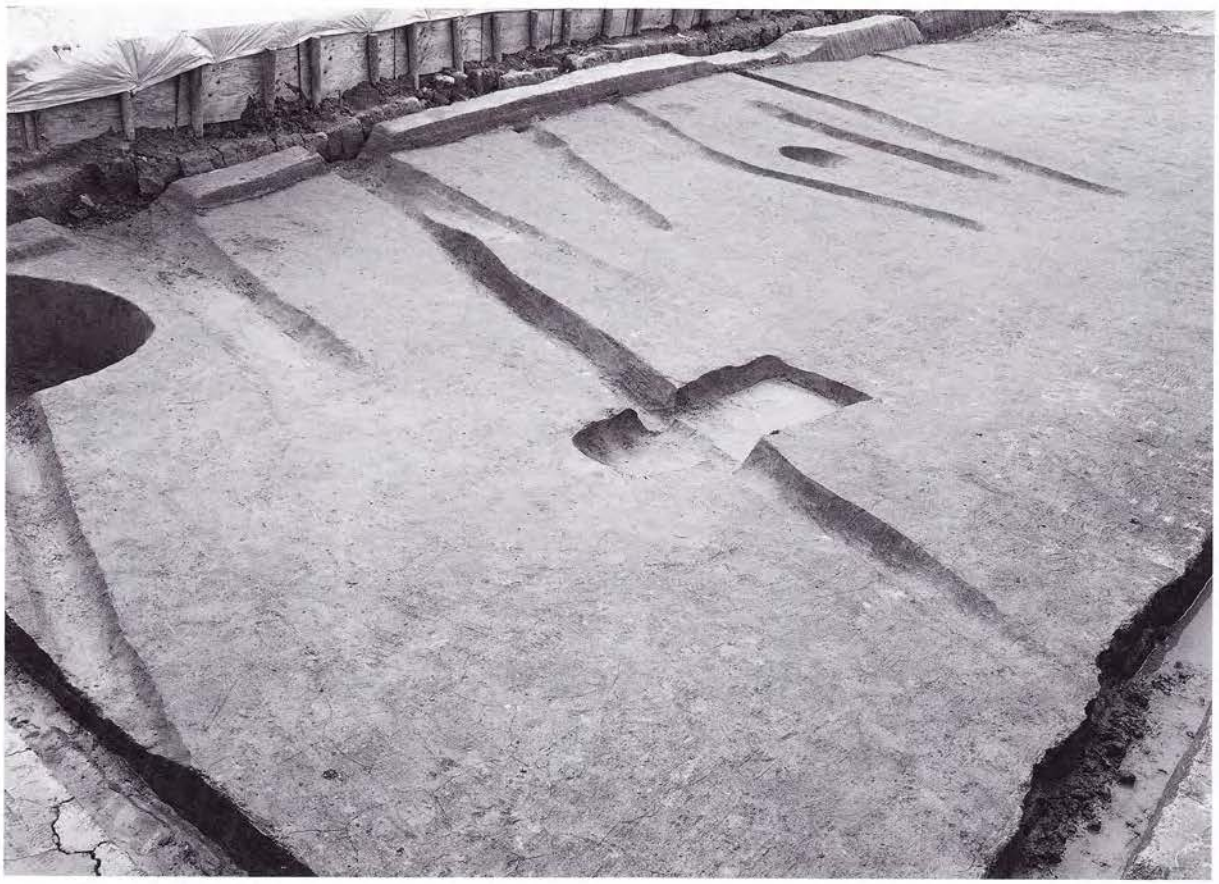
ケズリ方向は、砂粒の移動方向を示す　右：右回転、左：左回転

色調：『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠

図　版

PLATE

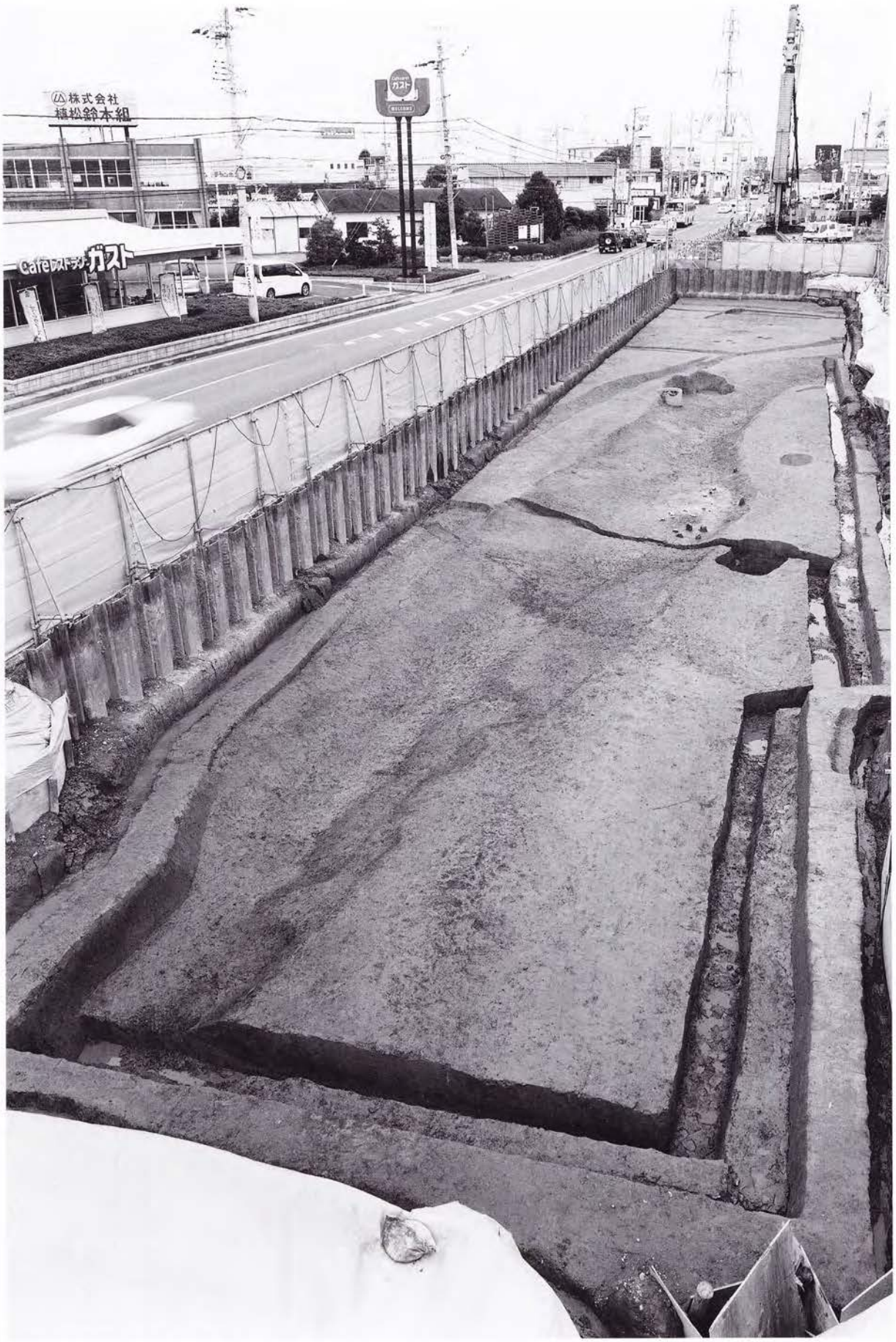
A区　古代面　全景（北西から）



1　A区　弥生時代　全景（北から）

2　A区　弥生時代 SE02 遺物出土状況（南西から）

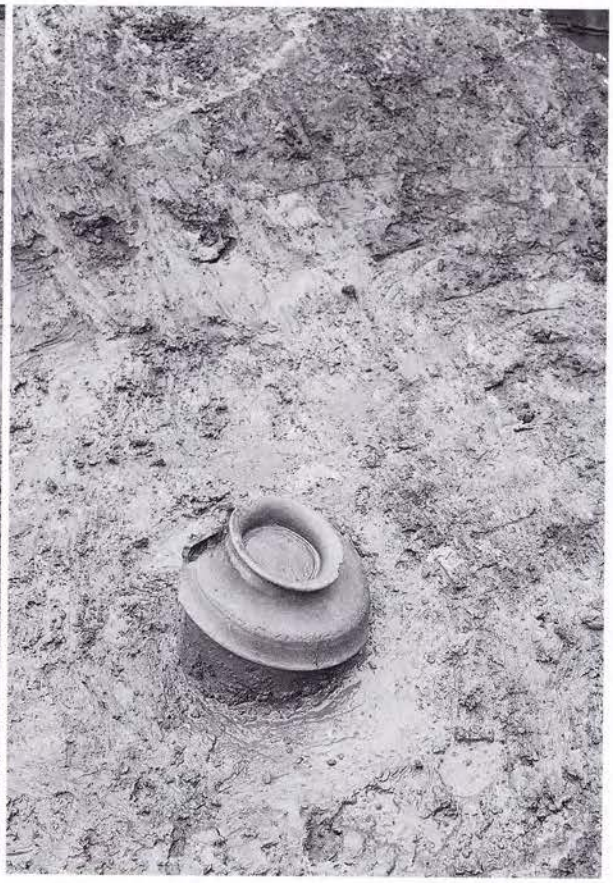
3　A区　弥生時代 SE02（北西から）



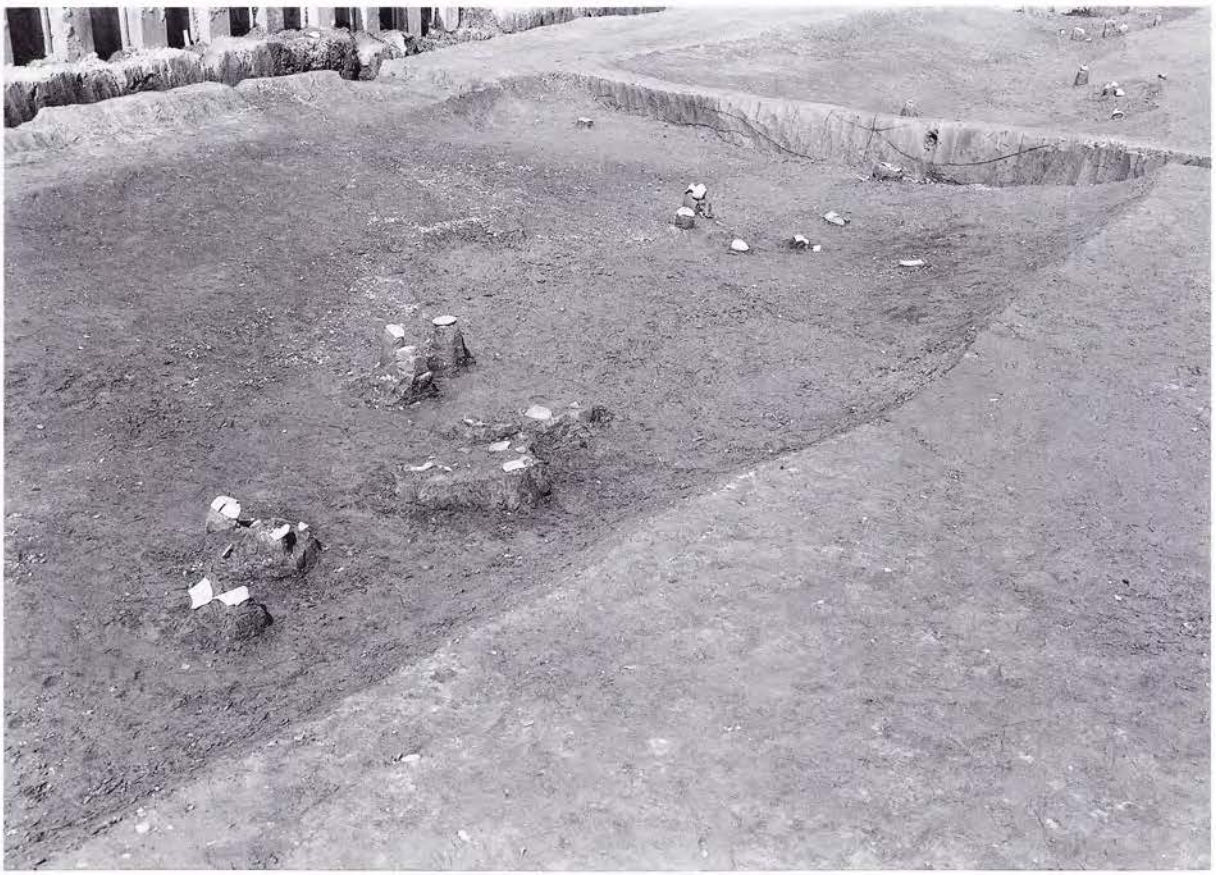
A区　古代面　全景（南から）

1　A区 SD06 下層 SX08 遺物出土状況（北西から）

2　A区 SD06 下層 SX08 遺物出土状況（西から）



3　A区 SD06 下層 SX09 遺物出土状況（北西から）



1　A区 SD06 中層遺物出土状況（南から）

2　A区 SD06 中層 SX03 遺物出土状況（北東から）

3　A区 SD06 中層 SX06 遺物出土状況（北から）

1　A区 SD06 中層 SX05 遺物出土状況（北から）

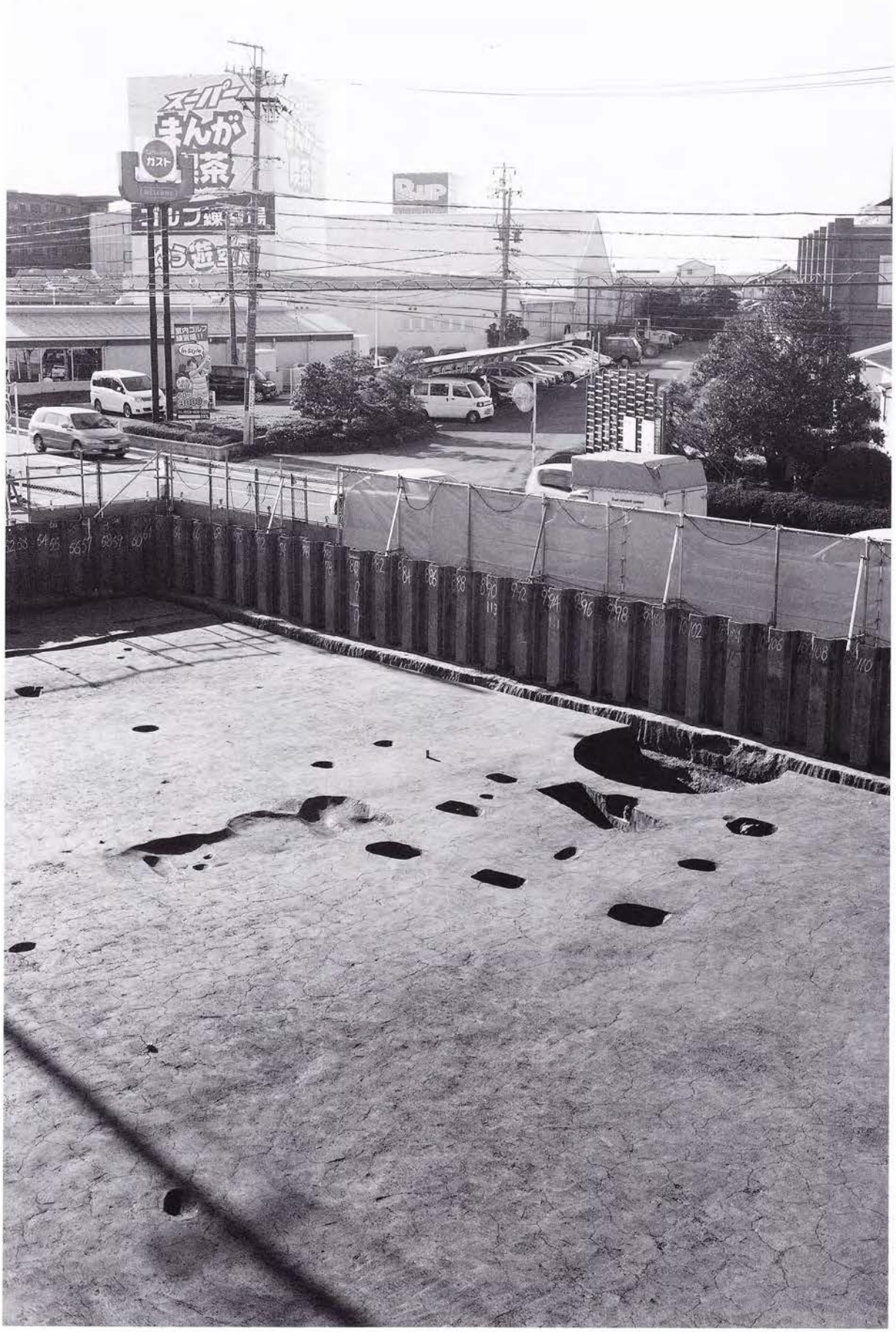
2　A区 SD06 中層 SX05 遺物出土状況（北から）

3　A区 SD06 上層 SX02 遺物出土状況（北から）

1　A区　鎌倉時代 SD01・02（東から）

2　A区　鎌倉時代 SE01（西から）

PL. 8



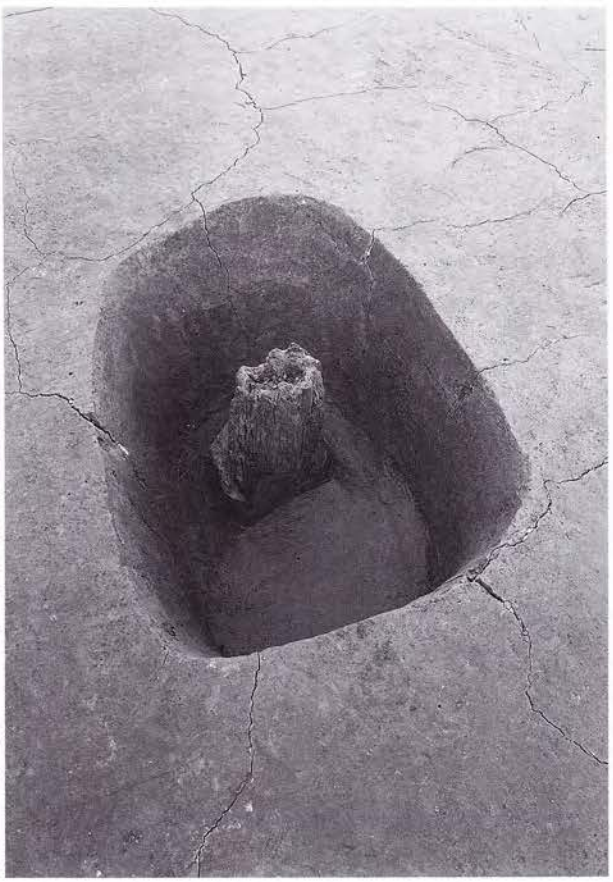
B区　古代面　全景（東から）

1　B区　古代面　全景（東から）

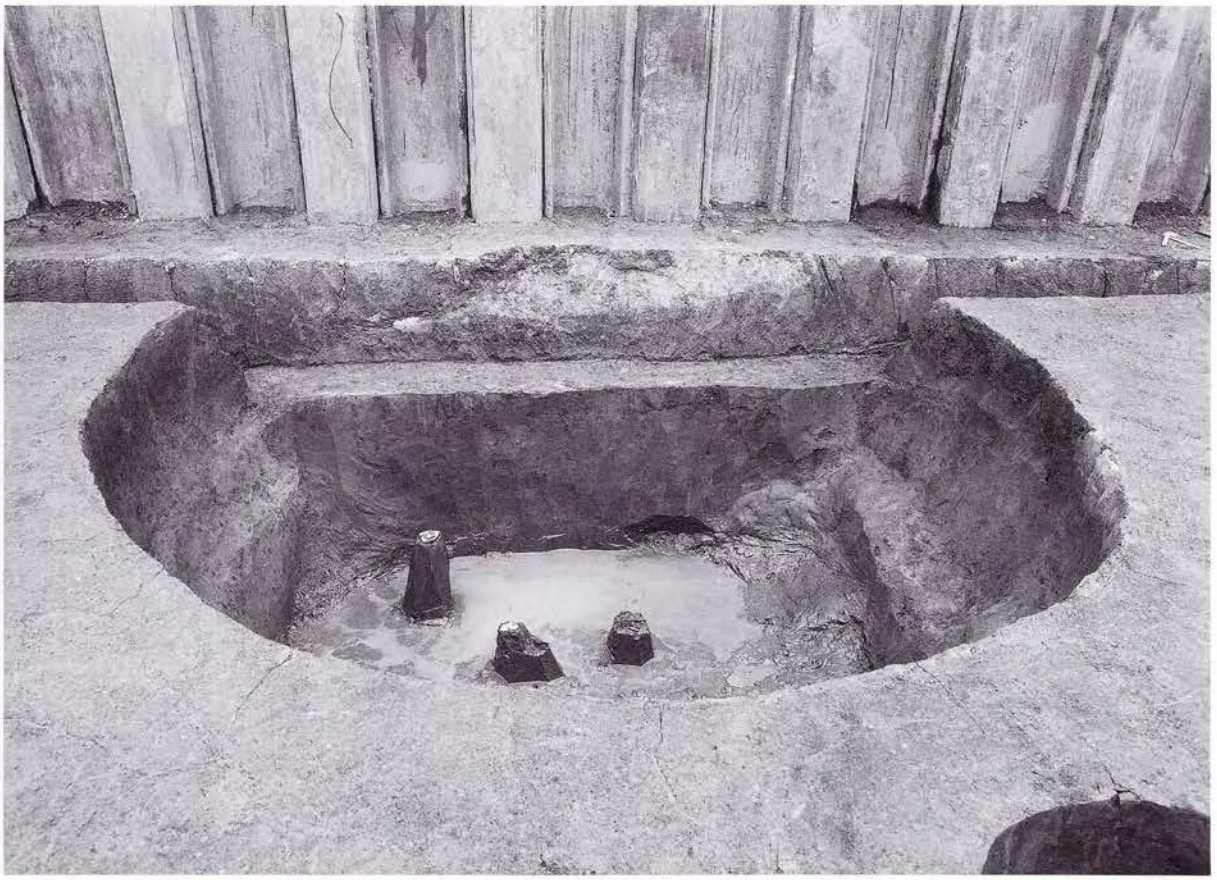
2　B区　古代面　全景（北から）

1　B区　古代 SH01（北西から）

2　B区　古代 SH01- SP18（北西から）



3　B区　古代 SH01- SP23（南西から）



1　B区　鎌倉時代 SE03（南東から）

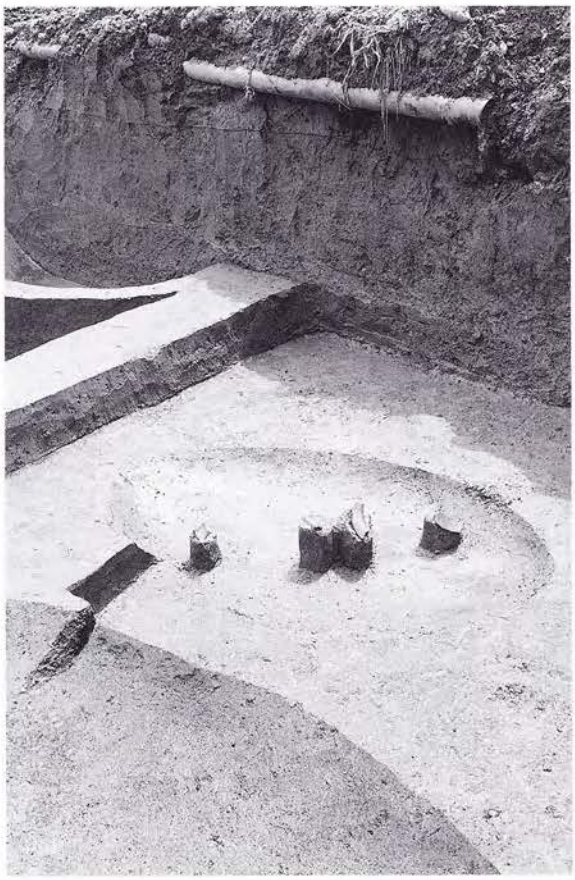
2　B区　近現代 SX11（南西から）

1　C-2区　全景（南東から）

2　D-1区　全景（北西から）

3　E区　全景（南西から）

1　F-1区　全景（北東から）



2　F-2区　古代 SK06 遺物出土状況（西から）

3　F-3区　鎌倉時代 SE05（南から）

1　F-2区　全景（東から）

2　F-2区　全景（西から）

3　F-2区　近世 SD26 遺物出土状況（南西から）

古代 SD06 主要出土遺物

1　古代 SD06 出土　製塩土器

SX08 20

SX08 21

SX08 23

SX09 32

2　古代 SD06 下層　出土遺物

SX03 54

SX04 61

SX04 59

SX05 62

SX05 63

SX05 64

SX05 69

SX05 67

古代 SD06 中層　出土遺物

PL. 18

70

78

79

81

108

136

古代SD06 中層　出土遺物

SX02 162

SX02 166

SX02 174

SX02 176

185

190

198

202

203

217

239

古代 SD06 上層　出土遺物

PL. 20

247

274

258

303

305

306

330

351

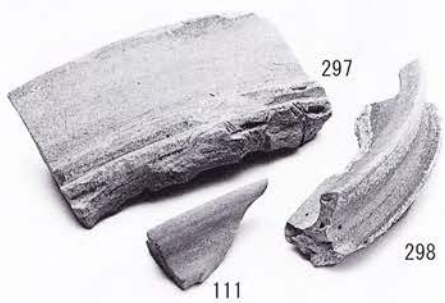
391

400

古代～鎌倉時代 SR01 出土遺物

1　SD06 出土　文字関連遺物（1）

299



300

300（ウラ）

2　SD06 出土　文字関連遺物（2）

PL. 22

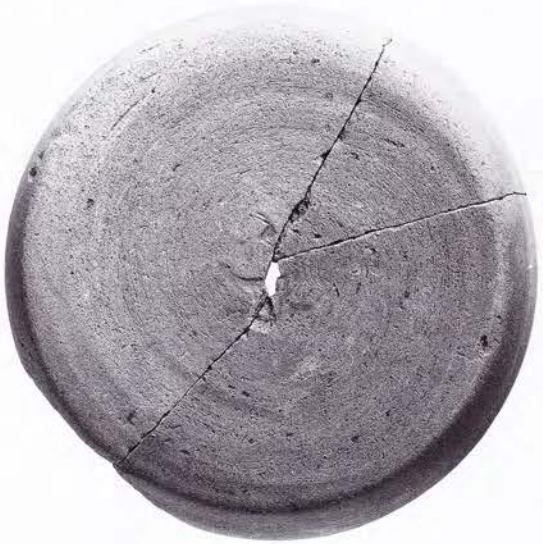
1号墨書

403

2号墨書

404

3号墨書



405

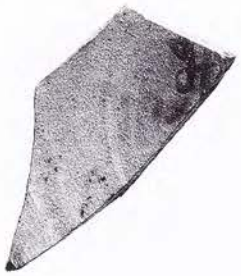
4号墨書

406

8号墨書

410

7号墨書



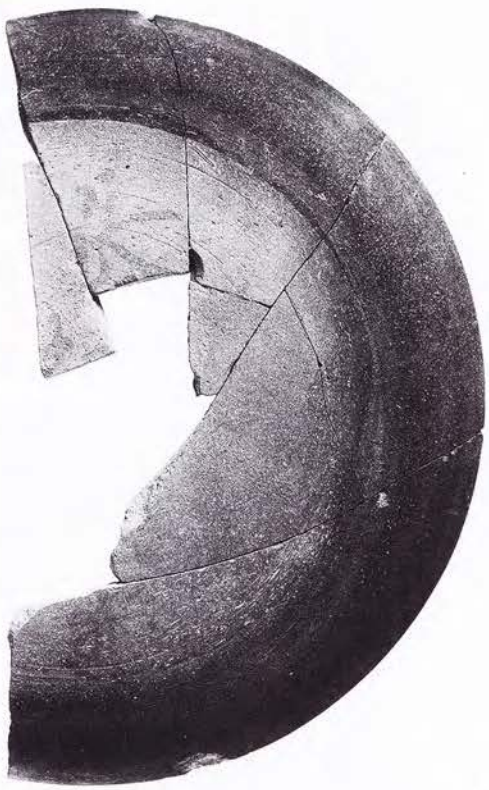
409

10号墨書

412

SD06 出土　墨書土器（1）

11号墨書

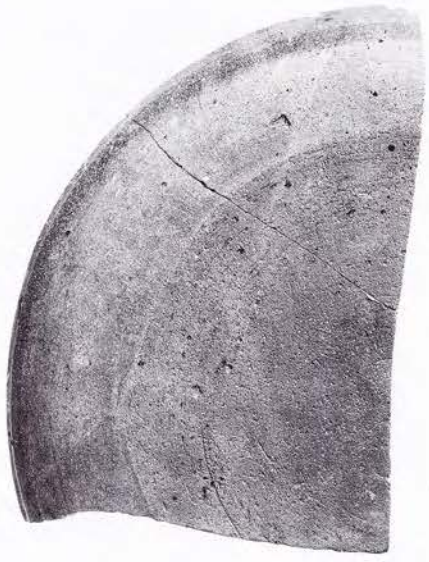


413

12号墨書

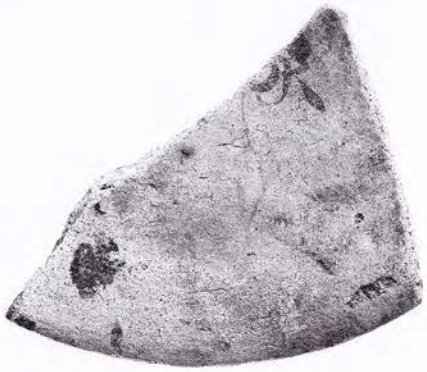
414

16号墨書



418

13号墨書



415

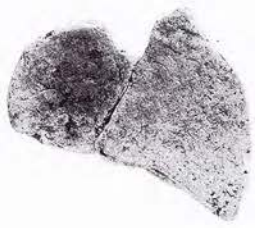
14号墨書

416

15号墨書

417

17号墨書



419

SD06 出土　墨書土器（2）

PL. 24

18号墨書

420

19号墨書

421

23号墨書

425

24号墨書

426

25号墨書

427

26号墨書

428

28号墨書

430

29号墨書

431

30号墨書

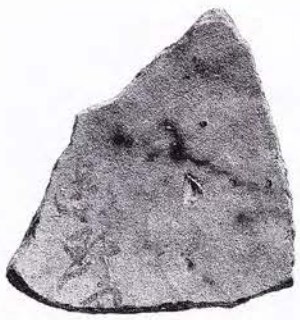
432

31号墨書

433

SD06 出土　墨書土器（3）

32号墨書



434

33号墨書

435

35号墨書

437

36号墨書

438

41号墨書

443

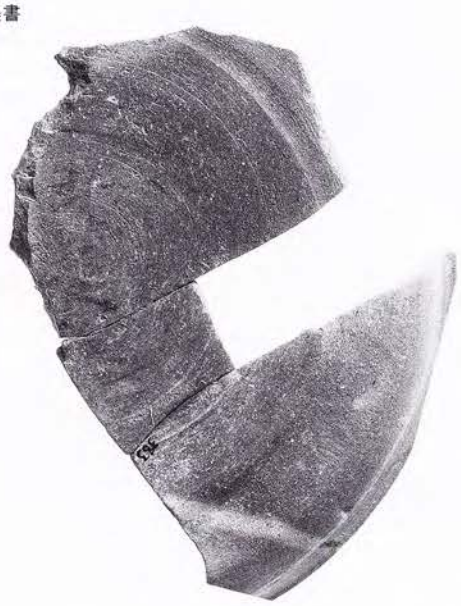
40号墨書

442

47号墨書

449

48号墨書



450

SR01 出土　墨書土器（4）

PL. 26

42号墨書

444

49号墨書

451

50号墨書

452

51号墨書

453

52号墨書

454

53号墨書

455

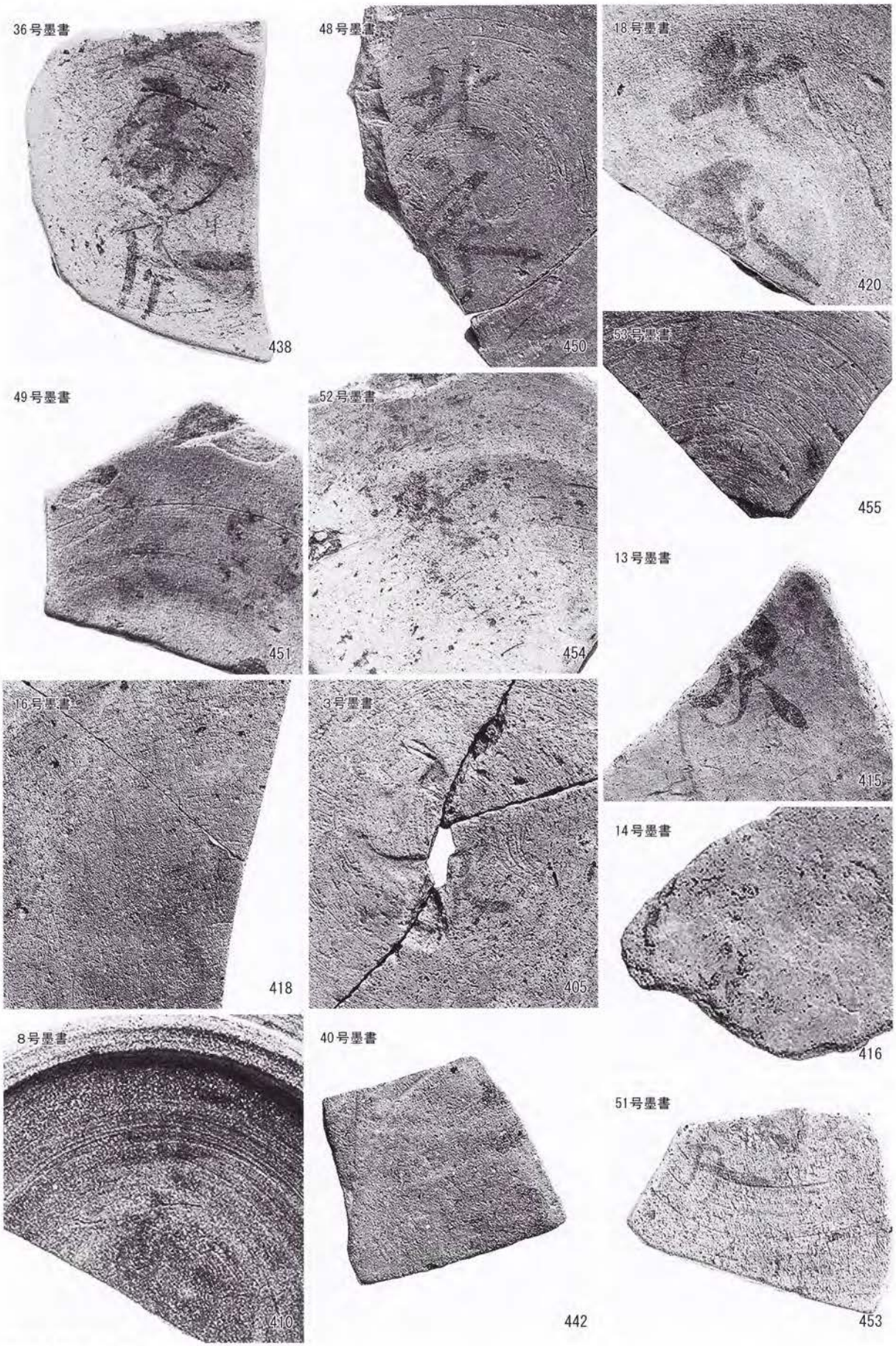
54号墨書

456

55号墨書

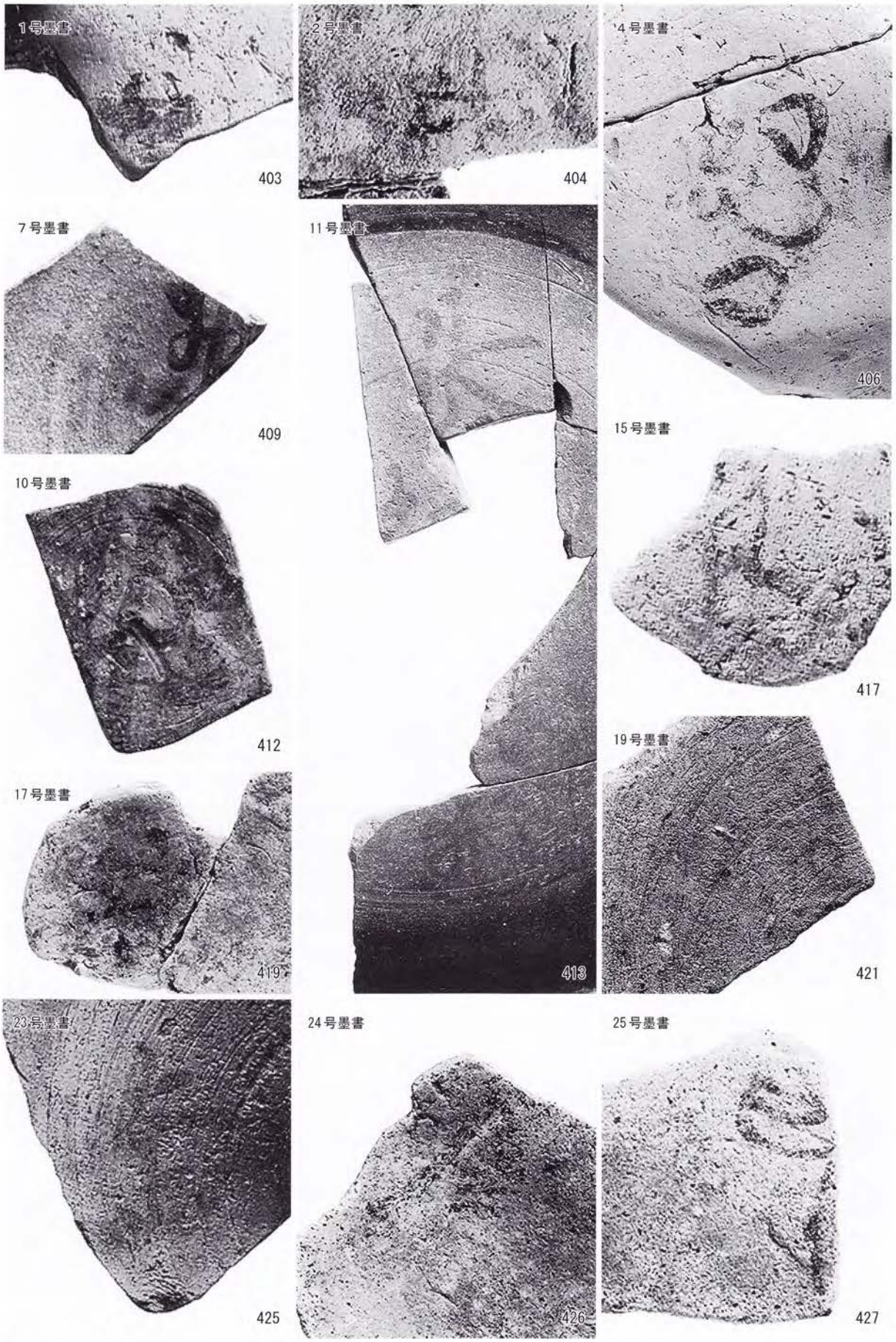
457

SR01 出土　墨書土器（5）

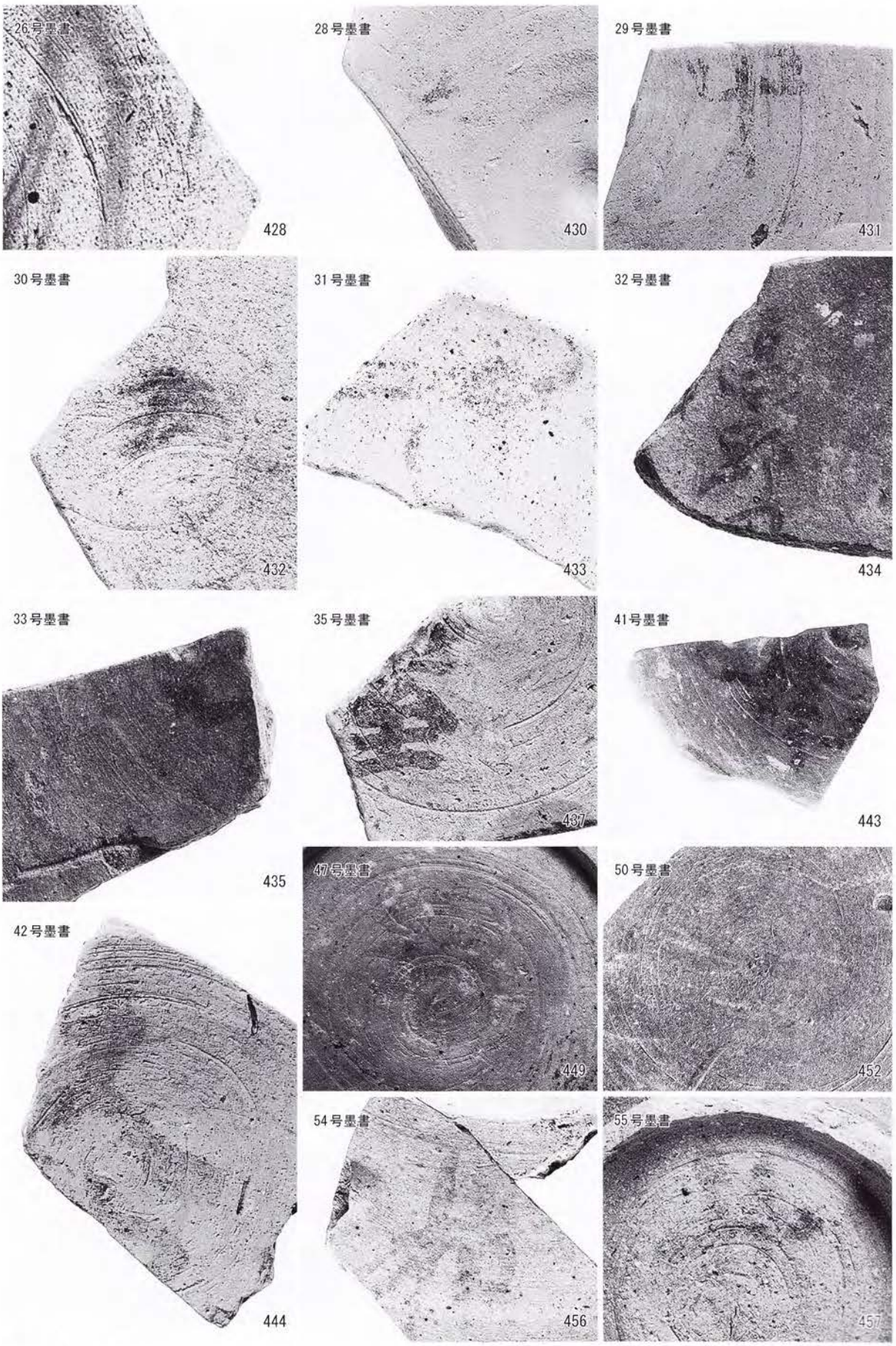

36号墨書
438
48号墨書
450
18号墨書
420
53号墨書
455
49号墨書
451
52号墨書
454
13号墨書
415
16号墨書
418
3号墨書
405
14号墨書
416
8号墨書
410
40号墨書
442
51号墨書
453

墨書土器拡大（1）

PL. 28



墨書土器拡大（2）


26号墨書
428
28号墨書
430
29号墨書
431
30号墨書
432
31号墨書
433
32号墨書
434
33号墨書
435
35号墨書
437
41号墨書
443
42号墨書
444
47号墨書
449
50号墨書
452
54号墨書
456
55号墨書
457

墨書土器拡大（3）

PL. 30

SE02 3

SE01 463

SE01 466

SE01 465

SE01 467

SE03 497

SE03 506

SE03 499

SE03 507

SE03 508

SE03 510

480

A・B区　弥生時代～鎌倉時代　出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みやたけのぎわいせき６じ
書　　名	宮竹野際遺跡６次
編著者名	鈴木一有、首藤久士（編）、関根章義、㈱吉田生物研究所
編集機関	浜松市教育委員会（浜松市文化財課が補助執行）
所在地	浜松市教育委員会 〒430-0929　浜松市中区中央 1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946　浜松市中区元城町 103-2 TEL（053）457-2466　FAX（053）457-2563
発行機関	（財）浜松市文化振興財団
発行年月日	2012 年 3 月 16 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
みやたけのぎわいせき 宮竹野際遺跡 （第６次）	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 ひがしくみやたけちょう 東区宮竹町	22202	02 05 04	34° 43′ 24″	137° 46′ 00″	20110728 ～ 20110310、 20110704 ～ 20110729	1,650	道路拡幅工事に先立つ事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮竹野際遺跡	集落	飛鳥時代～近世	土坑、掘立柱建物、井戸、溝、自然流路	弥生土器、須恵器、土師器、灰釉陶器、柱痕	奈良時代～平安時代の自然流路から、陶硯や陶馬、製塩土器のほか多数の墨書土器が出土。

要　約	宮竹野際遺跡は天竜川下流西岸の沖積平野（浜松市東区宮竹町周辺）に所在する。1986 年の開発時に発見されて以降、これまでに 5 度にわたる調査が行なわれてきた。今回の調査では、奈良時代～平安時代の自然流路から、陶硯や陶馬、製塩土器のほか多数の墨書土器が出土した。これらの成果から、遺跡の東端が確定した。過去の調査を加味すると郡家関連施設の存在が想定される。また、今回出土した墨書土器には「北家」と記されたものがあり、古代の施設名を伺うことができる。

北緯、東経は世界測地系の数値である

宮竹野際遺跡6次

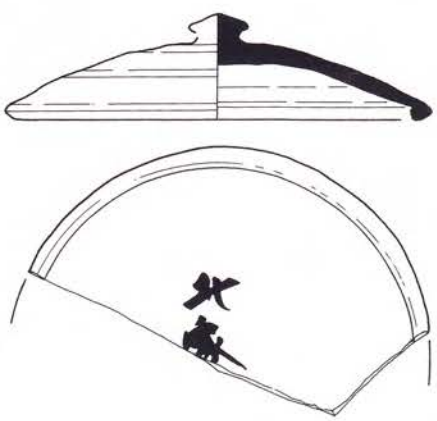
2012年3月16日発行

編集機関　浜松市教育委員会
浜松市文化財課
（浜松市教育委員会の補助執行機関）
〒430-0946　浜松市中区元城町103-2
発行機関　財団法人　浜松市文化振興財団
印　　刷　松本印刷株式会社

Miyatake nogiwa-Site

The 6th excavation report

A Report of Archaeological Investigations on 8th-10th Century County Office, that is called " Nagakami-gūke" in Western Shizuoka, Japan



March, 2012

Hamamatsu Cultural Foundation